

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

1月号



JANUARY '66

昭和四十年十二月二十日印刷 昭和四十一年一月一日発行 一月号 (第二十八巻第一号) 毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十五年六月十七日国鉄大間特別授承印紙第一二二号

奇譚クラブ

昭和三十二年新年号

定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



1月号 ¥ 300

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

女相撲と女斗美

モデル 木村洋子、大塚啓子

女相撲組打ち

大手札八枚一組 八〇〇円
相撲マワシ着用 略号(すか)

女相撲投げ業

大手札八枚一組 八〇〇円
相撲マワシ着用 略号(すね)

相撲マワシ着用

大手札五枚一組 五〇〇円
白晒六尺着用 略号(めん)

白晒六尺着用

大手札五枚一組 五〇〇円
白晒六尺着用 略号(めき)

白晒六尺着用

大手札八枚一組 八〇〇円
白晒六尺着用 略号(えく)

女相撲四十八手

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すは)

女相撲四十八手

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すむ)

女斗立業の応酬

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すち)

立業の攻撃場面

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すた)

寝業の女レス

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すほ)

女斗連続場面

大手札九枚一組 一〇〇〇円
略号(すく)

☆女体切腹資料の部☆

血紅女体切腹腸露出

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(せぬ)

血紅使用苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(おお)

肉體美全裸女体切腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(くえ)

長野 良子

大手札五枚一組 五〇〇円
略号(なせ)

瘦身女体切腹姿態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねは)

瘦身女体自刃姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに)

血紅切腹血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい)

殿中の女性切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは)

豊満の下腹を切る

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん)

女体介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか)

下腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す氷の刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ)

海老縛りの表情

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えふ)

☆極最近撮影△悦虐▽写真新分譲品☆

◎カラー・プリントの部

真紅の腰巻着用

大手札二枚一組 八〇〇円
大塚啓子 略号△うおV
真紅な腰巻を全裸の腰にまとうところ、従来の黒白写真ではあらわせない色彩を腰巻フアンの方々の要望によって特にカラー写真にて分譲品に加えました。

悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 八〇〇円
東浦ひかる、大塚啓子 略号△うてV

真紅の腰巻をまとった大塚啓子を高小手に縛り上げ、珍らしくも東浦ひかるが責め手に回って子の縄尻をとるといふ今までのみえいたしません。

真紅の腰巻緊縛

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△うこV

真紅な腰巻の乱れた裾から、白太股が、脛が、素足がこぼれるエロチックな緊縛シーンが、美麗に責めフォトです。

◎モノクロ写真の部

オシメと女学生

写真新分譲品☆

三人による女相撲

大手札七枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△うえV
肉づきのよい真白な太腿を八の字に開かされてオシメを当てられるオシメ・カパーを着けられる可憐なセーラー服姿の女学生。オシメマニヤの憧れの的である羞恥と汚辱に一人の感興を催させます。

◎三人による女相撲

大塚啓子 (東浦ひかる、木村洋子)

マワシを締めあう

大手札印画紙焼付 二〇〇〇円
十五枚一組 略号△うみV

三人の若き女性が素裸になってお互いに相撲を締めあう様子を三十五ミリ判にて漸次スナップしていった、女相撲準備中のありのままの状況描写の連続写真。

好取組三番勝負

大手札印画紙焼付 一五〇〇円
十枚一組 略号△うむV

三人のマワシ着用の女性が、勝抜きの三番勝負を展開、控えの人は双方に声援し、技に対するアドバイスをするなど入れかわり汗みずくになって繰り返す女相撲。

迫力実戦好相撲

大手札印画紙焼付

十枚一組 一五〇〇円
略号△うめV

三人がお互いに相手を選んで力をかぎり女相撲の技を競うところを次々と早いシャッターで場面を捉ええました。その中で妙味のあふシーンを選びました。

マワシの三人娘

大手札五枚一組 八〇〇円
略号△うやV

相撲マワシを締めた三人の娘が三人揃って立って並んだところを記念撮影しました。仲良し三人娘の裸の写真です。背面からのポーズも忘れず集録いたしました。

取組む三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円
略号△うゆV

三人の中の一人が行司役となつて蹲踞して向きあう二人から始まって睨みあいから四つに組むまで型通りの女相撲の展開を、一つ一つ丹念に狙ってゆきました。

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円
山原清子 略号△うもV

イルリガートル、ガラス製一〇〇CC浣腸器を用いて、浣腸に心をもち清子が蒲団の上にて自ら精神でフォト化しました。

浣腸されるマニヤ

大手札四枚一組 五〇〇円

山原清子 略号△うやV

浣腸マニヤでもある山原清子が他人の手によって各種の浣腸器具によって浣腸される状態を、浣腸ファンの眼を楽しませるために刻明に描写いたしました。

刺青姐御の切腹

大手札四枚一組 五〇〇円
山原清子 略号△うたV

白晒の六尺褌を前垂れなしに、きりりと締めた背中一面刺青の姐御が脇差を右手に右膝を立てての覚悟の切腹。裸一貫女伊達の最期はこうぞとばかり下腹を切る。

◎Mフォトの部

二女のなぶりもの

大手札三枚一組 六〇〇円
山原清子、大塚啓子 略号△うるV

応募してきたM男性モデルが二人の若い女性に手どり足どりがなぶりものな女性にされ、あとでこれに楽しかったと述べ懐するに至ったMプレイ・フォト。

二女の馬にされる

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子、大塚啓子 略号△うまV

二人の逞ましい肉づきのよい女性から、文字通り人間馬とされ、二人の全体重に喘えながら四足の草を這いまわらせる大笑いながら馬の乗心地を楽しむ若い女性。



「憎まれ児」の弁

編集子

先日、出版クラブに於て八雑誌倫理研究会の会合があつて、各々が月刊誌週刊紙を持ち寄つて各誌の内容を検討しあつたのであるが、確かにグラビヤ写真及び口絵を撤廃した本誌なんか、見劣りする。こと夥しいものがあつた。読者の方々から同人雑誌的に墮し過ぎる、自粛し過ぎるといった非難の聲が起るのも一応もつともな気がする程、会員発行の各誌の写真や絵は素晴らしいものがあつた。

も神奈川児童福祉審議会から十一月号について左記のような勧告が十一月四日付にてきていたので本誌も万更捨てたものじやないなあと、妙なところで意を強くしたものであつた。

「十一月号について」(勧告)

社会環境浄化の問題は、昨今、大きな社会問題として、国民の間に重大な関心がよせられているところであります。

出版界ならびに映画界などにおかれましては、業者間で自主規制の徹底を期し、青少年に好ましくない環境の浄化に努めておられる

ものの、なお青少年に悪影響を与える環境が憂慮される現況にあります。

当審議会といたしましても、この事態を重視し、青少年に好ましくない環境の徹底的排除に努力を重ねていくところであります。つきましては、今般神奈川県知事の諮問により、貴社発行のみだしの図書を神奈川県青少年保護育成条例に基づき指定することの可否につきまして、当審議会が慎重審議しましたところ、本誌は編集、企画、出版の意図が、サディズム、マゾヒズム等異常性欲の描写を主眼とされ、その内容には、随所に縛り、責め、切腹等の刺激の強いサシ絵、写真が挿入されており記事では「女を責める楽しみ」「妊娠腹観賞会」「亜紀子奇譚」の責めや浣腸の叙述、「花と蛇」の人道を無視した人間飼育の描写など全般的に異状性欲の極端な表現が充満しており著しく粗暴性もしくは残虐性を助長するおそれがある」と認められましたので指示すべきであると知事に答申したところであります。

貴社に対しましては、従来よりこの種図書の自粛改善を勧告してまいりましたが、貴誌上におきま

してはこの点の強調をしておられながらも内容におきましては一向にその傾向が見受けられず誠に遺憾に思います。以下略

といったわけで、まだまだ自粛が徹底していかないというわけである。グラビヤ写真、口絵を全廃したのだから、これ以上ストリップするとすれば、差し当り次はサシ絵を全廃するより仕方がないのだが、そうなれば文字通り八読むより仕方がない雑誌になってしまふ。しかし、これも青少年の保護のためにはやむを得ない。

昔は男子十五才にして元服をするといふ前の人間として責任を持たされたし本人もその気になって自重したものである。現在は一六〇歳以上にも成長した男を未成年だとか、青少年だとかいって甘やかして過ぎていくような気がする。少なくとも満十五才を過ぎたら一人前の人間として遇してやるかわりに、それだけの自覚と責任を持たしたたらどんなものだろうか。そうすれば有名無実の未成年者禁煙禁酒法も、未成年を満十四才未満とすれば実情に合致すると思う。こうすれば、未成年者の犯罪も急激に減少することは確実だ。

短 信 注 来

宮野政子様へ

田代俊夫より

関係のない人間が横から出て来て申訳ありません。僕は貴女のよくなたくましく強い女性に憧れているのです。貴女は大抵の男は組伏せるそうですね。高校時代、どのようなスポーツをやっておられたのですか。バレーやバスケット或は水泳、それとも剣道のような格技でしょうか。貴女に呼びかけられた富田氏が大変羨しいです。僕も東京に住んでいたなら、富田氏に代ってもらいたいくらいなのですが、残念ながら関西におり、ダメです。それで僕は貴女にお願いがあるのですが、聞き入れてもらえないでしょうか。貴女の通信文から推察しますと、宮野さん、貴女は今まで何人かの男を組敷き屈伏させたことが、おありでしょう。その体験談を手記にして本誌に発表していただきたいのです。男達をどのように投げとばし、どのように責めたて征服したか、又その男達が心理的、肉体的にどのような反抗、反発、反応して征服

されたか、ということに大変興味を抱いているのです。どうかよろしく願います。

◇

東京の宮野様のようなアマゾン は関西地区にも必ずおられると思います。宮野様に負けずに名乗りをあげて下さい。柔道や剣道のたしなみのある方、男を圧倒しうる体力と自信をお持ちの女性の方、どうか遠慮などなさらずに出現されることをお待ちしております。

新田英雄さんへ

御木本生より

毎月号いつも楽しくSMフォトを拝見させていただいています。十月号で知ったのですが、仕事が忙しくなってフォトの発表がむずかしくなってしまうそうです。全く残念です。新田さんのフォトを一番楽しみにKKの発売を待っていましたのに。別に傑作でなくともお手持のどんなフォトでも結構です。発表だけは毎月続けて下さい。モデルの奥さんのポリウムがすばらしいので、十月号のように全身を狙わずにゆくというやり方には大いに賛成なのですが、今後こういう写し方に徹したらいいかがでしょうか。そして第三者的な責め手を入れられると一層す



ばらしいものが出来上るのではないのでしょうか。しかし私の最も感激させられたフォトは第二回目の投稿でした。愛し合っているからこそ成し得た完成品だと思えました。モデルの若さあふれるポリウムに深くくいこんでいる紐。上段の写真でいかに股間で紐をひきしぼっているかがわかります。そして紐のむすび目が与える強烈なアクセント。もし貧弱なモデルであったら、絶対にあらわし得ない効果を十二分に堪能させてくれました。又なんともにくいのが畳と障子の配し方です。これによって、いかにも夫婦で家庭で写したとい

う愛情があらわれ本当に身近かなものを感じさせます。ほんの少しだけカメラの位置を低くすると一層ヒップのポリウム、紐の強調を強くしたのではなかったかと思えますが如何でしょう。

第一回のフォトもすばらしいものでした。胸のふくらみの強調、肉体のすばらしさに加えて技術の完全さが完調したフォトだったと思います。今後とも必ず投稿して下さい。

山代正代様へ

東浦ひかる

たびたびお呼びかけ下さいましてありがとうございます。山代様

プレイを数回経験していらっしゃるのですね。さっそくですが、誌上で連絡場所をお知らせ下さい。

大塚啓子さまへ

佐東茂より

ファンとして初めてお便り申し上げます。私は名古屋近辺に在住、名古屋市内の銀行に勤めている者です。年は三十七才、二児の親でもあります。想えば貴女のファンになってから大分長うございます。たしか長男(小学校一年生)が生まれる前から貴女の姿が心にしみており続けています。今も幾多のモ

デルの写真を見るにつけても、やはり貴女が一番好きです。

先日、貴女が雑誌にあるファンの方への呼掛けを載せておられるのを見て、私も是非お逢い出来たらと存じ急ぎ決意して、この手紙を書き出した次第です。お聞き入れ下されば真に生涯の幸に存じます。勤めの都合であまり休みはとれない身ですが、月に二日程度は何とか自由な日が出来ます。以下私の一方的な申出にて誠に恐縮ですが一応都合を記します。

SM夫婦プレイ同好者の皆様方へ

長 田 実

最近の本誌には、毎月八夫婦プレイの皆様方の投稿文がでており、嬉しく拝見しております。私も長らく御無沙汰しておりますので今回拙い作品ながら投稿させていただきます。

同好の方々の写真は、以前よりずっとよくなっております。夫婦プレイの皆様方が毎回よく研究されて、よりよい作品をとお考えになっ

す。しかし、これも奥様の協力があって出来るものであり、他人に見せるものではないのですが、出来れば同好者の方に見て頂いて研究資料の一端にでもなればと思っております。

今回は全裸による棒を使った縛りを実施してみましたので参考までに御覧に入れますので同好者の皆様、御批判下さることをお待ちしております。

十一月二十七日(土) 十二時から場所は天王寺公園内の美術館入口附近にて、目印としては黒っぽい縁の目鏡と手に大阪地図を持ってお待ち申しています。

突然のしかも一方的な申出にて御迷惑かとも存じますが、信用と誠実だけは誰にも負けないつもりです。どうか私の心からの呼掛けと思召されます様々もお願ひ申し上げます。

貴女のファンとしての私は、お逢いできたとしても、決して失礼なことを申し上げるようなこ

とはございません。どうか、この点につきましても、御安心の上、お差し支えございませんでしたら御足労下さいますよう、お願い致します。

貴女が幾多のモデル嬢の中で一番好きな方であるため、このような大人気ない、御迷惑なお便りをお出しすることになってしまいました。失礼の段、重々お詫び申し上げます。

では御目通りの上は詳しくお話し上げる事にして、先ずは祈る気持ちで筆をおさめます。



妖しいMの期待

―「十三妹」寸感―

T・T生

このサロンで誰かが発言するだろうと思っていたのに誰も何とも言わない。しかたがないから僕が言います。

夕刊朝日の連載小説「十三妹」作者は武田泰淳である。十三妹は武芸に秀でた女忍者で、安公子は世間知らずのお坊ちゃん。彼が盗賊に捕って命を失いそうになった時、十三妹に助けられ、それが縁で夫婦になるという発端からしてその気配十分。美しいアマゾンとその夫の年下の美少年、これは明らかにM的基本パターンの一つである。アラビアン・ナイトの「若者ヌールと勇しいフランク王女の話」と同一の構成になっている。

十三妹は第二夫人で、もう一人やはり美人で年上の第一夫人がいるが、二人とも安公子をおもちやにして遊んでいる。そのくせ、夫としてのつとめは、ちゃんと履行させているらしい。

「二対一」も又基本パターンの一つ、泰淳先生は欲張りだ。

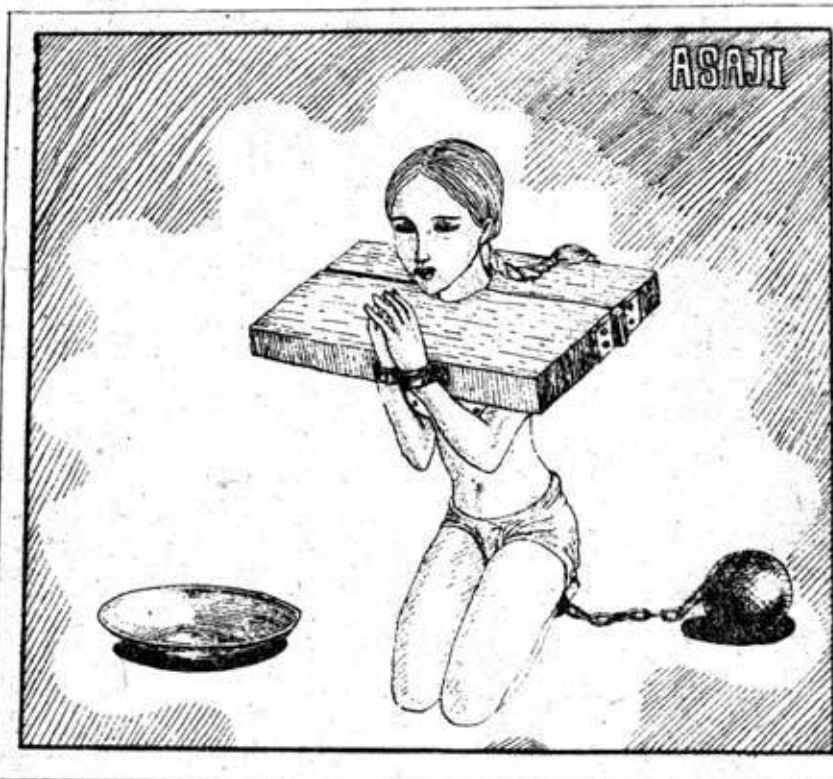
十月になってから十三妹と安公子は、予定通り(?)離れ離れになってしまった。二十九日現在、彼女が得意の武芸を披露して大活躍の最中なのに、彼のほうはドン底ムード。美少年の彼には今やもう一つの危機が迫っている。

これは我々には大変面白い小説である。まだの人は今からでも遅くない、読んでごらん下さい。僕はM派だからそんな所ばかり一生懸命読んで妄想を逞ましくしているが武田先生は平等博愛主義者らしく、S派やソドミ派にも、大サービスしていることが分る。

作品の価値は、やはり作者の才能と力量によって定まる。鞭で打ったり馬にしたり、飲ませたりしなくて

首 枷

室井亜砂路画



も(もっとも朝日でそんなことのできる訳はないが)妖しいMの世界は創造できるのだ。

この物語は、まだ半ばにも達していないだろうが僕は勝手におしまいで筋を作ってしまった。今それを言うとは著作権の侵害になるから、物語が完結して、もし僕の想像したことと似ていたら、一つ「十三妹」批判でもしてやろう。

編集部だより

○読者通信では、十二月号に掲載した花山千鶴子さんに対する返信が、文字通り殺到したという感じが驚いた。今月号で若干掲載した未掲載のものが相当でた。返信が余りにも多かったので、改めて十二月号のその欄を読み返してみたくらいだ。

○第二回山原清子を囲む座談会の席上実施した美枷輪生氏のMプレイについて同氏の体験談を伺いたいという切なる希望がある。その他今まで、男性Mモデルとして出演し、Mプレイを体験した人たちの告白なんか、面白いんじゃないかと思うのだが、今のところ、書いてみるという意志表示はあるが作品には接しない。

○真実味あふれる告白Vや八手記Vの待望されること久しいが、これは或る程度、文筆の才能がないと無理のようだ。編集部で文章の書き方を指導せよ、と言われる方もあるが、そんな簡単に上達させられる方法があるのなら、一つ「文章学院」でも開設するか。○読者通信の文章が余りにも整い

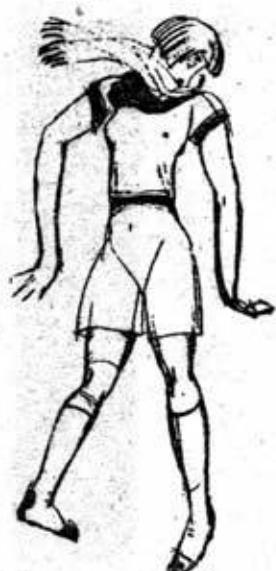
泥沼に落ち込んだ奇ク

宗 像 俊 彦

最近の「奇ク」を読んでもみると何ともそのお粗末さに慨嘆を禁じ得ない。今の奇クには、われわれを熱狂させた過去の奇クの片鱗も残っていない。まやかしの、ニセモノの、SMの精神など何もわかつちやいない奴らの勝手なオシャベリに終始している。

特に「花と蛇」も載っていない十二月号を読んでみると、もはやどうしようも無いところまで来た」と恐しさを感じる。

一体奇クはどうしたのか。奇クの本領であった本格的SM小説や真摯なアブノーマル・セックスの告白はどこへいったのか。これでは、もはやマニヤにも見捨てられ、もちろん一般の健全な読者にも見向きもされず消えて行くのがおちである。グラビア廃止による本文充実ということで、われわれは



大きな期待を抱いた。だが、今、完全にそれは裏切られている。

本文は充実するどころか、大きな質の低下をたどり、ごく一部の限られた常連投稿者の勝手な、くだらぬ、まるで読者を無視した同人雑誌的なオシャベリの場になっている。われわれは、くだらぬオシャベリや議論を欲しない。百のタワゴトより一つのりっぱな小説を望む。百の議論より一つのすぐれた小説がすべてを言い尽すのである。勝手なオシャベリはやめて欲しい。フザケタ小説（マガイのもの）は追放されねばならぬ。はつきり言わせてもらえば最近の夜乃探郎氏木戸川健氏などは、いささか腹にすえかねる。少しオファケがすぎるようである。読者を読者と思わない、まるで自分たちだけの雑誌だと言わんばかりのイイ気になった書きっぷりにはがまんできないのである。勝手な議論やオシャベリは他のところでやっていただきたい。真のサディズム・マゾヒズム精神を求めるわれわれ読者をなめてもらっては困るのだ。

のだ。

奇ク二百号に亘る歴史で今ほど内容のない。フズけた墮落した時はないだろう。やりにくい風潮の中で編集者の苦勞もわからぬではない。しかし、だからといって、あまり読者をなめきった作品を載せてほしくない。困難な風潮にある現在こそ真のサディズム・スピリット、マゾヒズム・スピリットを持った指導者が出なければならぬのだ。マンネリの常連投稿者を一掃し、全く新しい作者によって奇クは現在の泥沼から脱さなければならぬ。

幸い読者通信の白浜律子氏、また十二月号の「濡れにぞ濡れし」の芳野眉美氏など、はつきりと現在の奇クのあり方に、正しい批判の目を向けている方が居られるのは、泥沼の奇クの一すじの光明になっている。こうした正しい批判の目がある限り泥沼から脱するのにもそう遠くないことと思われる。ともかく奇クにはサディズム・マゾヒズムその他アブノーマルなセックスを扱う異色雑誌の旗手たる姿勢失ってほしくないのだ。黙っていることは、ますます奇クの方角を誤らせることだと思いきや、敢て筆を執った次第である。

すぎているので、編集部員の人たちの手で作るのではないかと疑問に思う向きもあるそうだが、今のところ投稿原稿は有り余って困るほどだから、その心配はない。殆ど便箋に書いてきたまま印刷に回し、書き直しもやっていない。○もっとも、誤字脱字の訂正や文章の変なところを直したりはやっているが、それも最小限度にとどめている。それは自分で投稿された方が一番よく知っておられると思う。

○先々月号先月号のこの欄で言及した大塚啓子嬢のパンティの件、予定数終了につき一応中止する。いずれ目鼻がつき次第、誌上に再びお目見えしたい。

○最近、編集者に逢いたいという通信を時折り頂くのだが、大変忙しいため全部の方々に色よい返事を差し上げられないのを残念に思っている。殊に日を切られて指定された方々には、お返事さえ出せなかったことをお詫びしたい。○新聞の値上げを攻撃した投書を載せた新聞を、今までのところ見ないが、新聞値上げ反対のデモをするオバサン連の写真を大きく取り上げる新聞があると、新聞の記事も大分信用できるのだが。

マニヤの手帖

池田 勝

縛り方教室

「縄の使い方」

十一月号で私の「射的」提案がサロンに掲載されましたが、今回は教室の第二章ということ、縄の止め方を皆さんのご参考に供したい。

これ迄グラビヤ、スナップ、分譲写真など沢山拝見して、白い肌と縄目の織りなす女体美は、Sの私にとってこの世の最高の美であるが、ほんとの緊縛はどんなに動いても、びくともしてはならないだけでなく、体を動かせば動かす

ほどきつくならねばならない。それは縄の交叉するところと、最後の留めの結び方次第であるので、図解し乍ら読者に練習して頂こうと思う。

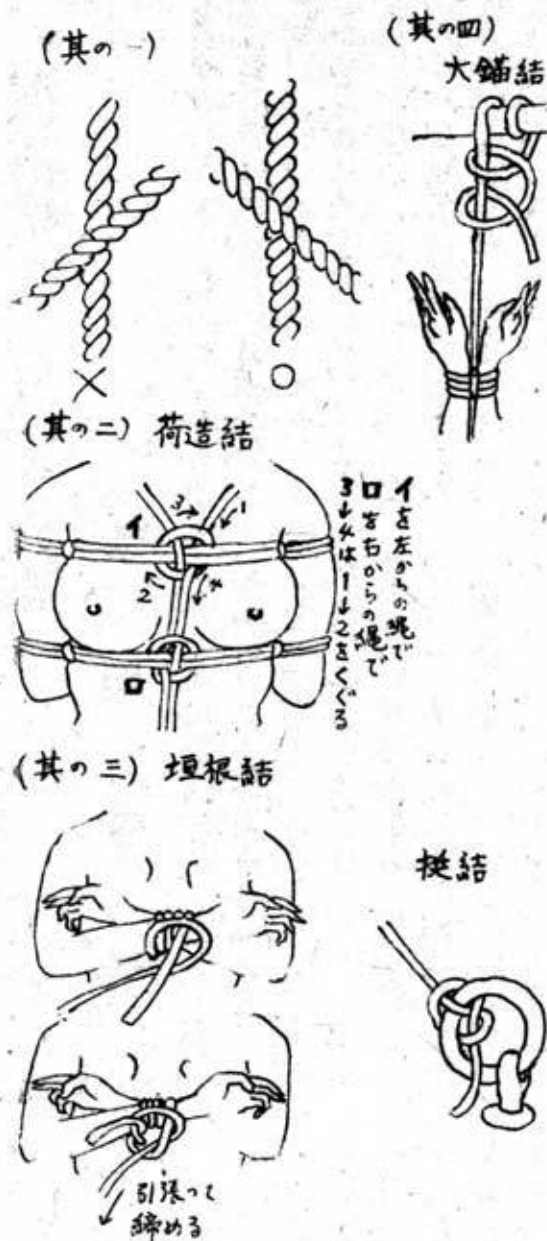
其一は「縄の交叉の基本となるもので、同じ抑え方でも「イ」のように縄のよじりにそった抑え方は引張ればゆるんでしまう。「ロ」のようによじりを切るように交叉させると全くゆるまない。縛った縄がゆるんだり、吊った縄がゆる

んだり解けたりしたのでは肌がすり切れたり、吊りが落ちて怪我もしかねない。ぐるぐる巻きにするときも、はじめの縄の端を一巻きしてきた縄で、この方法で抑えれば、いつまでも片手で縄の端を持つ必要もないから両手を巻く縄にかけられ、それ丈力強く締めることが出来る。

其二は「直角に交叉する縄の留め方である。股間縛りのとき胸を横切る縄と交叉するが、この結びが左右に動いたり、上下にずれたりしないようにする。これは荷造りに経験のある方は先刻ご存知であるが、最近の荷造りを見ると、専門の荷造屋さんにも正しい縛り方をするのは少なくなって、到着した荷物は縄がゆるんでい

る。「荷造結」がこれである。

其三は一手や足を合わせて縛ったり、棒や柱に縛りつけるときの留め方で、動けば益々固くなってしまう結び方は「垣根結」がよい。これも荷造り屋さんで必ずお目にかかることが出来る。縄を掛けた最後で縄の両端が一緒にあるところでは場



山原清子後援會

○九月二十七日に実施しました山原清子後援会の第二回座談会並にSMプレイ鑑賞会に引続いて、第三回懇談会を十一月二十八日の日曜日に実施する予定にて準備をすすめておりましたが、山原清子さんの御都合が悪いそうでしたので、今回の企画は中止いたしました。

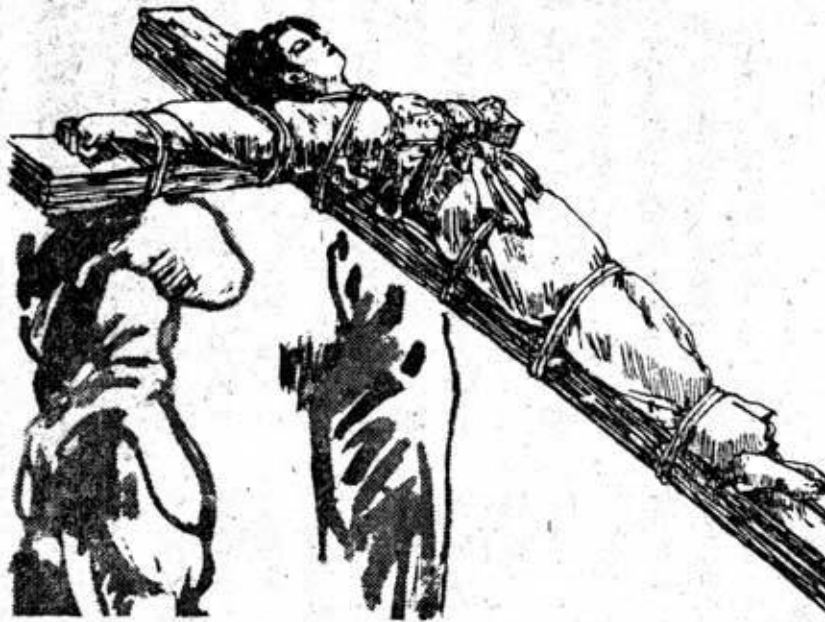
○会員の方々からは、いろいろと御意見御希望などについてのお便りを頂いておりますが、それらを十分参考に、いずれ新企画決定次第直接御連絡申し上げます。

○なお、今春、山原清子後援会を結成以来、御入会下さいました会員の方々も相当数に達しましたので十一月末日限り、新しい会員の募集を一応中止いたします。

○今後の予定は、前回の座談会において話題にのぼりました通り、緊縛モデルの撮影会を実施したと考えております。もっとも、写真撮影を希望されない方で、座談会の方がよいという御意見もありましたので、そういう方々のために新年宴会を兼ねた懇談会で大いに放談していただくのも面白いと思います。

〔読者原稿〕 磔 (ハリツケ)

H・K生



所はどこでも使える。一方を長くしておけば「縄尻をとる」のに最も便利で、縛られている方はどうにも出来ない結び方である。

其四は―縛った縄の端を柱、梁、杭などにつなぐときの結び方である。吊ったり、つないである物がゆれたり動いたりしたときに、弛んだり解けることのないようにしなければならぬ。弛んだり解けたりしない代りに、外すことが出来にくかったり、縄を切ったりする

ることなく、外すときは徐々にゆるめることが出来る。手も足も全く自由がきかないよう縛って、宙吊り、海老逆海老吊りを行なったときは、被縛者は落ちたとき身を防ぐ方法がないからこの「大錨結」で梁や柱にとめるのがよい。外すときは梁の二巻を残して弛めればよい。また地面で、杭や棒に縄の端をめるものに「二結」がある。

き開いた脚の足首をしぼった縄を左右に引張って柱や机の脚につなぐのに使える。

右の五種類で大概の縛りには間に合う筈であるが、縄のしぼりは「外れない」「弛まない」ことが大切であると共に、手吊りなどのとき、動くたびにきつく締って、血行が止まったり、しびれてしまったりしないよう、手足の先まで、緊縛感がひしひしと感ずる方が興は深いが如何なものであろうか。

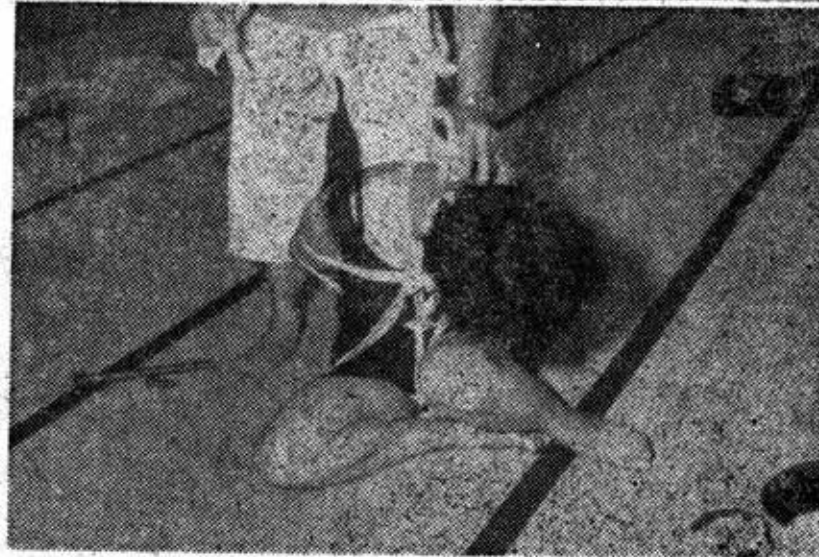
＜短 歌＞……………山中 冬子
おんなドレイのうた

しなびたるツワブキの葉にとまりいる毛虫が
ぼとり我が足に落つ
むきだしの素足に毛虫落ちたれどいましめの
身は取るにすべなし
ひしひしと肌身にまとう麻縄にわが体温がうつりしと見ゆ
庭石に縛られしままころびたる肌のぬくみで
いし乾きしか
首縄のいたく締めしに喘ぎつつなおも唱えむ
お詫びの言葉を
身にしまる縄目の味を噛みしめて幾刻たちし
と空かぞえする
マジックのくすぐったさをこらえつつ肌に書
かれる文字を待ちいる
四つ這いで這いまわりつつ御主人にスリッパ
はかす口を置いて
はめられし手錠冷たしめしうどのおみなのひ
ざに涙落ちいて

最近の奇ク 高橋秋良

近頃の奇クは表紙からして凄く楽しい。例えば二人の直立した美女を吊るのに鎖で黒髪を束ねた十一月号の構図など、群馬調教を現わし得て妙である。

それから扉が徐々に開かれて目にする奇クサロンは、流石にいずれ劣らぬ玉稿揃い、百花燎爛の園もかくやと嘆賞するばかり。読む雑誌にふさわしい「花と蛇」をはじめ長編読物も一きわ楽しい。



△SMプレイ鑑賞会にて▽

女相撲連作写真を見て 雪崎京人

今年の夏以来奇ク編集部は女相撲分譲写真の分野において連続ヒットを放ってわれわれ女相撲マニアを喜びの絶頂に送ってくれました琵琶湖畔の第一作以来同じく第二作、同じく前例のないカラー作品、更に室内における作品といずれも得難い名モデル大塚啓子さんと東浦ひかるさんのすばらしい演技による作品であります。野外における女相撲など夢に画くだけで実現は非常な困難がともなうものと思つてよいのに箕田京二氏はこ



れを見事に実現してしまいました。しかも風光明媚な琵琶湖畔近江舞子の白砂の上にです。水着をつけた女性の美しさだけでもすばらしいのに、乳房も腹も露わに肉体美に惜し気もなく相撲一本を強く締込んで激しく取組み合い、投げ倒し、押し倒す女相撲の美しさ、何にたとえ様もない。大自然の中でのかげやかに、おおらかに相撲を取る大塚、東浦二嬢の美しさ、たくましい肢体とすこやかな顔の表情、現実の世界とも思われないほどの夢幻的な世界でした。殊にカラーによる色の表現、写真芸術としても今までこの様なモチーフによる作品は嘗てあったでしょう。いや絶対になかったと思ひます。箕田氏の前人未踏の作といつても過言でなく、どれだけ讃辞を送つても過ぎるということはないと思います。大塚、東浦二嬢も進んで協力的で一作毎に技の研究のあと著しく、室内の作「すみ」「すみ」「すわ」に至っては襷返り(たすきぞり)など六ヶ敷い技を二人でよく演じ、小股すくいも大塚さ

娘 腹 画

森 英 生



テレビ△刺青▽を観て 保藤久人

十月三十一日午後十時三〇分。読売テレビ「ノンフィクション劇場」で△刺青▽が取上げられた。ご覧の方も多いと思う。山原さんへの憧憬から私は『落穂拾い』で刺青を取上げた。そして、兼ねてよりの古いメモや新しい資料をもとに曲りなりの雑感を書き上げた。実際に刺青をした人の話を聞いて見たりもした。が、その現場は見たことがなかった。ところどころが10チャンネルで、その実態を見て、思わず息を呑みつつ

画面を凝視していた。それは、私などの想像も及ばぬ読んだり聞いたりでは窺い知ることとも出来ぬ、全く凄絶なものであり、私は自分の書いたものが恥しくなった。△彫文▽という彫師。俯伏せの女。サクサクサクと鋭く厳しく忙がしく、しかも正確に、東ね針は女の肌を刺して行く。音がしていた。僅かの間がある。その間は針に墨を注ぐ寸時だけで

んの思い切った大胆な表現すばらしく今まで女性でこのような六ヶ敷い相撲の技を演じ写真の作品となった例は恐らくないのでないでしょう。大塚さん等の熱心な研究の結果を感銘しました。奇ク発表の女相撲分譲写真も回を重ねるに従って益々研究され遂にここまで来たかと驚嘆しております。相撲の締め方にしても格段によりなり殊に大塚さんは自分から選んで作られたというライトブルーの相撲褌を締める姿の何という美しさ、凛々しさ、そして可憐さ。また白い稽古褌を着けた東浦さんののびやかな豊かな肢体とはにか

んでいるような美しい表情と風に靡く髪。私など女相撲マニアを驚喜させてくれました。女相撲といえば見世物的な連想を持たれる方もあると思いますが、これはまたスポーツ的で明かると健康的で女子相撲とでも言った方が適当かも知れません。十二月号には更に「ろぬ」「ろお」「ろり」などの新作の発表あり大いに期待してします。大塚さん、東浦さん一層稽古を積んで技を磨き日本唯一の女性力士の優れた相撲を見せて下さい。しかし熱心さのあまり怪我をしないよう、おからだを大切に。

次号（二月号）掲載予定作品

○「牝犬羞恥地獄」……夜乃探郎
○ポケットブックに発見したM的小説クライマックス紹介……河津安春○吊り責め考……山口広○脊髄美女……黒田寿○告白「輝履歴書」……喜多六好○告白「異常なる夜の記録」……島田啓子○「続アブ談義」……久我庄一○あるレックスン……原由貴子○漫筆「裾の乱れ」……牧高志○SMカメラ・ハントへみゆきのパースデイ……辻村隆○耕土散筆「落穂拾い」

……保藤久人○しもべ……三原寛○アリアドネ……黒淵嬰一○心傷たむ遍歴……西条操○夏彦蛇行録△彼女の「スゴイ」という本……堀夏彦○小説「奇譚クラブ編集局」……夜乃探郎○新解体新書……高野原美○のおと・あと・らんだむ……千草忠夫○△山中冬子さんへの私信的な散文△「心にぞ通う」……保藤久人○続悪女の手紙……福田久文○戯文列伝……河津安春○殺人マニアの楽しみ……黒田寿○ある回想……保藤久人……その他△告白△体験△など。

音が続く。

肌は生きていた。柔軟な肌は、△彫文△の手が押えると平たく凹んだ。

刺す針は忙しい。一瞬刺されて凹み、反射的に跳ね返る。その連続のアップの画面は女の肌の弾力をまざまざと画き出していた。

血が滲み、重ねて刺すと玉となつて噴き出て来る。生々しい肉体とその凄美。△彫文△が拭うと、そこには、寸前の血も墨も知らぬかのような華麗な肌絵が忽然と姿を見せる。

カラー放送だったので、色彩をご覧の方は、きつと驚嘆されたことと思う。

刺青自慢の肉体展示もあった。だが、ご覧の方は画面の女性（きぬさんとか？）の背中の上の白さと、半ばから腰にかけての妖美に賛嘆の瞳を向けられた筈だ。実際に見て、刺青は女性の肌こそ相応しいと改めて感じ入ったものである。

「落穂拾い」加筆の意味も含めて右一筆。



妊婦を縛る

小妻容子

私の誓約書

山中冬子

いつものことながら、ご主人さまのご命令ですので、メス犬の暮らしの書き綴って読者の皆さまに、私のすべてを晒けだしたいと思ひます。ご主人さまとは、一年間の約束で奴隷としてお飼ひいただいているのですが、あとわずかにになりましたので、ご主人さまから、もう三カ月間延長すると申されました。実は私もある事情でもう少しお金も欲しく、苦しく恥しい生活ではありますが、続ける決心をしました。ご主人さまは私のために毎月一定額を積立てて下さっております。

それで、先日、私は次のような誓約書を書かされました。全文をごらんにいれます。

誓約書

一、冬子は今後昭和四十一年〇月〇日まで、ご主人さまに女奴隷として、又は家畜として使用されご奉仕いたします。

一、冬子の肉体は、すべてご主人さまの所有ですから、いかように

使用されても異議はありません。

一、冬子は、ご主人様のご許可を得なければ一糸まとわず全裸体で生活いたします。なお生理時には一々申出た上、三角巾（越中ふんどし）を着けさせて頂きます。

一、ご主人さまご使用の運転手様お手伝い様には、ご主人さま同様仕えご命令に従います。

一、排泄の欲求のあるときは、申出て許可を受けた上でいたし、トイレは使用いたしません。

一、今後、十回以上ご主人様のご命令に背いたときは、金属製の鼻輪を装着されます。

一、頭髮以外の体毛はすべて自分で剃り、いつも清潔にしておきます。

昭和四十年九月二十三日

忠実なるメス犬 冬子

こんな文章は、ほとんど今までの生活とかわりないので、このように改めて書かされ、書いてみると一層みじめなものです。誓約書ができると、ご主人やお手伝いさんの前で裸のまま直立不動の姿勢で読まされました。本当に情ない思いをしました。あとでご主人さまのいない時、お手伝いさんたちが「あんなにまでして、お金がほしいのかね」「私なんか百

「人形解体」

室井亜砂路画



万円もらっても、いやだね。今どきの若い女はわからないね」「あら、私だって若いけど、冬子みたいなまねはしないわよ」などというのを聞きたまらなくなりました。

私はマゾだと思ひます。でも鞭を打たれるのは、やはり苦しく、人の見ている前で排泄するときはやはり全身が赤くなる程恥しいのです。別にふつうの人と違っていいとは思ひません。近頃は自分で

自分がわからなくなりました。

今後は、またみじめな毎日が続きます。ご主人さまは私に鼻輪をつけたいらしいのですが、いく分まだためらっているようです。私もそれだけはいやです。鼻輪にくさりをつけられ、牛のようにひき回されるのはたまらないと思ひます。ですから、私はご主人さまの命令にそむかないよう、一層励まなければなりません。



(第十九回)

辻村 隆

岐阜の水野弘氏からお便り戴き
水野夫人の貴重なるフォト頂戴し
た。生首より近頃は移行して、水
野弘氏自身M傾向を持つようにな
り、機会あらば是非一度岐阜の自
宅へ来てもらって、自分等夫婦の
SMプレイを、撮ってもらいたい
との仰せである。勿論カメラ・ハ
ントに掲載して頂いても結構とい
うので、近々是非一度御邪魔する
予定であるが、その時は夫人がS
になって、水野氏を緊縛し、責め
るプレイになればよいと結んであ
った。

豊富な水野夫人のフォトには、
よくお目にかかっているが実物拝
見は未だなので、この際彼女の肢
態美をたっぷり拝んでしようと愉
しみにしている。往々にして逸脱

するので、水野夫妻、SMプレイ
をとっている私自身どうなるか、
それが些か気掛りである。

三隅良信氏の紹介で若い夫婦と
知り合った。この婿さん、若いに
似合わず、SMプレイに相当興味
をもっていて、家内が妊娠したら、
三カ月より、臨月まで順序を追っ
て毎月、緊縛妊娠フォトを撮ると
張切っていらっしやる。

私もお相伴出来まいかと、うわ
べは冗談まじりに内心は真剣に頼
んで見たら、意外にもあっさり応
諾してくれた。実現すると実に愉
しい。妊婦フォトが撮れると愉し
みにしているが、但しである。但
し現在避妊中とのこと。大枚二千
円をはり込んでリング挿入中で、

やはり、ヒノエウマに産むのは、
子供のために可哀想ですからね。
私達は気にしていないのだと仰有
る。迷信くそくらえといった、こ
の若い世代にも、やはりヒノエウ
マは生きていられるらしい。六十年に
一度の、人のいやがるエトにわざ
わざうまなくても、翌年生めばい
いのだと、あっさり言い切ってい
まう。経済面もあるのだが、そん
な配慮もあるのかと、今更乍ら改
めてカンシンした。来年三月にリ
ングを外しますよ。するとすぐに
宿っても、ヒツジ年ですからね。
それまで待つて下さいと言われ、
それ迄が待ち遠しいことである。
リングを外したといって、そうお
判らないが、可能性はあるんだし、
彼が誰かモデルを紹介してほしい
というのも、それじゃ妊娠するま
で待つて下さいとうまく逃げた。
お互い様である。

『奇譚三十九夜同人』のドクター
氏が、「来年はお産は薩張りない
でしょう」と苦笑していた。「そ
の代り、搔扱は例年の倍以上ある
でしょう」といったら、いやな顔
をした。
たとえ物体と考えると、やはり

代理部だより

○本誌の旧号も古いものは殆ど在
庫がなくなり、三十八年以降の分
のみとなってしまいました。しか
も現在在庫しております分でも非
常に残部が僅少なものがあります
から何れ売切れ続出になるかもし
れません。

○御送金は切手代用でも結構です
が紙に貼りつけたりバラバラに切
りはなしたものの、或は汚れたもの
などはお断りいたします。

○近時、本誌代理部の写真を複写
して分譲したり品物を送らなかつ
たりするインチキな通信販売業者
があらわれていますので御注意願
います。被害にかかられた向きは
本誌宛御一報願います。

○局留にて品物をお受取りになら
れる方は、未着のときは再度局へ
御足労下さるようお願い。尚小
包のときは保管場所が違ふことも
ありますので一応お尋ね下さい。
○カラー・プリントは御注文を受
けてから作成しておりますのでモ
ノクロより若干遅れております。
将来御注文がまとまるようでした
ら、予め作成しておいて速かに発

「奇ク」十二月号雑誌感

河津安春



一個の小さな魂を闇から闇へ葬るのは後味がよくないらしい。来年は西欧方面へ半年程旅行するか、

シップドクターで世界中廻ってこようかなどと冗談をとばして、外国のSMフォトを、うんと採集し、

あわよくばプレイして来るよと笑ってた。

いません。

十二月号は、正直な所、大変淋しい内容でした。芳野さんの「濡れにぞ濡れし」「夢の、また夢」今月は別人かと思われる程、穩健で少し学究的におすまして（御免なさい）アア「悩ましいのサディズム」は傑作だったと慨嘆させられました。万田不仁先生の「初陣」美しい武者絵を思わせる夢幻の境に誘われ、先生ならではと存じますが、出来れば是非、別に男と美女との斗いを先生の麗筆でお願いしたいものです。△肩先きに一太刀浴びた徳兵衛が「オノレ毒婦」と深傷に苦しみながら這い寄るのを、傍らの石に腰打ちかけたお百は、せせら笑い「惚れた女の手にかかり、あの世へ行けるとは、お前は随分幸せ者さ」と片足あげて首根っ子をグツと踏まえて動かさず……△私では駄目ですが、万田先生、是非お願いします。三原寛先生、ソバイは愈々佳境に入ってきました。惜しむらくは頁が少な過ぎます。M一辺例の勝手なことのみ申しました。お許し下さい。

送できるようにいたします。

○先月号のこの欄で以前分譲広告していましたが「にん3」「くた」「さほ8」「によ1」「かき3」「かき4」「かき5」「かき6」「かき7」「かき8」について内容や価格の照会が若干ありました。が、案外旧号をごらんになっていない方が多いんですね。以前あれほど大きく、しかも何カ月にも亘って広告しておりましたのですから、旧号をごらん下されば詳しくお判りになると思うのです。

○本誌代理部では毎月、新しい分譲品を豊富に発表しております。そのかわり、発売以来日を経ましたものは漸次分譲打ち切りにするよう予定しております故、なるべくお早く御注文下さるようお待ちしております。

○代理部分譲品目録は毎月新版分譲品が発表されますため、特別に作成しております。この欄にておその旨お断りしているのですが依然として十円切手封入にて目録を請求される方があとを絶ちません。目録の広告を打ち切ってから久しいのですが、最近の雑誌をごらんになられない方が案外多いというのを物語っています。新刊の入手が中々困難のようです。

拙い小生の投稿が、次号掲載予定作品の中に挙げられまして、これは予想外の喜びでした。しかも優しい二枚目のようなペンネームを頂いて、独りニヤニヤしています。これに勇気を得まして「波瀾の一年」をお送り致します。御叱正を待たいと存じます。巻頭言で「ラッフルズ通り……」云々、編集子とあるのを見て、大変懐しく

思いました。小生も昭和三十四年から三十七年末まで、同市に滞在していました。一度お目にかかって、大世界のキャバレーガールのお話でも語りあいたいものです。橋行司子先生が、読者通信の片隅にまで目を通され、伏兵などと恐ろしい名称が与えられましたのは驚きました。呉々も諸先生の御健筆をお願いする以外他意はござ

「ボクの責め方」

宝塚二三夫



ボクの責め方は、言わずと知れた若い女性の足オンリーである。足といえば、膝小僧から太股、脛から腓。踝、踵、素足から足指、とまあ言ったぐあいに、ボクの責めの対象はひろがって行く。但しボクの求めている責めの対象としての女性は、ずばり若い女性に限っている。やはり処女が一番である。今流行の夫婦プレーのように人妻なんていうのには一向に興が湧かない。又、ホステスとかダンサーとか、モデルとかいった水商売の女や職業に裸を売物にしている女は好まない。いくら女の足を責めるのが好き

だといったって、世帯やつれのした、生活の労苦のあとのまざまざと見せつけられたような女の足はボクの方から敬遠する。やはりボクの好みから言えば十七・八才のBGといったところか。純喫茶のウエイトレスといったところでもよい。まだ男を知らないスベスベした肌。素足を人前に見せるのさえ恥しい年頃の娘が、無理矢理その美しい足をボクの目の前にさらけだされる。思っただけでも、ぞくぞくするではないか。従ってボクの縛り方は、縄という縄をぐるぐる巻きに女の身体中に絡らみつけたというのは好まな

い。女がストッキングを脱がされた自分の真白な素足を、自分の手でかくすことが出来ないように、両手の自由を束縛しておきさえすればよいのである。だからボクはいつも大型の白い木綿のハンカチをポケットに忍ばせている。これだと、か弱い女の両手を括るのには恰好の小道具になる。第一、手首に縄のあとなんかつかない。ネクタイ、ストッキングなんかも急場の縛り道具としては恰好のものである。真白に輝く女性の素足の美がボクのポイントであってみれば、なにもヤケノヤンパチで気狂のように縄をかける必要はな

い。ボクは車に乗せた女を時々後手に縛り、その足を鑑賞することがあるが、外部から見ても変に思われるような括り方はしない。いつもストッキングに包まれて外気に触れない足を、くると剥玉子のようにさらけ出されたときは、大概の女性は羞恥心をあらわに示すものだ。この際素裸にしてしまつては、この実験は不成功に終る。出来るだけ豪華な服装をさせ、そしてハイヒールとストッキングを脱がせ、跣足のままでジカにフロアーを歩かせてみたまえ。ボクは手にとつて彼女の足をこの目で鑑賞したくなるのだ。

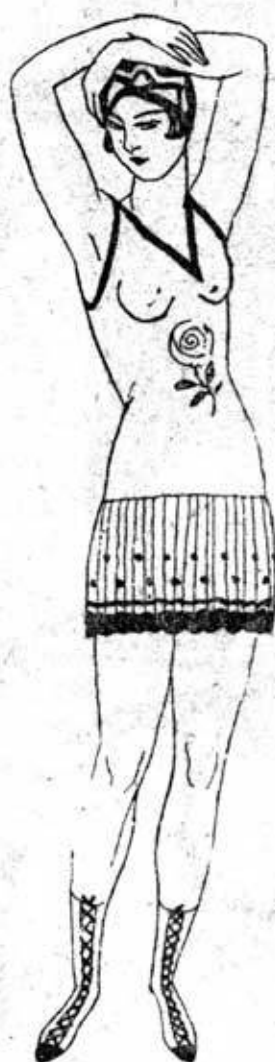
素足の美しさを強調した縛り



花山千鶴子さんに挑戦す

上 松

潔



恋人があり、愛していながらも別の世界に満足感を求めようとしているあなたに、ぼくは挑戦します。あなたとおなじように、三年越しの恋人がありながら、「何かみたされない気持」を抱いているひとりとして、ぼくはあなたに挑戦します。辻村氏や塚本氏のように洗練された△縄の技術△をもっていないが、ぼくはあなたに挑戦します。挑戦者を浮彫りにするために、簡単な履歴を記す。一、身長一六七センチ、肩幅広く、腕力あり、年齢二十四歳、一、外国人相手の仕事をしている社会人、一、大学で心理学を専攻し、女性心理や異常心理に関心をよせている自称知識人、一、恋人を愛している好青年、一、口重く思慮深く、陽

気を好む、ゆえに嘘偽をきらい真実を愛す。一、プレイの場として自由に使える別荘もあり、などなど。実をいうと、ぼくは彼女にM的な役割を果たさようとして失敗した経験があります。なぜなら彼女がそれをきらったからです。そのため、心の満ち足りぬ思いを続け、△奇ク△を読むたびに、夢でもよいから、ぼくのS的エネルギーを受けとめてくれるような、女性に会えないものかと考え続けてきました。そんなときに、同じような境遇にいるあなたの文章を読み、挑戦にふみきったのです。ぼくの好みは、乳房責め、股間縛り、各種の恥辱責めなどです。器用なほうですから、これらの責めを効果的にする器具を作製することも

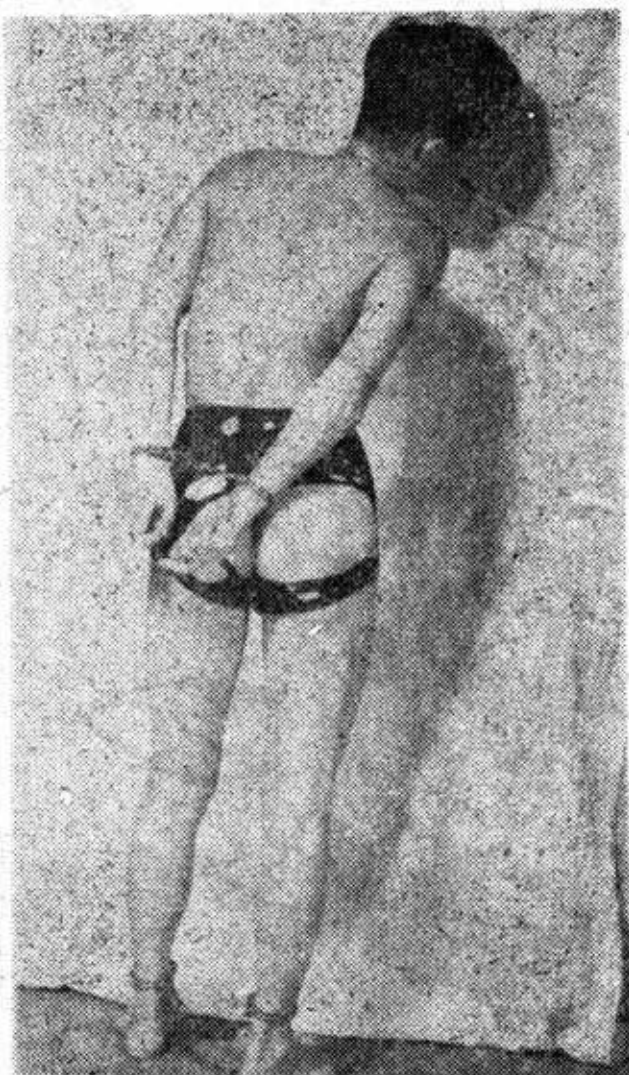
できます。ぼくの責めの美学は、本来、動かずにいられない人間(この場合女性)が、縄や各種の器具や道具によって拘束されることで、静止することを強要され、Mのがれようとする気持ちと、もっと厳しく責められたいという気持ちとの葛藤それ自体が快楽につながる、というものです。Sの側からいえば、美しい女性をあがめる気持ち強いがゆえに、その美しさを拘束することで静止させたい、

あるいは恥かしめ汚すことによってもとの美しさと比較して、いっそうその美しさをあがめたいという気持ちと空を飛ぶ小鳥のように自由なときにこそ美しさが発揮されるのだから、拘束すべきでないという気持ちとの葛藤が快楽になるのだと思う。以上の履歴と美学が、あなたの意にかなない、信頼感や安心感を与えうるものでしたら、どうぞ挑戦に応じてください。乞う、連絡。

Mフオト

△鼻輪、手錠、足錠▽

美枷輪生



「地獄メモ」に答えて

福田 久文

拝啓、箕田終身執政宮閣下。大人げないと一度は破り捨てたのですが、善良な奇ク小市民の負担と悲しみを貴誌の片隅にご掲載願います。昨年十月号の「地獄メモ」は何をいおうとされているのかよく分りません。いたずらに理解の

できない不快だけを残します。たとえそれが頓馬な人身攻撃であっても、その筋道さえ理解できれば、あえてペンを取らせた原因がわたしにある以上、何も申し上げません。現にわたしは他の方にスカットしたお小言を頂戴して恐縮の意を表したとさえあります。しかしこのメモは持て余しました。ただダンテもスエーデンボルグもストリンドベルグも、その二、三の

妊娠した腰元の成敗

新井 伸治



腰元と腰元のあられもなき決斗

新井 伸治



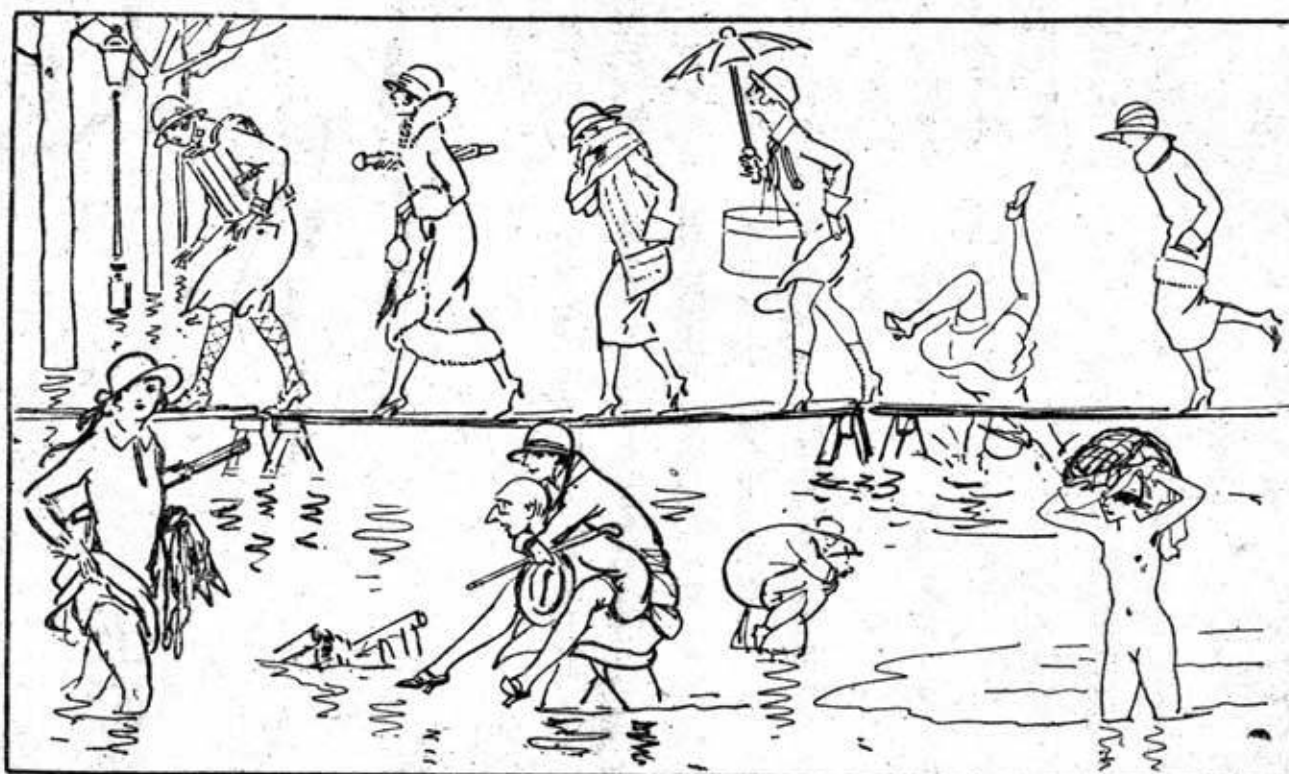
著作がわたしの愛読書だったことは一抹の救いでしたが、この大脳側頭葉（記憶と判断を司る中枢）だけが独立して発達し、前頭葉（感情、意欲、創造の中枢）の発育が遅れた方に、不完全な訳書から引用されるのでは、地下の天才たちも苦笑していることでしょう。悪意がないと付記しておけば勝手な中傷をしてもよいのだと思っておられるのなら、ジャーナリストの

資格も疑われます。奇クのために精力的に興味のある文章を幾多発表しておられるご功績を認めるのにやぶさかではありませんが、一般読者の方にも「実のない」この種のメモだけは、今後もお書きになるのなら、もっと簡単明瞭にして読者通信で発表して頂ければと思います。橘院長、あれは紳士の雑誌（昨年六月号編集後記参照）の「異色」作です。

奇 譚 ク ラ ブ

昭和41年1月号

(1966年・1月号 <第20巻第1号・通刊210号>)



本誌の信条

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。

一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。

一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。

一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。

一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



△F・実験告白▽

五彩の虹の水玉はしお辛かった！

「芳野眉美氏に捧ぐ」

夜乃探郎

告白を始める前にハッキリしておきたいことがある。私は八月号にて△芳野眉美氏への公開状▽を書いた時まで、芳野氏の「ガン作・マニヤのノート」ETCを、興味と反発を持って読んで来たが、評論はしようと思っても、理解しようとの努力はされなかった。

△理解▽とは、私流に言わして頂くと、相手の地点まで位置した所から生じるもので△金持のお坊チャンが、なっぱ服を着てプロレタリア文学を研究するような▽——態度では、とてもじゃないが本当の言葉は出ないと云う事である。

私は美少女を責める、その体臭に妖しきこ
うふんを感じるけれど、ネクター趣味は無

かった。△耽義主義者の手記▽に、一度、神酒ふあんたじーを小説の構成上、一つの小道具に使用した事はあるが、これは単なるアイキョウで△書く▽ではなく△描く▽に過ぎなかった。それは実感を作者が持たなかったからである。

誌上、私のような鈍才を、才人・芳野氏の好敵手とよんで下さるマニアの方もある。微笑の他は無い。セックスは五十歩、百歩である。だからある程度の妥協はできる。一例△「あなたのおうしろで、にっこり笑って立って、いらつしやる美しい御婦人、どなたですか」と、芳野さんは、おっしゃってられるが……実は私も——たくさん気になっていたの

です。ウン▽というようなこと。(短信往来・十月号より)この場合の△セックス▽に、『人情』論が意味付けられていることは、お判りと思う。

——どうしても妥協できないこと。神酒党にネクターを飲むな。サディストに女を責めるな——という声に対してである。例えそれが小さなセックスであってもマニアにとってはるまんのすべてだ。私は芳野氏に対して批判じみた言葉をろうした。だが、マニアのエチケットは守ってきたつもりである。△ネクター▽そのものについての良し悪しにふれることをタブウとした。あくまで、本質ではなく過程でお茶をにごした。行間を読むために

はそのものズバリ：フエティシズムとの対決を必然されるであろうからである。

リンゴを論ずる為には、好き嫌いとはともかく食べてみなければ話にならぬ。△公開状△を書いたのが、大体初夏の頃であろうか。それから、秋になる現在まで、私は、ネクタールを飲んでみようか？——その方のマニアでないことは、すでに述べた。だから、そう思ったことは、しばしばだが、その実験は、仲々はかどらなかつた。幾度、読むのは面白い。それだけに止めた方が、無難であろう、何も実際にためしてみるまでもなからうという——これが本音。十月三日現在。やっと、それをなめることに成功した。△五彩の虹の水玉はしお辛かった△舌にピリツ／＼とした酸味を感じたことである。いま、私が書いている事は、ごく初歩のことである。あるマニアにとつてはもの足りない物だろう。つまらんかも知れない。しかし、事実を私は記そうと思っているのだ。

——ここまで、読んだマニアは、おそらくこんな言葉を吐く方もいられるだろうか。なにさ、もったいぶって。まるでトイレは、世界に一つより無いような書き振りがやないか。ごもっとも。最も、簡単なことは、御自分のを、チョツと小指に付けて、なめればよいのだ。

だが、待って下さい。私は芳野氏を△人生の画家・SMの貴族△とまでよんでいる。また△繊細な白き手をもつ△とも形容しているのである。当然私も、優雅にそしてゼイタクに、デリケートにならざるを得ない。したがって実験も、その線にかなわぬまでも少しは似なければならぬだろう。ここで、私の自慢にならない。ホンの申しわけ程度の経験から△神酒考△を一筆させて頂くと、まことに神酒党とは事に当って審美眼をより發揮することになるようだ。液体なら何んでも良いとは——言えないのだ。ここに苦心と孤独感（あまりこの表現を使う人間は嫌いだと芳野氏は評しているが、文の構成上許して頂く）が生れる。また、ユーモアもポンポンと飛出る。大方マニアは不用意に△神酒△という表現を使われる？ようだが、芳野氏が云わんとする神酒とは——ズバリ「美」が要求される。と考える。ナンデモヨイとは、申されない筈である。たまたま、「ガン作・マニヤのノー」ETCに登場する女性は、サクラにして、美歌夫人にしても、カワイコちゃんであり、美人である（芳野氏の作品を、読んだ限

り。実物は見ないが——）

セックスは思考する（こんな言葉があるかどうか判らないが）。ともかく、芳野氏が△自分の小さなSEX△と、言った場合、「思考」という意味も含まれていると思う。素人考えでは（この表現はチョツと、適当とは思わないが）何もネクタールが飲みたけりや公衆トイレに行けよ。いつでもたまつてらアと云うだろう。——問題はここだと言いたい。思考なき動作は、マニアでなく、しかも△芸術△であり得ない。詩にもならないと云うことだ。ふた度言う、私は神酒を飲もうと思つた。芳野氏の妖筆？に頭がクラクラしたわけではない。理解しようと考えたからである。行間を読みとろうとは思ったからだ。元来、私って人間は、他者に何かを教えよう助けようなんて、御立派な気持はとんと持たせてない。ただ、貴方がよろこぶなら、私もよろこぼう。貴方が悲しむなら、意味はよく判らないけど、ともかく泣こう——という私なりのチツポケなモラルを持っているだけ。△好敵手△とは、このような裏付けも必要あってホンモノになるのではと信じたからだ。

行間を読みとれとは、くだけて言えば△ひとつ、あんたもネクタールを飲んでみませんか

かVと云うことだろうか？

この屈辱、このスリル、この甘美さ、このニヒル、（きりが無いから後はやめる。）要するに、生きる人間にとってのすべての哲学が、みな、このネクタール人生には、秘められていること。どうでしょうかな。△陽気なニヒリストVとは、その複雑さが点滅するドラマの舞台に、演ずる道化役者のようなものか。道化はどんなにユカイであっても、哀愁は消えない。これはピエロの宿命のようなものだ。ネクタール人生も、ユーモアあり、優雅はあれど、ニヒルは去らない。

私は哲学って、こむづかしいから嫌いである。ただ常識として一時期△実存主義Vの書物を手にしたことがある。やア、言ってみれば、戦後の流行？の波に乗ったままだ。単独者とかいう表現があった。（ただし記憶によれば！）

人間って生れた時は一人。死ぬ時も一人。ただし生きてる限り一人ではあり得ない、——このおかしい存在。いくら人間に絶望してもおのれに不信であっても生きてる内は一人にはなり得ない。ドラマの存在する理由でもある。△ガン作・マニヤのノートV十一月号の「久我庄一様への謹白」を読んで、ふと

これらの事を思った。『序曲も終曲も孤独だとわかっていながら、終着駅に向かって、引かれたレールを走っていく。去ることは不可能』単独者の説明と表現は違っても、これは実存主義的な世界のものである（—そう思う）——陽気なニヒリストの誕生する理由でもある。元来、表面的には、辻村氏の△芳野眉美氏は私の接する限り、解放的でフランクで、明るくてVとサロン楽我記・第十五回で述べられているように、芳野氏はサンガラスの似合うプレイボーイ・タイプの若者を連想させる、そんな男かも知れない。ただ、だれでも人間である限り、自分なりの△城Vを、つまり人生観を持つだろう。芳野氏が△小さなSEXVと言った時、それは人生観と称しても、よいのではなからうか。『彼の優雅な生活からユリンを離せば何も残らないかも知れません』との辻村氏の言葉が、その裏付けと考える。人生の単独者であることを意識ししかも、解放的な若者。そしてユリンある生活。ここに芳野氏の姿が、いつそう浮出してくるカギがあると思うのである。

いま、私は△小さなSEXVという表現に人生観という言葉をつけた『人生』と言ってもよい。人生とは、通例語でおそれ入るが、

悲喜劇が付加される。ユーモアリストでもある芳野氏がペンに、ときたま△ニヒルVな影がうかがわれるのは、彼にとっての△小さなSEXVは「人生」でもあるからだ。△陽気なニヒリストVというちょっと考えると、ムジユンしているような言葉（陽気とは喜劇を意味し、ニヒリストとは悲劇）の深意をよみ取るには、以上述べたような方法によらなければ私には出来ないのである。

さて、私の告白という本題に入ろう。（十月三日の、チョツとした実験談にもどろう）いつも、遊そびにくる中学三年の美少女K子が、たまたま小用をうったえたのである。いつもは責めたい。その青くさい体臭に刺激を感じる方が強いので、いくら△ネクタール実験願望？Vといっても、終いにはSプレイのゆうわくの方が勝をそうした。だが、その時△小用Vと言う言葉に激しい物を感じた。文学少女でもあるスタイリスト的な彼女は、会話に気を付ける性質でもある。それに、今まで、数度、部屋で会ったが帰るまでついぞトイレに入ったことは無い。

それがどういふ調子か、△小用がしたい。おトイレ借して△とはつきり言葉に出したのである。小用という言葉に、私はたしかに生

々しい、SEXを感じたのである。そしてふと、女の性の実体って何か——そのこうふんが私をぶちのめした。ある通人のエッセイ、
 “女をはっきりたしかめるには、舌による泉の面を深さを、ジカにふれ味あう”というような言葉があり、うーんと、うなったことがあったが、それ以上の刺激に、うたれたのである。

体内にひそかにあたためられた液体を味覚する。これは、たしかに小さなSEXというより大きなSEXということになるのでは、いっそうの実感的に——。だが、既成的な水は上流になれるを良しとし、下水門より放出されるは悪しきというモラルが、それを実験しようとスリルを感じる私の気持を屈辱感にこじやった。しかし、SEX的な悦楽を盛上げさせたこともホントである。

△飲ませてくれ△という言葉で、少女に吐き出すことは、ついに出来なかったが、彼女が入ったトイレにその直後にはいつか一つの行動をしたことは事実である。その白い花のよな紙片を取上げてみると、水玉が点々とにじんでいた。その時、夜乃探郎よ、K・K誌などという高級な書物を手にし△ガン作・マニヤのノート△などというユーモア？のエッセイ

を読んだばかりに、こんな不景気な場処でうらわびしく淋しい動作をしなければならぬのか——といコンプレックスと、同時に身体中が熱くなるような性のこうふんであった。おそらく、その時、思ったのは、ネクタール趣味とは、いつも一人の人間の中に二つのムジユンした（—それが消える事はない。序曲も終曲も孤独だというような意味で）悲劇と喜劇の要素がからみあって成立しているのだ——ということである。

芳野氏の文が単なるユーモア的読物だけであつたら、こんなにもファンをかざえることは無いだろう。どのような事を書くかとして、その底に、たしかに芳野眉美の人生感がただようことが、あろうからでもある。作者は、悲喜劇を、どのような表現を使っても小説・エッセイを唄えあげることが出来る。文字は、また自由追求の舞台でもあるからだ。しかし、紙背から流れるものは、作者の△思想△であることは間違いないことである。

「芳野文学」から感じられるものは、東洋的な無常感からにじみ出るものでなく、むしろカミユの△異邦人△からよみ取れる、からったとしたニヒルな世界から来るものであるため独自のユーモアが生じることになろうと考える。

られる。それは△近代△の特質にも連がれようか——。

——とにかく、私の実験はまことに小さな事である。しかし、意識して行動したフエテツシュなことは、私にとってはじめての事であるだけ、私のSMのアルバムにとって、やはり△歴史△であることは、たしかだと言いたい。しかし、例え小さな出来ごとであつたとしても、それは私にとって一つの△直実△であつたと思う。もし、美少女K子のものでなく、他者が何物とも知れない液体をコップに持ってくるか、それとも水玉ある紙片をかざして数百万円くれるから△どうだ△と云われても私は馬鹿にするな——とドナルだけである。その屈辱感、あのK子の白い花の如き紙片を手にとった時の△屈辱感△とは異質のものである。（どんな風にと云われても、説明しがたい、とにかく違う）おそらく、私でなくとも、芳野氏であつても、ドナルだろう。ドナッテあたり前と思う。

こう考えてくると、コプロ趣味もそうだが神酒党とは、そこに△美△が感じなければ成立しないと云うことになるようだ。だから、実感論者でもありうる。パンティETCのマニアは、相手を見て、たしかめなくてもよい

(それでもある程度の満足を得られる)

——というのは、その香に酔うという間接的な(布地を舌で直接味おうということもある)うが、いまは、大体という意味で!)むーど調が強い。憧憬も秘められる。どうするかは本人の自由意志によって楽しむ事が出来る。

ネクターは、飲むという、はなはだ直接的な方法が絶対される。なめる——という程度はマネに過ぎない。マニアとは、云われな。い。(私の実験も、あくまでマニア的ではない。象の足の先を見て、ふれて全体を想像するようなものである)

それだけ、ネクター趣味は、芸術家であり、リアリストであり、ユーモアを解する事も要求されることになるわけだ。おそらく芳野氏ほど女性の美について、神経質すぎる男はないかと推察される。つまり美女好み。そして、ネクター趣味とはロマンチックな世界のものである。私は科学に弱い。だからアテズポウな論調になるが、その液体は、分析すれば、何がナン・パーセントとか計出され、年令的男女別に答えは少しは違うだろうが、約同成分より化合物されたものになるだろうか。問題は、その人間の外的な美醜を直感的にすばやく捉え、科学的には、何パーセ



告白

ゴム・フェチ・マニヤ

護膜好夫

かなり幼い頃からゴムが好きだった。いろんなゴム製品を勉強部屋での秘かな友達として利用したものだ。

その防水性並に表面の平滑感が魅力だった。ゴム特有の芳香も、いつか忘れ難いものとして、私の心の奥深く結びついてしまった。

月経帯は勿論のこと、飴ゴム膜のはった店員さんなどは、むれるといって奨めない品物専門だ。最近に残念ながら少い。羽二重の薄いきらきらした絹の肌ざわりと裏地のゴム面の感じと匂い、衣ずれの音。

婦人用のレインコートは、どの点から見ても満点の衣裳である。以前或る時期、一時的に裏ゴム張りのレインコートが流行したことがある。もうかれこれ二十着近いゴム引きレインコートを手に入れ、コレクシ

ョンとして愛着している。

ゴム膜製の大人用、中人用おむつカバーも私の心を捉らえるものの一つである。中でも純白のゴム膜製のおむつカバーを若い店員さんがウインドーから出して呉れたときは、咽喉がからからになり、頭がぼうつとなる様であった。

腰にあてがうと、ピッタリ締まるのが気が持がよいし、「これ私にはけましようか」と、蚊のなく様な声で尋ねたり、受取って早速トイレで試みにつけてみて、太腿をびったり締めつける感じは最高だった。足を動かすとホックがはずれるので、もう少し大きいのと交換して下さいと頼んで、ウインドーの上で拡げると、数人のうら若い女店員さんに見られて、恥かしかったが、又反面、かけがえのない幸福感に浸ったのも

ントの化合物的液体。または排泄物に過ぎないと思なされる物に対して、如何におのれのSEXとなすか、優雅な生活に密着されうるか——こんなロマンチックな世界の「芸術」である。あまりにも実感的（リアル）にしてローマン的な（物語）……。

十一月号の「ガン作・マニヤのノート」で「A十月号への返書」で「実にオソレオオイことなのであります。ヘヤ・ゲネラル・クロ夫人の柔かなまっ白なオン肉体Vをと、過酸化水素O・五パセント混入の特別性サンプルびんをやりわりと御辞退したことは、美味を破壊するということもあるうが、むしろ真意は（相手を信じたとしても）見て、たしかめて、飲むというマニアの本質が云わせた言葉と考えるのである。このデリケートな芳野氏の心情は私が、実際にマネ程度でも実験したことで、おぼろげながら理解できそうな事なのである。

——私は、バー『よしの』に行くとして、芳野氏から「……を飲ませるVと、もし機会あって好意ある申し出がなされた時、それが私もナツトクするような素晴らしい美女のそれであるなら、よろこんで飲まさせて頂きたいものである」

（終）

事実だった。

先日は、前もって下見しておいた若い女性ばかりの理髪店へ、中人用大人用二重のゴムのおむつカバーをはき、羽二重ゴム引き婦人用レインコートを素肌に着用、バイク用ゴム引き布製ズボンをはいて、普通の衣裳は背広だけといったスタイルで出かけて理髪台に座った。

ゴム布に包まれたみじめな自分。変な人と感じながら、それでも何も断る理由はない、そ知らぬ顔をして仕事を続ける純真そうな乙女の手肌に、私のゴムシャツが触れる。襟をはだける。肩から腕に、マッサージをする。バサバサと奇妙な音がする。

『ニシキゴム』大人用純白総ゴムおむつカバーは、昨年、某デパートのベビーコーナーで発見して以来、すでに三着買った。

ゴム膜の面は平滑で、色あくまで白く、ゴム特有の芳香がたまらない素敵な製品だった。前の二つは既に海水パンツを作った。楽しんだが、又素晴らしいアイデアがひらめいた。今度はこの純白のゴムを丸く切って頭からかぶってすっぽりと入れ、首をきっちりしめて、いやな髪の毛の切れ端の入れ

ぬシャツを工夫した。一番大型のカバーを求め、股に当る部分に適当に丸い穴をあける。ゴムが良質なので、これで頭が通るだろうかと思うくらいの穴でも十分通る。大きく開け過ぎると首に対する圧迫が弱くなる。適当に穴を開けたら、すっぽりと頭を通し、せまい部分（本来前にくる部分）を胸側にしてかぶる。頭が通ったら脇のホックをきちつとはめる。まるで中世の騎士になった様なひきしまった感じで全く惚れ惚れする様な男振りである。

先日、私はこの上にさらに男児用のゴム引きレインコートをきっちり着込んで夏の太陽の照りつける中を理髪店を訪れてみた。ズボン下もパンツも総ゴムなので流れる汗でビチャビチャである。私の係の人はまだ高校生位のお化粧気もない清純な感じの乙女で、先ず汗でしめったシャツの襟をタオルでぬぐおうとしてボタンをゆるめた。襟をはだけたと思ったら、純白のゴム膜が汗に漏れて光っているではないか。彼女の赤らめた顔が鏡を通して窺えた。こうして私の恥かしいが、楽しい経験が終った。

SMカメラ・ハント紀行

「讃岐の蛇娘」

さぬ

き

へび

むすめ

辻村 隆

かねて文通のあった、高松市のN氏から、

夏の間に是非こないかという再三の勧誘の便りを戴き幾分憶劫でもあったが、N氏夫妻の夫婦プレーのフォトや文献も見たい気もあって、夏の終り家内帯同で出掛ける事になった。N氏は京都のT氏よりの紹介であるが、奇クには発表したことはないが、夫婦プレーのお二人のフォトが、約二千枚あるという。よく撮りも撮ったものだと思う。N氏四十一才、夫人三十五才だから、所謂壮年期の面白い盛りなのでもあろう。

快晴続きの今日此頃である。夜の九時半、大阪弁天埠頭から関西汽船の山水丸に乗船。夜目にも波静かに、船は沿岸の瞬く灯をうし

ろに白く波をけたてて沖へ出て行く。

一等船室の窓を開くと、汐風は快よく肌をなで、私達を仮寝の夢に誘い込んで行く。

夜半小豆島の坂手港に寄港したのも夢うつつの間に、朝もやの立ちこめる四国高松に到着したのは午前五時半すぎ。乗船客と共にぞろぞろ下船して行くと、出迎いに来ていたN氏が、私より先に姿を認めて、走り寄って来た。彼の車で五分余りで片原町の彼の家につく。街並はヒツソリとしていて、未だどこも起き出でていない。文房具卸商の小企業の社長であるNとでも、こんな朝の早い日は珍らしいのであろう。関西の土産物を手渡して、荷物を軽くして、私達はとも角離れで一服し

た。朝早いのに、奥さんも起きられて朝食の準備、さらにお給仕して頂き恐縮した。夕方よりN氏宅で一泊させてもらう計画で、日の高くなった午前九時頃、私と家内は、N氏の案内するというのを、強ってお断わりして、二人で出掛けた。

高松城玉藻公園の散策、屋島国立公園から源平の古戦場を偲び、屋島寺へ詣でて、ケールでくだり、栗林動物園へ。ひっそりと静まりかえり、二、三人の子供が泳いでいる。動物園内の、すごく冷たいプールで、パンツのまま泳ぎ、日盛りの栗林公園を歩いて、時間を計ってN氏宅へ帰宅。夕食は大変御馳走して戴き、市内を散策して八時半頃戻り、さ



ていよいよN氏のコレクションを拝見の段となる。元来N氏はS、夫人は飼育によるMであるが、プレイの趣くまま、近頃はN氏がMとなつて、往々夫人より責めて貰うようになったと仰有る。つまり夫婦プレイの場合、俱にS性もM性も兼備しているのが実情ではないかという。N氏のフオトは、ネガを見せてもらうと、少し硬いめだがかなりシャープに出ているのに、引伸しの際の焼き過ぎで、現像液の時間が短かいのか、どれもこれも黒っぽく出ていた。現像液に適時間浸せば真黒になるのを、あわてて引上げたという感じである。

私はD・P・Eに対して、適当なアドバイスをする。

奥さんはつましやかに、N氏の傍らに控えて、それらのかなり露出の激しいプレイのフオトを次々見て行く私に、羞らしい笑みを浮べていた。私の家内も私の見たものを次から次へ見て行く、ここには夫婦プレイを理解した二組の夫婦が、同好のよしみを通じて、赤裸々に向い合っているのだ。緊縛はオーソドックスであるが、許し合った夫婦のみのプレイに、往々に見られる激しいきびしさがある。夫婦プレイの場合、SMのプレイは所詮

前戯であることを、N氏のフオトより、つくづく感じとった。そしてフオトの殆んどは全裸であり露出であった。

「御覧の通りのフオトで前半身のみチョン切らん限り到底奇クにはのせられんシロモノでしてね。私は私なりに家内とのプレイを愉しんでいるのであって、奇クにのせるなんてことを考えて撮って

はいません。人間本来のままの意慾を本来のままにとっているの、若し夫婦プレイをとるとすれば、これが本来の姿ではないでしようか。本に掲載しているものは、無論制約もあるためでしょうが、何となく作爲を感じられます。奇クサロンなどに発表の夫婦プレイのフオトにしても、それは発表した人の、最もつまらない、程度の低いものか、奇クにのせるために、わざわざ撮ったものだと思うのです。秘密であるべき夫婦のSMプレイのフオトなど、実際は余り衆人環視の誌上などに発表する性質のものでないと思います。夫婦の永い永い、生活の上にきざす倦怠感、不満感、隔絶感といった、そんなものの解消に、SMのプレイは、親近感を増し、夫婦二人っきりの秘密をつくり、円満と愛情を保持して行く上の、最大の要素だと思ふのです」

「しかし、貴方達夫婦プレイの動機も、奇クの愛読からとすれば、奇クが存在も万更捨てたものではないでしょう」
「勿論そうです。発表する人は勇気があるものであって、自分一人で愉しんでいる私達は、考えようによってはエゴであるかも知れませんが、しかし発表する人は、その何千分の一いや何万分かの一であって、その殆んどは、

夫婦の生活を大切にして、夫婦二人っきりで愛情の潤滑剤として、SMプレイを愉しんでいるのではないでしようか。私は辻村さんのように、次々と新たなモデルを撮るといふ機会には恵まれておりません。家内一人を唯一の対象に、コッコツと気が向けば撮って、二人の愛のかたみにしているに過ぎない平凡人です。こんな言葉、一寸該当しないかも知れませんが、辻村さんをプロとすれば私はアマなのです。私達のこのあからさまなフォトをお見せしたのは、辻村さん御夫婦がはじめてです」

奥さんの康子夫人は、夫の言葉にしきりにうなずいていた。改めて夫の愛情を確認し、プレイの意義を認識したのである。私の家内も亦N氏の言葉にうなずいていた。夫婦のSMプレイが、いかに愛情のきずきになるかを、改めて知らされたのかも知れない。

数冊のアルバム（妻の愛のかたみにと表題が貼ってある）に貼られたフォトの傍には、撮影年月日と、簡単なデータが記載されている。撮影技術の巧拙より、そのフォトの記録が大切なのだろう。

N夫人の楚々たる容姿は、女優の小山明子さんを、もう少し痩せて細くして、少し老け

させたら康子夫人のイメージにピッタリである。撫肩の夫人の、かげのある瞳に、私はプレイへの慾望の視線をしらすしらず投げていた。

出来ればN氏夫妻の、SMプレイのフォトが撮れたらと、そんな希望を出発前から持っていたが現在のお二人の心境から見て、第三者介入のプレイフォトは、懼らく無理

な様な気がした。若し彼等が、望まれるならば、私は妻を口説いて、夫婦Wプレイも辞さぬ気でいたのであるが――。しかし、そのことを言い出して拒否され、氣拙くなるより、黙っていた方が賢明のようだ。

十一時半頃まで語り合い、話はつきなかつたが、夜も更けたし明日の行程もあるので寝ることにした。

離れのその部屋が夫人の手で取り片付けられ、真新しいシーツを延べて、夫人は二つの床をとっていた。私は便所に立ったが、廊下でN氏が佇ずんでいて、そっと近寄って、



私の耳許に口を寄せると囁やいた。

「よければ、私達のプレイお見せしますよ。そっと来て下さい、お一人ですね。廊下を突き当って、右へ折れ、中間を通った奥です。寝室じやありません。いわば私達のプレイの部屋ですから。十二時半きっかり――」

私は夢中でうなずいていた。さりげなく別れて部屋に帰り、のりのよくきいた寝巻にきかえて床にはらばいになる。腕時計を見ると十二時十分前。私はわざと寝苦しさをよそおい煙草に火をつけて、週刊紙を見る。妻もなかなかねつかれぬらしい、やがて私に背を向



けて動かなくなった。

十二時二十七分。私は枕元のスタンドを消して、静かに滑り出た。手探りで馴れぬ廊下を伝い、右へ折れ、云われた通り中の間の障子を静かに開閉して、次の間の前へ佇む。夜光の針がきっかり十二時半を指している。思いもかけず、私の佇む遙か右手の扉が音もなく開いて、黒い影が近づくと、無言で私の手をとる。開いた扉より、淡い蛍光灯の光が洩れてくる。

N氏に手をとられ、足音を忍ばせて部屋に入る。床はフローリング貼りの板間で、四方

はベニヤの合板がはってある六帖ぐらいの洋間——。その中央に、眼隠しされた康子夫人が床上一メートル以上の辺りまで吊されている。行儀よく座ったポーズで両手を後手に縛られ、乙字形になって白い晒で全裸の身を緊縛され、その結び目が、天井より垂れ下った太いロープにつながっていた。傍らに足高の机が一つ押しやられているのは、この上にのっかって縛られ、ロープにつないでから机を外したに違いない。N氏は近づくと、かなりの力をこめて康子夫人の体を押した。宙に前後に彼女の体は揺れる。ぎしぎしとロープが

きしむ。ムーツと汗ばむ一室は防音装置らしい。N氏は三脚に据えたカメラより、ファインダーを覗く。無言で私に革バンドを手渡し、手振りで打てと云う。云われるままに私は胸を弾ませ、幾分力をこめて吊された夫人の腰の辺りへ一曳する。ウーンと呻いて、宙に腰を振る。更にまた一むち二むち。閃光がその都度

走る。

「いたーい。お父ちゃん、やめてーえ」

康子夫人の悲鳴——。N氏は私の手を押し止める。私にカメラをとってくれと手で合図し私に代って、N氏は康子夫人に近づいた。

「痛かったの、よしよし、」

なだめて、彼はチラリと片眼をつぶる。彼の夫人を撫でる手がやがて——。

私は赤裸々な二人のSMのプレイを次々カメラに納めていた。私のではない、彼のキヤノン一眼レフに。

熱の籠った二人のプレイは、いつしか私の存在を忘れていた。

「ねえ、早く眼隠しとって——。ねえったら

……」

「うん、今とってやるよ。その前に降してやるう」

N氏は康子夫人を抱いて、片手でロープを解くと、抱え降した。そして、またしてもプレイが始まる。N氏が私に手真似で押す様にした。出てゆけというのか。私は扉をさすとうなずく。私はまた音もなく扉を開閉して滑り出した。体中がホテったように熱い。そつと離れに戻ったら、妻が暗闇から、声をかけた。

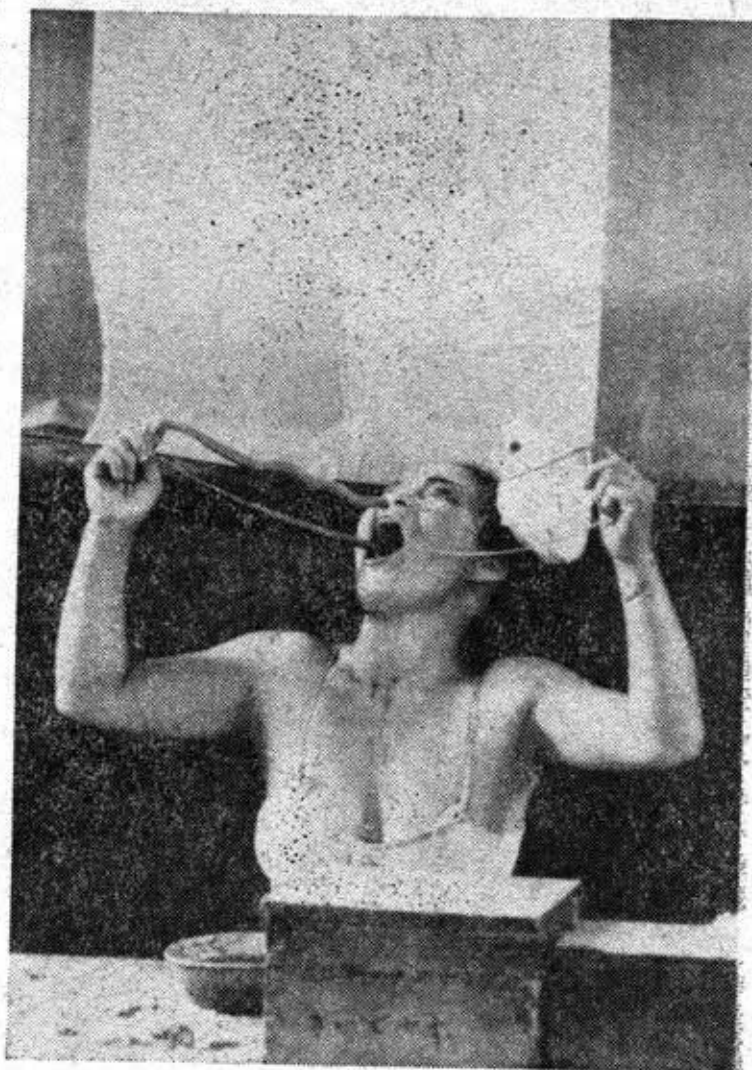
「何処へ行ってたの？」

「プレイへの御招待——」

私はその見聞をざっと話した、妻は根掘り葉掘り、康子夫人の様子をきき訊した。女性同志、プレイの関心は人並以上らしい。

成程、あの部屋は、よく出来ている。一步外へ出ると、内部でのあの呻きも、悶えも一切が隔絶してきこえなくなる。N氏の家族構成は、高校の娘さんが一人で、これはN氏の母親と二階で寝ている。使用人三人は別棟になっている。この洋間は恐らく日中は鍵をかけておくのだろうが、羨ましいプレイの間である。（朝、起きてその間をそっと覗いたら、変哲もない、文房具の荷置場に過ぎなかった。品物は意識して余り入れないらしいが、兎角夜は曲者である）

私達夫婦は、奇妙に昂奮した精神状態で、つけた枕元のスタンドを、再び消して暗くした。闇にまぎまぎと、先程の康子夫人の乱れた肢態が浮び上ってくる。何年振りかの他郷の一室で、家内も私の話や、N氏夫婦のプレイフトに刺激されたのか、そっと私の床に忍のびよって来た。私の受入態勢も熟してい



る。カタリと部屋の片隅で音がして、二人でない息使い、人の気配を、シンとした闇に私は感じとった。フトある予感がよぎったが、それもよからう。妻を抱きよせると私達は耽溺していった。

× × ×

覗かれていたかも知れない？。そんな危惧のうちに深い眠りに陥ちて朝がきていた。朝の光が射しこんで、腹這いに紫煙をふかす。煙が白く光って、さし込む光に立ち昇っていた。家内は傍らにいない。既に起きて、朝化粧しているのだろうか——。

つましやかに康子夫人が、私に向って挨拶した。恐縮して飛び起きる。

朝食の味噌汁が減法旨かった。N氏も相伴して、私達と一緒に朝食をとっている。辻村隆夫婦の、夜のポーズを覗きたい欲望——。これは若し彼と立場が逆になった場合、私としても充分持ったに違いない。恐らく確定的な彼の行為も一概には責め得ないであろう。或いはSMプレイするかも知れないという。淡い望みも、私達が単なる夫婦の交渉に終った事で、些かガッカリしたかも知れない。

私達は、そんな気持をけぶりにも見せず、只管にN氏夫婦の厚意を謝した。

「今日は金刀比羅宮へお詣りでしょうが、あの辺りに、例年面白い見世物が出ています。金刀比羅か多度津に行けば、きっと見られるのですが、蛇娘といってね。ゲテモノですが或いは辻村さんのカメラ・ハントのタネになるかも知れません。一度探して見ては如何ですか」

「時間があれば、探して見ましょう。」
私達は呉々もご夫妻に礼をいい、私の宅も

是非揃って訪問してほしい。今日のおかえしに、私達の夫婦SMプレイのフォトを、お見せするからと約した。

今日も陽が暑い。炎天は続いている。

琴電で、終点の琴平まで約一時間、ガタガタ揺れる箱電車に揺られて到着。駅前でN氏から頂戴した、桃太郎の桃菓子や、魚せんべいの風呂敷包みとバッグを預け、杖と経木帽子とゾーリを借りて、膨大な階段に挑む。国立公園象頭山の中腹に鎮座するコンピラさんまで、一三六八段の石の階段がつづく。信仰の対象でなく、リクリエーションで登るに

ては、相当のエネルギーの消費。戻りは裏道を下って再び琴平に出る。

駅前でN氏にきいた見世物の所在をきいたが、今日はかかっていないという。植木市の始まった多度津ではないかというので、琴平より多度津へバスで走る。二年前までは琴参電鉄が走っていて、普通乗換で多度津へ行く電車があったが、赤字で廃止になり、今はバスが走っているとのことであった。

多度津に目指す見世物は掛っていた。例年今頃になると植木市が始ま

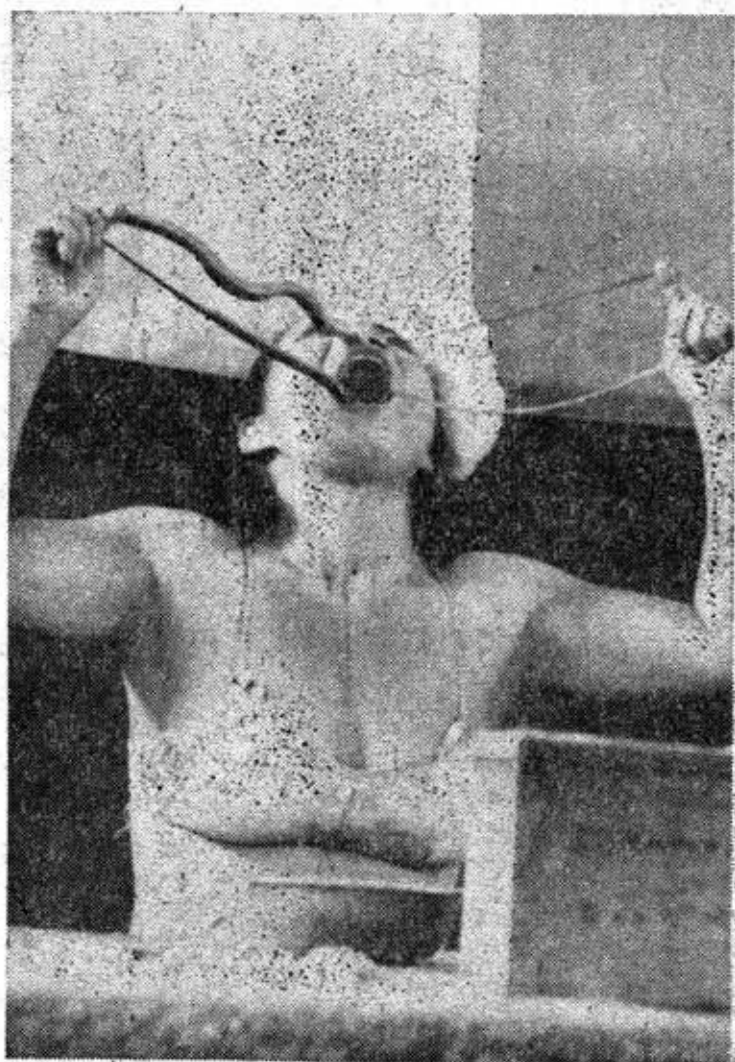
り、その雑踏をめざしてタカマチが集う。昔なつかしい店出しが軒をならべる。海岸から突き出した棧橋のような橋の彼方に小島があり、ここに祀る石槌神社の祭礼をあてこんでの、ひなびた賑わいであった。店出しの少し途切れた処に、古びた天幕張りが見える。青赤、黄の三色の色とりどりにはり回され、丸太で囲った入口には、毒々しい泥絵具の布看板が掲げられてある。角刈りに、色眼鏡の、だんだら模様のランニングをきた、一見やぐざタイプのにいちやんが、盛んに呼込みをやっている。

「不知火の沖でとれた、生きた河童と、生き乍らの蛇の生血を吸い、肉をかみくだいて生きた蛇娘はコチラ……。ええ、らっしやい。えー、らっしやい。皆さんの鼻、小さいほこりが入っても痛い鼻へ、たったハタチの若いねえちゃん、鼻に鎖を通してご覧に入れま

す。火をたべ、蛇をのみこんで見せます。さあ、いらっしやい。写真のような若い美人の姐ちゃんが蛇をいきたまま、モリモリとたべますよ——」



呼び口上の傍らには、成程若い可愛らしい娘が、鼻穴に鎖を通し、火を吐いているフォトが、陽に灼けて、黄色く変色して額縁にはめられて飾ってある。自虐的な鼻責め本位の見世物らしい。木戸銭は大人五十円也。二人分百円を払って入って、粗末な木戸口のすだれを潜る。場内には三十人許りの見物、蛇娘の出を待っていた。すり鉢型の小さい舞台の底は空白で、ガアガアと喧噪だけの呼込みのレコードが尚も鳴り響いていた。フト、このゲテモノめいた、見世物に興を覚え、私はフォトをとりた欲望を覚えた。黙って撮って、若しうるさそ



うな連中から文句いわれてもつまらないと、入口に引き返すと、しきりに喋っている若いあんちゃんに声をかけた。

「大阪から来たんだけど、凄く面白そうだから、紀念にカメラ撮りたいんだけど、いいかしら？」

「えっ！」と見下して、若い男はジロリと私を見た。私は慌ててポケットから、百円札を三枚小さく丸めて呼込台においた。

「ねえ、頼むよ」

「ああ、構いませんよ。どうぞどうぞお客さん。それに、こんな心配要りませんよ。しま

って下さい」

案外、外見に似ず気のいいあんちゃんであった私は押返す紙幣を無理矢理握らせ、

「いいよ、いいよ。ほんの煙草代だよ。じゃあ、済まないけど、お願いしますよ」

とつけ加えた。

「いいですとも、女にもそのこと、いつときますから」

男は私の風体を改めてジロジロ見て、ニヤニヤし乍らキサクに伝えてくれた。ホッとして私は中へ引返す。

けたたましいベルが鳴る。やがて始まるらしい。

× × ×

三色の幕をバックにして、色白く若い娘がここにやかに座る。黒髪に大きい造花をつけてブラジャー一枚の肌は豊かに盛り上って、この様な、ゲテモノの見世物にはふさわしくない娘である。化粧は眉を吊り気味に、アイラインも濃目の、ややきついつくりである。

座った机の前には、古びた木箱が二つ並んでいる。大きい箱には、くさりや、ローソクなど、このショーに使う道具類が入っていてその箱の正面には、出口と書いて矢印し、こちらです。下においでやすと、稚拙な字で書いてある。箱は油と手垢にまみれて黒く古ぼけている。その傍らの小さい方の箱には、蛇が入れているらしい。そして水の入ったアルマイトの鉢が一つ。

「何だか薄気味が悪いですわね」

妻が私の腕を捉えて、そっと囁きかけて来た。

「子供だって入ってるじゃないか。大丈夫」

見渡した観客の中には子供連れもある。子供には余り見せたくないシロモノだが……。

娘は箱を開いて、ピカピカ光る長い鎖をとって出して両手にかざした。客席に向ってそれを確認させるかの様に、坐った儘、上体をずーっと右から左へと廻していった。にこやかに微笑んで、きつい化粧がふさわしくないあどけなさがチラリとかすめる。そのかざした両手が私の正面でとまると、心なしか彼女は軽く頭を下げにこりとした。きっと木戸口のあんちゃんから指図があったに違いない。カメラを構えているのは私一人。辺りの見物が

彼女の視線を追い、私に当って、ジロジロと見る。傍らの妻は閉口して、そっと私の脇腹をこづいた。——随分物好きね——といった気持なのであろう。

娘は鎖を垂らし、やおら仰向くと両手で鎖を掲げて、その鎖の一端を左の鼻孔にスルスルと滑り込ませていった。まるで吸い込まれるように、鼻孔深く鎖は流れ込んで行く。うっと呻いて顔を伏せたと見るや、娘は素早く二本の指を口中に突っ込んだ。その指に鎖の尖端は握られていて、鼻孔から口へと連結した鎖は、美しい娘の顔を一瞬、みにくく歪める。鼻と口の鎖の両端を握って、娘は数度ゴシゴシとしごく。鼻粘膜や、咽喉がどうもならないものかと、見ていてハラハラするが、娘は一向平気な顔で、尚もゴシゴシやっている。ついで更にもう一本の鎖を、右の鼻孔からするする入れると、この鎖もゲツという様に、手を口中に差し込んで忽ち口腔からとり出して、それを交叉させる。鼻孔深くで交叉した鎖を掛声と共に、右へ左へとしごき始めた。口は一杯に開かれて、真紅の舌が、しごきにつれてハアハアと喘いでいる。美しい顔をしかめ、懸命に彼女は演じている。このワシカットで、木戸銭五十円はとうに吹っ飛ん

でいるだろう。家内はそっと眼を伏せてしまった。同性の自虐振りが見づらかったのであろう。私のカメラは、次々とシャッターをきる。意識しているのか。彼女も又、私に正面きって演じていてくれる。同情とも嘆声ともつかぬ溜息が場内にもれる。

しごき終ると、彼女は鎖の両端を握って、ぐいと力任せに左右に引き絞った。鼻腔中で鎖はクロスし、彼女の可愛い鼻孔は、極端に横に大きく拡大し、口は張り裂けん許りに一杯に広がる。鼻責め愛好者なら垂涎もののこれは又何とも無惨な光景だろう。

ブラジャーに掩われた豊かな胸が、切迫する呼吸に喘いでいた。二本の鎖を口腔よりスルスルと抜くと、客席からホツとした声もれる。娘は小箱の方を開き、そこから一匹の蛇をヌルヌルと無雑作に掴み出した。ニョロニョロ二匹の蛇が箱から顔を出すのをパタンとしめ、一メートル足らずはあろうかと思われる青

大将の首を握って鼻に近づけて行く。家内が思わず私にしがみついた。私のカメラ持つ手もいつしか力がこもっている。

娘は蛇の頭とシッポを両手で握って、高々と観客にかざす。かざした娘の両腋の下、清潔な白さが私の眼をそこへやる。空間に蛇はうろこをライトに光らせて、くねくねとくねりゆらぐ。あの太い蛇の胴が、娘のかわいらしい小さい鼻孔へ、果して挿入出来得るものだろうか。

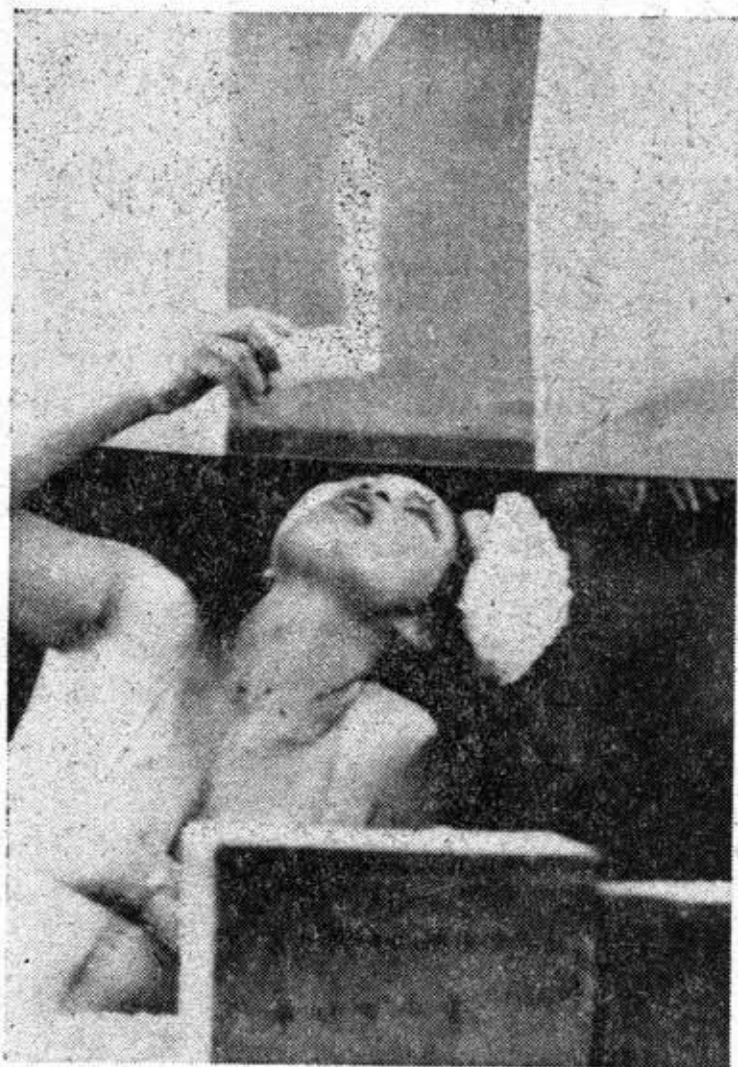
私をも含め、見物は一様にシーンと静まり返って、固唾をのんで、彼女の一举一動を見



守っていた。娘は両手で高々とかざしていた蛇の、シッポの方を一層高く掲げ、右鼻孔に蛇の頭部をあてがい、そろそろと押し込み始めた。頭部が陥没し、胴体がうねり乍ら、きらきらとうろこをきらめかせて侵入して行く。娘の眉は近づき、苦悶の形相が走る。俄破と口中深く手をつっこむと、蛇の頭部をズルズルと引曳り出した。生きた蛇が完全に彼女の鼻腔と口を塞いでいる。ハアハアと喘ぐ息が激しい。蛇をグイグイと左右にしごき、ぐっと抜きとり、つ

いで息つく間もなく鎖を左鼻孔に通して口中より出し、右鼻腔に又しても蛇を差し込んで行く。蛇と鎖が口腔と鼻孔でクロスし、それを左右にぐいと握って押し拡げる。全く何とも度胆をぬく離れ技である。

彼女の鼻腔は最大限に拡張し、今にも裂けん許りである。私はもはや夢中で次々とそれらのポーズをカメラに納めていた。両手を離すと、鎖はダラリと垂れ、蛇は唇の辺りでクネクネと踊り、しっぽをだらりと下げて、その尾端が時折、ピクピクとうごめいていた。家内は気分が悪くなったのか、少し顔色が蒼



褪めて、胸を押えてうつむいている。撮っている私自身、余りにも非情、無惨なショーにともすれば嘔吐を催す程の凄烈さだ。私はその時、首許から胸の谷間にかけてドス黒い血痕がしたたりついているのに気付いた。この芸当に夢中になっていて今まで気付かずうかつだったが、あれは正しく生血のこびりついたものに違いない。私はそっと隣りの三十過ぎの男にきいて見た。

「あの胸の血のあとは、どうしたのですか」「ええ、あれね。前回のショーの時、蛇の皮を剥いで喰った時にしたたった血のあとです

よ。一日に一回は蛇をたべるそうです。生きた俵の奴をポリポリやるんですから、見ていて、寒気がしますよ。あの箱には、未だ十五、六匹蛇が入っている筈ですが、あの可愛い顔で恐ろしい奴を丸ごとかぶりつくんですからゾーッとしますよ」「何回も見えておられるんですか」「ええ、別段交替もないのでね。わたしや今で三回目です。へへ」

きいて私は反ってゾーッとした。一回でも閉口なのに、三回も四回もぶっ続けで見て、平然と喜こんでいる奴もいる。

蛇を箱に入れると、奇妙な音楽が鳴り響いた。舞台の傍らに二尺四方ぐらいの水溜めがある。古木で囲いをした中に、潑んだ蒼黒い水が溢えられてある。音楽に合わせて娘がポンポンと手を叩くと、水面がゆれ動いて、ブクブクとアブクが立つ。何か水中でうごめいている感じだ。見物の中の子供が「河童や、河童や」と叫んでいる。姿出さぬが、娘が手を叩くと、水面がゆれて、あぶくが立つ。どうせタネのあるものとしりつつ、無気味な真剣さに惹かれて、本当にこの潑んだ蒼黒い水の

中に河童が棲息している様な錯覚を起す。

音楽がなりやんで、水の面も又元通り静かになる。ついで最後に、娘の火の芸当が始った。場内が少し薄暗くなる。娘は前の大きな方の箱からローソクを沢山とり出し始めた。何本あるか定かではないが、少なくとも十本以上はあると思われるそのローソクを、一束に纏めてしぼり、それに点火した。スツと場内の電気はすっかり消えて、ローソクを振回す毎に、鬼火の様に、炎は次々点火して次第

に拡大し乍ら宙に舞う。すべてのローソクの火が、振り廻す彼女の手許で一大火炎となつて激しい大きな焰と燃えさかる。その最大限を見計らって、彼女は仰向けた顔の、一杯に開いた口へ、手にしたローソクを傾ける。真紅に彩どられた娘の口へ、蠟涙が線となって激しく流れ込む。パツとローソクの焰を近づけると、どういう細工になっているのか、口中から激しい火炎が一メートル許りも立ち昇った。苦悶にひきつる彼女の形相に、心なし

か眼がうるんで見えた。焰が納まり、俄破と大きな塊りが彼女の口中から吐き出された。燃焼したローソクの残骸であろうか。口辺のかたまつた蠟涙を両手ではぎとり乍ら、にっこり笑い、私の方へチラリとウインクを投げ退場した。

このショーの時間、約十分。私は流石に堪能して、もう、一度見る気も起らず、妻をうながして木戸口を出た。

「どうも有難う。うまく撮れた様だよ」

私は先刻の木戸のあんちゃんに礼を述べると、彼は恐縮した様に頭を掻いて、

「もうお出かけですか。どうもどうも」

と柄に似合わずペコペコして私達を見送ってくれた。あんな恰好をして、ハツタリをきかしているが、根は善人なのだなあと、私はこの世界で生きる彼等の、偽悪者の姿を見た思いだった。

「今晚夢に見るかもしれへんわ」

家内はやっと人心地ついた顔付で、溜息交りにいった。あの強烈なシーンは、恐らく私も忘れ兼ねるものではない。

一日に十何回となく、あの自虐のショーを繰り返す蛇娘。あのうらぶれた小屋の中で、半裸の肌を曝し、僅か五十円の木戸銭に比べ

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

て、自らの身を削ってゆく彼女に、私は何かそこはかとなき人生の哀歎を覚えた。

私の探求癖は、若し出来得れば、ショーの終ったあと、彼女を一席招いて、その生いたちや、このショーに到る迄の苦難の来歴などを聞き訊したかったが、妻も同伴の事だし心の片隅では蛇を喰う娘に、多少のおぞましきもあつて断念した。仮りに、この地に止まつて、彼女を招き得ても、初見の私達であつて見れば、恐らく彼女も真実を語らぬに違いない。しかし、若し探求し得たら、あのうら若さで、蛇を喰ひ、鼻腔に通し、火をふき、鎖でしめる、くつきよの男ですら、為し得ない、あの演技の数々のウラには、恐らくその過去に、彼女を操つる親方の、無惨、残酷な嗜虐行為の数々の裏付けがあるに違いないと推察されるのである。タカマチのある所、四国の奈辺でか、必らずや諸賢もお目にかかる機会もあるに違いない。そうした点を探求される方はいないものだろうか。敢えて期待している。

アブの極致に行く娘よ——。名も知らぬゆきずりの彼女よ。私に微笑みを送ってくれた人よ——。願わくばいつ迄も健やかに、早く幸わせを掴み給え。

×

×

×

既に夕靄が多度津の港にただよっていた。

灯台にあかりがとまり、港から望む桃陵公園の一角に、(一太郎やーい)の明治の名残りを刻む銅像が、遙かに夕闇に霞んで見えた。汐の香がそぞろ身に沁む、異境の夕暮れである。出帆の時間も迫っている、慌ただしくまずい夕食を済ませ、私と妻は佻しい港から船に乗った。午後七時四十分——。ポーツと汽笛を静かな海面に響かせて、関西汽船のひかり丸は、少数の客を積んで出港する。

キャビンで船のローリングに揺られ乍ら、いつしかとろとろと眠った私は、てっきり蛇娘の夢を見ていた。それがN氏夫妻とのあの夜のプレイとダブって、何とも奇妙である。

康子夫人の端麗な顔に、蛇娘は、ぬめつく蛇を近づけ、口は耳まで裂けた、ゲタゲタとした笑いを浮べて、無理矢理、康子夫人の鼻腔へ蛇を押し込んでいたのである。数匹の蛇が次々と康子夫人のあちこちへ潜入して、もかく夫人を蛇娘は冷やかに眺めている。私とN氏は助け様と思うが金縛りになって動けない。気がつく、二人共天井から高々と吊り下げられているのである。康子夫人が悶絶すると、蛇娘は私の妻を引曳る様にして連れて

来て、裸にして縛ると、数匹の蛇をもって妻に近づいて行く。絶叫する妻——。

うなされて眼覚めると、淡い光の下で、妻が、不安げに私の顔を覗き込んでいた。

「蛇娘の夢を見てうなされたのと違う? 私、夢を見たの。本当にいやだわ。貴方はどんな夢?」

私はかいつまんで話す。

「N氏の奥さんのプレイを独りで見て、たのしんで……。私も誘ってくれればいいのに」妻はギョッと私の腕をつねった。

飛び起きて、人の混まぬ間に洗面して甲板に出ると、ポーツと東の空は既に明かるい。脂汗でにちやついた肌に、夜明けの爽やかな汐風は実に快い。私と妻はデッキで何となく手を取り合つて佇んでいた。黒いもやの中に、未だ眠むる神戸の街々。うっすらと白い暁の光に、黒くシルエットを映す六甲、摩耶の山並。私達はいつ迄も、想い出を噛みしめるかの様に、デッキで汐風に吹かれていた。

このカメラ・ハント紀行。先ずは私の拙ない文より、フォトの方をじっくりと眺めていただいて、蛇娘のショーのさまを偲んでいたければ幸いです。

この一文は「私信」にすべきか「投稿」にすべきか？

「久我庄一メモ」

—云いたいことを云いたいように—



久我庄一

大悪書はインテリーの
オナニーと同意義である

郷愁としての残酷を夢みる江戸川乱歩は、

現実の犯罪にはまゆをひそめるところか、そのむごたらしさに眼をそむけたという。おそらく紙上の他では、蛙一匹の解剖さえよく出来なく、見ることもしなかったろうか。事実

と文学の相違はここにある。S・百分の男がマニアでなく、むしろ、犯罪者に近いのはたしかだ。マニアとは常にSかMが、七・三位が理想だろう。推理作家にゼントルマンがそのすべてを占めていることは論をまつまでもなく、推理小説マニアの大部分が平凡な社会人でもあることはたしかなようだ。

人間だれしも秘められたアブ的な欲は多少ある。(木の股からでも生れない限り)

それが作品という世界を仲介として、昇華されるところに、文学というチョッピリカラミも入る調査された解毒剤が出来るわけ。これは八書くVという世界も八読むVという世界も共通である。

いま静かなオナニー・ブームが都会のサラリー・マンの間で取りざたされているという。赤線の赤い灯、青い灯が大人のオトギ話となった現在(赤線是非論は、いまは触れない)。世のサラリーマン・男性諸君は、一人静かに(主に独身者)あのビルの中の片隅、白々としたトイレで、もくもくとしてオナニーしつつ孤独をかみしめているという伝説? その人達にとって、悪書と称される書物は最も無難な、手軽な値段で求められる頭のレクレーションとして存在する。このことは、

何も私がSMマニアだからいうのではなく真実だと思う。私自身、いまは中年男であるが、小学四・五年生頃から乱歩の作品をよみ、長じてあの中国に現役として動員されたが、その前夜、古書店で『グロテスク』などを購入夜明けまで耽読し、カラッとした気で駅頭に立った。私の悪書？遍歴はまさに四十年になんなんとしている。でも社会にあって常によきサラリーマンであり、家庭人であることをほこりとしている。

ただし、歌人が独座して句作するようにあの紳士国・イギリスの知識人が冬、だんろの前で葉巻などをくゆらしつつ推理小説をよみふけるように、SM図書は、一人書齋で耽読する。ウイスキーなどかたむけつつ――。

まったく、高級なる趣味と、自画礼讃したい。だれに害を及ぼすわけもない。たまに気がむいて家内の陽子を縛れば、これ又、愛情の前奏曲のようなものだ。いっそうセックスがプラスされる。

さらに大悪書ともなれば、オナニーが無害の如く、身にホルモン充滿し、そのため夜にカアチャンよろこび、時間が惜しく外に札幌切るため出掛けることも無く。また独身者ならば、夢中になってよむだけ、セックス・

ノイローゼはいつのまにか昇華されよう。小説を地で行くなど、万に一つもあり得ない。特にいまの文学は表現もうまく、サービス満点なので昔の××××××○○○○など、へんに好奇心を刺激すること無く、書物だけで十分にグツタリさせられる。

モンキーダンスに狂う

若者に書物を読む習慣を

現代は、特に青少年達の世界を称して紙芝居人生と識者は言っている。(考える必要のない人生)あのパスカルは人間とは(考える輩)と言ったが、いまの子供達(青少年)はすべてに衝動的であって考えるなんてチャンチャラおかしいようだ。かつて日活のスター・赤木ナントカ君は、そこに自動車があったから、乗った、死んだ――という自バク的行為をなした。

解説は、その後で世間がナニヤカヤと付け足したもので、本人はいとも簡単に惨死したようだ。

いま、モンキー・ダンスという、いとも珍妙な踊りが流行っている。別名(ゴリラ・ダンスともよぶらしい?)

彼らは、甲高いリズムにあわせて、狂い踊

る。愛とか、むーどなど問題じゃない。ただ手前勝手に手を振り足を動かし、モンキーのような顔をしてバカさわぎをしている。だがここには、何んの本当の生きる目的も有しない。そんな社会の中にある彼らなりのハ孤独Vがにじみ出ているようだ。苦悩する時間も持てずただ行動的に、がむしゃらに果しくステップをふむ――。青春という言葉を使うなら、ハヤブレカブレの青春Vともよぶべきか。

書物によってハ悪Vもハ善Vも知り、そこに青春も、過ぎ去ったるまんも回想される。これは昔から今に、そして未来に通じる真理だと思う。(そういう意味では、ドストエフスキーの作品は、私にとって偉大なる悪書だった。)

悪のなんなるかを知らず、ただ夜の街に汚点を流す青少年の行状は(ごく一部であろうが?)何もPTAのオバサンたちの言葉を借りるまでもなく、その筋のオエラ方の指示を受けるまでもなく、昼も夜も、いっそう知っている(高級なる大悪書etcによって)マニアたる私にとって、実に悲しむべきことである。

彼ら(青少年)に読書の習慣(課外読本と

して)を付け(悪書などという高級なる書物はまだ読み理解するには無理。例えよんでもチンプン・カンブンだろう。)せめて一流大衆雑誌位は(だんだんと文学書も)理解、読む習慣ある生活をさせたいものだ。

マンガの本ばかり売れる新刊書店。借りてゆく貸本屋の統計も取らず、悪書(この場合SM的高級雑誌etc)と青少年を結びつける、この不思議な二十世紀の珍話は、だまりスケベイの偽善者?たちが、手メいの尺度で計るヒステリー・ドラマか。

聖霊によって身ごもるマリヤさんの如く、マコトにごせいけつなセックスなどしか御存じない?オバサン達の口火による——出版の自由など土足でふみにじる時代おくれの魔女裁判さながらの大人とは名ばかりの小人(シヨウジンとよんで下さい)たちのママゴト的悪書追放劇でもあらう——か。

SMマニアとは

あまりにも善良なる集団

私はこの奇クに親しんでから、マニアにあっての悪書とはワサビのきいた「善書」たることをあまりにもケンソンして自称して居る別名であると解釈し、——対社会から(それ

も一部だろうか?)悪意を込めて悪書とよばれるのは、メクラのテッポウうちのようなものサ——と判った、理解した。

それ程、「悪書」とは、つまり、人間の書√と称されるものが多い。そして、単純な人達には判らない複雑さもある。メクラのテッポウウチせざるを得ない程、超高級な世界だ。悪書よばわりする人種たちの、性的無智と家庭生活のアンニーに、一例として教育家のピンク・ニュースを持出したり何かと言えば、社会的な肩書を沢山かかえこんでよろこぶザーマス族の裏にまわっての?的行状は日常の新聞や週刊誌が、それオマンマの種と書きまくっているのを見て判るだろうが(悪書などとすぐ言葉に出してまゆをひそめる人間程、偽善的落下は早い。PTAで知り合った良家の出と称する男女が桃色の影響の世界のとんだ別天地での会議?は、三文作家の材料にされるかっこうのタネでもある?)

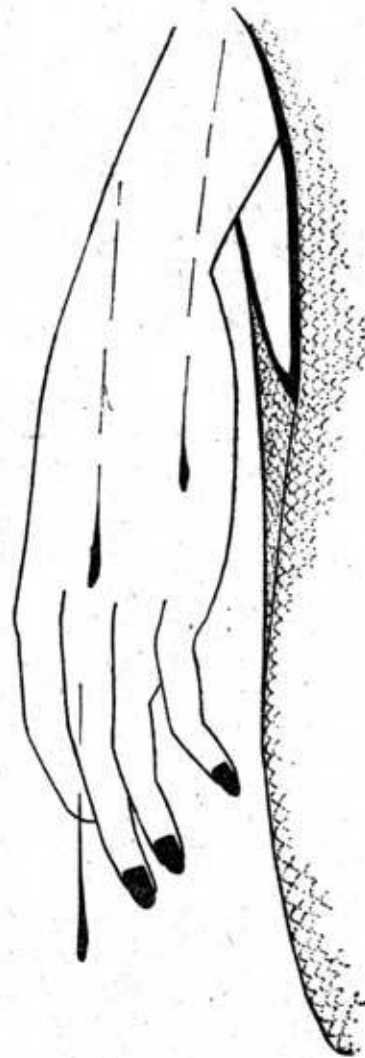
SMマニアと自種するある部分の人達が、芳野氏の指摘したように空想的なSMを夢みる存在?のようだと思われるし、(それで満足)まれに実地に見知らぬマニアたる男・女がめぐりあっても、そのフェミニスト振りはS男の場合・なみだぐましい?ものがあるよ

うだ。(晴雨画伯・またはマゾヒスト・古川裕子etcのような場合もあるが)ともあれSMマニアとは、おおむね対社会的にビクビクし、理解のない家庭にあってハラハラするあまりにも善良なる集団ではなからうか。(マニアに悪人なしと私は断言したい。むしろ人がよすぎる。)現代にあつては、アブノーマルという表現は、いまではオナニーという文句と同様に、普遍的な字句になりつつある。(人間とは、だれでもSM的な要素が多分に秘められている——これはミーチャン、ハーチャンがよむ週刊誌にだって特集されている。ナットク出来ないのはよほどおめでたい人間でもあらうか?)むしろそれを自覚した人間は、それだけ一步、人間存在の高級な部分にふれたことになり(高級とは、苦悩もあってこそ、——そうよばれる。美も生じるロマンもつかみ取ることができようか。ただし前記したような古川裕子etc・または夜乃探郎氏の如きetc・その他、段階はあるう。)真実ある世界の住人でもありうるのだ。

(終)

みようしん
に おぼえがき
妙心尼覚書

芳野眉美



A

文学部四階の国文科主任教授の小さな個室は、大学院学生の教室を兼ねた教授の机と学生用の机が一つあるだけで、周囲の書棚に研究用の古書や参考書がうず高く積んである外は、何も無い。文学部のイチヨウの大木にさえぎられて、西日もあたらない暗い小部屋でここだけは全く季節の外にあった。

個室のドアを開いて、紺のスーツにサングラスの青年が部屋を覗いたが、誰も居ないとわかると、机の上に腰掛けて、そこに置いてあった古文書をめくり始めた。

古文書の表紙には「妙心尼覚書」とあったが、これは主任教授の筆跡で、題名は無い。

簡単な記録の列記で、妙心尼の日記と思われるものだが、教授が覚書としたのは、月日が書いてある頁と、書いてない頁があるからであらう。

前後の文章から察すると、戦国時代白狐山城主一色武蔵守重満の夫人、小夜香の方につかえていた侍女の妙女が、一色家滅亡ののち剃髪して尼となり、山里の草庵で老後のつれづれに、日記の行間に書き綴ったものと思われた。書いた年代はわからない。

その覚書が日常茶飯事の単なる記録であれば、虫食いの上、細字が多く、女文字の読みにくい文章を、いくら人を待っているとはいえ、的場太郎は読まなかっただろうが、その覚書の主題と思われるものが、小夜香の方と妙心尼の弟松山太介の異常な関係であること

が、ひまつぶしのひろい読みでも理解出来たからであった。

その上、驚くべきことに、この二人の関係は、小夜香の方の夫武蔵守重満を刺殺する策謀の上に成立していたのである。

そして、その事実、あきれるほど簡潔に列記してあった。肉親の姉という立場が、この不可解な事件に対して、心理的解釈や感想をとらせなかったのかもしれない。

白狐山城が、関東地方のどの地域に存在していたかは、今日の地形からは知るよしもないが、城といっても、江戸時代の豪荘な城ではなく、規模は大きくても山の要害にたった中世風の山城のたぐいのものであったのだろう。

一色家は、数カ国を領する大々名ではなか

ったが、その頃としては門地は高かったらしい。それは、武蔵守の正室小夜香の方が、五撰家の流れをくむ上橋中納言の息女であり、都でもきこえた美貌の上臈であったことでも知れた。が、いくら門地が高くても、彼女が一地方大名にすぎない武蔵守の許へ輿入れをした理由はわからない。

妙女が召抱えられて正室の侍女になったのは、小夜香の方が輿入れしてから三年たってからである。妙女の素性はわからない。自分のことは書いてない。主家が没落した浪人の娘であったかもしれないし、土着の郷士の娘であったのかもしれない。

妙女が小夜香の方の寵愛を受けたことは、

「御襦袢拝領」

とか、

「御小袖拝領」

という五字に要約されるだろう。この拝領の文字は、宿直の数と比例して多くなっている。

これは、小夜香の方が妙女を策謀に引きづり込む為の伏線であったのかもしれないが、また、

「御肌着拝領」

の文字を見ると、単なる宿直ではなく、寝

所で小夜香の方と同衾したことを意味するものではないかと思われたりする。

もっとも、的場太郎は、室町時代の絵巻に張形や口唇による上臈の同性愛が描かれていたのを見たことがあるから、こんな空想をしたのかもしれない。

小谷亜紀が、ようやく教室に姿を見せたのは、的場太郎と約束した時刻を一時間程過ぎていた。二人は国文科の大学院の学生である。

小谷亜紀が的場太郎の口元の汗を拭いたハンカチは、彼女の手に握られてあったものではなかった。彼女の腋の下にはさんであったものである。汗に濡れていた。

ハンカチにはコロンがスプレーしてあったが、コロンだけの匂いではなかった。小谷亜紀の汗が染まっているはずであった。いくら美しい人でも腋の下の汗くさい匂いはいただけない。それなのに、小谷亜紀の体臭に香料が調和すると、こうも美しい匂いになるものなのだろうか。

的場太郎は踊りながらハンカチを持っていた小谷亜紀の手ごと引き寄せて嗅いでみた。

「いい匂いだ」

「シベットよ」

「シベット」

「霊猫香」

「それだけなら……」

「えっ」

「いや」

不思議なものだ。腋の下から分泌された汗小谷亜紀の体臭にシベットが秘められて、的場太郎は彼女にひきつけられた。

小谷亜紀はグリーン一色の袖の無いニットウェアと、短いタイトスカートを無造作に着ていたが、豊満な乳房と弾力のある腰が意識的に強調されているように見受けられた。タイトスカートの少しのゆるみもないし、ブラジャーはしてないようであった。ハイアップのヘアスタイルの色もグリーンであった。

二曲終って、小谷亜紀はちらっとテーブルを見た。今夜は、的場太郎の外に連れがあった。二人はテーブルにもどった。

的場太郎は額の汗に手をやった。このナイトクラブは熱すぎる。背広のポケットからハンカチを取り出そうとしてやめた。

「ハンカチを忘れたらしい」

小谷亜紀はハンドバッグから新しいハンカチを取り出した。

「それより」

「えっ」

「さっきのハンカチ」

「――」

「腋の下」

「あら」

小谷亜紀はボーイを呼び、スカッチウイスキーの水割りを二つ、コーラを一つ注文した。的場太郎は彼女の前に手を出した。

「借して下さい」

「汗かきだから」

「そのほうがいい」

「困るわ」

連れの少女は無口だった。小谷亜紀も別々の場太郎に紹介するわけでもなかった。少女はコーラを静かに飲んでいた。二人の会話を聞いている風でもなかった。

腹部を大胆にあけた、サンライトルックだが、健康そうな緑の素肌にマッチして可愛かった。お尻が小児のように小さく、きゅっと上にあがって七分のストラックスがよく似合った。三人のテーブルを外人客が覗くのは、小谷亜紀とこの美少女の為らしい。

「このハンカチ、返えしませんよ」

「おかしな人」

小谷亜紀は微笑を浮かべると、型の良い唇にケントをくわえて、

「妙心尼覺書、面白い」

と話題を変えた。

「興味は有りますね」

「そう」

「よくわからないところがある」

「虫食いで読めないでしょう」

「こんなこと、亜紀さんに、聞いてもいいかな」

「どんなこと」

「小夜香の方と、侍女の妙が同性愛だったのではないかということ」

「そう感じた」

「違いますか」

「そうかもしれないわね」

的場太郎はスカッチの水割りを一息に飲み干して、微笑の消えない小谷亜紀の顔を見つめた。

「それだけ」

「いや」

「どうぞ」

「小夜香の方が一色武蔵守の許へ興入れをした理由がわからない」

「復讐よ」

「復讐」

小谷亜紀の話に依ると、関東管領畠山氏の

家人であった一色武蔵守重満が、五位に任官し、京都に上洛した際に、小夜香の方の母である上橋中納言夫人に恋慕し、一夜兵をもって中納言夫人を強奪し、これを犯して死に至らしめたという。

「上橋中納言日記」には、一行、夫人の名の下に、

――自害。

と書いてあるだけだという。

中納言の館に帰って自害したのか、武蔵守の宿で自殺したのかわからない。いずれにせよ、自害の二字の外は何も書いてない日記には、言葉であらわせない中納言の怒りがこめられているように思われる。

小夜香が母の自害を知り、その犯人が一色武蔵守だと知ったのは、中納言家に仕えていた下郎の一人が、たまたま、一色家の属領の出身で、武蔵守重満を知っていたからであった。

母の自害から五年後、小夜香は、畠山氏の養女となって一色家に興入れしている。十八才の花嫁だった。ときの関東管領に処女を捧げるという代償を払って、自分の願望を達したもののらしい。武蔵守が小夜香の素性を知っていたかはどうか明らかでない。

「くわしいですね」

「あら、ハンカチを落してしまったわ」

話し終った小谷亜紀が、小さな叫び声をあげた。

的場太郎は、気軽にテーブルの下に身体をこめた。その顔の先に、小谷亜紀の素足があった。素足でハイヒールを履いていたらしい。脱げたハイヒールがテーブルの下に転がっていた。

ハンカチをひろったとき、小谷亜紀の汚れた足の裏が不意に的場太郎の顔に押しつけられた。そして、一瞬だが、彼女の足の拇指が彼の口の中にねじり込まれたのである。

的場太郎の顔を小谷亜紀の足の裏がまさぐったのは、ほんのわずかな間だったが、汗ばんで、妙になまあたかいた足の裏の感触は、的場太郎を興奮させた。

B

小夜香の方が、夫武蔵守重満を謀殺する計画を妙女に打ち明けたのは、妙女が侍女になって二年、興入れしてから五年経っていた。五年間も夫婦生活を送ったのは、覚書にも、——たとえ仇なりとも憎からず思い侍る。

とあるから、小夜香の方もあらあらしい戦国武将の肉体を拒むことは出来なかったらしい。心ひそかに武蔵守を愛していたのかもしれないし、復讐と愛情のジレンマに落ち入っていたのかもしれない。

それが侍女の妙に意図をもたらしきっかけになったのは、武蔵守の側室の一人に男子が出生したのを知ったからであった。武蔵守もその頃の領主の習慣に従って三四人の側室は置いていたらしい。小夜香の方に子宝がめぐまれていたら、あるいは、この奇怪な事件は起らなかったかもしれない。

ある早春の夜、松山大介は、姉妙女の計らいで、長持の中に潜んで奥御殿に運び込まれた。

一人ではなく、塹壕を掘る専門家の金掘りを連れてくる。このことは何を意味するのだろうか。金掘りのことは、この一行きりで、その後覚書にはでてこない。城中に入った金掘りは、そのまま消えてしまう。

白狐山城は、その頂に主神白狐が祭ってある白狐山の天嶮を利用した山城で、内部の区劃は地形によっていたため、規模は大きかったが至って不規則であった。正室側室の居る奥御殿は独立した丘の上にあったが、小さな

小川でへだてられた表御殿とは長い渡り廊下でつながれていた。廊下の中頃に杉戸が設けられていて、男女の関所になっていたが、いくら男子禁制とはいえ、雑色小者仲間の類は使われていた。

奥御殿の周囲は平地の部分には土塀がめぐらされてあったが、ところどころに断崖絶壁あり、原始林ありで城中とはいえ人跡稀な深山幽谷へ迷い込んだようであった。

渡り廊下から奥御殿に運び込まれた松山大介が、何処にかくれていたのかわからない。姉の妙女の部屋ではなかったらしい。松山大介の使命が使命だけに、人目につくことは許されなかっただろう。奥御殿の周辺には違いないが、館の中ではなかっただろう。

松山大介の行動は初めから不可能である。城中に入っても、すぐ小夜香の方と対面したわけではない。対面する迄の一カ月間が空白である。金掘りと同様、松山大介もその夜から行方不明になる。

この一月の空白は、何を意味しているのだろうか。

その一月後、即ち、合戦の小休止の間の花見の宴も終って、城中がひっそりと寝静まった夜半、

——大介、御台様の思召により、東司にてお目通り。

と覺書にある。

松山大介が小夜香の方に目通りを許されたのだが、その対面の場所が不審に思われた。

「東司」とは、東浄ともいい、東にある廁のことを云う。

小夜香の方の廁で対面したというのだろうか。

的場太郎は桂離宮新書院の東司を見学したことがある。二疊敷きで、盆栽、香炉を置く棚があり、真中より右に矩形の穴が切られ蓋がしてある。床は人のたけより高く、石だたみの凹みに、樋宮を置くようになっている。高貴な御方の御使用のつど、樋宮をとって洗い浄めたものだろう。

桂離宮は、天正の頃、後陽成天皇の皇弟式部卿智仁親王のために、秀吉が別荘を開いたのに始まる。

では、白狐山城の奥御殿の廁はどういう型になっていたのだろうか。正室側室の廁はそれぞれ専用のものがあつただろうが、山城だから、樋宮など使わず、谷間を利用して深い縦坑を掘り、不用になれば、そのまま坑を埋めてしまう方法がとられたかもしれない。

貴婦人の廁としては、その排泄物を、人には絶対見せないし、また自分でも見えないという点では、これほど完全で高貴な仕掛けはあるまい。

さて、小夜香の方の廁だが、大輪の菊の花のような襦襦をまとった上臈が、ゆったりと坐わるためには、茶の間程の広さに畳が敷き詰めてあつたと思われる。

そして、書院風の小窓から光が差し込み、棚の青磁の香炉から沈の香が、ひめやかにただよっていたのではないだろうか。

京の御所には、侍女が侍る次の間があつたというから、妙女が控えていた小部屋もあつたのではないか。

廁というより、書院といったほうがいいかもしれない。静かな奥御殿の中の一室であつた。

黒塗りの樋を間にして、松山大介は首を深く垂れていたのに違いない。

「松山大介か」

「はっ」

「顔をお上げ」

松山大介の眼の前には、小夜香の方の豪華な襦襦の裾がうず高い髪を盛り上げて重々しく広がっていた。

雪洞の薄暗い灯りの中で、松山大介が小夜香の方の顔をはっきり見たかどうかかわらない。身分の高い高貴な御方であれば、例え明かるい真昼でも顔を上げることは出来なかつたかもしれない。

そんな松山大介に、小夜香の方は静かに微笑んだことであろう。

「母の無念を晴らして賜るか」

「はっ」

「武蔵守殿を討つのです」

会話はそれだけだったらしい。

松山大介は襦襦の裾から覗いた小夜香の方のまっ白な素足が眼にしみて残った。

その後の対面も、小夜香の方の廁の中で行なわれている。しかし松山大介が小夜香の方の廁の中にかくれていたとは思えない。掃除にくる小者に発見されるおそれがあつたはずだし、秘密は守らなければならぬ。では松山大介は何処に姿を消していたのだろうか。

「妙心尼覺書」を読みながら、松山大介の行方を追っていると、的場太郎は小谷亜紀にむやみに会いたくなつて困った。彼女の足の裏の感触を忘れたわけではなかった。

それにしても、小谷亜紀の行動は理解するのに苦しむ。ナイトクラブのテーブルの下で

的場太郎の顔に汚れた素足を押しつけておいて、すましていた。何事も無かったような顔をして連れの少女と話をしていた。

その後、彼は小谷亜紀に会わないわけではなかった。二三回顔を合わせていた。が、彼女の態度に変化は無い。会って、あわてるのはむしろ彼のほうであった。小谷亜紀の足の裏の感触が、生ま生ましくよみがえって弱った。

そんなある日、的場太郎は小谷亜紀にホテルのプールに誘われた。その時も、彼女は少女を連れていた。

プールサイドの二人は、オリーブ油できらきら輝く肌を灼いていた。

そのまま地中海でももっていききたいような大胆なビキニスタイルだったので、すぐ二人とわかった。

どれを見ても小さな花をたばねたような水泳帽と、花模様のセパレーツ、サングラスの顔と顔では、誰が誰だかわからない。プールで泳ぐことより、プールサイドでのんびりと遊んでいる人のほうが多い。

小谷亜紀が少女の耳元に口を寄せて何かささやいているのかと思っていたが、注意して見ていると、そうではないらしい。彼女の唇

が少女の耳の穴をくすぐり、彼女の舌が少女の耳の穴をくすぐり、彼女の歯は少女の耳をとところかまわずかんでいた。サングラスにくれて少女の表情はわからないが、くすぐったそうに肩がよじれる。

的場太郎は、ここでも完全に無視された。コーラばかり飲んでもいられない。彼はプールに飛び込んだ。軽く泳ぐ。

彼がプールから上ろうとしたとき、彼はいやというほど顔を蹴られて水に落ちた。

プールサイドに腰をかけた小谷亜紀が、足を水にばたつかせて笑っていた。

彼が苦笑いしながら小谷亜紀に近づくと、彼女は的場太郎の顔の先に、足をのぼしてきた。水で濡れた足の裏を、彼の顔に押しつけてくる。

三本の足の指が彼の口をこじあげた。

小谷亜紀はプールの水をすくってはビキニパンティにそそぎかけていた。その水が型の良いすんなりした彼女の脚を伝わって、的場太郎の口に流れた。

的場太郎の頭を踏んで、少女がプールに飛び込んだ。

文学部の前に、豪華なビュイックリベラが止まっていた。日本に数台しか輸入されていないアメリカのスポーツクーペである。小谷亜紀の車に違いなかった。背の低い鋭角的なボディシルエルがすばらしい。車で通学する学生はめずらしくはないが、彼女は万事高級すぎる。

四階の主任教授の部屋で、小谷亜紀は教授と研究用の古文書に就いて話をしていった。教授の机の上には、スカッチウイスキーが三本置いてある。ウイスキーの好きな老教授はこの美しい学生に甘い。

今日の小谷亜紀は、学生らしく、活動的な白の絹のシャツブラウスとストラックスで若々しい。アップだった髪もカットして、初秋の雨に濡れた髪のようにであった。

すでに夏休は終わっていた。

「妙心尼覚書を研究しているそうだね」と教授が的場太郎に云った。二人の話が終ったらしい。

「研究、というほどじゃありませんが」笑いながら彼は云った。

「興味があるのです」

「そうかね」

「小谷君が、小夜香の方に似ているような気

がして」

「ほう」

美しい教え子の顔を、ちらっと見てから老教授は的場太郎にきいた。

「小谷亜紀君がかね」

「ええ、ちょっと」

「その話を聞きたいね」

「レポートにして提出します」

「おおげさね」

と小谷亜紀が云った。それから、彼女は的場太郎を促した。

「失礼します。先生」

真紅のボディのビュイックリベラは、全く小谷亜紀にふさわしい。左ハンドルのあやつる中指の紫水晶が神秘であった。

「小夜香の方に似ているの」

と小谷亜紀が云った。

「似てますよ」

「そうかしら」

「美しくて」

「月並みね」

「残酷だから」

「残酷——」

くすつと彼女が笑った。

「その意味わかっているの」

「えっ」

「なんでもないの」

小谷亜紀は急に進路を変えた。

「マンションでお食事しましょう」

「光栄ですね、マンションに御招待下さるとは」

「そうかしら」

小谷亜紀は彼の顔をまじまじと見て、またくすつと笑った。何か、新しいいたづらを考えているらしい。

最近女性美の標準が、顔から軀のプロポーションに変わってきたという。ある週刊紙の女性のどこに魅力を感じるかというアンケートに、脚と答えた若い男性が圧倒的に多かったそうである。

小谷亜紀が普通のものよりかかとの高いハイヒールを履くのも、ふくらはぎがしまつてよい形になるためでもあるらしい。日常生活でも、彼女は畳に坐ることにかけては、感心するほど行儀が悪い。正座することによって、血行をさまたげ、脚が太くなるのがいやなのだという。彼女に云わせると、だから、お茶の会などもってのほかである。

六人並んでも寝られそうな、広いゆったりしたベッドに、小谷亜紀は美沙と二人で寝て

いた。プールでの的場太郎の頭を踏んづけた美少女である。コケテッシュなピンクのベビードールスタイルのネグリジェがよく似合った。金髪なのは、かつらなのかもしれない。小谷亜紀は、脚の美容のために、ベッドに足台を置き、脚を高くして寝ている。

その足台なのだが……

今夜の足台は、生きた足台であった。ワイシャツとズボンのままで、ベッドの足のほうに仰向けに寝かされた的場太郎は、洗濯用のロープで両手と両足を縛られて、ベッドにくくりつけられていた。両手両足を縛ったロープは、ベッドの下で結ばれていたから彼は弓なりにベッドにおさえつけられた恰好になる。

的場太郎の顔の上に、小谷亜紀と美沙のまっ白な素足がからみ合って乗っていた。二人とも、足の爪の赤いペデキュアが美しい。

彼女二人の美女の足台になった理由は、厚い血のしたたるビフテキにあやつられて、ビールを飲みすぎたわけではない。彼女に誘われて、マンションを訪問したものの、なんとなく足台にされてしまったのである。

彼ははじめ、小谷亜紀と美沙の二人のいたずらだと思っていたが、いたずらにしては度

が過ぎていた。彼はそのまま朝まで放置されたのである。

小谷亜紀はロココ朝時代の貴婦人かと眼を見張るような、レースやフリルをたっぷりあしらったゴージャスな黒のネグリジュをまとっていた。下には、何も着ていないらしい。

彼女は美沙の顔を抱き、その可愛い唇に接吻した。そして、美沙に舌をださせて、まるで彼に見易いように位置を変え、その小さな舌に熱い舌をからませ吸った。

さらに、美沙のネグリジュをはだけて、産毛のある少年のような乳房を、濡れるような唇で軽くつまんだ。その度に、奔放な小谷亜紀の足は、彼の鼻を打ち、頬をこすき、口をふさいだ。

やがて、美沙の顔が、彼女のネグリジュの裾を開けて、彼女の無防備地帯をまさぐり始めた。亜紀が呻めいた。

足合である的場太郎は、二人から完全に無視された。

こんな状態で小谷亜紀と的場太郎の会話は始まった。

松山大介が小夜香の方と初めて対面してから数日後、一色武蔵守重満の居間や寝室のある表御殿の警備の武士が二人斬り殺されると

いう事件があった。場所は、表御殿の庭で、正室側室の住む奥御殿の境の石垣の附近である。

敵の間者というので、城中いきりたったが結局犯人は不明であった。すでに逃亡したものと解釈された。

しかし、続いて仲間が一人殺された。場所は同じであった。

原因不明の殺人に怒った武蔵守が、表御殿に限らず、奥御殿にまで犯人を追求したが、この時も下手人はわからなかった。すべてが奇怪な事件であった。

「犯人は、松山大介でしょう」

「そうよ」

「発見されたので殺したんだ」

「仕方なしにね」

「それにしても、松山大介は何処に隠れていたんだろう」

「小夜香の方の廁の中よ」

なんでもないことのように小谷亜紀は云った。

「でも、掃除にくる小者に発見されるよ」

「馬鹿ね、落し孔の中よ」

「えっ」

「山城の廁は、深い縦坑を掘ったぐらいの知

識はあるでしょう」

「——」

「縦坑の上部に、横に凹を掘って這入っていたのよ」

「まさか」

「松山大介と小夜香の方が対面したのは、すべて夫人の廁の中でしょう。松山大介が隠れる処といえば、廁の落し孔の中よりないじゃない。盲点よ」

驚くべきことを小谷亜紀は云っている。

「黒塗りの樋の間から廁の床に這いだして、小夜香の方にお目通りをしたわけね」

「——」

「松山大介がひそかに城中に入ったとき、金掘りを連れていたでしょう」

「そのまま行方不明になっている」

「何故だと思う」

「それがわからない」

「だめだなあ。金掘りは、塹壕を掘る専門家ね。夫人の廁の下から横の坑道を掘っていたとは思わない」

「あっ」

「松山大介も、城中に忍んでから一月間は行方不明だった。その夜から金掘りと二人で掘り始めたわけね。土なんて深い縦坑に捨てれ

「ばい。底無しの谷だってあるわけよ」

「そうだったのか」

「奥御殿と、一色武蔵守の居る表御殿とを、

坑道でつなぐ必要があったのよ」

小谷亜紀の推理は、彼女の足のように奔放だった。

「小夜香の方の目的は、夫武蔵守を自分が手をくたさず、松山大介に命じて、人知れずに殺すことでしょう」

「そうすると、松山大介と金掘りが潜んだ長持は、小夜香の方の廁の中に運び込まれたわけ」

「そうね。京の御所にしろ、大阪城の淀君の廁にしろ、御用場の次室に、下着類を入れてある戸棚があったというから、長持を運び込んでもおかしくはなかったのでしょう」

「二部屋も三部屋もある廁か」

「立派なものよ」

「坑道を掘り終えた金掘りは、どうなったんだろう」

「馬鹿ね。松山大介に、斬って捨てられたのよ」

「秘密を守るために」

「小夜香の方の、排泄物の中に姿を消したのね」

「金に眼がくらんで危険は仕事をしたのだから……」

この話は刺激が強すぎた。

「のどがかわいた」

と的場太郎は云った。

「水をくれないかな」

「水だって、美沙」

と小谷亜紀が云った。

「さあ、いつまでもおいたをしないで」
いつのまにか美沙はネグリジェを脱いでいた。うっすらと全身に汗をかいている。

裸の美沙は、彼の頭をかかえるようにしてコップから水を口に注ぎ入れた。

——その瞬間、的場太郎は激しくむせた。水ではなかった。

「それ、なんだと思う」

と小谷亜紀が笑いながら云った

「美沙のユリンよ」

「——」

「美沙ったら、いたずらばかりしている」

小谷亜紀の足の指が、的場太郎の鼻をつまんだ。

「さあ、口を開けて」

美沙のユリンが彼の口に流れ込んだ。

「朝になったら、わたくしのを飲ませてあげ

るわ」

「——」

「松山大介のようにね」

この言葉の意味を的場太郎が理解したのはそれから一月もたってからである。

D

小夜香の方の廁の落し孔の中から横に掘られた坑道の出口は、奥御殿と表御殿の境の石崖にあった。このあたりは警備の番兵の巡回も少い淋しい場所である。ここから武蔵守の寢所までは、そう遠くはなかったが、松山大介が宿直の武士に発見されずに武蔵守を襲撃することはまず不可能であった。失敗は許されない。

松山大介は、その機会の来るのを、暗い地下道で待たねばならなかった。

地下道は、ようやく這って進める程度の穴であり、小夜香の方の廁の下に来て、その落し穴と直角に交わる箇所、かろうじて背をのばすことの出来るわずかな空間があるだけだった。そのくぼみの中に、松山大介は軀を屈めて這入ったきり、一步も外に出なかったのである。食事は姉の妙女がひそかに運んだものに違いない。

小夜香の方から、武蔵守を討つ命令の下るのを、松山大介はただ待つだけであつた。いつのことかわからない。

これほどまでに、我が身を犠牲にする理由が松山大介にあつたのだろうか。忠義のためばかりとは思えない。忠義は江戸時代になつてからできた言葉だ。そこに何かあつた。

的場太郎が戸惑つたのは、覺書に——大介、御台様思召しにより、二布を賜る。

とある「二布」のことである。二布とは腰巻のことだ。

こればかりではない。小夜香の方の松山大介に対する下賜品は、意外というより奇怪であつた。

即ち、

——大介、御台様御汚物を賜る。

という文字さえあるのである。

「御汚物」とはどういう意味なのか。

ここで気になるのは、小夜香の方が廁を必要とする時に、その真下にいる松山大介がどうしていたかということである。

それと気がついた松山大介は、その度に、姿を横穴の奥深くかくしたのだろうか。

それとも、小夜香の方は、松山大介を完全

に無視したのだろうか。

戦国時代の貴婦人のことだ。自分の廁の落し孔に下郎を一匹飼っているぐらいの觀念しかなかったのではないだろうか。

小夜香の方は、廁の中にうずくまる松山大介に、排泄物を注ぎかける残酷な陶酔を知つたのではないだろうか。

的場太郎に許したのが、小谷亜紀のユリンと足であるということは、いったい何を意味しているのだろうか。

的場太郎は小谷亜紀の気持がさっぱりわからない。彼の口中に、彼女のユリンがあばれまわっている。芳香を秘めた甘美な聖水であつた。

足台にされた翌朝、約束通り、彼は小谷亜紀のユリンを吞ませられている。朝食はフルーツと蜂蜜だけの彼女のユリンは、あまりにも甘く、暖かく、美味であつた。彼女の体内を通過した果汁に、的場太郎は絶句した。

小谷亜紀の浮いた話は聞いたことがなかった。同級生と交歓するわけでもなく、学校外にボーイフレンドも見当らない。学生結婚があたりまえな昨今では、女子学生の純潔意識もあてにならないのだが。冷然と取り澄ました優雅な彼女の周囲には、かえって男の体臭

は感じられなかった。

小谷亜紀は処女であるといううわさであつた。

たまたま同級生でもあつた的場太郎が、彼女と接近したのは、親のすねかじりである彼のこせこせしないのんびりした学生生活が、彼女の興味をひいたとしか思えない。的場太郎が大学院に残つたのは、大学を卒業しても就職が無かつたからで、別に理由はない。

頭は短くアイパーをかけ、いつでもダークスーツで軀を包んでいるようなおしゃれなところがあるから、ていのいい小谷亜紀のアクセサリーだったのかもしれない。要するに、彼は彼女のいいなりだし、おとなしくて親切だつた。

的場太郎は小谷亜紀の手を握つたこともないし、接吻など考えたこともなかった。といって、男らしく欲望はあるのだが、眼に見えない拒絶の網が彼女を包んでいるように思えるのだ。

ところが、いきなり、的場太郎は自由を奪われて、小谷亜紀のユリンを飲ませられたのだ。それも、彼女が可愛いがつている美少女のユリンを、始めに飲ませるといふ念のいった方法だつた。

的場太郎にとって、若い女性のユリンを飲んだという経験は、生まれて始めての異様な事件であった。

接吻どころか、手さえ握らせなかった小谷亜紀が、突然、彼を寝室のベッドにくくりつけて、美少女とのレスポスの痴態を彼に見せつけ、美沙はともかく、誰にも見せたことのない生まれたままの姿を彼の前におしげもなくさらし、呻めき、のたうち、挙句、ユリンをコップにとって彼の口中に注ぎかけるといふ、考えられない不思議な行為をしたのは、いったい、どういう考えがあつてのことなのだろう。

小谷亜紀は、男性としての的場太郎の存在を完全に無視しているのだろうか。彼女にとって彼は家畜にひとしいものなのだろうか。的場太郎は、小谷亜紀の残酷な遊び相手にすぎないのではないか。

そうだ。松山大介も、小夜香の方にとって単なる遊び相手だったのかもしれないのだ。

「あの時——」

と的場太郎は考える。

「嘔吐はしなかった」

コップの中の透明な液体が、小谷亜紀のユリンであると知らされて、無理に彼女から飲

まされたはずなのに、ビールを一息に飲むように、彼ののどは激しく鳴ったのである。

何故か。

的場太郎は、もう一度、小谷亜紀のユリンを飲んでみたいと思った。残酷な遊びの相手でも、家畜と思われようと、それでもいいと思った。

不思議な気持の変化であつた。

「レポートはまだかね」

久し振りに教室に顔を出した的場太郎に、主任教授はやさしくきいた。

「楽しみにしているのだがね」

「書けそうにありません」

と彼は云った。

「わけがわからなくなりました」

「小谷君が、かね」

「そうです」

「小谷君は魅力のある女性だ。もっとも、私には刺激が強すぎるがね」

「刺激——」

「美しい少女を可愛いがっているそうだね」

「ええ」

「男に興味は無いのかね」

「さあ」

「君は小谷君に誘われたことはないのかね」

「誘われる、って」

「関係さ」

「ありません」

「そうかね」

「今の学生にしては珍らしいですか」

「さて、それはどうかな」

「小谷君が私に許してくれたのは、足と」

「足」

「ええ」

「足をどうするのかね」

「舐めさせる」

老教授の顔にふと微笑が浮かんだ。

「それから」

「いつかお話します。今はよくわかりません」

「ん」

「そのうちわかるさ」

老教授は、美しい弟子の異常な性格を知っているのかもしれない。

E

小夜香の方が厠に用がある時は、湧桶にぬるま湯を用意して、妙女は御用場の次室に控えていた。大切なのは、そのあと始末にあった。高貴な夫人は手を汚すことはしない。終れば侍女の妙がぬるま湯で洗ったのである。

その湧桶を小夜香の方が使わないことがあったとしたら……

妙女は小夜香の方と弟大介の奇怪な関係を知った。

はじめて小夜香の方と対面してから三月たった。松山大介はすでに四カ月を地下道でおくっていた。考えられないことであった。

この四カ月の間に、松山大介の心境は変化していた。といって、武蔵守を刺殺する最初の目的を放棄したわけではなかった。それ以上に、小夜香の方の復讐を助けることが、一生の使命であると誓っていた。しかし、武蔵守襲撃命令を待っているわけでもなかった。

松山大介が待っているのは、一日に数回、頭上に君臨する小夜香の方であった。

これは単に、的場太郎の勝手な空想ではない。小谷亜紀ですら、妙心尼覚書に暗示された意味を感じとっているではないか。

妙女は、弟大介の常識では考えられない驚くべき忍耐力が、主人に対する忠誠心というより、小夜香の方に対する思慕よりでたことを知っていたのに違いないのだ。

松山大介は、廁の床の上の、しとやかな足音と、かすかな絹づれの音に耳をすましていた。暗い坑道にぼんやり明りがさし、それが

また暗くなると、一条の白い線が深い縦坑に落下していった。

「大介」

小夜香の方が、低い声で落し穴の中に云った。

「また呑みましたね」

「――」

「上っておいで」

松山大介は黒塗りの樋の下から軽く這い出して、夫人の前に平伏した。地下道から廁の床に上がるために、あらかじめ足だまりは作ってある。それにしても、不思議な光景だった。

「しぶきが、そなたの顔にかかることは知っていました」

小夜香の方の媚笑は松山大介に自分の排泄物をかける遊びを楽しんでいるようだった。

「お許し下さいませ」

大輪の花のような嵩のある褥が、崩れるように松山大介を抱いた。そして、ゆたかな黒髪におおわれた顔が、平伏している松山大介の顔を覗き込んだ。

松山大介が小夜香の方から、素肌にとまっている二布を拝領したのは、この時ではなかったか。

そして、やがて、汚物拝領へと続く。密室の快楽であった。

「小夜香の方が、あと始末に、湧桶を使わないことがあったわね」

と小谷亜紀が云った。

「湧桶の代用に、夫人の何を使ったと思う」

「――」

「松山大介の舌よ」

的場太郎は口がきけなかった。小谷亜紀の薄いすけるようなパンティで猿ぐつわをされていた。六尺褌ひとつにされ、後手にねじられ、足から胸にとがんにがらめにロープで縛られた的場太郎が転がされているのは、砂地の上であった。といって、海岸ではない。

小谷亜紀の廁の中なのである。が、日常は使用していない、離れにある旧家の遺構であった。高麗ベリの畳二畳の部屋に、黒塗りの樋がしつらえてあって、その床下が砂地なのである。

離れは、帰郷の際の小谷亜紀の居間になっていた。

足台にされてから一月後、的場太郎は彼女の生家に招待されたのである。

部屋は小障子があり、小さな床の間に花がいてあった。樋に蓋があれば、全く廁とは

思えない。花嫁のために、こわさないで残してあるという。

床下の砂地も、意外にしめってはいなかった。乾いていた。砂を新しく入れかえたのかもしれない。床下を掃除する穴がいつもは閉めてあるのだが、今日は大きく開いている。空気も外と変りはない。

小谷亜紀が、生家の倉の中の妙心尼に關係のある古文書を見せるために、的場太郎を誘ったのは口実にすぎなかった。

が、安易に的場太郎がロープで縛られたのは、彼を無抵抗にさせる心の動きが、小谷亜紀の魔力と一致したのに違いない。彼女に何をされようと、彼は幸福だった。

小谷亜紀は、的場太郎の自由を奪うと、パンティを脱いで彼の口に押し込んだ。小夜香の方の二布が、ここでは彼女の汚れたパンティであった。

そして、彼女は乱暴に廁の床下に彼を押し込んだのである。

「小夜香の方は、松山大介になかなか武蔵守を襲撃する命令をあたえなかった」

黒塗りの樋にまたがりながら、小谷亜紀は落し穴の中の的場太郎に云った。

「松山大介に、夫人の排泄物を吞ませたり、

たべさせたりするのが面白かったのよ」
的場太郎は、ふと、花嫁姿の小谷亜紀を想像した。

一色武蔵守重満が刺殺されたのは、夏も過ぎて秋、観月の宴が終った夜半のことであった。武蔵守は廊下で斬られている。廁に行く途中だったらしい。ぼんぼりを持っていた侍女も斬り殺された。

酒を飲みすぎたのが、武蔵守の命取りになった。

犯人は、そのまま姿を消している。嚴重な搜索にもかかわらず、犯人は永久に現われなかった。松山大介は自刃したのである。これは小夜香の方と姉の妙女の二人だけが知っていた。

半年以上にのぼる地中の生活と、小夜香の方のあくことのない毎日の洗礼が、松山大介の軀をいためつけていたことは考えられる。武蔵守を刺殺する目的を達して、一度に気が脱けたことだろう。城外に脱出する気力も機会も無かったのかもしれない。

松山大介は、自分の使命が終ると、残酷な飼育者であった小夜香の方の排泄物の中に吸

い込まれていった。

覺書には、白狐山城主一色武蔵守死去の日記の行間に、

——大介、自刃。

とあるだけである。

すぐ死んだのか、それからしばらくは逃亡する機会をねらって地下道で生きていたのかわからない。

その後、小夜香の方は、父上橋中納言のもとに帰った。妙女とも別れている。

「上橋中納言日記にも、小夜香の方の奇妙な癖のことが書いてあるわ」

と小谷亜紀が云った。

「中間や小者をとらえて、吞ませたりたべさせたりしたらしいの」

小谷亜紀は、小夜香の方が松山大介にしたように、的場太郎を飼育しようとしているらしい。そう理解したとき、的場太郎は、小谷亜紀の奔放な尿を顔一面に浴びていた。そればかりではなかった。

(終)

「江戸川乱歩研究会」余聞

人魚責めパノラマ館

江^え川^{がわ}詩^{うた}二^じ

○ 推理作家、江戸川乱歩の初期の傑作『パノラマ島奇談』や『地獄風景』また戦後、面白倶楽部に掲載された『影男』などは、みな郷愁としての残酷であり、美への殺人ドラマが展開され、乱歩好みのパノラマ趣味が筋の運びを多彩なものにしていた。

私も『奇ク』の読者になってより、いつかはこの種のモチーフをもって私なりの角度から作品化してみたいと野心をもっていた。それは、推理小説がまだ『探偵小説』とよばれた頃からの、ファンであり、変格物と称せら

れる異常なる妖しき世界、特に前記の江戸川乱歩の小説など、下宿の屋根裏部屋で胸おどらせて耽読した懐かしい思い出を秘めているからでもある。

ただ、S6、M4くらいが一人の人間（男の場合）に内存するパーセンテージで、SとMは全然別個の独立したものでなく、この二つをあわせてアルゴリズム（嗜虐症）と呼ばれ、そこに責めるものと、責められるものの陶酔も『美』が生じる世界もある。また、それらを描くことが、『SM小説』だと思っている立場から、『殺人』という、まことに

S百パーセントが登場する推理小説的要素をどうして、現在の『奇ク』なりのSM小説と結び付けることが出来るか。

私はあれこれと頭をひねり、幾度ペンを捨てようかと思ったか知れないのである。このようなことは、私の思い過してあろうか。ともあれ、『推理小説』形式が、特異なSM小説として、新装され『奇ク』誌上に誕生することを望むのは、私ばかりではないと信ずる。それを期待するあまり、私はここに、一つの実験小説を提供したいのだ。

1

それは星の美しい晩である。東五番丁角の酒場『黒猫』の二階で、月例会『江戸川乱歩研究会』が開かれた。

この会の創立は古い。『パノラマ島奇談』に刺激されて研究会をもったというのだから当時の会員が、いまは六十を越している老人たちだ。

戦時中（太平洋戦争下）を中断したのみで後は毎月の会合を継続してきたのだから、たいたしたものだ。

ただし探偵小説（私たち会員は推理小説という言葉を好まず、昔ながらの名称でよんで

いる。)が、特に『新青年』による全盛時代を迎えた頃は、会員は実に数十人に達し、会の活動も活発で、機関誌『ランボ』を出す程であったが、現在は僅か五人という淋しさである。

それもすべて孫が大学生などという隠居の身の上だ。さて、その日も、くわしく言えば昭和40年3月15日のことである。あの頃はよかった——という、いつもの回顧談で会は始まった。またちようど、近くの日立ファミリ—・センターでいまは懐かし純情画家『竹久夢二小品展』が催されており、それを見ながらやってきたということで、なおさらであったのだ。

「あの、なよなよとした線は、夢二画家の独自のタッチで、いつみてもたまらない。それに白いエプロン姿の女給さんはどうだ」

「いや、足を投げ出すようにした娼婦然とした絵こそ、でかだんの極致じゃないか」などあれこれと話に花を咲かせた。

その時、酔えば「命短かし恋せよ乙女……」など唄う、かつての文学青年であった江川詩二は、やおら一冊の雑誌をみなの前に取り出しニヤリとしたのである。松本が、すぐ手に取りペラペラと、それをめくっていたが、破顔

一笑して

「素晴らしい。長生きはするもんだ。梅原北明なども、けっこう変った写真を読者に提供していたが、こうまではやれなかった」といった。

それは、新しい風俗文献誌奇譚クラブの旧号であったのだ。江川は「若返りのつもりでときたま、見てるんだが、好みからいえば、グラマー美人より、夢二などの描く、ぐうーっとにぎれば、骨がきしむようなやせ形の女が縛られたフォトがいいね」

「その年でかい」など、にぎやかなやり取りがあつて、その晩はあまり探偵小説にはふれず、とんだ脱線をして散会したのは、もう、夜も更けた十時過ぎであった。

近頃は商店街も、閉店時刻が早く、人影少い中に東宝劇場からもれる灯りが、どこか、しらじらとした佗しさをみせていた。だが、空を見上げれば、月はあくまで青く、星は真珠のようにまばたき、ほろよい気分には肌寒い夜風も、またかえって心よく感じられた。かつては、こんな夜には会員同志が三々伍々と連れだって巷を放浪するのが、お定まりであったが、近頃は会場よりハイヤーで帰っていくのが精一杯で、口ではまだまだなどい

っても身体が自由にならなかった。

ただ、江川だけは、みなのおすすめをこわって、一人で歩いて帰ることにしたのだ。それは月の魅力にさそわれとでもいうか、そして、夜の芸術師とか自称する不思議な紳士と会う破目にもなったのである。

2

夜光虫のひとみを思わせるような光をはなつて、トラックが江川の横をとおる過ぎた。

ビルの谷間とでもいうか、薄暗い裏通りに彼が出たとき、にぶいピストルの音がした。三和商事の建物のあたりから、古風なマントをした、まるで怪盗紳士、アルセヌ・ルパンをおもわせるような中年男が、何か白い物体をかかえて、こうもりのようにふわりと飛び出してきた。

江川は眼をうたがった。その男の服装があまりにも時代離れをした故もあるが、いくら夜更けでも、この街の中で、こんな風景が見られるとは、夢にも考えなかったからだ。

探偵小説趣味がこうじてみた幻覚かと頬をひねってみたが、やはりこれは現実の出来事なのである。その証拠には、くだんの男が、彼に微笑さえ浮べて話かけてきたのだ。

「いい、お月夜ですな、ここで出合ったのも何かの御縁、是非多くの芸術作品を御鑑賞願いたいものです」といった。

普通の人間なら、キャッ／＼とか、それともピストルの音からして、これはてっきり、殺人事件と気もそぞろになるのだが、年は取っても江川にとっては、怖いもの見たさのヤジ馬根性は又一倍強かったし、それに月の光りが、彼の生来の耽美的傾向に拍車をかける結果ともなり、思わず「けっこうですな」と受けたのである。

男は、わが意を得たりと合点するなり、かたわらにあった車の後部に、その白い物体をどさりと投げ入れ、運転台に坐り、「さあ」と江川の乗車をうながした。

「御心配なく、まだ殺してはいませんよ」と男は江川の質問を先まわりしていった。そして、運転しながら、さも愉快そうに「あなたは、まったくの幸運者だ。とにかく、ぼくの生きた芸術作品の完成を、観賞できる、この地上で只一人の人間なんだからね」と付け足した。

○
「真珠は、月の涙とか、いってるが、ぼくからいわすれば、真珠、猫眼石だって、みな血

の祭壇に捧げられる美女を彩るアクセサリだ。そうやってこそ宝石もいっそう美しく価値あるものになるんだ」

車の中で、自称夜の芸術師と名乗った黒岩大五郎は、アトリエとよぶきざちつくな赤れんが造りの建物に、江川を連れてくるなりその庭で彼一流の芸術論をぶつのであった。

「見給え！あの月を、そして、このまるで青一色の風景をだ。ここは、もう地上ではなく、青白い月光がしぶきとなってあたり一杯くだけ散り昆布がゆれる深海なのだ」と芸術師は、細い手先をヒラヒラさせた。

江川は催眠術にでもかかったように、実際にそう思われてきた。彼は熱にうかされたように叫んだ。「なんとという素晴らしい光景だ。本当に魚までも泳いでいる……」

芸術師はまたいった。「ただし、残念なことに欠けているものがある」江川はすぐ答えた「そう、人魚だ。白い肌を水に漏らして、長い黒髪は背までたれ、その紅きくちびるは……、おお、冷き感触をもつ」

芸術師は、飛上って、満面によろこびをたたえ「それだ」といい切った。また「ただし白き肌には、真珠の首飾りをもってかざり、彼に廻した両手首には、キラキラ輝やく銀色

の細いロープが幾重にもからまり、美への殉教者は、最後の夜の讃歌を多くの鞭によって上げさせられ、ついにはダイヤが散らばるか、鋭い刃によって、そのやわらかな乳房のあたりをグサリと突き刺される。真赤な血が流れ、冷い炎となって水中花を咲かせるのだ」――。

江川がハッと気付くと、たしかに、芸術師のいうように苔むした岩の上に、人魚が一匹あまりにも美しい姿体をさらけ出し、死んでいた。「いつのまに」と彼は声を上げた。

「いまこそ、ぼくの芸術は完成した。それがはかない、一刻の美の世界であるだけ、ぼくのむねに、貴方の脳裏にあざやかな印象となって、永久に消えないのだ。もう、残業のこっていたB・Gを、空砲で気絶させ、ここまで運んできたなど、どうでもよいこと。それよりはぼくが、こんなに人魚にびったりという女性を探しだしたことを、君に賞讃してもらいたいのだ」

芸術師は、ここで一段と声を張り上げていったものだ。「ぼくはこの自然をそのままにカンパスとし美しい芸術作品を創造することを生涯の念願としていたのだ。題は『人魚責めパノラマ館』だ」

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

黒 湊 嬰 一

ビブリオテーケー さいへんせい
 希臘神話の再編成

ミノタウロス

地母神殿でパーシファエーがアカレーに向
 って言った。

「アリアドネはテセウスに色眼を使っていた
 ようですね」

途端にアカレーは跳び上った。

「アリアドネが、そんな事を、僭越な」

パーシファエーは冷静だった。

「牛跳びをしながらテセウスの方へ微笑を送
 っていました。アリアドネに正面から見られ
 て参らなかつた男はありません。王族の娘に
 生れながら蛮人の男を愛するとは怪しからぬ
 事ではありますが、元々アリアドネはアケー
 ヤ女の腹から出た娘。これが当然なのかも知

れませぬ。だがアカレーよ。其方はテセウス
 如きに溺れたりはいしないでしようね」

王后は充分に釘を刺した。

「はい。母上様」

アカレーは頷いたが内心は甚だ穏やかでな
 かった。

「アリアドネを亡き者にする好機です。一昼
 夜縛った俵で吊っておいて痛めつけ、辛うじ
 て足腰の立つ状態で明日の夜迷宮ラビリンスの附属監獄
 に移しなさい。アリアドネの事ですから間も
 なく元気になるでしょう。幽閉する前に、近
 くの獄舎にテセウスが繋がれている事を暗示
 し、アリアドネの房は鍵を格子の傍に置き忘
 れたように見せかけ、アリアドネを縛った縄
 尻は長くしておくのがよいと思います。あの

娘は必ず自分で縛を解いて了います。それか
 らテセウスを救い出し、二人で逃亡を計るで
 しよう。アリアドネは聡明ですから巧妙に仕
 組まないと欺計である事に氣附きます。テセ
 ウスは沈着ですから小舟でも手に入る確信が
 なければ脱走を実行しません。二輪馬車と舟
 の有る場所を暗示しておきなさい。牢番は眠
 った風を装って二人の逃亡を見遁すように言
 いつけておく事です。其方は集められる限り
 の警官を迷宮ラビリンスの門は潜伏させ、其処で二人を
 捕えるのです。テセウスは剛力。アリアドネ
 は敏捷。二人共に油断のならぬ相手だから、
 準備も大掛りにしなければなりません。そ
 れよりも二人が逃亡を企てたという事実を成
 る可く大勢の者に見せる事が肝要です。投網

チャリオット

と二輪馬車を充分用意なさい。油玉や松明も沢山要ります。必ず捕えなければなりません。ぬアリアドネの死刑を阻止出来る者は誰も居ないでしょう。監獄でゆっくりと賜り殺してもよろしい。テセウスの方は使役奴隷に格下げしてもよいし、処分は後で決める事も出来ます。それから、アリアドネに同情的なモルパディアだけは他の用事を言いつけて遠くにやっておきなさい。ファイドラは既に七日間の使いに出しましたし、アンテイオペーはわたしが目く遠隔けておきましょう」

パシファエーの奸策は入念で隙が無かった。アカレーは改めて舌を巻いた。

密談が進行している頃、話題のアリアドネは床から高く、蛇の届かない高さで、気絶した俤吊られていた。神蛇はその直下で輪を描き、宙の美女を見上げている。消えなかった灯が僅かな光を投げ、両手は背に、足は揃えて固く縛られ、長い髪の鬘が崩れて肩や頬に流れ落ちたアリアドネの影を黒く洞壁に映していた。美少女は身動き一つしない。

と、突然、壁の一枚岩が揺れた。微かな音を立てて横に滑った。大蛇は鎌首を上げた。半時間後。

「王女様、醒めて下さい。眼を開けて下さい

生き返って下さい。憐れな老人を一人だけ残すような事は、なさらないで下さい」

聞き覚えのある声でアリアドネは意識を回復した。

「ダイダロスですね。有難う。でも此処は何処ですか。わたしは何うなったのでしょうか」

直暗だが声の反響で周囲の構造が解った。狭くて細長い支洞の内部らしい。

「此処は闇黒女神の地下神殿と迷宮附属監獄を結ぶ支洞です。私の他は誰も知りません。併し地下道というものは、ずっと遠くの方迄音を伝えますから、大きな声はなさらない方がよろしいでございます」

老人の掌が軽くアリアドネの口を抑えた。アリアドネの手足を縛った革紐は解かれていた。併し依然として自由が効かず、全身は綿屑のようだった。ダイダロスが関節を揉んでいたが、慣れないのと非力とで余り上手とは言えなかった。アリアドネは半身を起そうとしたが忽ち激痛に襲われて呻きながら洞底に跪いた。

「動かれてはなりません。骨が砕けてしまいました。時が来たら私奴が背負って連れ出して差上げますから凝って下さい」

ダイダロスは慌てたが、アリアドネは身を

転じて俯伏せになりながら催促した。

「いいえ、大丈夫。わたしの体は常識で律せられない程鍛えてあります。老人の力で揉むのは無理だから上に乗って足と手を強く踏んで下さい。すぐに元通り跳んだり走ったり出来るようになります。ダイダロスの背を借りなくてもいいようになりますよ。でも、何うしてわたしの捕っている場所が解ったの」

ダイダロスは恐る恐る王女の手足を踏み始めた。

「アリアドネ様は約束を破られるような方ではありません。イカロスの骨を壺に収める時刻が過ぎたのに、お姿が見えないのは、息子の火葬にお忍びあった事が露れて責められておいでに違いないと、すぐ気付きました。私奴の為に此のような目に遭れて申し訳ない事でございます。闇黒女神の地下神殿は私が設計したものです。王后様が悪企みをなさる場所は此処と見当をつけて居りました。若し将来私自身やイカロスが閉じ籠められる事があっては一大事と考えて抜穴を作っておきましたがそれが役に立ったという次第で。王女様の下には大きな蛇が居ましたが、天井の方から鎖を引き上げましたので追って来れませんでした。王女様。こんなに踏んで痛くありません

か、本当にいいのですか」

「済まないがもう少し踏んで。痛いけれど随分楽になりました。間もなく立てるようになるでしょう。でもわたしを助けたりしていいの。縛られて、鎖で吊られて、蛇が番していたのに、逃げて了ったとあっては必ず疑われますよ。それに、可哀想なイカロス。死んで了って、独り子を亡くした老人に、これ以上迷惑をかける事は出来ません。それともクレテ島を棄てて何処かへ逃げて行く心算ですか、それならわたしも連れて行って下さい」

「王女様。よく聞いて下さいました。イカロスは幸福な奴でした。生前は勿論、死後迄もアリアドネ様のような方に可愛がられたのですから。イカロスが居なくなつた今、クレテ王国には何の未練もありません。私はクレテ島を去ります。今なら外洋を航海出来る大船が一隻手に入ります。その漕手も味方に付けられます。王女様を貧乏人の中にお連れするのは恐れ多い事です、大工としてならまだ働けますから餓えさせるような事は決して致しません。老先短い身ですが、すべて王女様に捧げます。どうか目的地だけを決めて下さい。何処へでも参ります」

アリアドネは洞壁に凭れながら上体を支え

た。ダイダロスの肩に右手が伸びた。

「エウローペ様がお命じになりました。アリアドネよ、クレテ島を出よ。太陽神が守護するであろう、と。この僥クレテ島に留って居たら必ず殺されます。わたしはクレテの王女などで居たくありません。陰謀と策略の無い平和な国の庶民の女になりたいのです。ダイダロス、わたしを連れ出して下さい。そして出来る事なら弟のカトレウスと妹のファイドラも連れて行きたいのです」

ダイダロスは、アリアドネの脚を揉んでいた。王女の剥出しの膝に一滴の雫が落ちた。アリアドネは、それが老人の涙である事に気付いた。

「あゝ、王女様、残念な事に、カトレウス様はミレトスに、ファイドラ様はファイストスに行つておいでです。お二方共当分お戻りになれません。そして私奴が漕手を味方に付ける事の出来る船は、今夜を逸しては駄目なのです」

アリアドネは、凝つと涙を堪えた。そして迅速に決心した。

「ダイダロス。弟と妹は諦めます。生きて居れば何時か会える事もあるでしょう。わたしと違って二人共未だ子供で、地位も低く、王

后様に従順で、妬まれるような技術も持たず

お母様の記憶も少いから、殺されるような事はないでしょう。実の弟妹でありながら、わたしとは引き離されて成長し、祭礼の時しか会う事も出来ずに来たあの二人と別れるのは悲しいのですが、その代りにダイダロスが居ます。わたしには親も弟妹も居なくなるのですから今日からダイダロスの娘になります。

イカロスの代りだと思つて下さい。老人に働いて貰わなくても食べて行けるように努力します。医者の仕事も、薬の調合も、金属の細工も、陶器を焼く事も人並には出来ます。星の観測では何処の僧侶よりも鋭い眼を持っています。五箇国の五種類の文字も読み書き出来ますし、七つの言葉も話せます。踊りなら誰にも負けません。他にも考えている事があります。必ず何とかします」

ダイダロスは、アリアドネの前に蹲つて泣きだした。

「勿体ない。王女様。私は奴隷で充分です。言いつけて下されば何でも致します。けれど今日の夕方迄は老人の言う事を聞いて此処を動かないで下さい。丁度入れる位の油甕を用意して参りますから」

アリアドネは坐った姿勢から軽く跳躍し、

蹲っているダイダロスの上を越えて反対側に降りた。風を切る音は聞えたが、接地する足音は殆んど判らない程に軽かった。

「わたしの体なら心配しなくていいの。此の通り自由に動きます。夕方になったらダイダロスの決めた場所に自分の足で行きます。わたしが居なくなった事が知れて、クレテ中の警官が非常線を張っても必ず駆け抜けて行きます。わたしが本気で走ったら二輪馬車より早いよ。危くなったら先に船を出して下さい。わたしが泳いだら快速艇と同じ位は行けます。それから、わたしの身分はダイダロスの娘でいいのです。クレテを出たら、男の方が偉い世界ばかりだし、老人は一層尊敬しなければいけないのですからね。でも先行はわたしが決めましょう。船はギリシヤへ向けて下さい。ダイダロスは元々アケーヤ人だし、わたしはアツティカの王妃だったカルキオペーの娘です。他にもう一つ考えている事もあるからアケーヤ人はわたし達を仲間に入れてくれるでしょう。船が外海へ出たらわたしがギリシヤに着く迄指揮します。大きな事を言うようですが、星を観測して位置や方角を出せるのはわたしだけしか居ないと思います。船の出るのが夕方ならお願いがあるのですが

此処にわたしの薬箱と甕を一つ持って来て下さい。何うしてもやっておきたい事があるのです。そしてコルキユネに頼んでわたしの観測機械を船に運ばせて下さい。何方も迷宮のわたしの部屋にあります。コルキユネは信用出来る女ですし、武技も力量もあります。必ず役に立つと思いますから連れて行って」

「王女様、驚きました。先刻迄あんなに酷く縛られた上に吊られていたのに。仰言った通りに致します。晩くなったら大港の西端に来て下さい。造船所の試運転棧橋に泊っている三十挺橈船が用意した船です。アケーヤから貢納品を積んで帰った船で、整備の為に乗員は上陸しています。漕手は奴隷の中から二十人を味方に撰んであります。私が作った合鍵を渡してありますから、夕方には自分で足鎖を解いて合流する手筈です。漕手が少し足りませんが我慢しましょう。自由になれると知ったら、皆頑張って漕ぎます。舵は私が把ります。それから、申し難くて言えなかったのですが、船長になって進路を決める事の出来る人は仰言る通り王女様より他に居ないので。星の観測だけはお願します。どうかギリシヤ迄導いて下さい。私達一同で御主人と仰ぎます。併し此の支洞は誰も知らない安全

な場所ですから暗くなる迄此処を動かないで下さい。王女様が発見されたら脱走の計画全部が駄目になってしまいますので。薬箱と甕と共に黒い外袍を一枚お持ちします。王女様は余りに白いのでは却って人眼につきまます。それを被って来て下さい」

五月二日の昼近く。

アカレーは迷宮の附属監獄奥深くにある専用の獄舎を訪問していた。

格子の中にテセウスが居た。両手を広げ、壁の青銅環に手首を固定されている。

アカレーは剣帯と甲冑を牢格子の外にある室の卓上に置き、鎧下着の銅着一枚に革帯を締め、鍵束を下げ、笞だけを持ってテセウスの前に立っていた。

外側の室に油皿が置かれ、細い灯が揺れて漸く人影が見分けられる位の光を格子の中にも注いでいる。

「テセウス。面白い事を、教えてあげましょう。このクレテ島には貴下の弟と姉と妹が居るのですよ。いや、弟のようなもの、と言った方がよいかしら。貴方の父だとか言うエーゲウスが以前妻にしていたカルキオペーという女。それがクレテに来て三人の子供を生んだのです。長女が十七才のアリアドネ。確か

テセウスより三日早く生れたから年齢が同じでも姉ですね。長男は十三才のカトレウス。次女は十才のフアノドラ。殊にアリアドネは牡牛の舞を最後に踊った娘で、ほら、踊りながら貴下の方ばかり見ていた女です。知らないとは言わせませんよ。あの娘は確かにテセウスに惚れていました。だから、若しかすると助けに来るかもしれない。それが出来るのなら。そうしたら、何うします」

太い声を牢壁に反響させながら、アカレーは答の尖でテセウスの顎を小突いた。

海神の大祭が終って後、何のように待遇が改められたのか。テセウスの肩や腕に赤い傷痕が幾つも見られ、牡牛を振じ伏せた四肢も今は自分の体重すら支えかね、鎖に身を預け自ら吊下るようにして壁に凭れていた。両手首からは新しい血が流れている。それでも気力だけは屈伏せず、テセウスは正面からアカレーを見返した。

「アリアドネと言うのか。カルキオペーの子供がクレテ島に居るかもしれないという事は話に聞いていた。あれは確かにアケーヤ人の血が入っていると見たが矢張りそうだったのか。あの娘が来てくれたら一緒に逃げてもいい。君には悪いが俺はあの娘が好きだ。何う

せ俺は生きてクレテ島を出られないだろうか。今の内に言いたい事を言うぞ。クレテ王国の実力はよく解った。但しそれは思った程強くないという意味だ。見せかけだけの強さ。アケーヤ人が、自らの恐怖で作りあげた幻影だ。海の上でこそ強かろうがギリシヤ本土の奥深く攻め入る力はない。虚勢を張って威嚇するだけの兵隊しか居ないではないか。アツティカ一州だけでもその位の戦士は出せる。クレテ海上帝国と威張っても住民の大部分は奴隷に過ぎない。王族も貴族も、戦士たるべき男はすべて女に支配されている国ではないか。尚武のアケーヤ自由民がこのような国に貢納を納めていたかと思うと実に情ない。俺は自ら進んで犠牲に加ったが、クレテ王国がこのような国だと知っていたら全アツティカに檄してアケーヤ人を団結させていただろうに。ボエオイヤもメガリスも味方に加え、反対にクレテ王国を乗取り、財宝を皆で分け取り、君達クレテ女を側女として分配したものを。俺は近い内に殺されるだろう。無念だがもう覚悟はした。併しクレテ王国も永くはないぞ。アケーヤ人が何時迄も欺されているのか。必ず英雄が現れてクレテ王国の男を悉く殺し、女をすべて縛ってギリシヤに曳いて

行く時が来る。その英雄が俺でないのが口惜しいだけだ」

声は囁かれて途切れ勝ちだが、テセウスは少しの恐怖も見せずに言った。クレテ王国が女権専制と見たのは表面的観察に基く誤解だったが、その他は概ね当を得ていた。クレテ王国に到着してから未だ一週間。それも殆んど牢内で過したテセウスにこれだけの事を観破されてアカレーは驚いた。併し感嘆を表情に現わす事は自尊心が抑えた。

「仲々勇ましい事を言うのですね。わたしを怒らせて早く殺されたいと思っっているのですか。そんな事はしませんよ。でもテセウスは力があるだけでなく、頭も鋭いのですね。アケーヤの蛮族には惜しいみたい。確かに貴下を自由にしたら、クレテ王国を亡す事の出来る実力を持っています。クレテ王国の安泰はアケーヤ諸族の相互不和の上に乗っているようなものですからね。したい事をしなさい。わたしを縛るなり殺すなりしなさい。但し、アリアドネが助けに来てくれたならその事だけあげましょう。あの娘は地下の牢獄に縛られて吊られていますから」

アカレーは此処迄言って息を呑んだ。暗黒

の中から首筋に冷たい金属が触れた。

「伝えに行つて戴く必要はございません。テセウスの鎖の解く手は、此処迄伸びて居ります。アカレー殿」

アカレーの手から答が落ち、床に転った。

「その声は、アリアドネ」

アカレーはパーシファエーの策に従い、アリアドネとテセウスを故意に逃亡させる準備として暗示をかけようとしていた。その実行は今夜の予定である。だがアリアドネは何としたものか、嚴重な縛を脱けて半日早く現れた。アカレーには何の用意も出来ていなかった。警官の招集は勿論、愛用の大剣すら手もとに無かった。

「如何にもアリアドネです。お首に触っているのは青銅の短剣。動かれますと不本意ながら刺さなければなりません。どうか言う通りにして戴きたいと存じます」

アリアドネは静かに、併し明瞭に言った。

「革紐で縛つて、青銅の鎖で吊つておいたのに、あれを自分で解いたのですか。何うして此処に現われたのです。牢獄の門には屈強の番卒も居たでしょうに」

アカレーの声が少し慄えていた。その背後で黒い外袍が床に落ちた。テセウスは暗い中

に浮き上った白い四肢を見た。運動着もその尽の、競技場で見た美少女だった。

「わたしの体は鍛え抜いてあります。鎖でも綱でも脱けられます。武術の心得はありませんから門衛の方達を斬つて通る事は出来ませんが、身を細くして岩の間から侵入する事は可能です。パーシファエー様の魔法でも、貴女の武勇でも、わたしを阻止する事は出来ませんでしょう」

アリアドネは高い綺麗な声で言った。併し勝誇つたような響きはなかった。寧ろ沈鬱な感じだった。脱出と侵入の手順については真相を隠したが、それはダイダロスの行動や抜穴の存在を伏せておく計算であると同時に、テセウスの前で少しは虚勢を張つてみたい見栄も入っていた。

「テセウス殿の鎖を外して下さい」

アカレーは、口惜しそうに拳を握っていたが、首に擬せられた短刀を押されると唇を噛んで従った。腕力に自信があり、剣拔はクレテ随一と言われたアカレーだが、剣も甲冑も手が届かず、アリアドネの敏捷はアカレーの反撃を許さないだろう。

「中腰に坐つて下さい。手を後に組んで、少しの間動かずにいて戴きたいのです」

アリアドネは短刀を口に咬え、腰から革紐を外した。刃尖は依然アカレーの後頭部に触れている。

「待て。それは俺にやらせてくれないか」
解放されたテセウスは一旦床に坐り込んだが、アリアドネの意図を察するや忽ち起き上った。アリアドネは短刀を手に持ち替えて微笑しながら軽く一礼した。闇の中に白い歯が見えた。

「お願いします」

テセウスは足が蹣んでいたが、アリアドネから革紐を奪うようにしてアカレーの背に躍り掛り、肉付のよい両腕を高く振上げ、渾身の力を籠めて革紐を締め上げた。立派な体格のアカレーが思わず呻いた。それ程にテセウスの臂力は優れていた。その位に復讐の憤怒に燃えていた。

「そうまで、丁寧に縛らなくてもいいでしょう。此の方は強いけれど柔軟ではありませんから、縛られたら自分では解けないのです」

アリアドネが微笑しながら催促した。デセウスは外側の室から大量の革紐を運び入れて鬱憤を晴らしつゝあったが、興奮が一締め毎に治ると入替りに情況判断が入って来た。

「俺を遁がそうと言うのだね。だけど君自身

は何うするのだ。此の獄室を出てもクレテ島を離れる船が要る。俺が遁げたら残った十三人が苦しめられるだろう。アツティカの王エーゲウスに災が及ぶかもしれない。俺が帰れなければな。君は其処迄考えてから俺を助けたのか。それとも此のアカレーという女に恨みあって、こんな事をしたのか、何方だ」

アリアドネはアカレーの甲冑を着用し、剣帯を付けつつあった。アリアドネの方が相当細かったが、身長は同じ位で、暗闇なら何とか化け終せる事も出来そうだった。

「勿論考えた上での事です。お仲間の十三人中六人は既に或る場所に集っています。あとの方々が何処に居るか何うすれば連れ出せるかも調べてあります。ギリシヤに逃げ出したという先刻のお考えは聞きました。外海を航行出来る三十挺機船が用意してあります。尤も漕ぐのは貴下達にもお願いしなければなりません。わたしもその船に乗ります」

事実上の初対面。会話を交すのは、これが始めてなのにアリアドネは実の姉の如く、優しさを籠めて言った。

「解った、俺もアツティカでは王子だ。エーゲウスの相続人だ。無事にギリシヤへ着けたら君を一生涯大切にしよう。で、此の女の始

末はこれでいいか、いや、君も満足か」

テセウスはアカレーに足を掛け、首から足先迄、凡ゆる関節、すべての屈曲部を材料の続く限り縛りあげ、口には海綿を詰め込んで太い革帯で締めつけた。それだけでは足らず落ちていたアカレーの筈を拾い、折れる迄打叩いた。アリアドネがそれを抑えた。

「テセウス殿。動けぬ者を撻つのは卑怯ではありませんか。然も貴下は勇士、アカレー殿は女です」

「君はクレテ女なのに、男の権威を認めるのだな。それとも何か魂胆があるのか」

「クレテ王国とて、男の働きがなければ保ちません。わたしも貴下の権威を認めます。但しそれはギリシヤへ着いてからの事。今は貴下に頼んでいるではありません。クレテの風習に従って、又姉として命令しているのです」

「俺は美しい女が好きだ。併し強い女は一層好きだ。それも性根の強い女が。兎に角今は君の言う事を聞こう」

テセウスはアカレーを壁際に引き擦り、青銅環に幾箇所も繋いだ。アリアドネは扉を閉めて外から鍵を掛けた。

「鍵は一本しかありませんから放置したらア

カレー殿はミイラになって了います。それでは余り可哀想ですから鍵は差した俥にしておきましょう。此処に麻の絲玉があります、これを巻き取りながら行って下さい。此の地下道は複雑で、始めての方は、こうでもしなければ歩けません。六人のお仲間が待つて居られます。牢番を縛って奪った武器も有ります。でも、声を立てないで下さい。すぐ上は海神の神殿です。皆揃ったら海に向って走りましょう。船は暗くなつてすぐ出港する事になっていきますから」

「君にばかり働かすわけには行かない。残る七人を助ける仕事をさせてくれ」

テセウスは面目からも勢い込んだ。

「船に乗る際、発見されて戦わなければならなくなつた時は貴下達の腕を見せて戴きましよう。でも此の地下道で、灯がなくては日頃の武勇も振えないでしょう。相手は真暗でも自由に走れる者達です。それにテセウス殿は足音が大きくてすぐ見つかつて了います、夕方迄はわたしに任せておいて下さい」

言い終るとアリアドネは一陣の風を残して闇の中へ駆け去った。テセウスはそれを追い掛けようとしたが、彼の聴覚では到底無理だった。

「何と恐しい女だ。併し何と美しい、優しいそして素晴らしい女だろう」

テセウスは絲玉を巻きながら、闇の地下道を一步一步、手探りに歩き始めた。

五月二日の太陽がスーダ湾の彼方に沈み、

クノスス一帯が夜の幕に包まれ始めた頃。

迷宮の大玄関では十人打の大銅羅が連打され、不気味な音を首府から外港一帯に響かせていた。非常信号である。

迷宮の屋上からはオリブ油を灯した巨大な火焰が高く明るく輝いた。それは断続的に点滅していた。

外港突堤上の大灯台はタールの火を以てこれに答えた。機械力で回転する大反射鏡が光を一方向に集め、白昼の如き光芒が滑った。回光通信は緊急警戒を告げていた。

詰所からは婦人警官が溢れ出ていた。街路には灯火が点ぜられ二輪馬車が駆け違った。金属と皮革が騒然と闇の中で触れ合った。

同じ頃、出港用意の成った三十挺機船の上では、ダイダロスやコレネ等が事態に胆を潰していた。

「大変です。王女様が発見されたのです」

「アリアドネ様の事だから何とか駆け抜けて到着されるでしょう。みんな、合図をしたら

全力で漕ぐのだよ」

ダイダロスは発明や諸技術を記した粘土板を幾箱か船底に持ち込んでいた。イカロスの骨を入れた小甕は手近にあった。コレネはアリアドネに頼まれた観測機械を船檣に据え、卵殻陶器の美麗な密封小壺を正面に安置していた。壺には、アリアドネが地下道から秘かに運び出し、コレネが人知れず焼いたカルキオペーの骨が入っていた。

全く同じ時刻、迷宮附属監獄の奥では。

失神寸前で呻き跪いていたアカレーの顔面に、突然オリブ油の強烈な照射光が注がれていた。

「クレテ王国の警備を預る其方が何と不態な姿を晒したものです。丸で芋虫同然。手は何処にあるのです。何か言って御覧なさい。母は情なく思いますぞ」

声は確かにパーシファエーだった。アカレーは一度に意識を取戻したが既に全身麻痺して手も足も動かず、返事も猿轡に遮られて唸るのみ。眼だけで解放を哀願した。

「アリアドネが逃げました。其方は帰って来ない。若しやと思つて来て見ると此の有様」王后は青銅の短剣で娘の革紐や猿轡を切り取った。アカレーは口中の海綿だけを自力で

吐き出したが、手足は自由になつても立てなかった。王后は短刀の背でアカレーの肩を軽く叩いた。痺れている上を打たれたのでアカレーは泣くような吐息と共に四肢を長々と伸ばした。王后は舌打をした。

「アリアドネ如き小娘に恥を掻かされて、口惜しいとは思わないのですか。其方それでもクレテ随一の女勇士と言えますか。さあ立ちなさい。わたしについて来なさい」

パーシファエーの叱声は、答よりも痛かった。アカレーは床に頬を押し当てた。涙を流した。併し氣力体力共に尽き果てた身体は動かない。

「もっと大切な事を教えてあげましょう。父王陛下がお果てなされたのです。誰が討つかお解りでしょう。其方の責任ですよ。これでも立てませんか。意気地なし」

アカレーはあつと叫んで跳び起きた。途端に痛そうに顔を歪めた。一度片膝をついたがそれでも真直に立った。

「追い掛けなければなりません。三十挺機船が用意してあると言っていましたから、行先は大港より他にはないと思います」

「ダイダロスが手引したに違いありません。其方の自慢していた部下八人も、使いに出し

たモルパディアを除いて全部、他の獄吏共と一緒に海神殿の地下倉庫で荷物みたいに縛られた上、袋に詰められていましたよ。わたしは解いておきましたから今頃は元氣になって港に向っているでしょう。わたしの二輪馬車^{チャリオット}は迷宮の玄関に用意しておきました。乗せてあげますから早く来なさい」

「ああ、母上様。甲冑も剣も楯もアリアドネに奪られて了ったのです」

「そんな事だろうと思って新しいのを車に積んでおきました。弓と槍もね。このパーシファエーに抜かりがあるとお思いですか」

「申し訳ありません。何としてもアリアドネとテセウスを捕えます。今度捕えたら」

「それは美事捕えてから言いなさい」

二人は地下道を走りだした。五十八才のパーシファエーの方が二十六才のアカレーより早かった。

大灯台は煌々たる光芒を以て首府から港に至るすべての道路を掃射した。凡ゆる物体が黒い影を落して照破された。隠れる術なし。

「失敗った。発見されたぞ」

叫んだのはテセウスだった。迷宮^{ラビリンス}から発するもう一つの光芒が同一点に交差した。アリアドネを先頭とし、テセウスを後殿とする十

五人の少年少女は焦点に捕捉されていた。忽ち数十人の婦人警官が八方から群った。

アリアドネは甲冑も楯も棄てて身軽になり剣だけを帯びていた。剣帯には罌や袋や壺を幾つか下げていた。テセウスは銅羅打用の棍棒を持っていた。剣や槍のような精妙な武器は性に合わないらしかった。テセウスの腰には丸い包が結んであった。これはアリアドネが十四人の最後の者を集めて合流する迄にテセウスが入手したものである。アリアドネはそれに気附いたが、危急の際なので敢て問わなかった。他の少年達も、少女すらも、獄吏達から奪った武器を帯びていた。

「戦闘に拘ってはなりません。港はもうすぐです。早く駆け抜けて」

アリアドネの声が天空から聞えた。事実、アリアドネは地を蹴って婦人警官達の頭上を跳び越えていた、越えながら袋を開いて灰色の粉を撒いた。高熱処理で乾燥粉末にした香辛料だった。正面の婦人警官達は眼と鼻を犯されて方角を失った。

テセウスが突破孔を開いた。棍棒一閃する毎に頭が砕け、手足が折れて飛んだ。七人の少女を中に囲い、三人宛の少年が両翼を固めて駆け抜けた。遂に棧橋が見え出した。

「端に見えるあの船です。急いで」

俄然、後方から二輪馬車^{チャリオット}が迫って来た。

「アリアドネ。遁しませぬぞ。今こそコルキユス魔法の恐しさを見せてあげます」
重く太い女の声が響いた。

「ああ、王后様」

アリアドネが恐怖の表情を見せて数歩後退した。二輪馬車を操縦するのはパーシファエー。傍に甲冑剣楯で武装し、弓槍を帯びて同乗しているのはアカレーだった。

「魔法などに驚くものか」

テセウスが棍棒を振って進み出た。

「浅慮者。エジプト、バビロニヤからエウクシヌスに至るすべての魔法を極めたこのパーシファエーを侮るとは」

王后は馬車の手綱をアカレーに渡し、左右の手を交互に回転させ始めた。指先から閃々と革紐が飛んだ。先端には尖った刃がついている。テセウスの棍棒は見る間に革紐が巻きつき、振廻す事も出来なくなった。

「王后様。御手向い致します。わたしとてもエウローペ様から魔法の伝授を受けた者。御存分になさって下さい」

アリアドネが眦を決してテセウスの前に立った。青銅の大剣をテセウスに渡し、素手を

拡げた。

「よい覚悟です。受けて見なさい」

パースファエーは目標を転じた。革紐の流れは真向から直線に飛び込み、頭上から落下した。腕の振り方一つで螺旋回転し、左右からも曲線を描いて滑り込んだ。アリアドネはそれを必死に手で払い落す。

王后は頃合を見計って更に恐る可き武器を放った。アリアドネは革紐と似ているが自力で動く別種のものを見分けた。

「ああ、エジプトコブラ」

危く革紐と間違えて掴む処だった。だがアリアドネは幻惑されなかった。手早く小罐の蓋を取り、猛毒蛇に向って小さな粘いものを

投げた。頭部に附着物を浴びせられて毒蛇は落ちた。王后は革紐に混じて続々と蛇を投げた。自分は噛まれないように、蛇の首を掴んで放った。アリアドネも対応物を投げた。蛇は悉く叩き落され、退散した。

「テセウス殿。オリブ油に浸した蛞蝓です。蛇退治の妙法ですよ」

アリアドネが手を休めて言った。要するに有機酸に対する強アルカリである。

「アリアドネ、仲々やりますね。今度はこれを受けて御覧なさい」

パースファエーは左手で穴のあいた袋を投げた。花粉のようなものがアリアドネとテセウスの上に降り掛った。間髪を容れず右手か

ら土甕が飛び、アリアドネの足下に砕けた。

「カメ蜂だ」

テセウスも王后の意図を察した。先ず誘導物質を撒き、次いで毒蜂を放つ。

併しアリアドネの対応動作は敏速だった。先刻の罠から口中に液を含み、一息に鋭く噴霧した。毒蜂は拡らない中に飛翔力を失って散り落ちる。

「凄い、何という業だ」

テセウスが感嘆した。

「只のオリブ油ですよ」

アリアドネはテセウスの方を一寸振返って微笑するだけの余裕を取り戻していた。

「今度は俺の番だ、行くぞ」

四馬孝妖美画集

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付
五枚一組 略号一〇〇〇円
(しせ)

- 一、若き姫君の切腹美態
- 二、介錯を受ける美しき娘
- 三、切腹する娘落城の哀史
- 四、夫の眼前で切腹する若妻

浣腸美媚態

五、愛人の手で介錯される娘

△女体浣腸の極美▽

大中判印画紙極鮮明焼付
三枚一組 略号六〇〇円
(のゆ)

- 一、美しい令嬢に対する浣腸
- 二、女事務員の浣腸の場面
- 三、女学生に行う浣腸の私刑

浣腸責め図譜

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付
五枚一組 略号一〇〇〇円
(しき)

- 一、片足吊りで美女に浣腸
- 二、いちぢく浣腸の恐怖
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女
- 四、硝子シリンダーで乱舞す
- 五、イルリガートルの浣腸

浣腸責め図譜

大中判印画紙極鮮明焼付
五枚一組 略号一〇〇〇円
(しえ)

- 一、踊子へのイルリ浣腸責

- 二、ヒマシ油強制下剤実施
- 三、進しり出る緑の浣腸液
- 四、女体浣腸用責衣の応用
- 五、両足吊りイルリガートル浣腸

羞恥責め絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付
五枚一組 略号一〇〇〇円
(しい)

- 一、渾水による人工妊婦製造
- 二、浴槽の女神を責める
- 三、三角木馬の美女責め
- 四、全裸の美女柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

テセウスはアリアドネから譲られた剣を構えた。併しアリアドネがそれを制止した。

「王后様の狙っているのはわたしです。貴下には彼方を頼みます」

アリアドネは正面でパーシファエーやアカレーと対しながら、背後に起りつつある他の事態も察していた。港に停泊している艦船から水兵が続々上陸し、棧橋への通路を遮断しつつある。王后の目的は時間稼ぎだ。

「早く囲みを破って船へ。ダイダロス老人にアリアドネが命じたと伝えて下さい。構わず船を出しなさいと。証拠にこれを見せて」

テセウスの肩に黒い外袍が舞い下りた。

「待て、君にばかり危険を負担させないぞ」だがアリアドネは既に反対方向へ駆け出していた。走りながら言った。

「早く船を出して、わたしは必ず追いつきます。心配しないで、信じて」

声が急速に遠くなった。アリアドネの姿は光の縞を縫って宙に躍り、一旋して見えなくなった。

テセウスは棧橋の方に仲間を導いた。通常の間が相手なら、テセウスの武勇に刃向い得る者はなかった。その様は恰も利鎌を以て熟麦を刈るに似ていた。幾人かの仲間が傷を

負ったが曳き擦るように船へと駆けつけた。

王后はアリアドネが大突堤に向って走るのを見遁さなかった。アリアドネとて他人の二倍の高さを跳べるものではない。盗塁王と言っても百米を五秒で走るのではないと同様に、思い掛けない姿勢から、意外な方向へ心の虚を突いて跳ぶのである。人間の視神経は頭上を越える対象に追従出来ない。併しパーシファエーは見破った。

「アリアドネ、わたしの眼を眩ませると思つてか」

王后は馬車を一回転させて追った。蟬で固めた燐の油玉が飛んだ。アリアドネの足元から火焰が湧いた。アリアドネは跳躍しつつ火を避けて走る。併し大灯台の光芒が追いついた。捕捉して離れなかった。

「それ走れ、もう一息、遁しませぬぞ。駆けよ、踏み潰せ」

パーシファエーは車上に突っ立ち、二頭の馬に鞭を加えた。アリアドネは走りながら、罌や壺を馬の脚下に投げた。王后は巧妙に馬を躍らせて危険物を乗り越えた。王后の卓越せる操縦。アリアドネの超人的疾走、何時か他の者は悉く引き離され、奔るはアリアドネ只一人。追うはパーシファエーとアカレーの

二輪馬車チャリオット一輛。煌々たる照明の下、一団となつて防波堤上の石塁を驚走していた。

「アリアドネ、血迷ったのですか、そちらは行き止り、堤防の先は海ですぞ、武器も無しに逃げ切れると思つておいでか」

王后は勝ち誇つて言った。アカレーは閃々と矢を放つ、併し速力早くして当たらない。

「アカレー、下は石塁、反撓射撃スキップショットしなさい」

アカレーは照準を下げた。石塁から撫ね返る矢は脚下からアリアドネを襲った。効果はあった。走っていたアリアドネが転倒した。そう見えた。王后は快哉を叫んだ。遂に蹂躪できると思つたが。

アリアドネは身体を水平にして跳躍し、扨転しつつ二頭の馬の中間に擱った。馬の腹を握り、予め口に咬えていた短刀で繋駕綱切断した。

勝敗は一瞬で逆転した。アリアドネは馬背を蹴って高々と空中に転回し、体位を調整しつつ接地した。王后の悲鳴が聞えたようだった。全速疾走中の二輪馬車チャリオットは片側の馬を切り離され、停止も出来ず、急角度に旋廻して突堤の壁に激突した。大音響と共に車体は木端微塵。光芒の中に車輪が、車軸が、前額板が粉碎飛散し、空中に舞った。寸断されたパー

シファエーとアカレーは壁を越えて闇黒の海中へと消し飛んだ。

折しも三十挺機船は櫓音を揃えて灯台下を通過しつつある。突堤上から火箭を集中されテセウス等は消火に忙しい。

「王女様」

「アリアドネ様」

コルキュネとダイダロスは海に、突堤上にアリアドネの姿を求め続ける。

女性切腹（時代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま2）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円
若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求め、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女の首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲したものですが、今回御希望の方にのみ特に印画紙に焼付けて頒布いたします。

「ダイダロス、コルキュネ、テセウス、来ましたよ、約束通り」

アリアドネの鋭く高い声が突堤の間近で聞えた。灯台の光が死角になる附近、大きく跳んで外の海中に没する姿が一瞬だけ見えた。船は全速で航走する。それを追って一閃の水沫。忽ちアリアドネの姿は水面下に没し、空を切って飛来した数十本の矢は空しく水泡を描いた。

女性切腹（現代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま1）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円
その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの口絵を発表して斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作の意欲を燃やし、うら若き現代的な女性が絶對命の境地に追い込まれて、自らの手で自らの命を断たなければならぬ場面を設定し、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿態を彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しました。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

五月二日の太陽が雲の裂目に現れた。乱雲が飛ぶ、波は高い。

「天佑です。此の風では快速艇は出航出来ません。でも三層機艦は出撃している筈。戦艦に発見されたら施す策がありません。力の限り漕いで下さい」

アリアドネが呼吸を弾ませながら言った。苦しそうだった。肩と背と腿に、矢傷があった。昨夜、船上に引き揚げられた時は鮮血に塗れて体力も殆んど尽きかけていた。それでも経緯儀とクノスス標準水時計で観測を済ませる迄は責任感が意識を引き止めた。今朝はコルキュネの手当てで蘇生したばかりだった。昨夜の戦闘でアケーヤ人は半分が負傷し、内二人が重態だった。併し兎に角全員が船上に揃っていた。

テセウスは撓漕を手伝っていたが、アリアドネが覚醒したと聞いて上って来た。

「アリアドネ、君は素晴らしい女性だ。知性、美貌、体技、それに責任感、どうだ。アツテイカの王妃になる気はないか、君の為なら何でもする、君を世界中の女王にしてみせる」アリアドネは微笑した。聡明睿智にして神技と見紛う躍動を見せるアリアドネが、他意のない微笑で愛嬌を撒くと、周囲一帯が甘美

な雰囲気にも包まれるかと思われた。

「遂にクレテ島を離れて了いました。斯うすべきか否か、九年間迷い続けていたのです。

ギリシヤに着けばわたしも只の女、其処は男の方に従わなければならない世界と聞いています。身の振り方はテセウス殿が決めて下さるでしょう。女王になれと言われたら政治を

見ます。奴隷になれと命ぜられたら賤しい労働でも致します。すべてはお心次第です」

テセウスは身体中が燃えるように思った。

「二人が組んだら不可能は無い。現に君は魔法使いパーシファエーを倒した。俺はミノス大王を討った。此の通り、此の首が欲しいばかりに危険を冒してクレテ島に渡ったのだ」

テセウスが取り出したものは正しくミノス五十二世ラダマンテュスの首だった。だが、それを見るや否や、アリアドネは一声高く絶望的な叫喚をあげて失神した。

「アリアドネ。何うしたのだ、俺は何か悪い事をしたのか。生首が恐いのか」

テセウスは狼狽した。

「貴下がお討ちになったのは王女様を可愛がって居られた御父君なのです」

「そうだったのか、知らなかった、アリアド

ネはクレテ王国の王女だったのか、俺はその父を殺したのか、俺は何うしたらよいのだ」

純真な少年テセウスの煩悶を反映してか、

風は愈々強く、灰黒色の帆は鳴り響き、波浪は甲板を越えて躍り騒ぐ。

嵐は二日間荒れ狂った。

五月五日未明に漸く星が出た。アリアドネは傷の痛みを耐えて船櫓に立ち、星と時刻を測って位置を示した。早朝ナクソス島が右舷遙かに見える旨予言され、テセウスはアリアドネが鎮静になったものと考えて安心した。

日の出直後、テセウスは撓漕を交替してアリアドネを捜した。だが何処にも見えなかった。コルキユネの姿もなく、カルキオペーの骨壺、ミノス五十二世の首、観測用経緯儀の三品が紛失していた。不吉な予感が走った。

皆で船内を尋ねたが得る処なく、只船尾樓の板に線状のクレテ文字が書いてあるのを発見しただけだった。

線文字Aを読めるのはダイダロス一人だった。老人は文字を見るなり腰を抜かした。哀哭しつつダイダロスが読んだ内容は

「テセウス殿。貴下は世界中で一番愛しい方、そして憎い人。お側に居ると無意識に刺すかもしれぬ自分が恐い。ナクソス島が近

くに見えた時に此の船を去ります。身を隠して庶民の娘になります。テセウス殿。アツテイカを立派に治めて下さい。ダイダロス老人約束を破って済みません。お幸せにね」

ダイダロスは手離して泣いた。

「アリアドネ様の矢傷は癒っていません。コルキユネ様は元来泳ぎ上手とは言えませんでした。此の波で遠いナクソス島迄無事に着けたかどうか。噫、憐れな老人は妻も子も亡くした上に王女様には去られ、たった一人でこの世に残されてしまいました」

テセウスは愕然として右舷後方を眺めたが既にナクソス島の影は見えず。

「アリアドネ、何故俺を刺してくれなかったのだ、馬鹿、馬鹿」

テセウスの号泣は風に吹き千切られ、一望重畳たる灰色のうねる彼方に消えて行くばかりだった。

× × ×

衆知の如く希臘神話に於けるアリアドネの挿話は此処で終わっている。併し筆者は尚十五年間、此の純情、篤信にして薄幸なる永遠の乙女を追いつけなければならぬ。

哀しくも美しい物語の中に。

(未完)

手記はいまも生きている……

続「マゾヒスト・古川裕子」メモ

久 我 庄 一

△……ああ誰か、私を目茶目茶に虐げてくれる人はいないか？それが夫への不貞であってもかまわない。ああものたりない！私の中の被虐の女が、こう叫びつつける。一度あの歓楽の美酒を味わったものが、どうして忘れられるものか？と▽

「続・囚衣」28・4月号 古川裕子

◇

「終」と、活字でピリウドを打つことは出来る。だが、真の叫びは、そこから終りなく無限に読者の胸に生き続けるだろう……私が、いま、奇ク全盛期が生んだ稀有のマゾ女性、古川裕子を再び書き、メモを発表しようとするのも、彼女の「凌辱の幻想と期待」の呻めきが、年月を意識させず強烈なアブの炎とな

って、私のS的な欲望を刺激するからに他ならないのだ。

——前作では、古川裕子の華麗な悲劇をより浮彫させるため作家・吾妻新を配して一つのドラマを形成させ発展させた。この稿では古川裕子の満たされないみずから称した人神に見はなされた悪魔の女▽の日陰の人生を探って見よう。

◇

突然の自動車事故は、私から最愛の夫を一瞬にして奪ってしまった。

——ここから、「真面目なる聖なる自己は余りに弱く、肉体の女は余りに強い！」マゾヒスト・古川裕子の△……もっともっと、骨を噛むように、底の底まで楽しみなさい。ああ

私に満足させて！あの歓喜！あの満足！▽という「異常性欲の一筋の道を——」堕ちて行くのである。

異常性欲という言葉をも、他にどのように美化し表現することもできる。しかも、彼女はまれにみる才筆をもっているのだ。それをあえてせず、好んで俗語（なまの表現）を使用する所に、その苦しさ、どうしても「告白」せざるを得ないアブへの宿命を感じよみ取るのだ。

そこにフィクションの世界でない「真実」の訴えがある。古川裕子にとって小説家としての、文章家としての野心はない、あるものは「身も世もない叫び」のみだ。それが、マニヤの魂にするどいトゲとなつてつきささ

る。

それが例え「毒素」をもっていても……。

「SMよ、コンニチワ！」と明るさプライドを持って生きて行くのも一つの生き方ではあろう。だが、古川裕子のように「世間の眼や自分の道徳なんてなあに？……私の中の女は身をもだえ地団太を踏んでこう叫ぶ！」「三十にもなつてなあに、この豊かな乳房、真白なものも、可哀そうだと思わないの！」「自問自答する心の暗闘も、それがどす黒い悪魔の道であったとしても、これも人間古川裕子の一つの生き方ではなからうか——

私はあなたに私のよれた靴下と禪とで猿ぐつわを嵌めますよ。私がどんなに巧妙に責めるか、どうか一度会って下さい。縄の味もムチの味もそれから……。あなたの大切なものには私の指一本ふれず責めるのです。貴方は私のドレイ。哀れなドレイがどんな仕置をうけるか、早く連絡して下さい……」

遙るか北海道・札幌、S氏からの手紙が、古川裕子をして仙台駅から北海道へ旅立たせた。——結果は悄然としてまた義兄のもとに

帰る破目にさせた。なぜか？

……乳房に厚いゴム製の椀のような器具がはめられ次第にしまつてゆく。……

乳枷を遠慮なく締めつけられる。猿ぐつわもちぎれよと呻く……。

古川裕子が望んでいた被虐図が完璧なまでに展開されたというのに。

いみじくも、作家吾妻新は、その「古川裕子への手紙」36・5月号の一節で述べている

「古川裕子は完全なマゾヒストであるが、意志なき道具ではない」と。北海道に旅立つ前夜、彼女は心の中で叫んでいる。「寝床の中

で読むS氏の手紙に、私の中の女は声をあげて呻き出した。何故行かないの？恐いの？結婚なんかはしてくれやしないけど、行ったら

いいじゃないの？」

古川裕子はたしかに、小雨降る札幌の街の空の下でS氏の加虐のムチの下で狂喜した。

秘密クラブのショウにもかり出され「地獄の祭典」に「何か楽園にのぼる感覚」を意識した。

だが、——そのすれすれの一線で「真や善や美を真面目に考え。人生を有意義に」という願いと、「SMの世界に共通した愛」へのひそかな願望が、かろうじてS氏に背をむけ

させ、——その汚辱の代償として三万円の札束をポケットに……ついにはどしや降りとなった雨の中を、古川裕子は待合（秘密クラブのショウのあった）を出たのである。

古川裕子の第一作・「囚衣」より、復刊第二号の「告別」に至る数多くの手記が、そのなまの表現・異常な告白であるのに比して、単なる好奇や通俗的な読み物に堕ちない原因は、実はここにあるのであって、その文章の全篇をつらぬくろまんはマゾヒスト・古川裕子の人間的な悲劇として知る者の気持をゆさぶるものがある。私はそう信じた。

△この項「続・囚衣」29・4月号参照▽



古川裕子の文法を無視した形やぶりとも思われる告白は、それだけでも当時の奇クにあつて異色の生彩を加えたわけだが、出版史上おそらくは前代未聞ともいうべきことを二つしている。（あえて編集部にそうさせた）

一つは、昭和二十九年三月号に「私を愛して下さった皆様へ」——裕子の告白の言葉——として「さようなら」した、すぐ次号・四月号に「慟哭の記」が登場し、つづいて六月号に「わが心の記」——あるマゾヒストの女の日記——を、八月号に「美しい五月に」それに復刊

第二号に『告別』を最後として、誌上にその消息は断った。(二度、公的な意味のさよならしたことになる)

もう一つは、その本当のさよならの『告



別』の時、吾妻氏の言葉を借りれば△公刊誌にこれほど思い切った告白をする▽という作家・吾妻新への「愛の書」を捧げたことだ。

これは、△私信というよりも、本誌の読者が熟知している仮名のあなたの感情の吐露という点で十分によみものになっていたからだと思います▽と言う吾妻氏の手紙によるまでもなく文献的に評価されるものであったことは論をまつまでもないことではあるが、それに刺激は強すぎる。ズバリ言おう。古川裕子にとっていつも日々がはじめでもあり終りでもあった。だから『私を愛して下さい皆様へ』の△

さようなら▽も『告別』の場合のさようならも、真実であるが故に、いつわらない事実でもあった。

そして吾妻新への「愛の告白」も、彼女のよく使った△性欲▽へのぬきさしならなかった一つの切り札でもあったのだ――。

古川裕子にとって、△美▽のなんたるかをいっそう知っているだけに、その彼女に巣くうデカダンな血みどろにのたうつマゾの虫との暗闘には凄絶なものがあつたらうか。

ここまで推理の糸をたどってくると『古川裕子さんへ与える』佐治須十(28・8月号)の批評の一節「何れにしても貴女はマゾの牢獄に於て、『終身刑を運命づけられた女囚です』または△女囚古川裕子は雨に濡れた囚衣をまとい、深編笠であるフードを冠り、目に見えぬ手錠足枷に縛しめられ、衆人の中を無形の鞭に追われつつ今宵も又悦虐の刑場へとぼとぼと歩んでいる事でしょう。▽という言葉が生彩をはなってくる――。

(終)

× × × × ×

女相撲物語

花の女斗美たち

②

奮 斗 士 好 太

練習場はふつうの教室の二倍くらいの広さです。下は土間、まわりは全部板張りになっていますが、両側一ぱいに頭の高さくらいのところに窓がとってあって明かるく清潔な感じがしました。

真中のやや奥より土俵があつて、もうそれを囲んでマワシすがたの上級生たちが練習を始めていました。

土俵といっても、土間に丸く俵を並べただけの簡単なもので、その中で取り組んでいる二人を囲んで、立ったりしゃがんだり、中腰になつて膝に手を当てたりして見ているのでした。

榎本さんと小林さんのうしろについて、おそれるおそれる入つて行つた私は、その人たちを何だかマブシいものでも見るような気持ちにな

りました。というのは色の白い人、黒い人とさまざまでも、皆りっぱな体格をしていて、やせているように見える人でも引き締まつているという感じで、私のようにヒョロヒョロではないし、反対にいくらふとっている人でもダブダブとタルんだところはなく、張り切つた肌などさわると、ピンとはじき返えされそうな感じさえするほどです。

津野さんも、がっちりしている方ですけれど、あの人たちと並べれば、スゴく小柄に見えてしまふのでした。

土俵で取り組んでいるのは、キャプテンの今井さんと、この前紹介された時にはいなかった色の白い大柄な人でした。

色白の人が今井さんの胸に頭をつけ、背を丸めるようにしてグーッと押して行きます。

キリッとマワシを締めこんだ丸いお尻がブルブルンとふるえ、たくましい太ももの筋肉がモリモリと動きます。

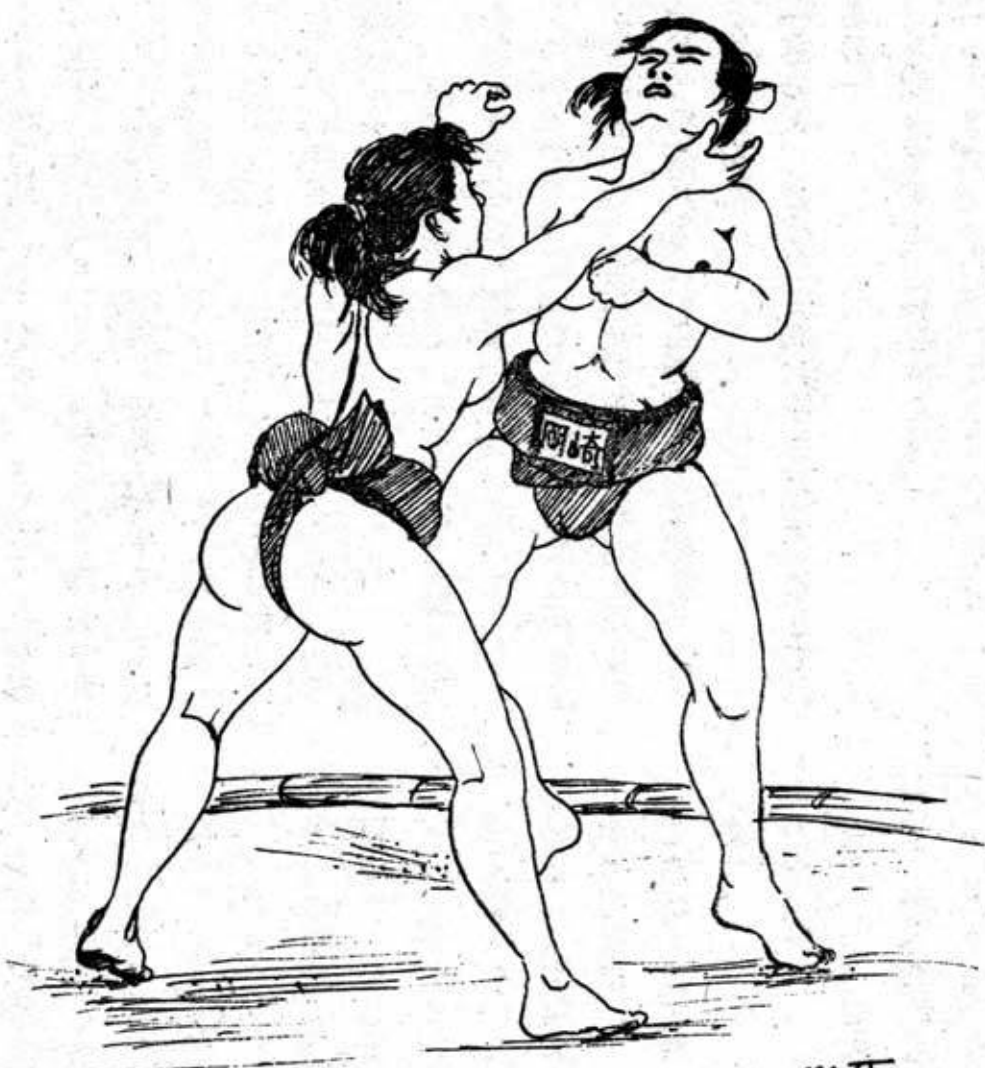
今井さんのふんばつた両足が、土俵の砂にズーッと二本の線を引きながら、うしろ一押されて行きます。

「スゴいなあ」

と見ていると、今井さんは土俵の端に足がかかる、そこでグッとこらえました。そして体を左へひねるようにしながら左手で押して行く人のわき腹のあたりをポンと突きますと、押している色白い人がまるで頭からトンボ返えりをするような形で、ひっくり返えってしまいました。

「スゴいわねえ」

となりにいる津野さんを見ると、津野さん



もニコッと笑って、ちよっと首をすくめるようにしながら自分のマワシのおなかのあたりをポンポンとたたきました。

ひっくり返った人は、そのままクルッと一回転して起き上がると、すぐ向き直って待ちかまえている相手にぶつかって行きます。「パチッ」

裸かと裸かが、はげしくぶつかる音がしてまた胸に頭をつけた形になってグーッと押しに行きます。

「キンちゃん、ヒジヒジ！」
土俵のまわりに立っている人から声が飛びます。

キンちゃんと呼ばれた色白の人は、両ヒジ

で自分のお乳をはさむようにしながら土俵の端まで進んで行きましたが、そこでまた突き倒されてひっくり返りました。

「パタン、パタン」

すぐ横で音がするのでそちらを見ますと、小林さんがふとった体をゆったりと動かして四股をふんでいるところでした。

足を開いて両手を曲げたヒザに当てた形から、スッと足を上げると軽く私の顔くらいの高さにまで上がるのです。そしてそれをしげんと重さのために下がってくるような

感じてズシッと力強くふむのでした。

高く上げた足も、地面についた足も、グッとヒザが伸びて体操の演技を見るようにきれいです。足をつくたびに、ふとっている小林さんの大きなお乳や、丸いおなかブルブルッ、ブルブルッとふるえるのが武者ぶりをしているように見えました。

まるで、本当のお相撲さんを見ているみたいな堂々とした感じなので、すっかり見とれてしまいました。

あとで聞いたのですけれど、小林さんの四股は、部員のなかで一番形が良いのだそうで小林さん自身も四股をふむのが自慢なのだということでした。

中学時代は体操をやっていたのが三年生ころから急にふとり出したので、この高校へ入ってから相撲を始めたという話で、ふとっているのだからだがスゴくやわらかく動くのは前に体操をやっていたからなのだそうです。

この時も数人の私たちが見ているので、ちよっと得意になっていたのかも知れません。四股をふみ終わった小林さんは、今度は足を下ろしたそのままの形で、両足をズーッとひろげて行きました。そしてお尻をピタリついてしまうと、足をまっすぐ両方へ開いた

まま上体を前へ倒すのです。するとこれも軽く地面に胸がとどいて、お乳の先が砂にやわらかくふれます。マワシを締めてもらってから私など何だか体の自由がきかなくなってしまったようだというのに、小林さんは何てやわらかい体をしているのだろうと、すっかり感心しました。

小林さんに見とれているうちに土俵では相かわらずはげしい練習がつづいていました。ぶつかって行ってはころばされ、また起き上がったぶつかって行く、四回、五回と同じことをくり返えているので、そばに立っている津野さんに

「あの人、どうして同じ負け方ばかりしているの」

と聞きますと、津野さんは

「あれはブツカリげいこっていうのよ。つまり柔道の受け身のけいこみたいなものね」

といいましたが、その柔道の受け身というのがよくわかりません。

でも、とくいになっているような津野さんの顔を見ると何回も聞くのがシャクで

「アア、なるほど」

とわかったような顔をしていました。

いくら練習でも、あんなヒドい転び方をし

たら、痛いだろうなあとと思って見ているうちに、だんだん起き上がってまたぶつかって行くスピードがなくなってきました。

「ハアハア」

荒い呼吸をして汗のにじんだ肩から背中へ、そしてお尻にまで砂がベトトリと張りついています。

固く締めていたマワシも、すっかりゆるんでお腹の上の方へまでズリ上がってしまい、折りたたんでいたところは、はずれてダラリと垂れています。

「バジッ」

とぶつかっても、もうそのまま押せず、前へ進めない足がブルブルとけいれんするように、ふるえています。

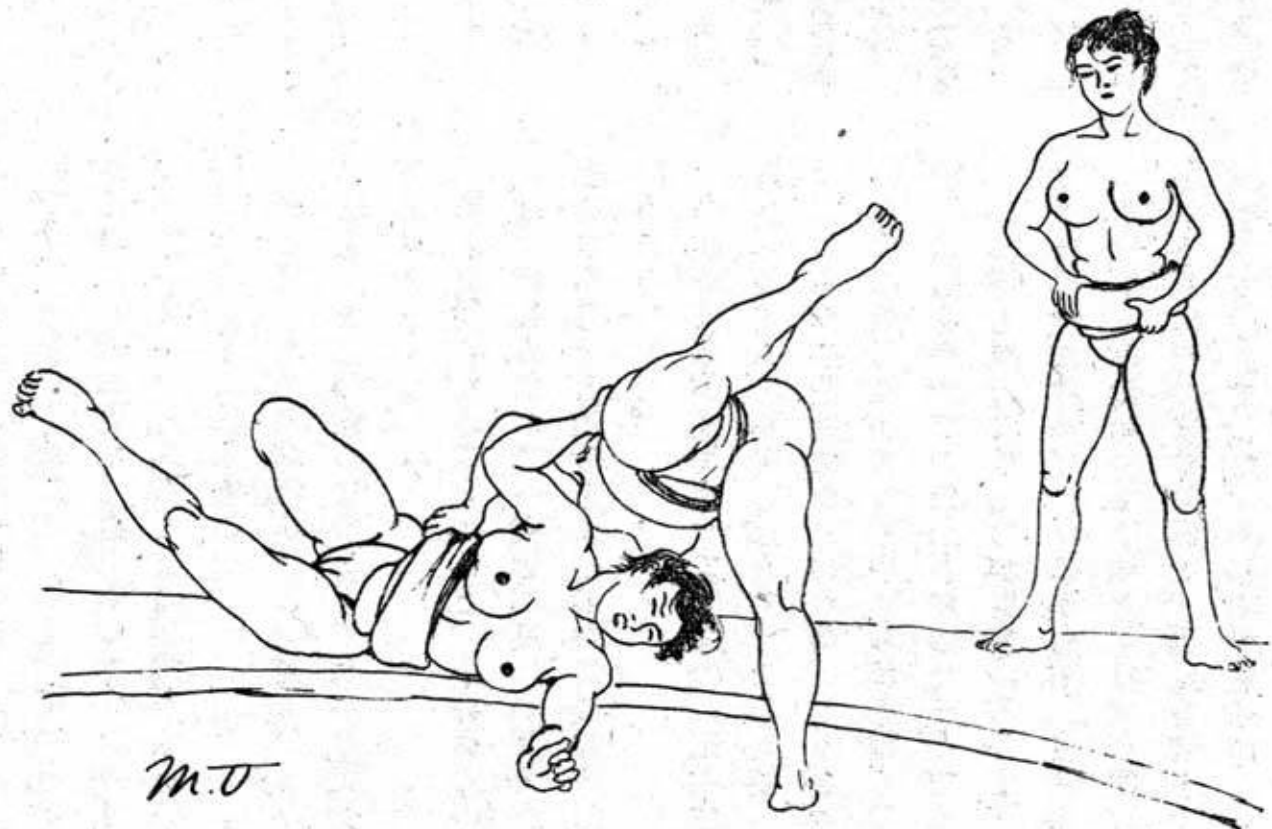
前に垂れ下がったマワシの端だけがユラユラとゆれています。

「ファイト、ファイト！」

「休まないで！」

まわりから、激しい声がかかりますが押せません。

私はいきなり、こんな激しい練習を見せら



れたのでコワくなってしまう、胸がドキドキして足がふるえてきました。

となりの津野さんも、しっかりと握り合わせた両手をお乳のところへ当てて、目ばたきもせずに見つめています。

そのうちに、今井さんの方が逆にちよっと押し返えますと、キンちゃんという人の方は、フラフラと後へよろけるように下がりました。

「ダメダメ」

「ダラシないわよ」

という声が耳に入ったのか、よろけかけたのを立ち直ろうとしたようでしたが、そこをもう一度ドンと押されると、ヨタヨタと土俵ぎわまで下がって、そこでとうとう尻もちをついてしまいました。

「さあ、ファイト！もう一丁」

声をかけながら、今井さんは土俵で身がまえて待っていますが、なかなか立ち上がれません。

顔中一ぱいの汗で、髪がべったりと額に貼りついています。

「ハイッ！ラスト！」

という声にさそわれるように、やっと起き上がると待ちかまえている相手の胸に向かってまるで倒れかかるようにぶつかって行きました。しかし押すどころか、相手の体につか

まっているのがやっとなのうに見えます。

「ハアハア」

というはげしい息づかいについて、上がり下がりしている肩と、波をうっているお腹の白さだけが、彼女の疲れをあらわしています。

汗が背中の中の砂の間をスーッと流れ下がってマワシにしみこんでいきます。

「つかまっているだけじゃダメよ」

「ソレ、押して押して」

あんなに疲れているのに、まだ休ませないつもりなんだわと、まわりで声をかけている人たちがにくらしくなるくらいです。

それでも、その声をきくと、ただつかまっているだけだったキンちゃんという人は、力をふりしぼって相手を押して行きました。

息をころして見ていると、今井さんは土俵の端まで押されて、そこで一度グッとこらえました。そこで力をぬいて自分から出るように土俵の外へ下がりました。

そして

「がんばったわね」

相手の肩に両手をかけながら、ニッコリ笑いました。

キンちゃんという人は、コクンとうなづく

ように頭を下げ、足をひきずるような歩き方で私たちの方へやってきました。

マワシがすっかりゆるんで、まるで子どもが帯を締めたみたいにお腹の上の方にメチャメチャに巻きついていきます。

キンちゃん／＼金子というのだそうですが、頭文字だけとって、キンちゃんと呼んでいるということでした。は、タオルを持った人から受けとると、汗ビッシヨリの顔をぬぐい、肩から胸と流れる汗をふきますが、そのあとから絶え間なく汗がにじみ出てきます。

それでも、荒い息づかいも少しおさまって私に「背中の砂を落してよ」

とタオルを手渡しました。

背中からお尻、そしてぬれたマワシにまでべったりとついていっている砂をゴシゴシと落していく私の手に白い肌の下に張り切った筋肉の弾力が気持よく伝ってきます。

私が砂をすっかり落してしまうと、金子さんは自分でマワシの結び目をとき、その端を私に持たせてからクルクルと体を回転させながらマワシをはずして行きました。

金子さんの股をくぐったマワシが私の方へスーッと伸びているのが何だか、金子さんから長いシッポが生えているみたいでした。

金子さんは自分で腰をひねりながら、またシッカリとマワシを締め直し、そして、すっかり締め終ると、うしろの結び目をポンと軽くたたき深呼吸をしました。

もう息づかいも、ほとんどおさまったようでした。

落ちついた金子さんは、色白で目鼻立のはっきりしたなかなかの美人です。上気した頬がポーッと紅潮しているのが、ふるいつきたいほど魅力的です。笑うとすっかり細くなった尻が下がって、おかめの面のようになるのがかえって親しめる感じになる人でした。

「あなた、一年生ね。何ていうの？」

と聞かれて

「石山テル子といいます。よろしくお願いします」

「そう、私、金子っていうの、よろしくね」

津野さんも

「津野栄子です」

と、おこったようないい方でピョコンと頭を下げます。

「一年生は、あなたたちだけ」

「いいえ、四人なんですけど、西田さんて人が今日は来られなくて、あとから水野さんが来ます」

「じゃ良いわね。わたしたちの時なんか最初二人だけだったのよ。どっちな休んだりすると上級生ばかりでしょう、淋しかったわ、あとからだんだんふえて、六人になっちゃったけど」

話していると、ガタンと入り口の戸が開いてヒロちゃんの顔がのぞきました。

私が部屋へもどると、ヒロちゃんは

「もうマワシしてるのね。自分でやったの」「ううん、上級生からしてもらったわ。わかるわけないでしょ」

「そうね。私のはどこにあるの？」

「そのロッカーの端の方の自分の名札のついてるところに入れておくんだって」

「そう」

ヒロちゃんは、自分の名札のついたロッカーから青いマワシを出して

「すごく厚いのね、こんなの締めて痛くないかしら」

「私たちの今注文してるんですって、これは選手用ので少し厚いんだっていったわ」「じゃ私も締めるから手伝ってね。大体知ってるのよ」

と、さっさと服をぬいで裸かになる」と青いマワシを前に当てます。

私がうしろへまわって締め始めたところへ笠原さんがもどって来ました。

笠原さんはヒロちゃんを見ると

「ああ、水野さんも来たのね」

と声をかけましたが、私がなれない手つきでヒロちゃんのマワシを締めてやっているのを見ると

「ダメ、ダメ。そんなゆるいんじや、直ぐとけてしまうわよ。体についてた方はうんときつく締めなくちゃ」

傍へ来て私にかわってヒロちゃんのうしろへまわり、なれた手つきでグイグイと締めこんでくれました。

マワシを締め終ったヒロちゃんと、また練習場へ入りますと、今度は小林さんが佐伯さんという三年生の人におつかっていました。何しろポリュームのある小林さんがおつかるのですごい勢いです。

グイグイとブルドーザーが進むみたいな押し方で進みます。

ころがされて起き上がって、またおつかって……とさっき見なれたつもりでも、やっぱり息をのみます。

すると土俵から下がっていた今井さんが私たちの方へやって来て、「今日は三人だった

「さあ、いよいよ始まるわ」

「何よ、ダラシないわ、落ちつきなさいよ」

と自分で自分をはげまして今井さんのいう

ことを聞きもらすまいと耳をすましました。

(未完)

△日本版▽

頒価 一〇〇〇円(送共) 略号〔美5〕

モデル……………美木乃々子……………山原清子

待望のグラビヤ印刷によるアート紙の「刑罰拷問写真集」成る

映画紙焼付による分譲品として美木乃々子嬢出演の『日本拷問刑罰集』並に山原清子嬢出演の『入墨女賊拷問刑罰集』の二集をキヤビネ判にて企画分譲しましたところ、熱心な女性拷問刑罰ファンの方々から、いち早く多数のお申込みを頂き迫力ある八刑罰写真集として好評を賜りました。その頃よりアート紙に對するグラビヤ印刷の「女性拷問刑罰写真集」の刊行を強く要望されました。ここにアルバム「美しき縛しめ」限定版写真集の一巻として、前記映画紙焼付の写真集とは全く異なる観点から35ミ

リカメラにて撮影した写真（従つて内容も全然違います）を「日本版」「西洋版」と二種に分け、今回は美木乃々子、山原清子二嬢による「日本版」を△美しき縛しめ▽（第五集）として刊行いたしました。

純白の特アート紙に対する極めて鮮明なグラビヤ印刷による迫力のある写真集を是非お残め下さい。七十四葉の△女性拷問▽写真がぎっしりと全紙面を埋めてファンの方々の御一見を得っております。売切れになりますと絶対に入手できません。どうか未見の方は今すぐお申込み願います。

(一般書店にては一切販売いたしておりません。限定版発行につき、直接発行所へお申込み下さい。御送金次第直ちに発送いたします)

(刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集)

○木馬責にあつて苦悶する女囚△一葉▽（美木乃々子）○白州の上で非人の颯りものになる女囚△連続四葉▽（美木乃々子）○牢内にて折檻を受ける女囚——海老縛りと答打ち。△連続四葉▽（美木乃々子）○非人に縛り上げられる哀れな女囚△連続十二葉▽（美木乃々子）○海老責めに放置され全身蒼白となった女囚△二葉▽（美木乃々子）○非人に不浄縄を掛けられいたぶられる女囚△二葉▽（美木乃々子）○荒蕪の上にて荒縄の緊縛に泣き悶える女囚△連続八葉▽（美木乃々子）○算盤責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する女囚△四葉▽（美木乃々子）○荒縄で乳房もくびれるまで縛られた女囚△三葉▽（美木乃々子）○土壇で胴斬りにされる死罪の女囚△四葉▽（美木乃々子）○算盤責めと石抱きの拷問△四葉▽（美木乃々子）○囚衣を剥がされ竹のささらで打たれる女囚△四葉▽（美木乃々子）○刺青を晒して木馬責にあう女囚△三葉▽（山原清子）○海老縛りでムチ打ちに喘ぐ女囚△四葉▽（山原清子）○海老責に苦悶する女囚△四葉▽（山原清子）○竹の棒にて折檻される女囚△三葉▽（山原清子）○全裸にて白洲に股間縛りにあう刺青の女囚△六葉▽（山原清子）○礫台に括られた人墨姐御△一葉▽（山原清子）○足首を上にして逆さ吊りにされた女囚△一葉▽（山原清子）

以上合計七十四葉

ポケット・ブックに発見した

M的小説クライマックス紹介

河津安春

一、押えきれぬ欲望

シャーリイと呼ぶ娼婦の許へ、小男のロスが足繁く通って来る。ロスは母性コンプレックスでシャーリイの部屋では幼児にかえる。ママと呼び、乳房に戯れ、時には彼女に叱りつけられて喜んでいる。

……シャーリイは笑いながら言った。

「もう、こんな事は止めるわよ。ママなんて呼ばないでよ」

欲望に目の眩みそうになったロスは、夢中で彼女の乳房に触れようと手を差し延べた。

「酷いよ、酷いよ。触らせておくれよ」

「よくお聞き、チビさん。暴れたって駄目。私の方が強いんだから——」

「シャーリイ、お願いだ。シャーリイ」

「駄目！今日は、もうお終い！」

「シャーリイ、どうして俺を虐めるんだ。俺のことは良く知っているくせに」

シャーリイはキモナを肩から滑らせた。美しい裸身を見せつけながら、彼の顔を両手に挟み胸許に引き寄せた。小男はもがき、舌を延ばして乳房にキスしようとしたが、彼女の両手はしっかりと彼の両耳を握り、一寸の間隔をおいて近寄せなかった。

「アラッ！すごい息づかいね。そんなに欲しいの？」

「欲しい、欲しい、欲しいよ！」

「気の毒ね」

「シャーリイ、お願い。お願いだ」

「あんたはノーティボーイだから、罰を受けるのよ」

「お願いだ。これ以上虐じめないでくれ」

「いやよ。虐じめてやるわ。真実に虐じめて

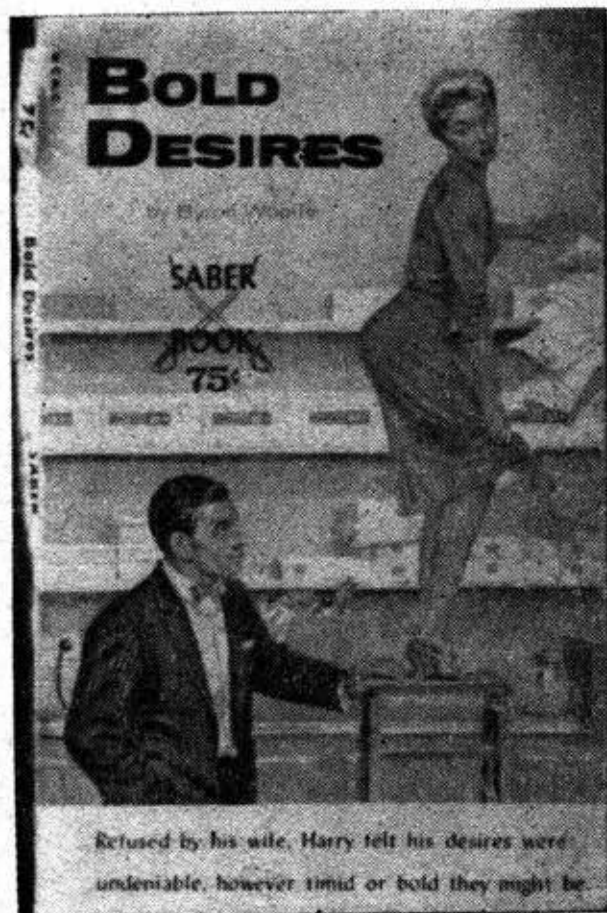
やるわ。チツチャイいたちさん。あんたは私が思うように自由に出来る、たった一人の男子。今夜は男い切り油汗を流させてやるわ。これ迄味わったこともない程、ひどくね」

彼女はソファに気ままな姿勢で横になり、膝を立てた。キモナは滑り落ちて、円い太股が露わになった。

「考えるだけでも面白いわ。私のために、お前がどれ程苦しむかと思うとね。お前はこの実験に一番恰好な男よ。力でも私の方が強いんだもの。お前は私が許してやること以外には何んにも出来ないのよ」

彼女は手を延ばして、掌で彼の目と口を押えた。彼は口を半ば開き、甘い香りに鼻をくすぐられ、失心しそうであった。彼女は更に指を口の中に差し入れ、彼の舌を弄んだ。

男はもう半狂乱になっていた。



押えきれぬ欲望

「ああ、面白い」

彼女はクルリと横になると、もう一方の手で、うっとりとしている彼の顔を弄んだ。突然、彼女は手を離れた。これはもうロスには堪え得る限界を越えた。狂暴に身をもがき、乳房に近づこうとしたが、又、両耳はしっかりと握られていた。

「どれ程欲しがっているのか、言って御覧」

「凄く、物凄く欲しいんだ」

「触らせてくれ、お願い。お願いだ」

「じゃ、どれ程欲しいのか、言って御覧なさいよ」

「オウッ！シャーリー、お願いだ」

「私の乳房、奇麗だと思う？」

「奇麗だよ。奇麗だと思うよ」

「どんなに奇麗だか言って見なさいよ」

「この世で、一番豪華な乳房だ。一番美しい胸だ。今迄に見たことも無い程、素晴らしい乳房。シャーリー。さあ、触らせておくれ」

「ロス坊や、あんまり夢中になって、噛まないうようにしてよ。誓うよ」

彼女はようやく彼の顔を胸許すれすれに迄近寄せた。彼は口を突き出し、舌が飛出すようだった。然し、彼女は舌に触れさせなかった。彼は更に舌を延ばした。笑いながら、彼女は一寸舌を乳首に触れさせた。彼は真つ赤だった。然し一瞬で又、引き離された。彼は

はみじめさに泣きそうだった。

「ロス、もうそろそろ帰ったらどう？」

彼は何か言いたそうにしたが、喉がカラカラになって声も出なかった。

「帰らないの？ エッ、そうだろうね。お前は男じゃなくて、ノーティボーイなんだからね。そうだママはノーティボーイを罰しなくちゃ……」

「ウウウ……」

彼は咳きこんだ。声はまるで動物のようだった。

彼女の笑い声が室中に響き渡った。

今度は、彼の舌がシャーリーの手に握られていた。ロスはガアガアと呻き声を挙げていたが、彼の目は恐怖に満たされていた。彼女は嘲笑しながら彼の顔を見下した。彼の両手は彼女の手首をつかまえていたが、どうすることも出来なかった。一寸でも力を入れれば彼の舌は更に引き伸ばされるのだ。彼女は彼のみじめさを見て、その不思議な快感に酔って来た。

「サア、舌をつき出すと、どんな罰をくうかよく教えてやるよ」

彼は何も言えなかった。まるで罠にかかった子鼠のような顔だった。事実、彼の舌を握って、彼女はまるで生まれたての赤ん坊のよう

に彼を縛った。

彼女は腕を上げて、室の中を引き廻した。

「面白い顔をして、ホホホ……」

彼女は一寸手でこずいた。彼は殆んど倒れそうになったが、漸く立ち直った。倒れれば彼の舌が抜けてしまいうだろう。大粒の涙が彼の頬を流れた。

やっと彼女は手を離し、又ソファに横にな

った。煙草に火をつけ、クスクス含み笑いをしながら、床に延びている男を見、それから男の舌を握って、引きずり廻した自分の手を見た。笑いながら、膝を立てて、キモナが美しい太股を滑るのを見た。彼女は手で太股をピチャピチャとたたいた。

やっと床に膝を立てたロスは彼女の方を向いた。

「シャーリィ。どうして、こんな酷いことをするんだ？」

「何故って、私がそうしたいからよ。もし行儀が悪かったら、又してやるわ」

「お前は俺を虐め始めるのが面白いようだな」

彼女は彼を見ながら、ゆっくりと自分の裸身を、両手で滑らせた。乳房を弄びながら、猫が鼠を玩具にするように彼を見た。彼女が与えた苦痛を忍びながら、彼の顔には、又欲望の影が現われて来た。

唇を舐めながら、彼の目は彼女の手の動きを追っていた。小さなバラ色の乳首は、彼にキスを命じているようだった。

魅せられたように、ロスは膝でヨチヨチと進みソファに近づいた。シャーリィは、こみ上げてくる快楽に身を任せながら、彼を見詰めていた。

辛抱し切れなくなったロスは、猛烈な勢いで飛びかかり、もう少しで彼女の乳房に触れる所で、又、両耳を彼女に握られた。今度は彼も一生懸命だった。気の狂った猫のような呻き声をあげて、もがいた。シャーリィは、柔く微笑みながら、ソツと目を閉じた。手はしっかりと彼の耳を握り、胸より離しながら彼の呻き声、願いの言葉を聞いていた。素晴らしいわ。男をこんなに夢中にさせるなんて。それに虐めてやればやる程、余計夢中になるんだもの。そうだ今夜は一晚中、こいつと遊んでやろう。

その時、電話のベルが鳴った。彼女はロスを突き離して、電話に歩み寄った。ロスは四つ這いになったまま、彼女の後を追ひ、脚に抱きつこうとした。彼女は笑いながら、身軽に彼の手を避けた。電話はホテルのベルボーイだった。

「今夜はもう駄目よ。今、とても面白いことをしているんだから」

「一体、何をしているんだい？」

彼女は脚に抱きついて、気狂いのようにキスしているロスを見下した。手をロスの頭に乘せて、「お止め！くすぐったいじゃないの。お止めたら」と言った

「ロスが何をしているんだい？」

好奇心にかられたベルボーイが聞いた。

「聞いたら吃驚りするわよ」

彼女は受話器を掛けると、又彼の耳をつかんだ。

「そうはさせないわよ。お止め」

未だ脚に抱きついてロスを押しのけて彼女はキモナの帯紐を解いた。ロスは飢えた野良犬のように四つ這いのまま、彼女の後ろにつきまとうていた。振り向いた彼女は、ロスを上から床に押しつぶした。

「何をするんだい。何をしようてんだい」

「遊び易い、いいことを思いついたの」

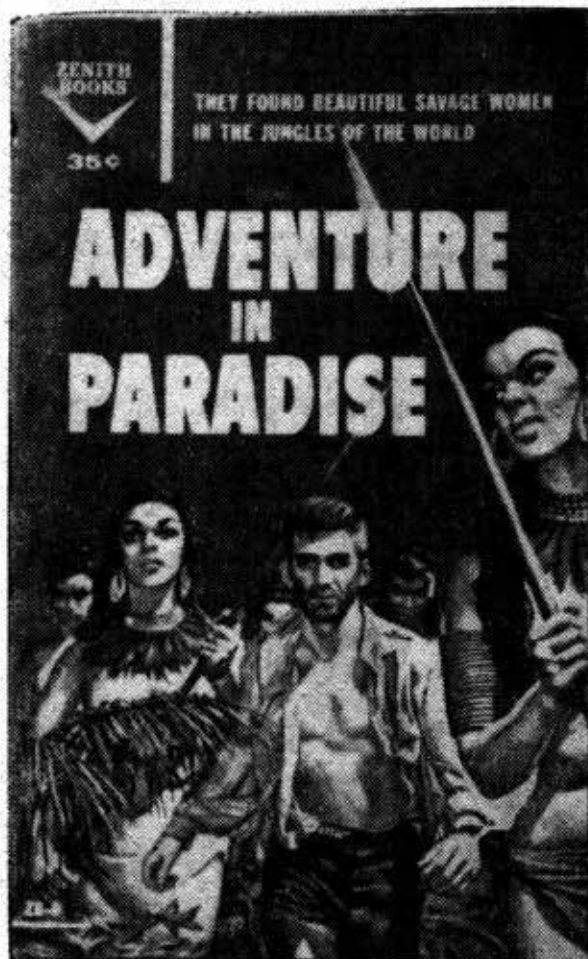
彼女は笑いながら、彼の両手を背中にねじ上げて、紐で縛り上げた。

「シャーリィ。酷いことを、しないでくださいよ。ね、シャーリィ」

「お前が私の足を引っ搔くからよ。こうすると、やり易いわ。少くとも、私にはね。お前はどうか知らないけど」

彼女は彼の上から立ち上った。ロスはゴロリと様に転がると、ようやく床に座った。腕を背中縛られていて、座るのは仲々大仕事だった。

シャーリィは一步後へ退がると、笑いなが



楽園の冒険

「紐をといてくれ。どうして、こんな事をするんだい？」

「今に判るわよ、チビさん」

彼女は彼の側に膝をついて、胸を彼の目の前につき出した。彼の顔が又、欲情に溢れてくるのが判った。彼は身を屈めて乳房に近付こうとしたが、彼女は片手で肩を押し、もう一方の手で彼の唇を軽く打った。これで又々彼は気狂い猫になった。

彼女は、カーペットに引っくり返って笑った。彼女がソファに戻ると、ロスは一生涯懸命に膝でにじり寄って来た。もう声も出ない位興奮していた。まるで意志を失った人形のよう

うに彼女につきまとった。然し彼女は未だ許さなかった。この楽しみは、余りにも大きかった。

「そら御覧よ。こんなは簡単に、お前を取り扱えるわよ」

彼女は片手で彼の額を支え、片手は彼の舌を玩具にしていた。

遊びにあきた彼女はベッドに上り、掛布をはねのけると、美しい裸身を横たえた。ロスはヨチヨチとベッドにたどりついたが、彼女はベッドの端の方へ身体を避けた。

ロスはヨロヨロと立ち上ると、ベッドの上に身体を投げかけた。彼女は素速く掛布を二人の上に引き上げた。顔を掛布の上に出し、

彼女は期待に身を震わせた。

アア擦った。こんな面白いことであるかしら。何故もっと早く、これを思いつかなかったのだろう。

彼女は今度は笑い出した。思わず手が口を覆う程、その声は高かった。

△註▽これは「セイバーブック」の中の一冊である。日本では余り見かけないが、アメ

リカには随分この種の文庫が多いようだ。他に「モナーク」、「ヴェガ」、「パラゴン」等々根気よく探すと、進駐軍の払下品の中に見出すかも知れない。「ヴェガ」などは、巻末十数頁に亘り、アメリカ最高裁判所で無罪の判決を受けたことを詳細に報告している。この「押え切れぬ欲望」はシチュエーションはともかくとして、男を虐める女の気持が割合によく描かれていて、私には面白かった。

二、楽園の冒険

これは四編の冒険小説から成っていて、ここに紹介するのはその中の一つ、「私は蛮族の白人女王の奴隷であった」である。

スペインの美しい女性人類学者が南米奥地を調査中、アカラ・インディオ族に捕えらる。この部族は太古の母権社会の生態を未だに保ち続けている。女性学者はその美しさの故に、忽ち彼等の女王となる。アメリカの青年植物学者が数年後、その地方の調査に出かけるが、罠にかかって捕えられる。獣を捕える罠ではなく、人間を捕える罠である。更に詳しく言えば、さきの女王、ルイザ・モンテスの命により、迷いこんで来る白人男性を捕えるための罠である。

——土人達は私をまるで動物のように、手足を一つにして縛り上げ、それに丸太棒を通してかつぎ上げた。余りの苦痛に私は失神してしまった。……

気がつくとは私は地面に転がされていた。手足は未だ縛られたままだ。頭上で人の話し声がするが、痛さのため身動きも出来ない。その時、目の前に、日焼けしてはいるが、スラリとした美しい脚が二本近付いて来た。足にはサンダルを履いていた。

「一体何を連れて来たの？フェリペ」

サンダルを履いた美しい足は邪慳に私の頭を蹴りつけた。彼女の命により、縛しめは解かれたが、二人のアカラ土人がしっかりと私の両腕を抱えていた。女を見て私は驚いた。

実に美しかった。文明社会の青い目のブロンドなどというようなものではない。彼女には敏捷な野性の猫を思わせるような雰囲気があった。目は明るいブルーで確固たる決断力を示していた。口は大きく官能的だった。着ているものは、簡単なりネンのような布で、片方の肩に金のピンで止めてあり細い腰には、豹の皮のベルトが巻かれていた。裾は太股の半ばまでで、私はこの女は自分の美しさを引立てることを知っているデザインの人材だと

思った。……

その夜、彼は、部落の儀式を女王の足許に座って見物する。それは一人の白人の男を殺す儀式だった。女王の今日迄の恋人である。

それは、新しいペットが女王の手に入ったことを示すものだ。更に、今一つの殺人が行われる。

……一組の男女が女王に近づいた。女は手に小さな盃を持っている。

「お飲み！」

女王は命じた。

男は女の手から盃をとり、一瞬、たじろいだが、グッと一息に飲み干した。

「跪け！」

「額を地につけよ！」

女王の厳しい命令が次々と下された。

女は跪いた男の側に行くと、足を挙げて、男の首根っ子をグッと踏みつけた。

「お前の男は、お前の言いなりになる奴隷になった、再びお前の男にするか、或いは奴隷として使用するか、自由に選べ！」

「厭です。女王様。この男には真実にあきあきしました。新しい男を探すことを、お許し下さい」……

男の運命は決り、人喰蟻の塚に追いやられ

る。青年は女王の残酷さに堪え切れず、逃亡の計画を立てるが、事前に女王はそれを察知して、遂に青年は女王のペットから、奴隷の地位に落される。

……最初の夜、見せられた儀式のように、青年は女王の前に引き出された。女王は王座から立ち上ると、盃を私に差し出し、命じた。

「お飲み！」

私はジッと女王の顔を見詰めたが、毛程の変化も見られなかった。私は盃を手にとって周りを見廻したが、大勢の土人が広く取り囲んでいて、逃亡は不可能だった。

大きく息を吸って私は一息に飲み干した。

効果は徐々ではあるが、確実に効目を現わして行った。最初は酒に酔ったようになり、気が出来なくなっていた。誰かが、私の代りに考えてくれないかなと、思い始めた。

「跪け！」

「額を地につけよ！」

厳しい女王の命令が下された。私は唯々として命に従った。サンダルを履いた足が、無慈悲に私の首を踏みつけた。

「お前は奴隷だ。私の命令には、絶対に服従せよ」



ジョイ・キラー

／＼註この小説は、アメリカの黄雑誌、メンに掲載された事もある。メン・メンズマガジン、メン・オンリーなどの雑誌を見ると、驚く程、同じような趣向の小説が見られる。南海の離島で、一人の美しい女、或は多数

女王の足で首を踏みつけられながら、不思議な安心感が私を満たして来た。これで良いのだ。俺はもう何も考えなくてもいいのだ。女王がその代りに命令を下してくれる。そして翌日から、私は毎朝、女王の家に呼びつけられ、女王の命に従って、彼女のサンダルを奇麗にし、石油ランプを掃除し、薪づくりに精を出した。……

の美しい女達によって、ギニア・ピッグとして取り扱われることは、アメリカ青年の一つの夢ではないかと思う程である。

前記の盃の中味は、人間の意志を奪う麻薬である。母権社会の安定のために、昔から部落の女達はそれを男に与えていたのだ。

三、ジョイ・キラー

題名は幸福を破壊する者の意味で、主人公の青年の仇名である。彼は田舎牧師の息子で、道学者振って、友人達に忠告を与えるため、この仇名がつけられた。

彼にもベビイと呼ぶ恋人があるが、男女間のセックスには、第一ラウンド、単純なキス。第二ラウンド、全身へのキス。第三ラウンド、最後のセックスと別けて、結婚する迄は、第一ラウンド以上に進んではならないと言う彼の主張に、彼女は非常に不満である。偶々、彼に酒を飲ませると完全に意志を失ない、喜んで第二ラウンドのサービスを行う事を発見する。しかも彼は全然それを記憶していない。彼はカレッジを中退して、海軍に水夫見習として入隊する

ことになり、彼女は海軍将校養成所に入学、情報掛将校として彼の隊に赴任して来る。入隊前に二人は結婚する。

……俺は一四九号室の床を磨くよう命令を受け、ブラッシュとワックスを持って急いだ。それは情報掛将校の室だった。そしてそこに婦人将校服に身を包んだベビイを見た時俺は思わず「ベビイ！」と呼んで抱こうとした。然し彼女は冷静だった。

「手を下してよ、キラー。見えるわよ」隣室は新聞記者室で壁の上部三分の一は硝子窓になっていた。

「キラー、二人の結婚は秘密にしてあるの。だから、ゴタゴタを起さないよう気をつけてね」

「心にかけてくれて有難うよ。それじゃ俺は何をすればいいんだい。ここに立ってお話をするのかい？」

「飛んでもない。キラー、あんたはここへ、デッキを磨きに来たのよ。早く仕事にとりかかった方が良いわ」

「デッキだなんて下品な兵隊言葉を、お前の口から聞きたくないよ。床だよ」

「デッキだよ」

ベビイの声は、これ迄聞いたこともない威

敵に満ちていた。

「水夫見習、お前は、これから直ぐ仕事にかかるのよ」

「いいよ。仕事にかかるよ。だがその前にここに膝をついて、お前のキラーにキッスしてくれる。な、いいだろう」

彼女は近付いて、床に膝をついている俺を見下した。彼女はスカートを引上げて、ガーターを直す振りをしながら言った。

「ここならいいわ。第一のキッスは右脚のストッキングとパンティの間」

俺は命令通りにキッスをした。

「今度はこちらの脚よ、キラー」

再び俺は命令に従った。膚は柔くて、冷た

かった。キッスをしていると、黒いパンティのレースのひだが、俺の額を擦ぐり、彼女の甘いコロンの香りが快かった。

「アア、ベビィ。よし、俺はこれから床を磨くよ」

「デッキよ」

彼女は一步退ると言った。

「サア、こちらへ来て、私の机の下を見て頂戴。靴の傷痕で一杯よ」

「お前は一体俺を何だと思ってるんだい」

「水夫見習と知っているわ。そして私は士官

よ。私はあんたに命令する士官よ」

「判ったよ。磨くよ。イエス・アダム。イエス・サアの積りだよ。海軍じやアイアイ・サア」と言うがね」

「そう言っただけでも変じや無いわ。さあ、私の足を置く所をよく磨いてよ」

俺は狭い机の下に、はいりこんだ。一心に磨いていると、何か俺をグイグイと押して来た。俺は壁に押しつけられて、首も曲げられない狭い所でもがいた。俺を押しつけているのはベビィの膝だった。苦勞をして漸く向きを変えたが、ベビィは椅子を持ってきて座りこんでいるのだった。彼女の膝は俺の顔にくっつきそうだった。

「オイ、何を思いついたんだ。出してくれよ」

「騒がないで——」

「いいよ。だが仕事の邪魔をしないでくれ。

俺がこの下にいるのに、座りこむなんて、何の積りだい」

返事の代りに、彼女は両膝を拡げると更に椅子を前に引き寄せた。俺は彼女の膝で顔を挟まれ、動くことも出来なくなった。どうやら彼女は腰かける前に、パンティも脱いだらかった。

「素敵な機会だわ。第二ラウンドよ」

「厭だ。第三ラウンドなら話は別だが。サア俺をここから出してくれ」

彼女はクスクス笑い出した。

「あんたが喋ると、擦りたいの、もっと何か言ってよ」

遂に俺は勘忍袋の緒を切った。

「これが最後だぞ、ベビィ。今直ぐに俺を、ここから出してくれ。さもないと……」

俺はどなるのを止めた。何故って、ベビィが又、クスクス笑い出したからだ。俺のこの怒りの言葉も、彼女をただ擦ったくさせるだけなのだ。

俺は黙って座ることにした。そのうちに出してくれるだろう。

「キラー、そこに居るの？」

「どこへ行けると思ってるんだい」

又、彼女はクスクス笑った。

「何か、もっと言って」

「厭だ。ここから出してくれ」

「私は、あんたが要るの。サア、良い子だから、ラウンド2」

「厭だ」

彼女は両膝で柔く締めつけて来た。滑かな膚は、私の耳から、頬からゆらめく炎をかき

起すようだった。

負けないぞ。こんな誘惑に負けるのは罪悪だ。時間が過ぎて、俺は段々疲れて来た。誘惑に打ち負けそうになった時、ノックの音がして誰かが部屋に入ってきた。

「私はホワード中尉です。ホールの向う側に居ます。我々は隣人です」

男の声だった。

「マア素晴らしいわ。どうぞお座り下さい」

ベビィは甘ったるい声で言った。俺には彼女の太股で、ブルブル震えるのが見えた。俺がこの部屋に来た時も、こんなに震えたのだろうか。

二人の長いお喋りが始まった。俺は怒りに震えながら窮屈な恰好で座っていた。遂に、俺は彼女の太股に噛みついた。……

彼女は将校だから街に部屋を借りて、部隊へ通勤することになり、キラーは彼女の当番兵となる。彼女の部屋で、キラーは第三ラウンドを要求して、暴力を振おうとする。

「水夫見習、お前は身分を忘れたの？それが将校に言う言葉かい？」

「海軍なんか、くそ喰えだ」

俺は彼女に迫って行った。彼女はテーブルの廻りをグルグルと逃げた。

「海軍士官に暴行するなんて、許し難い罪悪よ。止めなさい、止めなさいと……」

「止めなきやあ、どうしようってんだ」

俺は飛びかかって、抱きすくめた。

「こうよ！」

彼女は膝で俺の股間を力一杯蹴り上げた。

余りの痛さに思わず呻き声をあげて、俺はうずくまった。ベビィは俺の手をねじ上げるとベッドの上に押えつけた。そして俺のシャツを引きちぎり、手足を縛って四本のベッドの柱につないだ。俺は女のするままになっていった。まあいいや。縛ったって、直ぐに自由になれるだろう。ベビィが縛れるのは、靴の紐位のものだ。

俺は手足をつっぱって、紐をゆるめようとしたが、どうした事かビクともしなかった。俺は又、全力を尽してもがいたが、駄目だった。ベビィは面白そうに笑いながら、俺がもがくのを見ていた。

「私は今、海軍々人だという事を忘れたの？この結び方は海軍で習ったの。絶対にあんたには解けないわ。百年かかってね」

「卑怯者め。股を蹴り上げるなんて、汚ない手だ。どこでそんな事を習った……。ああそうか。海軍だな。何だって、俺をこんな目に

あわせるんだ」

「軍務に服している婦人将校の名誉を守るためによ」

こう言いながら、ベビィは残っている衣類を全部俺から剥ぎとった。

「俺の背中に乗っかるな」

「背中になんか乗らないわ。だけど直ぐに裸かになって、あんたの胸に乗る積りよ」

やがて彼女は俺の上に身を投げかけると、俺の首を抱いて猛烈なキッスをした

そうか。そうだったのか。彼女は上になりたいんだ。優越者の気分を味わいたいの。俺は今迄、女に厳しくし過ぎたんだ。しばらくは女をボスにしてやろう。男は気が大きいんだ。俺はだんだん快い気持ちになってきた。

「一ラウンドを、このままやりたい？」

「いいよ、ベビィ。だけど苦しいよ。お前が裸かでこうして俺の上にいると、苦痛と快楽が一緒にくるようだ。お前の膚は滑かだし、気が遠くなる程、お前の身体は重いて、熱いキッスをして、手で愛撫してくれるし、ただ残念なのは、俺が可愛いお前を腕に抱けない事だ」

「おう、とんでもない。巧いことをいって、紐を解かせようとしているのね」

俺は興奮して叫んだ。

「ベビィ。頼むから、第三ラウンドに入ってくれ」

「駄目よ。服務期間が未だ一年半あるわ。その間は絶対に駄目。どう、キラー？こんなに近くにいて、何にもする事が出来ないって、どんな気持？ホラ、私の乳房とあんたのところがタッチしているわ。擦りたい？」

「俺は身体中が燃え上るようだ。これ迄の事は俺が悪かった。詫るよ。な、だからベビィ何とかしてくれよ、ベビィ」

「よく見てよ、キラー。私の身体を美しいと思う？」

彼女は身を起すと、俺の胸の上に跨った。

彼女の全重量が俺の胸の上に乗った。彼女の両脚は温かく俺の頬を撫でた。手は俺の髪をまさぐった。

「美しいよ。この世の中で、一番深い青い目だ」

目は遙かその上にあった。小さな洞窟のある腹、豊かな胸、そして遙かその上に、青い目が俺を見下していた。

何か本で見たな。

見よ、ここに青く冷たき湖がある。この蓮の花咲く地に眠れ。小麦色の穂はゆれつつ近

付き、汝をその豊満な重みに押しひしがん。

そこに泉あり。飽くこと無き接吻により、甘き蜜を引出し得べし、只余りに急ぐことなかれ、泉のネクターは枯れること無ければ」

俺は夢見る心地だった。青い目に吸いこまれるような感じだった。

突然ベビィは、身体を次第に前方にずらせ

て来た。

「止める、ベビィ！ 止め……ム、ムムム」

「止めないわ」

彼女は優しく言った。

「抗うのはお止めなさい。とても私には勝てないわ。云うことを聞かないと……」

「どうするんだい？」

「シャンペンよ、抵抗するのを止めないと、

シャンペンを注文するわ」

彼女は思い出したように笑い出した。

「それだけは止めてくれ。勘忍して……。ムムム……」

彼女は更に身体を前に進めて、俺の口を塞ぐと、ベッドサイドの電話をとり上げた。

「さてと、……私はこのまま座っていて、ベ

ルボーイがシャンペンを持って来た時に、あ

んたの呻き声で彼を怖がらせないようにしなければね。私も少しシャンペンを飲もうか

な。あんたのためのシャンペンだけど、構わない？ 勿論チョッピリよ。後は全部あんたに飲ませるわ」

「ムムムム……」

彼女はベッドテーブルの上のヘアブラッ

シュを取り上げてあて始めた。

「ムムムムム……」

「シーッ」

彼女は腰をずらして完全に私の呻きを抑え

た。ボーイがシャンペンを扉の内側に置いて

帰って行ったのだ。

彼女は立上るとシーツの端を俺の口に押しこんで出ていった。直ぐにシャンペンの瓶を持って帰ってくると、又、俺の上に跨った。

「グラスなんか、要らないわね。ああ、結婚

の夜以来だわ。あの晩、あんたはシャンペンに酔って素敵だったわ、私これから毎日、あんたにシャンペンを飲ませようと思うの。そうすれば、あんたは鹿爪らしいことは、何も言わなくなるものね」

彼女は瓶を俺の口にあてて、シャンペンを流しこんだ。

「アラ、マダ少し残っているわ。私が飲んでもいい？ キラー」

俺が文句を言いかけると、彼女は腰を一寸

ずらせて俺の口を塞いだ。

「ムムム……」

「キラ、可愛い人。あんたムムム……と言う以外、何にも喋れないの?」

「ムムム」

「そうだね、今は何にも言えないわね。だけれどシヤンペンが廻ってくると、他の事が言

えるようになるわ。そうよ、素晴らしい、甘い言葉をね。もうしばらくよ。それ迄私はこのまま座っているわ。酒が回って来たのが、どうして判ると思う?キラ。このまま動かずに、じっとしていても判るのよ」

「ムムム……」

「アア、キラ。擦ったいわ。始めだけよ、

この擦ったいのも」
「ムムムム……」

△註▽これはベガブックの中の一冊です。キラは未だ未だ酷い目にあります。ベビイが男をつくるからです。余り長くなるので、この辺でペンを置きます。

「浣腸フォト新版」

△山原清子が無類の浣腸マニア東浦ひかるに施す力作浣腸写真▽

○浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円

略号(かね)

○百CCの溶液注入

大手札六枚一組 一〇〇〇円

略号(かと)

○グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円

略号(かて)

○シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円

略号(かた)

○イルリガートル

嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円

略号(かち)

○アーヌス浣腸帮助

大手札四枚一組 七〇〇円

略号(かの)

○イルリガートルの浣腸

大手札十枚一組 一五〇〇円

略号(かも)

○オシメを着用させる

大手札六枚一組 一〇〇〇円

略号(むし)

○ゴム製カバー着用

大手札六枚一組 一〇〇〇円

略号(むに)

「女相撲と女斗美写真」

△湖畔女相撲(第一回)▽

モデル 大塚啓子、東浦ひかる

「第一組」 略号(すや)

大手札印画紙焼付

二十枚一組 二五〇〇円

「第二組」 略号(すゆ)

大手札印画紙焼付

二十枚一組 二五〇〇円

「第三組」 略号(すよ)

大手札印画紙焼付

二十枚一組 二五〇〇円

△女斗美場面写真▽

「砂浜での格闘」

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

略号(すえ)

「叢で止めをさす」

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

略号(すう)

「松林の中での死斗」

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

略号(すき)

「責めフォト新版」

○全裸強烈縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(なの)

○猿ぐつわにあえぐ

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(なむ)

○真紅の腰巻をする

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(なれ)

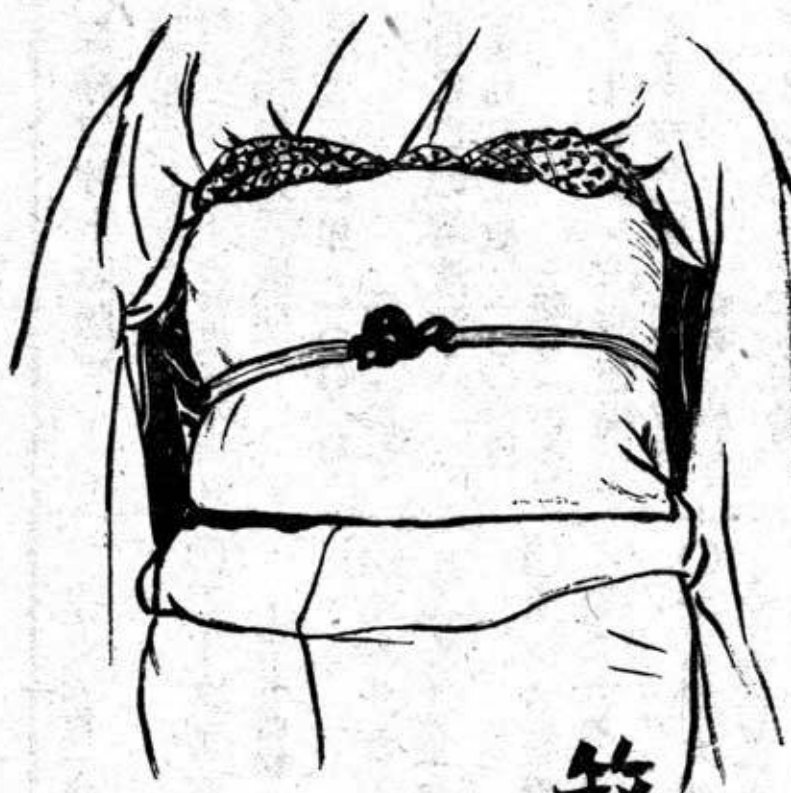
○膨大な臀部責め

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(なに)

漫筆

帯の魅力



牧高志

文重



通常きものに締める『帯』というものは、心理的にもまた或る時は明確に表型的には女体を自縛するものである（と私は見ている）
 処で問題は、この帯が、どのあたりで身体に巻きつけられるかということである。

非常に面白いことに最も封建的だと云われ

置の変わり方が最高頂に達したのは明治から大正になったその末期、すなわち大正十四・五年頃ではないかと思う。

現在の松竹映画がまだ「蒲田作品」と云われた頃、トップスターであった栗島すみ子を始めとし松井千枝子、川田芳子、東栄子と云

た明治時代には帯が緩く、しかもどちらかと云えば腰から下の方に締められる傾向があった。この傾向は

明治につながる安政年間から一幽斎広重が描く浮世絵を見ても長い間女体を支配したが、

日清日露の戦争を経てわが国が次第に近代国家へと脱皮して行くにつれて形態が変わり、締められる位置がまた変わったのである。しかもこの位

った女優連は今でも当時の機関誌である映画雑誌「蒲田」「松竹」などをひっぱり出してみると、残酷な程に帯を胸高に——つまり肌の両乳房を完全に押しつぶし、もうこれ以上あがらぬギリギリの線に帯を巻きつけて、しかも派手な帯揚げを巾広ろく拡ろげて結んだ写真が載っている。

この頃は何か映画スターばかりではない。大阪で発行された某新聞欄にもダンス嬢の服装と題して次のようなことが書いてある。

△近頃のダンス嬢（ダンサー）とは書いていない）は何故か下着というものは一切つけずシユミーズの上にじかに強烈な無地の錦紗を着る。そして必ずと云ってよい位黒の無地の帯を背中の方へ高く、しかも垂れを極く上にして締め、赤い背負上げをその上に思い切って拡ろげて結んでいる。この黒の無地の帯が選ばれた理由は踊る時脂臭い男の手が掛って汚れるのを前もって予測したことであり、また赤い帯揚げは喪色然としたじみな黒色に反駁して少しでも派手に構えようとした心根からであろう。ただ時勢とは云え（当時は第一次世界大戦も終って平和かつ退屈過ぎるような世の中であった）帯をより高く胸高に締めれば当然下半身は無防備極まる下腹部がさらけ

出ること位は判ってる癖に：V云々。と云った具合である。

前にも引用したことがあるが、この半ば畸形にも等しい女の姿態は、漫画の材料にもなると見えて大正の末期から昭和の初めにかけて、主婦の友社おかかえの漫画記者であった田中比左良画伯が好んで描きまくったものである。氏の著作である「女性美建立」を初めとし漫彫「娘の重宝」「大正婦人の形と色と言葉」そして小柄な氏自らから女装して踊った「エプロンねえちゃん」などの一連はすべて極端な胸高帯なのである。

さて、こうまで胸高に締めた帯に対する魅力とは一体何なのであるか？……と開き直おられて一寸その確答はむずかしいのでないかと思う。女体を飾るものでなく冒頭の如く緊縛するものである。という点から云えば第三者は極めてサジスチックに眺めるであろうし、また当の女性は多分に疼痛に似たマゾヒズムに陶酔しながら帯の感触をたのしむというのがまず序言となるであろう。

事実日本の風俗を紹介する英文の図書を見ても、あるいは直接外人に帯の意義から帯の魅力までを説明しようとしても、ただワンダフルだけではどうしようもない……それ程、否

寧ろ先方が奇々怪々なアクセサリだとせいぜい頭をかしげるのが関の山である。つまり身体の後ろではあるが、祇園の舞妓さんの如く上から下まで垂れ下ったいわゆるだらり帯の美しさは辛じて判るがお太鼓と称しふくら雀結びなどと云う帯は上半身に限られ、しかも何故あのような布の板見たいなものを宙天高く背上げなければならぬのか、それこそ正に We wonder why……なのである。

こうした帯の魅力については事は旧聞に属するが、今から三十年程前に、さる処のさる料亭での宴の折、侍った某名妓が云った言葉を憶い出す。

「膝枕をなさる、そのもう一寸上の方、つまりこの部分（と腹部をたたいて）……この何んとも云われぬ腹線美と失礼ですけど、その丁度裏側に当るこの腰線美、どちらも美しいナアとはお思いになりませんか？」

残念ながら洋装では、これ程の美しさは作れませんもの。ですからつとめて邪魔になる帯は上の方へ上の方へと結ぶのがお判りでしょう。何んと云ったって若い妓程色気が大切ですよものねえ……」

しかし芸妓の晴れの出の衣裳は今日でも胸高どころか腰下すれすれの処で締める（裾を

曳く関係で勢いこう下らざるを得ない）ことは周知のとおりである。

このようにして帯の位置だけについて云えば大正末期をピークとして再び胸下に下り始めたが昭和十年頃になると肝心なキモノの方が急ピッチで姿を消し始めたので帯も終戦後の今日になっても僅かにお正月か婚礼ないしパーティ位に限られて見られる寂しい世の中になってしまった。

確かにこう考えてみると、結果的に日本人は世にもおかしなものを発明したものだと思心する反面、徹頭徹尾、男の支配下に在って権力を無視され終生男の奴隷として扱われた女の身体をまず有形的に縛ったのがこの帯であり、魅力的だと称して気ままに帯をせりあげて何線美を玩弄しようとするに至ってはどうも相当罪が深そうである。

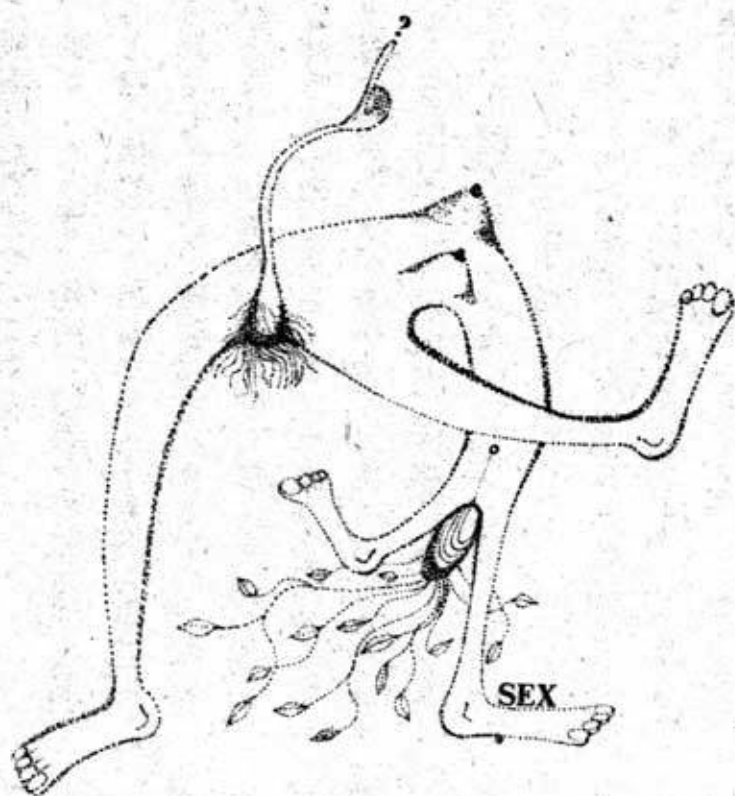
挿絵画家

募集！

○本誌の挿絵をより充実させるため、読者の方々の中から腕に自信のある方の応援を求めます。

○自作画をお送り下さい。個性的な本誌向きのカット、挿絵、口絵を求めます。

○佳作は漸次誌上に発表の上、反響の如何により逐次御依頼いたします。



＜神酒＞を酒の肴にした

酔人酔談

謹しんで芳野眉美、葉山啓、両氏

及びK誌神酒党員に捧ぐ――

木戸川 健

＜前書き＞

私は＜日本一うるさい＞神奈川県に住人である。だから＜神酒＞にはいつもごやかかいになっている。――神奈川県で造られる酒を、つまり神奈川の地酒を＜神酒＞という。神酒連（神奈川県酒造連合会）という歴した団体も、本当に在るのである。ホント。扱て、そこで、今宵（九月十二日）徒然（つれづれ）なるままに、神酒を飲み合いて、＜神酒＞の話をするも、いみじゅうこそ聞こえまほしけれ。と――題して酔人酔談。

○ 「最近のK誌は、一部作家や評論家の間でも大変わかれていますというような話を聞いたんですが、本当ですか？」
「ぼくも買っている。しかし、三百円は高いね。それだけ、発行部数が少ないという証拠でもあるんだろうが――。それに、販売ルートにも問題があるだろう」
「いや、先生、ぼくの言ってるのは、内容ですよ。どうなんですか？ 箕田編集長の行き方は――」

「同人雑誌的ね。いいんじゃないの。面白いよ。ただ、問題なのは、その同人だよ。――大阪で出してる、例の＜近代説話＞のむこうを張るぐらいの意気込みがK誌の同人にあるかどうかだ」
「近代説話のね。と、いう事は、芥川賞、直木賞を目ざせ、ということ？」
「面白いじゃないの。K誌から、そういうのが出たら。既成文壇に対する、これほど痛烈な皮肉はないものな――」
「出る可能性はありますか？」

「はっきり言って、Sの分野にはないね。しかしMの分野にはあるよ。大いにある」

「例えば、芳野眉美氏のもの——？」

「そう。大体、セックスを、真正面から扱うには、二つの行き方があるんだ。△砂の女△のように観念的に行くか、——前衛小説の話だよ——高度な△艶笑△というか、ユーモアで行く手ね」

「彼のは、後者ですね。そして、日本には前者はあっても、後者は余りない——？」

「そう。それは言えるな。——ただね、女のオシッコは、彼にとっては△神酒△かも知れないが、われわれにはやっぱりオシッコだからね。△神酒△が、われわれにも、なるほど△神酒△でなきやあいけないんだ」

「まだ、完全に昇華されていないという事ですかね」

「昇華というよりも、必然性がないんだよ、△神酒△の出て来る——。やたらに△神酒△が出て来る感じがする」

「一種の密室小説ですからね。外とのつながりが何もなく、しかも観念的なものを排除する、そこに無理があるんですよ」

「そう、その辺りが壁だろうな。そして、観念的になってしまうと、すぐ昔に返ってしま

うと、すぐ昔に返ってしまふ。だから、彼は作品の中で、わめくんだろう。わめいている事は、実は、みんな自分の事なんだ」

「そうですか。そこ迄は読めませんでした。そこで、先生！何か、彼のためにアドバイ

スはないですか？」

「アドバイスはないね。自分の事は、自分でやるんだ。しかし、暗示ならあるよ」

「マミのために、お願いします」

「こいうのは、どうなんだ。例の、安保斗争はなやかなりし頃、彼は全学連の幹部で、毎日のようにデモに出かけて、警察官と乱斗する。つまり、左翼小児病患者を彼に想定する。その彼が、ある日突然、斗志を失ってしまふんだ。何故だかわかるか——？」

「さあ？」

「その日も、警官隊と大乱斗になる。六・八事件の当日でもいいよ。彼は、ある女子大生の大きなお尻の下に、下じきになってしまふ」

「ハハア。その女子大生が、興奮の余り、オシッコをするんですね」

「そうそう。とたんに、彼の斗争心が失せて

耽美的なものに変わってしまう。——最後に彼に恍惚として叫ぶんだ。安保サンセイ、安

保サンセイ、と——」

「なるほど。△神酒△の前には、全学連の政治理念も斗争心も、ヤクダたずですか」

「もっと深い意味があるんだよ。所詮、人間は、自己の性向には勝てない」

「面白いじゃないですか。——ハガチーデモの時、実際に、羽田空港でそういう事があったらしいですね。いや、女子大生の生理的現象ですよ。警官隊に、十何時間も控え室におしこめられて、いや、本当に困ったらしいですよ」

「そうだったらいいね。だったら、なお更、事実の裏づけがある。——君、一つ書いたらどうだ」

「いや、ぼくはSの方ですから——。しかし実際、イデオロギーなんて弱いもんですからね。マルクス、レーニン主義だって、本家のソ連において、既に変質してしまっているんですから——」

「そう。だから、まして、全学連のボンボンが、△神酒△で変質したって、無理からぬわけだよ。——とに角、△神酒△になるんだよと思うがね」

「同感です。——でも、芳野氏が、いわゆる密室小説から脱け出ようとして、色々試みて、

いる事は事実ですね。——△優雅な生活▽も
そうだし、△御厠番秘聞▽もそうでしよう」
「ぼくは、△優雅な生活▽をかうね。彼のモ
チーフは現代にこそあるんだ。何も江戸時代
まで逃げる事はなからう」

「痛烈ですね」

「批評する限り、当然だよ。君にもいっとく
がね、へっぴり腰で批評しちやあいかん。そ
れは、かえって相手に失礼に当るんだ。——
そこで、△御厠番秘聞▽だけど、例によって
△神酒▽が出てくる。第一章で、將軍の房事
を監視するために、添臥を命じられた中臈お
清の方が、翌朝頭にきて、御厠番の花仙老人
に△神酒▽を飲ませて、妖気を静めるわけだ
が、常識的には、秘具を使わせるか、直接さ
せるだろうな」

「常識的にはね」

「あの場面、どうして△神酒▽が出てくるの
か——。やっぱり、必然性がないんだな。ぜ
ひ、△神酒▽でなければならぬ、という訳
じやあないんだから——。あの場面は、やは
り、常識が勝つんだよ」

「難かしい問題ですね。——ぼくだったら、
厠で、お清の方が張型を使っているところを
花仙老人にのぞかせますね」

「なるほど——。最も常識的な線だな。のぞ
いて、後、犯すかね」

「それだったら、エロ小説でしよう」

「のぞくのは、エロじやあないのかね」

「一種の芸術でしよう」

「勝手な事をいってる。——とに角、芳野氏
に苦言を呈するならば、橘行司子氏も言っ
てるじやあないの、神酒を飲みすぎて足もとふ
らふら、と。△神酒▽は彼の伝家の宝刀なん
だから、不必要に、やたらに飲んじやあだめ
だ。効かして、飲まなければね」

「でも、文章はうまいですね」

「うまいね。一種の才能だよ。努力じやあな
いんだ。特に△優雅な生活▽はよかった、何
故やめたんだろう」

「だから、ぼくは△読者通信▽で呼びかけ
んですがね。友よ、好敵手よ、フフ」

「△神酒▽といえば、七月号の葉山啓氏の、
あれはシナリオだったけれど、△いちじくの
実を持つ女▽——思わず、ウーム、とうなっ
たね」

「最後の、亡夫の墓石に、美也子未亡人がア
レをかけるところなど、まさに前衛ですね」
「あの△神酒▽は効いてるよ。ぼくは、あの
△神酒▽から三つの意味をくみ取ったんだ。

一つは、そういう性向の是認。アレで結ばれ
た夫婦の愛情。他の一つは、既成道德に対す
る、抵抗と破壊。既成道德を、墓石に象徴し
た訳だよ。墓にね。——お墓にねえ」
「もう一つは何です？」

「K誌に発表したという事さ」

「なるほど。——でも、葉山啓氏の△神酒▽
は、随分こくがありそうですね」

「そうらしいね。しかし、ケツサクだよ。ウ
ンチクを傾けて書きこんである。いや、冗談
でなく。——ただ、彼のそういう前衛精神が
シナリオという形式では、いかにも訴えるの
に弱いんだよね」

「それは言えますね。シナリオこそ、行間の
意味を読まなければ——」

「行間の意味を読めない俳優が近頃多いんだ
——。例えば、△いちじくの実を持つ女▽で
も15のシーンに、美也子が有田由紀夫に月に
一度の△神酒▽を飲ませようとして、短刀を
つきつけるところがあるよね。あの時、何故
短刀をつきつけたのか——？」

「有田が飲まなかったら、死ぬ覚悟だったん
でしょう。自分のそういう忌まわしい性向を
さらけ出したんですから。無理心中をするか
或は自殺するか——」

「そう。と、ぼくも読んだね。そうすると、あのシーンは大事だよ。美也子（美しく笑う）へさあ、どうぞV（短刀をつきつける）——死ぬ覚悟だ」

「シナリオを読むのは難かしいですね」

「作者がアクチヴな描写で行くところを、こちらは、心で受け止めなければいけないからね。シナリオは読みすぎていいんだ。作者以上で読みすぎていいんだよ」

「もう一度、へいちぢくの——Vを読んでみましょう」

「アクチヴなものを、心で受けるという事は人生に処する修練にもなるからね。何も俳優

ばかりがシナリオを読む事はないんだ」

「同感ですね。とりわけ、サラリーマンの生活は、シナリオみたいなものですかね」

「そう。そして、行間の意味をくみ取った者が出世する。本当の事だよ」

「葉山氏に対する、苦言はございませんか」

「あの一作に限っては、多分、ぼくは作者以上に読みすぎているからね。苦言はないよ。ただ、恐れ入った。熾烈な作家精神だ。——」

K誌の今年度の収穫の一つだね。とくに、最後がよかった。美事な、前衛のオチだ」

「芳野氏が、国宝の油滴天目で、マミとサクラのオシッコを飲んでみたいと思った、のと

同じ発想でしょうね」

「そう。そして、あの発想をもっと発展させれば、三島由起夫の金閣寺になるんだ」

「金閣寺を炎上させた学僧の心理ね、ぼくもそう思います」

「本当かね？ だったら君は、まるきりSではない筈だ」

「そりやあそうです。Mの部分も多少はあります。だから、へいちぢくの——Vの、美也子未亡人に池内淳子を想定したんです」

「山本富士子でなく——？」

「淡島千景までには至りません」

× × ×

△後記▽

その夜、私は生まれてはじめて△神酒▽というものを口にしてみた。はいてしまった。飲めなかった。だから、私には芳野眉美、葉

山啓両氏の世界が完全にわかっていない。

『最近の二つの問題』

——駄足ながら。

その一——いわゆる芳野文学（関東眉美節？）を批判される方々も△人間、芳野眉美▽には好感を抱いているらしい。その、人間像はどこから生じたのか？

現在在庫『本誌既刊号、特集号、限定版』案内

○臨時増刊号「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号「文献」

○限定版写真集「豊満と清楚」

女体緊縛グラフィック集
頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号「美4」

○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」日本版

頒価 一〇〇〇円 略号「美5」

○限定版写真集△緊縛美女艶姿百態▽

頒価 一〇〇〇円 略号「美6」

事更、書く必要はないけれども、多分彼の作品を通してであろう。しかし、彼の作品には、たしかに人間が書かれていない筈である。すると、△人間、芳野眉美△は、忽然と自然発生したものらしい。

私が△箕田京二△氏に人間を感じたのは、箕田京二編集長の書かれているものや、トピックスを通してである。だから、あれは小説である。読物ではない。（小説、箕田京二）△人間、芳野眉美△は、K誌に生きている。それは、彼の作品の中に自分が書かれてあったからに違いない。敵も作り、味方も作るほど、△人間、芳野眉美△が生き生きと書かれたあったからに違いない。すなわち、小説である。——リッパなものである。

芳野眉美氏、濡れにぞ濡れて小説を書け。優雅な生活の中で、太陽にむかって絶叫せよ／＼（少し、ほめすぎたかな。まあ、いいやどなたかが、お返しにけなしてくるでしょう。——それが、ウキヨというものである）

その二 玉（将）にかけても、王手というのはいかに？ 自分が公開されないで△公開状△というが如し。（？）

その逆のお話である。みだりに△私信△を公開し合って、読者サービスに満点の人々

がいる。その名を辻村隆、芳野眉美という必ずしも両氏だけではないが、とりわけ、両氏は満点である。

最初にしかけたのは芳野氏の方で、辻村氏の正体をバクロして、大分辻村氏の誤解をまねいたらしい様子だが、お返しに今度は辻村氏がやられて、芳野氏に大変感謝されている。両氏の間に前もって了解がついていたのなら、とも角、△私信△というものは、マン・ツー・マンのお手紙なのだから、みだりに△公開△すべきではなからう。（と、思うが読者のみなさん、いかが？）

だから、お手紙を出すのも、つい躊躇してしまうむきもある。

仮名だから、かまわない、という人もあるかもしれないし、返って、舞台裏がのぞけて面白いじゃあないか、という人もあるかもしれない。その通りである。ただし、第三者としては——。

少し、固い事をいすぎたかもしれないけれど、要するに程度の問題である。舞台をのぞかせるにも——九月号の△世相診断室△をお読みになって下さい。私は、そういうつもりで、あれを書いたのです。私の過ぎし想い出ではなく△やがて、それにもあきるだろ

う。その時、彼女たちは一体何をさらせばいいのだろう△。

「世相診断室」は、実は私の舞台裏である。

ともあれ、私は、K誌を愛するが故に、こういう苦言を呈するので、とりわけ、芳野眉美氏が、△濡れにぞ、濡れし△という変格エッセイの陰にかくれて、そういう事を派手にやっておられる事に、ある種の危険さえ感ずるのである。エッセイである限り、批評は結構である。どころか、大いにやるべし。彼の毒舌で、傷ついたり、頭にきたりするものは、多分、それだけ彼の批評が的確であった証明であり、批評に対しては論で応ずるべきであって、感情で答えるべきではない、と私は思う。智に働きすぎて、角をたてているところも見られるけれども、大筋として、彼の批評は的を射ている。だから、ケンイがある。

しかし、△私信△の公開や、それに近い形でのバクロは、問題である。思えば、辻村氏がバクロされたのも、△濡れにぞ、濡れし△であった。

好漢、折角の自重を望む。濡れにぞ、濡れて、小説を書け、といった意味はシンチョウである。（少し、固かったかな——）

（完）

「読む雑誌・K誌の今後を思う」



橘 行司 子

△S M時評▽をK・K時評と改題（十一月号の展望より）しても「時評」という性格上これはあくまで公的な立場よりの発言が要求される。そうでなければ意味をなさない。軍配がいつも中間を指しているのは、その故からである。この稿は時評でなく△感想▽である。木戸川氏のいつも申しているように「私」の言葉と御諒解願うものだ。特に貴重な一頁に毎回、△時評▽を掲載させて頂いているのに、別稿を持って発言したいのは、K誌の読

む雑誌としての、いっそうの本文充実を願うものだからである——。

たまたまこれを執筆しようとした時、某紙（十月九日付）に次のような文化人の発言がのっていた。

△現代では、健全な交わりの基盤となる人間への興味が失われてしまっているようにみえる。「あの人はおもしろいから」というのではなく「あの人は役に立つから」という理由でしか人と付き合わない風潮が強い。これでは

人間は荒廃していくばかりではないか▽

——私はこれを読んで、すぐ現代にはユーモアが欠けつつあることを痛感した。行過ぎたビジネス・ライク的な精神が、人間と人間との連がりまでも、機械的に化してしまう味けなさである。一見、無駄と考えられる物こそ貴重であるという夢のある世界が薄れて行くことの、それは淋しさにも通じるのだ。また木戸川氏の言葉を出させてもらうが「昔の青年は、万里の長城から小便すれば、てんでわざわざ中国へ出かけて行って、梅毒をもらって帰って来たものである。そういう素敵なバカヤローが、たくさんいた」——という話は、つまり反骨であり、ユーモアある人生を意味している。客観的に見れば実にバカバカしいことである、これが人間にとってのロマンである——そう私は思う。

実は、私がこのような感想を述べたいと思ったのは、読む雑誌・本文充実を願うという冒頭に記した底に、十一月号の△奇クサロ▽▽雑感・山本章氏の一文によって、大方執筆者・寄稿家の、あまりにも感情的な投稿が編集部に殺到し、K・K論壇ヶ原に新しい展開どころか、混戦状態になることをおそれたからである。それだけ山本氏の苦言は、今

後のK誌の方向に重要な意味をはらんでいるからだ。はじめて、私はこの稿で軍配に頼らずズバリ発言を試みたい。

K誌は△同人雑誌的▽という言葉がしばしば誌上で近頃うんぬんされる。私は、かつても今も文学同人雑誌に関係しているので私なりに見たその実態を御紹介したい。△同人▽という語感からして、すぐ限られたという先入観が生じられると思うが、本当はこれ程、自由な一般的な運営も無い。早い話、小説ETCを書きたいものは、だれでもお金を出しあって発刊できる。(プリント版が多いのがそれを裏付けられる)すでに誕生した同人誌には、同人費を出せばおほむね希望者は入会自由。また退会も自由である。(ただし、作文のような文学以前の作品は発表まで研究期間が必要だが、これはアタリ前のことである。う。)

これが、一般商業雑誌となると、芥川・直木賞ETCなどの資格付けも必要されるだろうし、機会あって原稿注文されれば、規定された原稿料が渡される。けだし、同人雑誌的という表現がK誌に評される時、自由な投稿・発表——という意味があらうと一考する。うがった見方をすれば、K誌で本来的な出版

界常識を持って、作家的待遇^{たいてい}を受けている者は幾人あるのかと、いう事だ。ここで一般的言葉による△特定▽という表現が問題視されてくるわけだ。私の見る所△気持▽というデリケートな世界はあろうが、既成事実的な作家の存在は考えられないと思う。一般誌は特定の寄稿家、作品のサシミのツマのように、たまたま受読者原稿募集をしている。K誌は△原稿募集▽は、編集のそれこそバックボーンのようなものである。これは大方マニアの知る所であろうか——。

“特定の読者や寄稿者だけのオナニーの場”と、絶対になり得ない仕組である。カメラ・ハントの辻村隆氏が“箕田氏と話したのです”がカメラ・ハント式に美人、佳人を撮っているのは、何も私一人ではない。自分一人で撮ったのしんでいる人が多いということだ。何も私に遠慮せずドシドシ新形式の方法で書いて戴き”(サロン楽我記・第十四回)ETCの言葉は、むしろ、自分が一読者に過ぎないことをけんめいに物語っている——そう取れ^{ほはえ}微笑しい事である。編集子が△編集後記▽で、“読者の声が非常に多い。読者からの苦情や要望も素直にのせたい。(六月号)

“とか”論争の場は十分与えられるので(九月号)“——というよび声をしているのはK誌の本質を如実に示めていると思われる。一例すれば、逆説的になろうけれど「雑感」山本章氏のややドギツイと考えられる極論が掲載されるのも、その裏付けでもあろうか——。おそらくは、山本氏の言葉に対して、大方マニアの投稿が多々発表されると推察されるので細部の点についてはふれないが、△本格的S小説の出現を望んで▽については少しく取上げたい。(ただし、ジャンルの一つとして)。△出現を望む▽と△育てたい▽という似て非なる点から先ず考えてみたい。出現を望む——とは、いまだ不毛^{まう}であってそのような物が、極論すれば△無い▽と解釈受取れる。どこか断定的なニュアンスがただよふのだ。その点、育てたい——という言葉には、いっそうの発展を期したいと云うあったかさが感じられると思う。△本格的なS小説を育てたい▽そのような意味なら私は賛成である。そうあるべきである。事実、グラビア及口絵廃止後は、新しい本格的なS小説を育てよう——という、編集部と読者とのタイアップによって、それは告白・論評ETCのジャンルの盛んになるにつれて、徐々に開

拓されつつある。それが芽を誌上に先ずたしかめられたのは、四月号に八懸賞募集入選作品・「花散る里」▽瀬川泰子の小説と、「革の盛装」第一部、革の招く運命・山口広の作品が増頁にもなつて、その頃としては珍しく長文が掲載発表されたこと——この事柄を注目したい。特にこの号からの作家としての山口広氏の活躍振りは、めざましいものがあり、五月号「革の盛装」第二部・六月号「革の盛装」第三部・七月号「おとめ」の「マダム」ETCと続いた。

最近号に眼をむけよう。十月号からベテラン・芳野眉美氏が「夢のまた夢」△御厨番秘聞▽を連載はじめた。行司子としては、この小説に「これはまた、本格的なSM小説を御執筆。」とそのスタートを期待した。十月号からの「亜紀子奇譚」麒麟児久氏（十一月号で終る）は「後記」は無くもがなの、もたもたした感があつたが、ともかく異色の「トロロ汁責め」ETCなどが出て興味あり、筆も達者。新しいジャンルとしては諷刺的なモデル小説も出現するようになり（一例・「小説・箕田京二」木戸川健・十、十一月号）まさに、S小説も、育てられつつあるとうれしく思っている。そう、「痴人の糧」山本一章

・も上げて置く。——ただ、私が云わんとなたいのは、本格的なS小説をいっそう育てよう、これはより大切な事であり（私もSM時評で、そのように要望してきた）本文充実の切札きりふだでもあるが、バックボーンでは無く、K誌の性格は通刊二百号突破の歴史は、すべてのジャンルが育てられ編集され、今後もうあるべきだと信じるからである。十一月号を見てみると（最も記憶に新しいと思うのでこれを取上げる、他意は無い）

小説は「妊娠腹観賞会」高野原美。「痴人の糧」山本一章。「夢のまた夢」芳野眉美。「美少女煩惱」夜乃探郎。「亜紀子奇譚」麒麟児久。「花の女斗美たち」奮斗士好太。「小説箕田京二」木戸川健。「兜首」万田不二。「小説芳野眉美」夜乃探郎。「花と蛇」団鬼六。とその数は十本。それにエッセイは耕土散筆「落穂拾い」保藤久人。ETC約七本位。ハンザツをさけて後は省略するが、この号だけでなく、いつも公平なバランスある投稿作品による編集がなされているようだ。むしろ小説の本数がやや読む雑誌に脱皮しようとした時期よりは多いのではないかと思われる位である。公平な立場より考えてみて、S小説好きも、それぞれの好みがあり、すべ

てのマニアが満足されうるのはズバリ、団氏の「花と蛇」が筆頭に上げられようが、それだからと言ってS小説の不調と断ずるのは以上、記したように酷なような気がする小説。好きもいれば、論争好きもある。たまたま論壇が開花したとしても、これがK誌のすべてだと断ずることは気早やすぎるし、そうかと言って極論的に△自殺▽という批判が出されるのも酷である。要は、それぞれのジャンルが白熱化し、バラエティーある投稿による編集こそ読む雑誌の今後課題せられた問題であり、総合的に、幻と神酒党論争、ETCも、これからは△読む雑誌、本文充実とは、如何にあるべきか▽という論壇に新しい発展なされるべきことが大切で、その意味からも、その捨石となった木戸川・夜乃・芳野ETCの各氏による声は、拍手されるべきものであり、またS小説ジャンルの発展を願う、山本一章ETCの苦言は、その捨石、刺激となったこととこれ又拍手を送りたいのである。雨降って地固かたまるということわざがあるが、マニア（読者）の声は、すべて前進ある方向にむかってなされ、いささかも後退を意味しない事を切望し、それこそ私の「苦言」とした——

「或る真面目なたわごと」

(乱歩作品からのマゾフィズム的空想など)

須 朔 渾



乱歩作品の場合は、谷崎文学に対して抱いた思い出に比べると遙かにあいまい、且つ散漫な印象しか残っていないのが残念である。

谷崎文学の時には、私の持っていたと思われるを得ない――生来的(?)マゾフィズムや逆転趣味ETCが、性のめざめにショックングな亢奮を呼びさましてくれたのであろう。

その点自己を語ることのなさそうな、探偵作品であってみれば、その作品の中に多くのアブの世界が点綴されているとは云っても、谷崎文学をはじめて手にしたようなショックは残っていないのも無理はない。

私にしても、その時代の他の少年達の多くのように、乱歩の名を、自然のように覚え、

「黄金仮面」に「白髪鬼」に胸おどらせたことをはつきり思い出しはする。幸いにもその作品には「少年もの」が少くなかったので、そんな「少年もの」から「一寸法師」、「蜘蛛男」や「悪魔の紋章」の如き通俗長篇、更に乱歩文学の名に背かぬような推理ものである「柘榴」や「D坂……」や「二銭銅貨」や「陰獣」、「湖畔亭事件」へと読み耽る如くになったわけだが、本当を云えば、私が乱歩文学に本当に耽溺出来たのは終戦後、私が大人となってからだと、云うのが正しいようである。(自分のことなど云って恐縮だが)

デイクソン・カーの本格推理長篇ものにすっかり感激し、「皇帝の嗅入煙草」だとか、色々はんやく本で読み耽ったものだったが、メリベール卿(H・M)とか、フェル博士とか太っちゃ探偵のユーモラスな、名探偵ぶり――そんな外国本格ものの、楽しいお遊びにすっかりうれしくなったり、今度は横溝作品にすっかり参ってしまった、「獄門島」や「犬神家の人々」を読み、そのスリルと恐怖に夜便所に行けなかった頃の思い出。

やはりあの頃は再び乱歩作品がなつかしくなり、「陰獣」や「パノラマ島……」を読みかえしたことがあった。八少年時代乱歩作品

で強く印象づけられていることと云えば、肥体フェチ的要素のある私は、乱歩の作品に屢々、太っちょの男が出て来る、そんな思い出が、淡い乱歩作品への印象の中できわだっているわけで、旧号時代麻生和夫氏の「肥満体への郷愁」などで、乱歩作品中のこういった肥満体の男の裸体云々に……とあったのをよく覚えていて、私とよく似た趣向と思ひ出のある人が存在するのに感心したものだ。そう云えば、「闇にうごめく」の初山ホテルの主人、「地獄風景」のおそろしきランニングで、太っちょ達が死のランニングをする所、等々、割合乱歩作品には肥満体の人間が登場するが、これなども乱歩好み(?)の「奇怪趣味—グロテスク趣味」の現われのような気もするのだが……。

そして乱歩作品中に、かなりのアブ、就中マゾフィズムを発見するに及んで、私の乱歩文学への興味は、谷崎文学のそれに劣らぬものとなったと云ってもよい。谷崎文学への早熟(?)に比べて、随分廻り道をしたわけだが、純文学の谷崎文学と違い、自己を語ることのなさそうな、探偵作品(少くともそう云われ、標榜したことだろう)であれば、マゾならマゾの心理について追及され得る個所は

ごく少いわけだから、それも致し方のないことのようにだった。

もっとも谷崎文学にしても、抽象主義の文学と云われるものであり、云う迄もなく私小説的要素となるとごく少い、純粹フィクションのそれ、——わざわざ云うまでもないが、故、氏がマゾ小説ばかり書いたと云って、彼が即ちマゾフィストと、云うことにはならない。△マゾフィストと云うのなら、観念的マゾフィストであろう(?)▽といって氏が、「細雪」の後に「鍵」や「癡癡老人……」など、執ように書きつづけたのは、単に偽悪主義、悪魔派の作家というカテゴリーで律することと解釈出来るものでもなさそうで、あくことなきマゾフィズムへの耽溺、又追求者であつたことは云う迄もなからうし、そこにこそ氏の真骨頂を見るのではなからうか。

ともかく谷崎文学への評論が、殆んどそのマゾフィズムに対してお茶をにごしている始末だから、甚だしい谷崎文学論への片手落ちとしか云えないのではないか、と云うのも谷崎文学からマゾフィズムを除外してしまつたら——妙に寂寥たるものではないだろうか、そうした趣味の殆んどなさそうな「細雪」等により、氏は国民的文豪とうたわれたのだら

うが……だからこそ「鍵」等で氏らしいマゾの世界——溫柔境が連綿と続いているのを知つた時の喜び——それは「花」や「饒太郎」や「小さな王国」や「憎念」や「痴人の愛」や「金と銀」ETCを始めて読んだ時の感激には遠かつたけれども……。

◇

ところで、乱歩作品に谷崎的要素を見出そうと、私はそれらを一心に読み耽つてみた。谷崎氏の「途上」という推理小説まがいの作品等からの刺戟が乱歩氏に探偵作家(むしろ浪漫怪奇作家といった方が当たっているだろう)としての道を歩ましめる原因の一つとなつた、というのは有名な、エピソードであるが、たしかに類似点は存在したように思われたものだ。

谷崎文学が、女性崇拜のそれであるのに対し、乱歩のそれは、母胎願望の文学と云われる、そんな所に第一の類似点を私は見出して悦に入つたものだった。乱歩の「探偵小説の謎」というのは、「かくし方のトリック」の条で、「私は子供のころ、ゴミ隠しという遊びに、何とも云えぬ面白さを感じたものだ」と書いてるように、何かの中にかくれる——△何かを何かにかくすことから、何かの中に

自分自身をかくす、ということに、マゾフィスティックなものを感じるのだが：V—テーマは一寸例をあげても「人間椅子」、「屋根裏の散歩者」、「鏡地獄」、「お勢登場」ETC数多く、いずれも乱歩文学らしい、ノスタルジアに満ち満ち、ほのぐらい土蔵の中で執筆したという伝説を思い起させる。すばらしい子宮内幻想ともいふべき妖美な耽美浪漫の世界。

◇

乱歩作品でしつように、追及された「一人二役」トリックも、変身願望の一つであるのだから、上述の何かの中に、かくれるテーマと背中合わせとも云えようし、「パノラマ島奇談」、「陰獣」、「一人二役」、「一寸法師」、「柘榴」ETC、殆んどが、このトリック、テーマのものとさえ云えそうな位である。こうした一人二役を扱った神秘的作品に谷崎の「友田と松永の話」という、同一人物がある期間、肥満体となり、又、やせ形の体躯となり、それをくりかえし、その女房のもとに帰って来る、甚だ印象的且つ、奇怪なものがあり、文豪谷崎が乱歩の好む（乱歩の最大要素とも云える）一人二役トリックの作品を書いたのは興味があった。

そう云えば「その頃私はある気紛れな考えから今迄自分の身のまわりをつつんでいた賑やかな雰囲気や遠ざかって、いろいろの關係で交際を続けていた男や女の圈内から、ひそかに逃れ出ようと思ひ……」という文句で始まる谷崎の「秘密」など、谷崎の初期の作品には、こうした別人間への願望を画いたロマンチズムの作品がいくつあつて、両文豪に共通するロマンの追求、耽美の色濃いのに気づきもしたものだ。

とにかく「友田と松永……」という作品を読んで奇妙な感激を覚えたものではあつた。こうした感覚は多くの人間の抱くロマンであるらしく、奇ク等でも、屢々女装して女性になりすまし、男と交渉を持ったり、縛られたり、等のマニアの方々の手記などをよく覚えていて印象深いのだが、もともとこうした感覚というものを分類すると、1ホモ、2きものへのフェチ、3のぞき趣味、4マゾフィズム、5ロマンへのあこがれETCとなり、又これらが勿論合成されて色々になるのであるうけれども、ともかく、この二人の文豪は人間の持つ本質的な願望を心にくい迄に文学に定着させてくれ、そして或る個所ではマゾ等のアブの花を咲かせてくれて我々マニアを随

喜させて下さった大恩人というより他ないと思う次第である。

乱歩中に見られる、怪奇趣味からグロテスク、奇型趣味の一変型で太った人物の描写がユーモラスで印象的だったと云ったが、谷崎文学の中でも、グロテスクを伴った、ぶよぶよした太っちょの主人公等がよく出て来るのも、美のみならず醜をも美と化す耽美派の文豪だからだろうか。氏自身の若い一時代の化身とも思われもする太っちょの男は「饒太郎」の主人公とか、「友田と松永……」の主人公だとか、色々あつて、そして又その描写が巧妙で、如何にもアブチックな人物が何となく動物的にも思えたりして感心したものだ。

一方乱歩の作品にも「芋虫」だとか、「闇にうごめく」だとか、「陰獣」の大江春泥だとか、グロテスクな肥満者が登場して、而も甚だ印象的なことではあつた。

◇

谷崎文学が女性崇拜、更に進んでマゾフィズムの文学、それも三者關係のそれへの追求を第一義とするものであろうことは疑いもないだろうが、又云う迄もなく「饒太郎」あたりから「花」をへて「鍵」に至る作品群に三者關係への追求は夥しく存在するが、私は乱

歩作品の「一人二役」という小説を読んで一寸嬉しくなったものだった。

もっともこれは私の一人よがりの空想にすぎないのだが、自分自身の妻に、別人として

もう一度恋愛する、といったようなものだったと記憶するが、つまり、自分の妻が不義を

している、即ち自分はコキューの身分に……

もっとも、相手は自分自身であるが……美青年としての喜びと、前夫としての憤りが混濁

している、とは云っても、このようなことがらがあった作品を書く、ということから、谷崎

式トリオリズムを回想せずにはいられなかった。

変身にうき身をやつして美青年に変貌出来

たとは云っても、本来は五十男にすぎないのはどうしようもないのだから、この三者（女

房と五十男と、その変貌した美青年）間のうち、よりシリアスな関係、といえば女房と

五十男ということになり、前夫としての憤りということが、最大の意味を持って来る。

「憤り」とは、言葉をかえて云えば、コキュー

ーとしての悲哀となりそう、三者関係を勝

手に連想したとて、あながち全然でたらめにもならないだろう。もっとも端的なM的個

所、描写となると、今更云う迄もない位だ

が、「人間椅子」の椅子の中にひそんで、上にのる人間の臀部や腿部へのフェチ的、マゾ

的描写——アブ誌で、マゾフィズムの象徴的表現に「人間椅子」という言葉が、なっ

ったのを見て、乱歩氏は苦笑したことだろう

(?)

(完)

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

K 1	全裸刺青自慢緊縛 (山原)	K 19	開股縛にあう女囚 (美木)	K 35	イルリのある風景 (大塚)
K 2	恍惚たる責の境地 (山原)	K 20	罪状を訊かれる女 (美木)	K 36	麗しき裸身を晒す (大塚)
K 3	苦悶の表情海老責 (大塚)	K 21	股間縛りの全裸像 (山原)	K 37	亀甲縛り正面裸像 (刑部)
K 4	海老責にあえぐ女 (大塚)	K 22	荷造り縛りで晒す (玉田)	K 38	豊満乳房縛り上げ (山原)
K 5	全裸のぐるぐる巻 (玉田)	K 23	革拘束衣で括らる (大塚)	K 39	全裸を投げだして (山原)
		K 24	庭木に立縛りなる (木村)	K 40	縛しめに哭く乙女 (木村)
		K 25	柱に晒される裸身 (玉田)	K 41	エビ責め放置十分 (木村)
		K 26	セーラー服しばり (大塚)	K 42	豊かな全裸を緊縛 (玉田)
		K 27	高手小手首縄緊縛 (山原)	K 43	観念アグラ縛り囚 (玉田)
		K 28	黒輝豊満刺青縛り (山原)	K 44	笑顔を縛る強烈さ (刑部)
		K 29	踏みしめられた女 (山原)	K 45	猿轡の下にあえぐ (刑部)
		K 30	古墳にて吊り準備 (木村)	K 46	縛りに典子の素顔 (刑部)
		K 31	拷問にあう裸女賊 (山原)	K 47	伸びやかな裸縛り (刑部)
		K 32	ロープブラジャー (山原)	K 48	エビ縛り刺青姐御 (山原)
		K 33	嚴重な後手縛猿轡 (刑部)	K 49	立木より逆さ吊り (木村)
		K 34	エビ縛りにあう女 (木村)	K 50	裸身の緊縛と羞恥 (玉田)

＜耕土散筆＞

『落穂拾い』

(其の四)

と人 ひさ久 ふじ藤 やす保



16 夢さまさま

△補足▽ままたらぬ夢・男の夢と女の夢

17 対異性の観察点

18 スカッとした風貌の条件

19 新聞スクラップから

△補足▽エレガントなSM

16 夢さまさま

△夢！▽夢を見る！夢に見る！夢想！幻夢！

夢の中！夢の又夢！等々々。

人間の心の一部を表現するのに△夢▽という言葉は非常に良く利用され、又、実質的な心理描写に至極便利な文字といえる。

人間の内部には、それが空しいと知り乍ら何故かその空しさに縋りたい様な奇妙な感情が大きく地位を占めている様に推察出来る。

現実一辺倒で△夢▽を嘲笑い△空想▽を否定する方も多い。併し、その人々の心の蓋を開いて覗き見たなら矢張りその中に△夢▽は着実に芽生え育っているのではなからうか。

唯、その空しさ儚さを痛感するが為に、又、現実の余りにも厳しきが故に、主義主張が現存し現出する可能性のあるもの以外を認めなくなるのであろう。

併し、大方の人にとっては△夢▽は重要な意義を持つ。儚ない空虚！そう知悉し乍ら何となく追求めて見たくなる――。

△夢！▽それは人間にとって、空の彼方に麗わしく画き出された虹、その見境いのつかぬ薄れ行く端にも似て、霞み乍ら無限に通じ、あらゆる想いの萌芽となり結晶となり得る。

◎空想とは空しい想い。現実よりかけ離れた考え方を謂う。

◎夢想とは夢中の想い。夢の中に画き、又想

い見することを謂う。

◎幻想とは幻ろしの想い。現実にはない事をあ
る様に感じる想念を謂う。

例に挙げた字句の如く、△夢▽は人類の現
実で果し得ぬ、併し乍ら、希い願う部分へ通
じる唯一つの道であるといえる。或る意味で
△夢▽こそ人間にとって、最も「高き場所」
凡ゆる望みの結集の園と言つても可笑しくな
い。楽しいものである。嬉しく、又、悩まし
く、切ないものでもあらう——。

だが、私は今、「夢の想い」を綴ろうとし
ているのではない。△夢▽には二つの解釈が
ある。即ち、前記した△夢▽に、連なる想
いと、実際に、休息を意味する睡眠中に見る、
△夢▽と——。

人間が寝ている内に見る△私▽は文字通り
夢であり、其処には、心も想いも存在しない
少くとも自意識の介入する余地はない。

昔から、夢は「五臓六腑の疲れ」とか、「
吉凶の予言」とか謂われている。又、新しく
は、「夢は人間の無意識の中の意識の表示」
などとも——。そこで今回は先ず、この「寝
て見る夢」について、興味ある部分を拾い出
して見よう。

洋の東西を問わず、△夢占い▽は盛んであ

る。

「迷信」などと現代人に排斥され乍らも、占
い師まで存在して、何か神秘的な事実である
様に「吉兆」とか「正夢」とか気安め的な感
情の流れに想いを委ねることさえある。

フロイド博士なども△夢▽の「精神分析」
の中に大きく取上げているのを思うと、或は
人間の「無心の意識」として重要な意味を持
っているのかも知れない。

東洋では、そのお国柄か、或は歴史の古さ
によってなのか、お隣りの中国が最も盛んな
様である。

△夢秘録▽という書がある。△夢占い▽或は
△吉凶予言▽の解説書で、その由縁・結果な
どが記してある。

記載項目は随分多い。見てみると、その中
に面白そうな部分がある。つまり、アブマニ
アにとって多少気になる△夢▽である。

詳細は略し、その中のいくつかを「吉」と
「凶」で連記して見よう。但し、△夢▽の占
いの判断は、解釈もいろいろある様に推定出
来るので必ず断定は出来ぬが、前記△夢秘
録▽（中国人の書）によった、事を註記して
——。

◎首や頭が手に入る夢△大吉。

◎黒髪美しい夢△長寿（禿や脱毛は凶）

◎真ッ裸になる夢△大吉（瘦せた裸は凶）

◎腕の夢総て及び爪長き夢△吉（短い爪凶）

◎妊婦の夢△大吉。孕み女に関する夢△吉。

◎女性が自分を美装する夢△吉。

◎入浴及び便所の夢△万事吉。

◎大小便が躰につく夢△宝を得る。

◎大小便満つ夢△大吉（大便上に居るは大吉）

◎大小便を我家に運ぶ夢△大吉。（註・神酒
神宝拝受というのは残念乍らなし）

◎人に斬られた夢△利益あり（手足の傷は凶）

◎獄などで縛られ叩かれる夢△吉。

◎処刑・刑死の夢△大吉。刀の夢大吉。

◎お灸の夢△吉。猛火で火傷の夢△大吉。

◎喧嘩の夢△吉（人を罵る夢は大吉）

◎麻又は緋の着物を着る夢△吉。

◎自分の衣服破れる夢△凶。袖裂ける夢△凶

◎女性に着物を着せる夢△吉。

◎鏡の面の明るい夢△吉（暗いのは凶）

◎鏡に向う夢。櫛の夢△吉（櫛折れるは凶）

関係のありそうなものを、ざっと見ても以上
の様に多く、詳細となると書き切れない。そ
れで、私共が見たい様な△夢▽だけにとどめ
ておく。

その他に△食▽と△鳥獸▽というのがある

ので関係分だけ書き添えて見よう。

◎食に関する良夢Ⅱ飯・餅・饅頭・菓草・胡瓜・茄子・蜜柑・林檎・無花果等

◎食に関する凶夢Ⅱ牛肉・西瓜・大根・栗・梨・桃・柘榴等

◎鳥獸に関する良夢Ⅱ竜（水中は凶）・蛇・大蛇・鶴・鷹・鳩・鼠・虎・鹿・象等

◎鳥獸に関する凶夢Ⅱ猿・猫・狐・熊等

◎荷を積む馬は吉。犬の咬み合うのは凶。

◎畜類を養うのは吉。家畜を殺すのは凶。

（註・右の家畜は本物。人間馬人間犬は？）

（皆さん適当に△吉夢▽をお選び下さい）

△補足▽ままならぬ夢Ⅱその本体

△夢▽については古来から種々の憶説が多く研究も盛んだが、余りにも対象が複雑で、単に、意識・記憶・刺戟等でその現象を確実に実証することは出来ないというのが定説。従って、精神修養や知性向上では超越不可能の種類のものであるらしい。

実際の睡眠状態は、一種の脳の貧血、即ち軽度の麻痺状態で、正確な意識も記憶もなく肉体・環境的な刺戟が一時的作用を及ぼし、半意識の中で起る現象が△夢▽だというのが最も常識的な解釈の様だ（性医学研究会の書）

男の夢と女の夢

△夢▽に対しての男女の差異を統計で見ると

◎殆ど毎日見る者Ⅱ男13% 女33%

◎よく夢を見る者Ⅱ男27% 女45%

◎稀にしか見ないⅡ男50% 女13%

（女性に男性の二倍）

女性の夢は17↓40才位に多く内容も奇抜で色彩的なものもあり、鮮明であり、又、膀胱の関係で、大水や溺水が多い。（高橋鉄氏の書）

17 対異性の観察点

鏡に向って長時間を費し、最も魅力的に自分の個性を生かすことに努力し、美々しく装うのは婦人の特権の様だが、男性も又日常何気なく覗く（髪を撫でつける・髭剃り・ネクタイを結ぶ・等）のとは別に、折に触れ鏡面を睨みつけることがある。

△俺だって万更捨てたものじゃない——▽

△どうして女性にもてないのかなあ——▽

△個性的だッ。男らしい顔付を見る——▽

△少しニヤケているのかな。締りが不足——▽

△醜男だなあ。我乍ら……淋しい——▽

いくら男の値打は……などと勝手なことを

言い乍らも、矢張り自分の容貌は気になるものだ。

そこでふと、一体、女性はどういう男を好むのだろうか、と思うことがある。概して、対女性に消極的（いろいろ意味があるが）な男性に多い風潮の様だ。

男は本質的に女性の「美」を求めようとする。容貌など「二の次」という方も、心の中では「美しい人を」と乞い希っているに違いない。男女では「美」に対する観念に大きな相違がありそうだが、女も又、男と同様に、男の中の「美」を探し求めている。

美しいものに憧れる心理は人間共通のものだから、その思潮も当然のことといえよう。併し、アブ的な心理状態で異性に接する場合、その風貌に関しての思考には、男女間に可成りの差異がある様に思われる。

男性は割合単純である。S派もM派も、自己の観察主眼を基本にして、より好ましい異性（美的要素Ⅱ性格的なものも含めてⅡの多い方）をと念願するのが普通である。

だが、女性の内的思考は男性と異って複雑な傾向を示して行くように思われる。

これ等は所謂『精神分析書』や『心理学的説明書』を繙けば、その数多い事例を知ること

とが出来て、女性の内的心理の複雑微妙さに驚くと共に、或る種の興味（失礼！）さえ覚えることがある。そして、これが又、前項の△夢△に関連して来るから奇妙だ。

女性に男性よりよく夢を見、その夢が甚だリアルであることは既に記した（註・補足）が、尚加筆するなら『運動』『飛行』『墜落』というような内容の夢は、思春期以後（10才以上）17・18才頃迄に次第に多くなり、その中の『怖い夢』『苦しい夢』は全体の25%に及ぶという。

心理・思考・思想と同じ様に個人差が甚だしいが、若い女性程『怖い、苦しい夢』が多いという結果が記されている。

◎動物・怪物・兇漢に襲われる。刺される。牀の上に乗るかかられる。喰いつかれる。

◎羽搔締め。暴行。凌辱。激しい苦痛。右は

△被虐的△被征服的△願望欲求心理。

◎医療器による突発的苦痛。強引な抜歯。

◎交通事故などで轢かれる。負傷→死。

右は△異性恐怖△異性憧憬△内的心理。

（註・夢に関する部分は高橋氏の著書参考）

△夢△と△現実△は何時の時代もままたらぬものだが、この様な、若い女性の秘められた深部心理から推察しても、M派女性の対異性

観には、外面から窺い知れぬ隠蔽された部分もあるものの様で、それが、対男性風貌主観となる場合も多い様だ。

つまり、△被虐△△被征服△欲求心理は、相手が△怪物的△△妖怪的△（醜悪な荒くれ暴漢）であって欲しいと思うことさえ有り得る。又、△異性憧憬△の心理過程でも△容貌魁偉△（力を恐れ力を乞う）をと希う場合が多い。

この心理はS派女性にも共通している部分がある様に思われる。一般的には、至極端正で、男らしき者を膝下に隷属させることが愉悦であろうが、逆に△醜怪なる者△により以上の嗜虐味を感じる方も多いと思うし、事例も又、そのいくつかを挙げている。（註・フランス映画△美女と野獣△或は△ノートルダムのセムシ男△などは、この前者△M派△後者△S派△の代表ともいえる）

以上は女性の△内的心理△から推定出来る対異性感で、従って多分に△幻想的△要素が含まれていることは否定出来ない。

では△現実△ではどうだろう。

心の中の奥深くに秘められている真実の希求願望とは別に、矢張り女性是一般的風潮として、逞ましく男らしく、力強く清々しい男

性を、と望む筈である。特に、若い女性程、その傾向が強いのではないか。

SMイズムを度外視した所謂、社会通念による（？）対男性観では勿論だろうが、SMに於ける△プレイ△の過程に於ても、表面的に女性にきつと△スカッとした男性△が相手であることを望むに違いない。

と、いうことは結論的に、我々男性も又、その容貌の美醜以前に△िकास男性△であり又△カッコいい男△であることを要求され、そのことに努力しなければならぬことになる。

では一体、女性から観た、△スカッとした男△の条件はどんなものだろうか。以下は、ジャズ評論家、△湯川れい子女史△の診断書だ。

18 スカッとした風貌の条件

△カッコいい男△への条件は大別して六つの項目に分けてある。△女性の目から観た△という傍題があるが、勿論、個人的な好みや傾向は不同であり、従って湯川女史の主観・客観を基本にした一般的なものらしい、とお断りして――。（註・40・9某新聞紙上より）

（一）頭髮

「殿方の頭というものは女の目から見て意外と気になるものです。例外はありますが、ヘア・スタイルや髪の毛の処理で、その方の人格・性格・知性まで判る様な気がします」

▽軽佻浮薄型Ⅱカラーまであるロカビリー頭
▽知性欠如型Ⅱリーゼント或は油で固めた頭
▽常識欠如型Ⅱボサボサの長髪。学芸タイプ
▽貧相不潔型Ⅱフケだらけの髪。貧困タイプ
「髪型の良否は一概に言えませんが、清潔第一。そして職場に合ったものが最高です」

(二) 髭Ⅱ

「本当かどうか知りませんが、ヒゲの濃い方は「情が深い」といいます。確かに殿方の青いヒゲ剃りあとは女にとっては魅力的なもの併し、濃い薄いが問題ではありません」

▽不精ヒゲⅡ貧相で嫌。時には滑稽に見える
▽モミアゲⅡ不明確はスツキリとしない。
▽慌てた傷Ⅱ剃刃傷は生々しくてゾッとする
▽注意箇所Ⅱ顎のチヨボチヨボ。咽喉の二、三本。

「ローションでおさえた艶やかな髭の剃あとというものは本当に魅力的なものです」

(三) ワイシャツⅡ

「ワイシャツに気を配っていらっしゃる男性は割合少ないではありませんか。ピッタリ

身についた白い清潔なワイシャツ姿の男性は拝見していても気持ちの良いものです」

薄く色づいた襟。すり切れたカフス。ノリ気のないもの。以上何れも不可。

「特売場の安物でも結構。いつも新しくノリのきいたパリッとしたものは、ネクタイの坐りも良く背広も、すっきり。着心地も満点です」

(四) ネクタイⅡ

「ネクタイは殿方の意向に関係なく、表看板である顔の真下にブラ下がつているので自然に目が走ります。併しその割に無神経に取扱われている様に思えます」

▽背広の色と配色に注意。同系色が宜しい。
▽夏・冬・四季の区別をつけること。
▽金・銀糸の織込み多く派手なのは品格をおとす。夜間用にすること。

▽好みによるが渋過ぎる位で丁度良い。

汚れたもの。よれよれのものなどは非常識
ブラ下けている看板までが最低に見える。

「安価な細い紐一本で、季節感・品格・趣味を表現し変化に乏しい殿方の服装に、適当な色彩りをそえることが可能です」

(五) 靴下

「案外、靴下の趣味が無視されています。向

い合って坐って一番気になるのは靴下。本当のオシャレは小物から……。ネクタイ・カフス・タイピン・時計・ベルト・靴下。総てその方のセンスの代弁。併しその全部に神経を使うのは、お金も暇も大変です。そこで靴下とネクタイ位は――」

▽ズボンから下を全部同系色で揃える。

▽ネクタイ・ベルト・靴下の色を揃える。

▽替え上着と靴下を同色。色の統一に注意。

▽全身で三色以上がチラチラしないこと。

茶のズボンに紺の靴下。黒いズボンに茶色の靴下。ゴムの部分の緩んだ靴下。変な刺繍の悪趣味なもの。金銀糸を織り込んだ派手なもの。以上、かえって田舎くさい感じ。

「靴下の臭いのは絶対嫌ッ。こういう方に近くで靴を脱がれると、耐え難い拷問です。色調に留意するのがオシャレのポイントです」

(六) 背広Ⅱ

「日本の殿方の背広の着方は『目立たなく着れば良い』『目立つ様に着度い』『ただ着ていれば良い』とこの三種しかない様に思えますが――。一年中乙馴しく紺一色の方。冴えない顔色に紺はうつりません。たまに明るいグレーを召して、いじましいサラリーマン根性も一緒に脱ぎ捨てられたら如何かしら」

▽自分の背丈に合った常識的な色も。

▽セーター・ベント、サイド・ベントは動き易さが目的なので特に注意。

▽窮屈なアイビーは粋でなく滑稽に見える。

▽スポーティな替え上衣、スリムなお洒落着は仕事のあとの自由な時間に――。

「十年一日の様な型のスーツが横行していますが、時には大胆な、色や柄ものの替え上着で、本当の着熟し上手に成長して戴き度いものです。間違っても肩やポケット、ズボンの前立が、色腿せ汚れたものは遠慮下さい。百年の恋も一時にさめてしまいますから――」
 ハिकास男性▽への条件は本当ならお洒落の常識といえるが、こうして指摘されて見ると可成り手厳しい批判になって来る。

☆代理部の分譲品について☆

○本誌上に只今広告してありますものは全部在庫しておりますから、お申込み次第直ちにお送りいたします。但しカラープリントは御注文を受けてから作成いたします。○御注文はすべて（大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号ハ天星社▽）へ、必ず注文ハ略号▽にてお願いします。

ご婦人方というものは、極めてデリケートでその上、気まぐれなものと、言っては叱られそうだが、我々男性にもこれ位の注意は必要らしい。特に、SMという多少異った行為の前提には不可欠の様に思われる。このことは、ハ読者通信▽の女性方の発言を拝聴すれば良く判る。女性にモデルことよりも、女性に清潔感を与えることが先ず第一の絶対条件でないだろうか――。

ハ補足▽エレガントなSM

元来、SMは派手なものではない。粋なものでなく、かと言って陰湿な暗いものであってもならない。股賑を嫌い淫靡を避け……人間感情としてはむしろ「高度級」のものだと言っではいけないだろうか。

気品（気位）があり、風格（尊貴）があり極めて格調の高いもの。これ位の、自信・自負が必要な様だ。従って「軽佻浮薄」を排除し、エレガントな奥ゆかしさの中で、しかも自己を偽ることなく……という事になる。

現代の風潮の先端をフアフア浮上りつつ行動する所謂「カッコいい」スタイル。アイビー族も、ビートルズ族も、カミカゼ族も、真のハSM族▽とは無縁の存在というのがこの

項目の結論になる。

19 新聞スクラップから

(A) 一九八〇年代の女性の生活は？

十年一昔という。が、現代では十年位まるで東の間に過ぎて行く様に思える。世の中の事象の総てが余りに進歩的に過ぎる故かも知れない。

これから書く記事は丁度十年前にハ25年後の女性の生活は？▽という表題で、人類の夢「原子力時代」を想像して、某新聞紙上に発表されたものであるが、25年後の前半、丁度十年を経過した今日に於て、ハ夢と現実▽にどれ程の相違があるのか、競べて見るのも一興と、敢えてSMと関係なく、提供してみた。

(イ) 美容Ⅱ

25年経って気がついて見ると、地球上の総ての女性が例外なく美人ばかりになっていることに一驚するだろう。併し決して奇跡ではない。原子力の平和利用は既にモデル以来の疑だった遺伝因子の秘を解明し、品種は際限なく改良されている。人間も生物……動物の一種なので、当然、遺伝因子の人為淘汰が行われるべきで、従って、女の子といえば必

ず美人ばかり産まれても不思議ではない。

美肌に対する臨床例も既に成功している。

アザやホクロが取れて美しくなるのは今日でも普通だが、重症の火傷、ケロイドになると必ず自分の皮を剥いで植皮しなければならぬ。これでは顔は美しくなっても、裸になると、その「美」の犠牲部分が特に目立つ。

25年後ともなれば蛋白の合成が進み、皮膚・毛髪・筋肉・総て当人と同機質のものの人工造成が可能となり、部位々々の取替えが出来る。

男は筋肉隆々とした逞ましさとなり、女性には皆、ふっくらとしたオッパイ。曲線美など思いの尽、ということになるだろう。

(ロ) 料理・薬

炊事に水だけは欠かせない。水分がないと人間の体はもたないし、皿洗いも水が必要。

併し食物は各種の人工培養が進歩し、急ぐ時には丸薬一粒で満腹してスタミナ充分。

けれど、人間という生き物は甚だ贅沢なので、そんなもので満足せず、矢張り、見た目に美しく、実際に美味。そういうご馳走がないと家庭生活も味気ない。で、止むを得ず、マジック・ハンド（遠隔操縦）（魔法の手）で用を足すにとどまるだろう。

万能薬が出現する。寿命は倍層。生きてい

ることに倦々して来る。百五十歳になると新陳代謝が不可能で自然に死亡する。が、苦しくないので誰も苦情を言わない。兎に角、地球上から凡ゆる病が追放されて仕舞うだろう。

(イ) 自殺

「自殺クラブ」が出来そうだ。冒険精神というのは趣味の一種で、人類の滅亡するまで消滅しない。冒険心が旺盛なのに、世の中が平和で退屈でたまらないという連中。それに、何時の世でもヒネクレ者は絶えない。

そういう連中が「自殺クラブ」を結成し、志願者達は凡ゆる方法を考え出す。

▽死の灰は、その悪用を当局が許さない。

▽飛び込みは完全自動ブレーキで防止される

▽身投げは時に有効だが、レーダーが発達して直ちに救助艇がやってきて失敗する。

▽青酸カリで止った呼吸器官も人工代用品に

取替えられて自殺用に役立たない。

▽ピストル自殺は全然駄目。人体の部品は総て取替えることが出来るので成功しない。

◎可能性のあるのは唯一つ。自家用ジェット機で成層圏に到り、そこから地上に向けてマッサカサマに急降下する。この場合のキリモミと空中分解が彼等の話題となりそう。

(ニ) 掃除（省略）

(ホ) 結婚

男女が平等になる。無痛分娩なんて古くさい。女性の苦しむ負担は一切なくなる。というのは「人工子宮」が発明される為。

適当な恒温室で人造血液を供給され、よりぬきの優良精子と優秀卵が結合し、胎児は成長して行く。月満ちれば「人工子宮」から「哺育室」に移すだけ。計画産児なので人口問題もなくなる。

一方、愛情が無軌道になる恐れはあるが、それも、遺伝的に優秀な人間が多くなるに従って、そんな馬鹿なことはなくなる。

「恋愛至上」の思想により、嘗て「恋愛の墓場」であった「結婚」は「恋愛の継続」となるだろう。

(ヘ) 天気

台風の進路変更、晴雨等も、原子エネルギーから、更に太陽エネルギーの利用研究が進んで思いの尽。従って年中春の気候にも出来る。サバクもなくなりジャングルに文化都市が建設され、変化のあるのは指定された観光国（日本など）ということになる。但し、地震は無くならない。それで嫌な人は国外へ出て行く。唯、地球外への旅行はもっと先、

二十一世紀の課題である。月世界探検や、宇宙船の運航は、25年も完全でない。

(B) その他

成年男女の労働時間は一日二・三時間。賃金は平等。失業・困窮・という社会現象は、歴史書にあるだけの「死語」で実感が判わず。研究家が『生活苦』を味合う為に、人気のない山奥や無人島に出掛けてハロビンソン・クルソーを真似たりする。 以上。

人類の夢というものは何時の時代でも良く似たもの。併し、右記した事象は、あと十五年で果されねばならないことになる、今の

状況ではまだまだ「夢物語」に過ぎぬ様だ。

(B) アメリカ出版界の近況

アメリカでは目下SEX小説が流行し、ポケットブックの出版は、新産業的企業に発展している。アメリカにも××文学追放委員会というものがあがり、某市の委員会が最近発表した報告によると、この様な状態は近々一年程の現象だという。

が、唯、SEXものの隆盛は別に目新しいことではない。問題はその内容、そして一般の読書人の思考と動向である。

所謂SMに始まるアブノーマルが小説の主

体となっているのが特に目立っている。

これに対して前記「委員会」や宗教的立場で眉をひそめる人も随分多いのだが、その人々とは別に「歓迎者」や「同情論」もあり、その理由に興味があり、一つの国民性を物語っている様に思われる。

◎アメリカ人のSEX問題についての見方、考え方が成熟して来た。

◎女尊男卑……女性を恐れる男性の多いアメリカでは流行するのが当然だ。

◎SEX小説を読むことにより、男性は女主人公に対してのささやかな優越感に浸る。

【最新版】女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	七〇〇円
三十組三十枚	五〇〇円
四十組四十枚	三〇〇円
五十組五十枚	四〇〇円

A 1	フミツケ汚辱縛り (新井)
A 2	手吊り乳房責め (五月)
A 3	ハリツケ猿ぐつわ (新井)
A 4	全裸正面柱しばり (遠藤)
A 5	亀甲強烈乳房縛り (遠藤)
A 6	全裸手吊りムチ打 (遠藤)
A 7	豊満乳房いじめ (遠藤)
A 8	乳房責め股間縛り (遠藤)
A 9	鼻責鼻梁いたぶり (遠藤)
A 10	全裸後手高小手 (遠藤)
A 11	膨隆臀部さらし (長野)
A 12	全裸正面強烈縛り (長野)
A 13	うねる緊縛裸身 (長野)
A 14	色輝の開股しばり (長野)
A 15	正面縛蛙股ひらき (長野)
A 16	裸自慢縛りヌード (長野)

A 17	正面アグラしばり (長野)
A 18	正面大の字開股縛 (長野)
A 19	遅ましき裸しばり (長野)
A 20	荒縄縛豆絞り猿轡 (大塚)
A 21	両手前縛り髪首絞 (大塚)
A 22	両手吊り股間吊り (桜井)
A 23	両手膝下しばり (関谷)
A 24	疼れんする裸身像 (関谷)
A 25	両股縄掛け開股縛 (大塚)
A 26	正面裸身強烈本縄 (梨花)
A 27	乳房晒し肉体自慢 (長野)
A 28	責衣にはみ出る肌 (東浦)
A 29	投げ出した全裸縛 (長野)
A 30	捕われの全裸緊縛 (梨花)
A 31	羞らいの両股縛り (大塚)
A 32	猿轡乳房いたぶり (遠藤)
A 33	荒縄全身縛り豆絞 (大塚)

A 34	盛り上る乳房縄目 (長野)
A 35	亀甲本縄鼻いじめ (大塚)
A 36	ムチ打悶えポーズ (関谷)
A 37	椅子またぎ汚辱責 (東浦)
A 38	縦縄股間縛り正面 (関谷)
A 39	ゴム猿ぐつわ全身 (大塚)
A 40	くさり乳房責め (長野)
A 41	強制片足挙げ責め (大塚)
A 42	正面乳房くびり縛 (関谷)
A 43	鴨居正面ハリツケ (梨花)
A 44	手吊りパンティ落 (絹川)
A 45	白バンド後手吊り (東浦)
A 46	豆絞り高小手呻 (絹川)
A 47	裸縛り鼻いじめ (梨花)
A 48	ガソジガラメ立縛 (愛川)
A 49	亀甲本縄股間縛り (絹川)
A 50	立木縛竹棒責め (桜井)

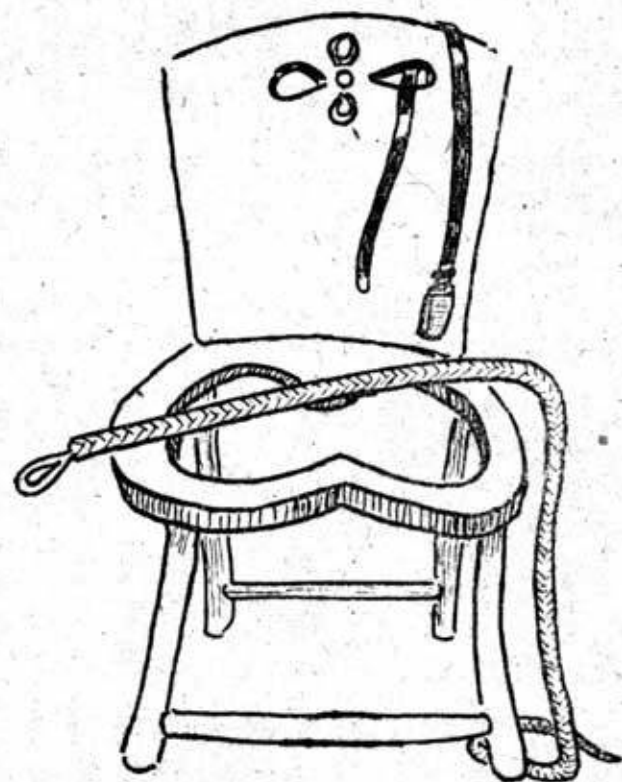
連載サディズム小説

心痛たむ遍歴

△第十六章 そのかみのこと(十六)▽

(続々・コンピエーヌのイヴェット看守)

西 条 操



婦人刑務官イヴェット・ヴラディイは早朝の並木道を急いで出勤した。今日は早番、しかも日勤に引続き夜勤だ。早番の時には、おそくとも点呼終了時には顔を出しておらねばならない。週二回の筈の早番だが、若い新参者の悲しさに、どうかすると四、五回やらされる。

監舎の起床は年がら年中六時だ。窓の鉄蓋が一斉に開き、全電灯がつき、ベルが鳴り渡り、号令と共に女囚達は起きねばならない。忽ち婦人看守達が巡視して回わり、モタモタ

して居るとあとでヤキを入れられる。手早く身繕ろいをし、毛布をキチンとたたみ、一刻を争って鉄格子の内側に坐わるのだ。洗顔等は云うもおろか、用便すらもあと回しで先ず点呼。広間に立ったベルディーヌ看守は、鉄格子の中で息せき切る女囚達の有様を睨み回わした。ベルディーヌにかかる、一番おそい房の連中はタツプリ痛めつけられるのが常だ。

「そんなにあわてなくても、今日は大丈夫だわ。新入りが居るもの」

「馬鹿お云い。あすこは別さ。少くとも今日はね。請け合うよ。ちょっと詰め合ってよ、坐れやしないじゃないか」

「あーあ、情けない境涯だよね。叩き起された途端、もう痒いところも搔けやしない。新兵さんより辛いわ」

「動物園の獣だって、もちっとましさ」

「今期はいやに寒い陽気じゃない？床の冷たいこと」

「冬よりましさ。ああ、今年の冬が思いやられるわ。ちょっとお、あんだ、肘を何とかし

てよ。邪魔だよ」

女囚達は唇を動かさずに囁き合いつつ、床の固さに顔しかめた。ベルディーヌが寝足りた顔つきで主任格、リストを持ったマリイが従う。キャスリーヌは眠そうな顔でデスク寄りの広間に立つ。今朝の点呼は第十一監房からだ。看守長やフォンティーヌ補佐もちょいちょい来ることがあるが、今朝は来ないらしい。第十一監房の五名が額をすりつけ、モニカが身を起して喚き出した。一番囚のルーシーはセリフを知らないから、今朝は逆番だ。「一四七号、第十一監房五番。窃盗罪ッ。懲役三年の刑に服しておりますッ。本日、御執行をお願い申し上げます。受刑番号一四七号囚でございますッ」

モニカはスラスラと叫んで再び額を床につける。若し体に異常があれば、此の時に申し出るようになって居る。毎月のこと、今日あたりからだ、と思えばそう云うのだ。大声でハッキリと叫ばねばならないのだから、馴れて来ても時には泣き声が混ると云うものだ。

何とか叫び終えたルーシーが再び身を床に伏せ、ホロリと涙をこぼした。五名の頭上にベルディーヌの声が降る。

「一七〇号以外は、四名とも昨夜は反則。おネンネさせて頂いてる間だって、刑の執行は停止されてる訳じゃないんだよッ」

エドヴェージュが微かに肩をすくめた。眠って居る間のことだから何と云われても仕方がない。知らなかったでは通らぬ世界だ。ミルドレーヌもルーシーも観念の色を浮べた。明け方になって漸く少しはまどろめた二人だったが、はっと思つて腕を毛布の外に出したり、立ち去る靴音を夢うつつに寝返りしたりした様な覚えがあるのだ。

「四名ともお立ちッ」

シモーヌは少し奥の方へ退がり、モニカとルーシー、エドヴェージュとミルドレーヌがそれぞれ向き合つて立たされた。云わずと知れたこと、女囚同士、対抗ビントをやらされるのだ。

「右、左、右、左……一、二、一、……」

ベルディーヌが面白げに号令をかけ向き合つた女囚は左右交互に相手の頬を撲り合う。「もっとしっかり撲るのッ。懲役人の癖して遠慮する柄なの？」

マリイも嘲けて、リストを鉛筆で叩いて調子をとる。モニカとエドヴィージュは面白そうに、それぞれの相手を撲り続けた。何し

る娑婆では声すらかけては貰えない上層階級の女性を、天下晴れて撲れるのだ、ルーシーとミルドレーヌは一撃毎によろめいて、相手を撲る腕もしどろもどろ、絶えず狙いが外れて空を切る。それでも、ミルドレーヌは歯を喰いしばって居たが、ルーシーは意気地なくヒィヒィ泣いた。

「三一〇号ッ。何故逃げるのッ。馬鹿、おたんちんの意気地なしッ」

罵倒されたルーシーが顔を掩い、勝ち誇つたモニカが其の手を引きはがして笑う。頭を振り立てたルーシーが、いきなり狂つた様に相手の顔をピシャリと打った。

「そう、そう。その調子よ」

マリイ婦人看守が白い歯をこぼし

「やったわねッ」

と唸つたモニカが歯をむき出した。エドヴィージュは落ち付き払つた顔に薄い笑みさえ浮べ、ミルドレーヌの頬は赤く上気して眼に憎しみの色が走る。時々こんなことをもさせて、同囚同士の反感を培わせる必要もあると云う訳だ。

「これッ、一四七号。耳を撲っちゃいけないよッ。ホ、ホ、ホ。三一〇号も三八五号も、口惜しかったらさ、もっとしっかり相手をお

撲り。よし、おやめッ」

五名の女囚は再び並んで床に坐わった。

「では、今日、性根すえて、まじめに服役おし」

二人の婦人看守は第一監房の前へ移った。

朝の点呼の時は手薄でもあるし、眠いしするので、よほど目に余ることがなければ、ゴムホース、叱責は先ず行わない。その代り、全監房が点呼を終わっても、六時半までは床にそのまま坐わらされる。イヴェットが出入口の鉄格子戸から声をかけたのは、丁度ベルディヌが

「点呼おわり。用便許可ッ」

と奴鳴った時だった。

「おはようございます。キャスリーヌ。二八六号はどうお？」

「二八六号？ああ、ピンピンしてもがき回わってるわ。詰まらないこと心配するのね」

キャスリーヌが鍵を回しながら答えた。

ジャンヌとジョーゼットも遅刻気味に滑り込み、これで支配者は六名。イヴェットはキャスリーヌに代ってデスクに陣取った。看守が五名以上居れば一ヶ監房の全女囚を房外に出していい規定だ。

「第三監舎。ベルディヌ・ボワール以下六

名。全監房を開きます」

六時四十五分、イヴェットは電話器にそう云った。

「出房準備ッ」

女囚達は鉄格子戸の内側に縦一列に並び、金属音と共に本錠が解かれ、仮錠の把手が回わされて次々と開かれて行く。鉄格子には女囚は触れないから、扉をキッチリ九十度を開いて行くのは婦人看守の仕事だ。鉄格子が開いても、女囚達は未だ出られない。

「出房ッ」

両腕を背に回わした獄衣の女達が、そろそろ出て来て、広間に素足で整列した。

「寝呆けるんじゃないよ。列が曲ってる」

ピンタを喰って二、三人が朝っぱらからヒートと呻いた。

「運動準備ッ」

毎朝の日課、裸行進が始まるのだ。女囚達は房内衣を全部脱ぎ去って足許にたたむ。

「三二二号はそのまま。全員位置について」
六十四名の女達が床をヒタヒタと踏み肌すり合って、出入口側の通路の端あたりに並び。監房毎に一行横隊に整列だ。

（今、全員そろって反抗でもされたら、とても六名位じゃ押え切れないわねえ）

イヴェットはそう思いながら、デスクを囲む低い鉄柵の向うの女囚群を眺めた。彼女の眼は自然と、デスクの警報器を見る。

「前に進めッ」

六列縦隊の裸女の群は両手を背に握り合ったまま、歩調を揃えて通路を歩き出した。

「回われ右ッ」

通路の端から端まで往復を繰返すのが運動だ。歩調を乱せば罵声が飛び、革ロープの鞭が鳴る。鞭の届かないあたりの者は列外に引摺り出されて張り倒された。年がら年中、素裸ではだしなのだから、今頃はまあいいが冬は辛い。

「お前も少し運動おしよ。体にいいわ」

と、キャスリーヌが三二二号を広間でいたぶる。

「一緒には歩けないだろうからね、私の回わりをお歩き」

キャスリーヌはそう云って革ロープを取り出し、ベルト股手錠姿の三二二の両肘を背で括り合わせた。勿論、くっつけて縛る訳には行かない。

「さ、歩くのよッ」

革ロープの端を握って奴鳴りつける。三二二号は数歩あるいて呻いた。痛いのだ。しか

し、命令には絶対に服従せねばならない。三二二号はヒューヒュー云いながら、革ロープを二米半の半径に張って、例のアヒルとガマのあいのこと云った恰好で、キャスリーヌの周りを尻振り振り回り出した。

「もっと早く歩けないの？ 刑事さんが追掛けて来るじゃないの。それッ急いで!!」

革ロープを持ち替えたキャスリーヌは、振り返りもしないで背後の女囚を嘲けり、矢庭にグイと手荒に引張る。半回転した女囚はバランスを失って尻餅をつき、こじる手錠と喰い込む金具の痛さに悲鳴をあげた。此の制服を着てバツジを光らせて居るからこそ、こんなことをする気にもなるのかも知れない。

「坐り込んでいいと誰が許したのッ」

制服の娘は通路を見たまま、背後の革ロープをスカートの横でゆすぶり、しやくる。ベルトの真下あたりに結ばれてないだけ、まだしも助かると云うものだ。三二二号は脚をばたつかせ、もがいて立ち上った。ベルトに股手錠姿の女囚は一步毎に腰をよじって頭を振り、思い切り開いた膝から腿にかけての筋肉をびくびくさせ、キャスリーヌの前を通る時にはチラと哀願の横眼で見上げた。恨めしげに見やるまなざしは制服の胸のあたり、其の

のポケットには、施されて居る懲罰具の鍵が納めてあるのだ。

「腿を挙げてッ。高くッ」

引摺り出して蹴倒した女囚を列へ突飛ばしながら、ベルディーヌが呟鳴る。女囚の群は一斉に腿を高々と挙げては床を踏み初めた。いやと云う程に挙げないと、その腿に革ロープが降る。後ろ手の身はともすればよろめくし、列は乱れ勝ち、鞭音が一きわ繁くなつて女囚達は泣きそうな顔だった。

「とまれッ。回われ右ッ。続けて前へ!!」

女囚達の額に汗が滲んで来た。

「ああ、もう…脚が上らないわ…」

女囚の一人が呟いて乳房をゆるがせ、ヤケ気味に突き上げる、膝頭を顎の下でよろめかせた。

「これッ。上体を立てて!!」

疲れて来ると上体がどうしても前に屈む。

呻いた金髪が片膝を落した。忽ち手練の革ロープが蛇となって肌に吸い着く。からかい気味に半ば脅しだったそれまでのとは違い力一杯の一撃だ。馴れた婦人看守が扱えば、革ロープでも本式の革鞭同等の苦痛を与える。金髪女囚の悲鳴が監舎内に魂消った。

「しっかりおしよ。あんた、ダンサーだった

んだろ？ふう…」

「こんなの…ふう…国立バレー団のレッスンにだって…ふう…ないわよ、ちくしょう…」

スラリとした別の金髪が脂汗と共に喘ぐ。

「でもさ、毎日凄いいストリップじゃない？ゼニ取って見せりや…大儲けだよ…ふう…」

「身検の方が…もっと当る…わね…」

「ありや…えげつなさ…過ぎるよ…ふう、苦し…い…」

「まだ…この方が…芸術味があると…云うわけね…ああ、苦しい…ま、まだ…やるの!!」

「あのベルディーヌの奴の…時は、ほんとにもう…。これじゃ…体がもたないわ」

「スマートになり過ぎ…ちやう…ふう…もう腿が石だわ…」

ボヤきながらも女囚達は死物狂いだった。

ともかく第三監舎では、ベルディーヌが最もきついのだ

「駆け足ッ」

ベルディーヌは颯爽と号令をかけ、今度は女囚群を走らせ始めた。

「腕を振れえ」

女囚達は始めて後ろ手を解き、腕を振りはじめ。きびしい面持ちで女囚達の動作を監視し号令をかけるベルディーヌは軍国調で全

くのファッショ、革長靴でも穿かせて下士官の襟章をつけた方が似合いだ。若いのも年増も女益りのも中年のも、脚の長いも短かいのも、そして太ったのも痩せたのも、ふうふう云いながら走った。喘ぐ唇から涎れが垂れ、疲れ硬張った脚は、よろめいて列は乱れ勝ち。無論、通路の両側に立つ制服が革ロープを振り回す。走り過ぎる的に狙いが外れ、他の女囚の素肌に屢々鳴るが、そんなことはもとより構ったことではない。近くの女囚数人を蹴り散らかしてベルディーヌが列に割り込み、鞭の届かぬあたりから栗毛を一匹引き摺り出した。番号を呼んでも列外に出て来ない中年女囚だ。恐怖にひきつれた頬に往復ビンタが小気味よく鳴り、足を払われて床に倒れる。

「聞えないふりをしたって駄目よ。お前、ここで御厄介になって何年なの？ボケナス」

背に降った革ロープに、立ち上がりかけた中年の体が再び床に這った。革ロープを素肌に当てるのは禁止事項の一つなのだが、ベルディーヌは頓着しない。訴える術もない女囚達はそれが恐ろしいので、ベルディーヌの宰配する「運動」に怖気を振るうのだ。それに此の中年女囚は下着の一枚を腰にまとして居るし、赤い木札を首の前後につけて居る。首

に巻いたゴム紐につけた赤札は、三監では先月から始められたもので、期間中の女囚がつけねばならない識別だ。他にも数名が首につけて居る此のしるしは娑婆の女性ならば殺されても嫌だと云うだろう。

期間中の女囚は、激しい運動、労役を免除して貰うことが出来る規定だが、ベルディーヌ看守にかかつては馬の耳に念仏だ。第一、その規定にした所で、免除することを得る。と云う表現なのだから、すべて支配者の匙加減一つ、そんな条文などはあつて無きに等しい空文なのだ。

突き飛ばされた中年女囚は又も床に這い、革ロープに脅かされ追われ、死物狂いに列を追った。

「止まれッ。回われ右。かけあーし」

「まだア!!いつ…まで走らせるのよ…」

喘ぐ女囚達は大小の乳房を波打たせる。一度止まって再び走り出すのが、もうとてもえらいのだ。しかし、婦人看守の姿はおそろしく、懲罰は怖い。太い腿やスラリとした脚が必死に動き初め、金髪や栗毛やブルネットや赤毛が床上三呎で上下左右に揺れて躍る。

「ああ、もう、息が苦しい…胸が破ける…」

「あいつ、きつと腕立て伏せ」と来るよ、

今日あたり、ちきしょう…威張りやがってること。ふーッ

「ほんとうあたし、死んじまうわあ…おんば日傘で…育つたんだ…もの…」

「お笑わせで…ないよ。ほんと、あのベルディーヌの奴と来たら…自分も一緒に…ふー」

「…走って見やがるといいんだわ…」

苦しい喘ぎに混じる声を、ベルディーヌが耳敏く聞きつけた。

「誰かしやべったわねッ。マスクかけて欲しいのかい」

嵌口具をかけられてこんなことをさせられた日には、胸が破けて死んで仕舞う。しかしベルディーヌならやりかねない。脂汗を滴たらせて喘ぐ女囚達は、見やる勇氣もない眼を恨めしげに伏せて、ベルディーヌの前あたりでは殊更に大きく手足を動かし、恐怖の胸わななかせつつ走り過ぎるのだった。怨嗟的のベルディーヌは、余り御立派でもない御面相に朝化粧など念入りにやらかし、自分の号令一つで右往左往する女囚の群を愉快げに睨みつけて居た。ともかく、ベルディーヌの「運動」は一番きついのだ。案の定

「よし、とまれ。少し散って。腕立て伏せ」

と来た。ばたりと脚を停めた女囚達は苦し

げに喘いだ、顔の脂汗を拭いもせず、観念して床に這った。情容赦もない号令と共に、あちこちで苦悶の呻きが床に流れ、肩甲骨が死力を絞って軋み鳴らんばかり。

「だらしないねえ、お前は。そんなことで懲役が勤まるかい。お前もッ、床にオッパイ吞ませなくていいんだよ。こらッ。膝がついている!!お尻が重過ぎるんだよ、かたわだね、お前は。ハイ、腕を曲げてッ。伸ばして」

「か、かんにん……おゆるし……」

豊かな胸を床に押しつぶした金髪が細く泣き、革ロープが背に降った。

「仰向けに寝てて持ち上げる稽古ばかりして暮してたんだろ、お前は。ほら、まだまだできるさ、やろうとさえ思やね。ズルけると承知しないよ。鼻声が、通用するところじゃないの」

シモーヌは数回と保たなかったが、彼女にはベルディーヌも鞭を当てない。努力の限界を越したかどうかは、ベテランのベルディーヌには一目で目分けがつく。ルーシーとミルドレーヌは命じられた回数を立派に耐えた。人間、死物狂いになると案外の力が出るものだ。こう云った体操などになると、だらしない生活が板についてしまった女の方が、駄目

だ。

ベルディーヌ婦人看守は、今の此の場では最高の支配者。自分の号令のままに死力を振り絞る女達、特にルーシーとミルドレーヌの二人の姿を見下ろして、さも満足げだった。

「よし、やめえ」

女囚達は腕を立てたまま、首をガックリ落とす。

「第六監房は続けてあと十回ッ」

六房の六名はヒールと泣いた。点呼準備の整列正座が最もおくれた罰だ。泣こうが喚こうが、ベルディーヌは絶対に容赦しない。命令通りにやらなければ、たとえそれが体力の限界にきた上でのことであっても、そう認めて貰えねば駄目なのだ。下手すると、刑務官抗命の懲罰が待って居る。六名の女囚は全身に汗したたらせて呻き喘ぎ、最後の死力を振り絞った。

(哀れなものね)

イヴェットは床に這う六十四個の背を打ち眺めつつ、デスクの回転椅子で思う。

(懲罰がおそろしいのよね。そりや、怖いわねえ、抗命の罰と来たら半死半生なもの)

六名の女囚が獣の様に呻き吠えて、最後の力を両腕にこめた。

(ああ、でも、ミシユリーヌ奥様に辛抱出来るかしら。いい加減にしてやったらいいのに、ベルディーヌたらきついよねえ)

「運動おわりッ」

ベルディーヌが喚き、女囚達は床に脚を折った。週に一回はまわって来るベルディーヌの「運動」も漸く終わったのだ。

「ありがとうございました」

床に額すりつける女囚達の声や裸か身に、ホッとした安堵が溢れて居た。

「懲罰」と一概に云うが、ビンタ一つにした所で本来ならば禁止事項なのだ。婦人看守が独断でやれることは、せいぜい女囚の腕をねじ上げることと、お尻のあたりを平手で打つ位のことと、正規の懲罰とは、「説諭」「叱責」「発受信停止」「面会停止」あたりの穏やかなものから初まって「嵌口具」「窄衣」「減食」「禁食」「軽屏禁」「重屏禁」「革鞭」と凄くなっていく。「ベルト」や「ゴムホース」等は表向きにはないことになって居るが、実状は御存知のとおりだ。嵌口具や窄衣は時間に制限があるが、一旦解いてすぐ又かければ、連続して居ないことになるのだから、これ又実際には無制限。手錠や足錠、捕縄や革ロープは、懲罰用ではなくて鎮圧用

の戒具なのだから、使用は勝手次第で時間に制限もない。しかし、足錠は足首を傷めやすく、気をつけないと血が流れて面倒になるし、第一、解いてやるのにしやがまねばならないのが臆効だ。また、捕縄は結んだり解いたり面倒臭い。其の点、金属手錠は便利で使用簡便だし、第一、常に持って居る。前手にかけておけば、身の回りのことは不自由ながらも自分でやらせることが出来るし、使いたい方もいろいろあってネを上げさせるのも訳はない。ツーロンやアンジェーならいざ知らず、勿論ここでは規則に妙な限り、手錠すらかけない建前にはなっている。しかし、時と場所を問わず、黙って縛に就かねばならぬのが囚人のさだめなのだ。

懲罰委員会は、開いたことにすることもあらず、また時々催おされる。看守長か補佐が議長になり、其の監舎の婦人看守二乃至四名が其の都度指名され、本館からは刑務課員一名と保安課以外の課員一名が出席して、大抵は監舎の詰所で開かれるのだ。文通や面会の禁止三カ月まで、軽屏禁と一週間までの重屏禁、そして十二時間までの嵌口具と二時間までの窄衣とは看守長の決裁で実施される。それ以上のことは刑務課長のサインが要る

し、仮出獄願資格の剥奪などとなると所長決裁だ。その他減食や禁食などにはうるさい規定があるが、まあ大抵は運用よろしきを得て居ると云う訳だった。

ともかく懲罰は恐ろしく、一方的で情容赦ない。常に、悪いのは囚人の方であり、落度があるのは被支配者の側、痛めつけられて血の涙の憂き目に逢うのはいつも受刑囚と決つて居る。下手に申し開きでも試みようものなら、勿ち「抗弁」「不服従」「改悛の情認められず」などときめつけられて、懲罰におまけのつくのが落ちだ。

委員会を構成すのも人間なのだから、よきにつけ悪しきにつけて私情も混じり、受刑者によっては社会からの圧力も時には利き目を見せる。刑の執行を受けて居る身になお其の上に科される「懲罰刑」の量刑に、対しては、受刑者達の不平不満が敏感だ。もとより正面切って抗議出来る筈もなく、従って依怙最良を受けたと思われた囚人は同囚達の憎悪の的になって、結局は差額の支払いをさせられて仕舞う。

房内衣を再びまとった女囚達は掃除を初め六名の婦人看守は白マスクで鼻口を掩った。毎日磨き立てて居るのだが、それでもコンク

リート床からは埃が舞い上がる。各監房に二名宛、他は通路と広間だ。入念に掃いた床を固く絞ったモツブで磨き立て、什器備品を光らせる。極めて柄の短いモツブは、其の場の婦人看守の人数だけしか保管庫から出されない。反抗の武器になるからと云う訳なのだが、少し大袈裟でもある。モツブを持たされた六名の女囚は、腰を深く曲げてふうふう云つて居た。罪に服する様な女には、清潔と云うことを躰けてやらねばならない。触れることすら禁制の鉄格子だが、此の時には一本一本入念に磨かされる。やらされるのが、当然の「鉄格子磨き」と「戒具磨き」だが、囚われの身にとってはみじめな仕事だ。デスクに坐わるイヴェットの眼前で、監舎出入口の鉄格子に取りつくルーシーとミルドレーヌがホロリと涙をこぼした。

太い鉄棒を両手で握ったルーシーが肩震わせ、階段のかなたを見詰めたミルドレーヌが鼻を嚙り上げる。

「何故休むのッ、馬鹿ッ」

背後に近寄ったキャスリーヌが叱りつけ、ひかがみのあたりを蹴った。二人の女囚はガクリと膝をつき、鉄格子にしがみついて一声嗚咽した。

「まさかと思うけど、お前達、出たいのかい？お前達はね、そこを一步でも出る時は鎖をつけるの」

キャスリーヌはなおも嘲ける。

「ま、生まれて初めての、お掃除だろうけどね、もう女中達も居ないのよ。心をこめて磨くのッ」

二人の女囚に観念の色が浮んだ。此の鉄格子を出ても、その向うには又鉄格子と錠が厳然とあるのだ。人間社会から此の身を隔絶する象徴の鉄格子の冷たさを、女囚達は再びこすり初めた。

詰所の掃除も勿論女囚の仕事、婦人看守達がやる訳がない。色彩豊かに柔かい詰所の床を這い回わる四人の女囚は其の日の当番囚。

真白い寝台や華やかなカーテン、深々としたソファや椅子を盗み見て切なげに涙ぐむ。テーブルの上の化粧用品は誰のものか、眺めたプラチナブロンズが溢れる涙を懸命にこらえた。監視して居るジャンヌが、黙ってそれらを抽出しに納めた。七時二十分、マジョーリ婦人看守が階段を昇って来て、鉄格子の外に立った。

「お退き」

マスクを取り、鍵を握んで立ち上ったイヴ

エットは、ルーシとミルドレーヌを三步退らせ、鍵穴に突込む。

「おはよう、イヴェット」

「おはようございます」

イヴェットは鉄格子をガチンと閉じて答えた。やさしげな眼をしたマジョーリは、遥か後輩のイヴェットにも先に声をかける。懲罰委員会では常に弁護側に立って女囚を庇うマジョーリは三十五才の色白な未亡人、口紅さえもつけない顔に絶えずいたわりの色を漂わせて居た。立ちすくむルーシーとミルドレーヌが思わず同時に云う。

「おはようございます」

しかしマジョーリは、それに答えず通り過ぎ、二人の女囚の眼が悲しく床に落ちた。詰所の入口で振り向いたマジョーリは

「お前達、駄目よ。手を後ろに組みなさい」

「は、はい。」

「すみません」

ミルドレーヌとルーシーは、あわてて腕を背に回す。

「もう、おそいわ。仕事を続けなさい」

二人は再び鉄格子に取付くのだった。女囚が挨拶するのは黙認してもいいが、それに答えてはいけないのだ。答えると対等の扱いを

受けたと思わせるし、ひいては結局女囚達の為にならない。隔絶した一線を画しておくためには守るべき心得なのだ。

七時半、女囚達はあわただしい洗顔を許される。

「それ、あたいの歯ブラシじゃないの、いやよ」

「ガタガタ云うんじゃないの。早く粉をお寄越し」

歯ブラシ置場で小競合いが初まり、忽ちピントが飛んで二、三人の洗面が禁示された。十二名宛が各々一分間で洗顔を終え、号令と共に次の組と代わるのだ。未練氣にして居ると髪を掴まれて引き起され、腕ねじ上げられて突き飛ばされる。物入れの所で顔を拭いた女囚達は、やれやれと云った顔で食卓に坐わった。やっと朝飯にありつけるのだ。刑務所の朝は早い。早番出勤でない婦人看守達も、その頃には略々全員そろって居る。そして、制服の姿がふえるにつれ、女囚達の態度も神妙になって行く。六十余人の女囚のおお方はしたたか女、それを十二、三人で昼夜を問わず支配して行くのは大変なことでもある。何しろ相手は隙さえあればと云う連中だし、ジョアンヌ女史が定員増を要求するのも無理は

ない。

労役開始は八時。だから朝食は忙がしい。手の使えぬ三三二二号が立てる食器の音が止まない中に「食事やめ」の号令がかかった。一房宛立って広間で房內衣を脱ぎ、抱えて来て物入れに納め、両腕を高く挙げて労役衣ハングアの所へ来る。略式の身体検査だ。監視されながら労役衣をまとい革サンダルを穿いて、次々と広間に立って整列する。数名は首の赤札をつけたまま。マジョーリが其の赤札の一人一人に工合を訊ねてやって居た。フオンテイーヌに云われてデスクを離れたイヴェットは、三三二二号の体を調べて、首かしげた。背を丸めて立った三三二二号は、哀れっぽく鼻など嚙って居たが、熱は全くなかった。「少し位の熱なんか、ちよいとヤキ入れてやれば吹飛んじまうものよ。これッ、手をもつと後ろへ出してッ」

背後に立つキャスリーヌが女囚の尻をピンヤリと叩き三三二二号は脚の間の両手を更に後ろへ突き出す。キャスリーヌが鼻を寄せながら鍵を突込んで回わし、女囚の股手錠が漸く外された。

「手足縮めて一晩寝れば、大抵の風邪なら治ったわね？」

「は、はい……」

三三二二号はのろのろと背、腰を伸ばし両腿を寄せ合せつつ、手首を揉んで答えた、ヤキを入れられれば少々の風邪位は吹飛ぶ。そんなものかも知れない。三三二二号はベルトの縦横をおそろおそろ指でしごきつつ、悲しげに労役衣をまとった。ベルトに結合された手錠はぶら下げたまま、腰をよじりつつ列に並ぶ三三二二号の裾の中でカチャカチャと音がした。

「さあ、来るのよッ」

ジャンヌが呟鳴る。デスクの前を掠めて労役場への鉄階段を昇って、行く女囚達の顔には、これから労役が初まるのだと云うのに、もう疲労の色が浮んで居た。無理もない、これから正味九時間、味気ない苦役をみっちりとやらされるのだ。労役場へ追われる女囚群を眺めもせず、マリーとキャスリーヌは鉄格子戸を出て行く、其の姿を階段の途中で見送るルーシーとミルドレーヌの眼に涙が光って居た。ベルデイーヌは看守長室で押問答して居たが、やがて労役場から三四〇号を連れて来た。元秘書課長の端正な女囚だ。

「これ、連れて帰るわよ」

イヴェットのデスクに伝票を投げて云う。

「何時頃帰監させますの？」

構外労役指図伝票には、看守長のサインはあるが帰監予定時刻の記入がない。労役種別の欄は、勿論「近傍道路の清掃。」昨夜はタツプリ眠ったことだし、今日は溜った家事雑用を片付けようと云うベルデイーヌの魂胆だ。ベルデイーヌの亭主は小心でチビの安月給取り、官舎には二人の腕白と一人の娘、そして亭主に逃げられた妹が居る。

「身検までには戻すわ、それに合わせて、あとで書き込めばいいじゃないの。守衛なんて平チャラだわ。文句云わずにサインしてよ」

ベルデイーヌは事もなげに云って腰手錠を抜き出す。三四〇号の顔が、悲しげに歪んだが、おとなしく両手を差し出した。黙認されて居る私用使役だが、原則として本館の個室に、居る女囚を使うことになって居る。しかし、それには「表て」の連中に頭を下げねばならないから、ベルデイーヌの様な婦人看守は横車を通して監舎から連れ出すのだ。手錠をかけられた三四〇号は、更に革ロープで腰をくびられた。ベルデイーヌは、馴れた手付き、腰を二回わりした革ロープが手錠を前で押えて錠金具が鳴る。されるままに縛しめを受けながら、三四〇号は長いまつげを震わせ

て居た。

「女のすべき仕事と云うものを此の女に教えてやるのよ、フ、フ、フ、さ、来るんだよ」

革ロープを引張ったベルデイーヌは、自分のことを棚に上げて荒々しくそう云った。三四〇号は打ちうなだれてしおれて居た。これからの今日一日は下婢働き、はつきり云えば女奴隷の憂き目を味わねばならないのだ。コンピエーヌの森の中とは云え、一般の人達に此の姿を曝らすこともあるだろう。それでも獄外に出るのを喜ぶ女囚も多いが、それは氏そだち次第、三四〇号などにとっては、どんなに苦しくとも所定の労役の方が如何に気楽なことか。

背を曲げて漸く届く指先で眼を押えた三四〇号は、腰ロープを引かれてよろよろし、肩を悶えて着苦しさをゆるめ、とぼとぼと曳かれて行った。

「あ、ベルデイーヌ。鈴は？」

鉄格子戸を閉めながら、イヴェットが訊ねた。

「そんなもの、家にあるわ。うちには鉄丸だってあるのよ。さ、来るんだよ」

ベルデイーヌは女囚の肘を強く握む。

「何だってそんなにメソメソしてんの？、折

角娑婆の空気を吸わせてやろうと云ってるのよ。少しは有難いと思ってくれなきや」

革ロープの端が二重に折られてピシリと肩口を打ち据え、コンクリートの通路に悲鳴が流れた。

(ベルデイーヌのことだもの、手荒くこき使うことね)

イヴェットは思いつつ見送った。丸めた囚衣の背に、囚人番号布だけが白かった。

マジョーリが駆け降りて来て詰所へ飛び込んだ。

「何かあったんですの？」

「いえね、ベルデイーヌの『運動』がきつもんだから……」

マジョーリは嘆息して答え、脱脂綿とガーゼ等を抱えて駆け昇って行った。

(私もぼつぼつ選んだ女囚を『使役』するところを考えなくちゃ。どう云う段取りでやればいいのかしら、要領よくやらなくちゃね)

イヴェットはデスクで物思う。私宅で『使役』する場合には、個人的事情がひそかに介入する余地もあり、と云う訳で選んだのを連れ帰るには余程の信用と心臓が要る。

(いつも公平な態度で居ることが肝心ね。可哀想だけど、時々は一七〇号あたりも看守長

の見てる前で撲ってやろうかしら)

体に異常を来たした『赤札』女囚も大したことはなかったらしく、掃除具を取りに降りて来る様子もない。こんなことになる、マジョーリはいつも大袈裟過ぎる。

(でも、私、とてもミシュリーヌ様を撲ったり出来ないわ。ああ、今頃どうなさっているかしら)

フォンテイーヌがコーヒを持って来てデスクにおいた。

「あなたはいつもまじめなのね」

イヴェットをいたわる。フォンテイーヌは部下思いで、尊敬できる人柄だ。

(もし、ミシュリーヌ奥様を連れて帰れたらどうやってお慰めしようかしら)

「日直さん。搬出よ」

物思いに沈んで居たイヴェットは、前に立ったジャンヌの声にハッと気付いた。女囚達が段ボール箱を労役場から運び下ろし、鉄格子の手前に積み上げる。フォンテイーヌが数を読み、二つ三つ開いて調べた。出来上った既製服の搬出だ。二人宛腰を連鎖された八名が現われ、イヴェットは鍵を握んだ。紙箱を抱え、ジャンヌに監視されて、何回も出入して女囚達は往復する。浅間しい鎖を鳴らす女

囚達の殆んどは何やらいそいそと嬉しげだ。どうやら今日はトラックへの積込みまでやらされて居るらしく、その運転手あたりが若くてハンサムなのだろう。運び終えて戻って来た女囚連中は、哀しげな顔つきで鉄格子を潜った。

かっちり検身直前に戻されて来た三四〇号は、一日の屈辱と労働に、端正なその顔を寝れさせて居た。ベルディーヌは鉄格子のすぐ外で腰ロープを解き手錠をはずす。

「こんな役に立たない女は初めてよ、イヴェット。うちにや生憎とタイプライターも会議室もないもんで、ウロウロして『鈴』ばかり鳴らしてるの。さ、もうお払い箱だよ、入りな」

ベルディーヌは女囚の背を突き飛ばし、手首をさすって居た三四〇号はスラリとした長身をよるめいて潜った。

「あら、お入りになりませんか？」

「冗談じゃないわ。非番だと云うのに今日も勤務しちやうとした様なものよ」

ベルディーヌは、回われ右して帰って行った。

身体搜検を受け終えた三三二号が房内衣を着る同囚達を羨ましげに見やりつつ、今日一

日を脚の間にぶら下げて過ごした手錠をまさぐり、背を丸めて泣きながら自分の両手に自分でかけた。さも痛そうに腰をよじる。『ベルト』の革は充分に鞣してはあるものの、今浴びたシャワーに少しは縮まるのだ。シャワーを浴びるにもベルトは、解いて貰えない哀れさ。そして、これから食事だと云うのに、もう股手錠だ。しかし仕方もない、懲罰されて居る女囚なのだから。

点呼はフォンテーヌが、キビキビと行なった。今夜の「点呼時」監視役の主任格はマジョーリ。イヴェットは三六三号だけをゴムホースで打った。マジョーリが怒る位だから余程のことがあったのだろう。イヴェットは気楽にマーサの腿を打ち据えてやった。

第十一監房では、ルーシーとミルドレーヌがぐったりと虚脱した様な面持ちだった。これでやっと、何百分の一か何千分の一かを終えたのだ。ポツリとミルドレーヌが呟く。

「御挨拶しても、看守さん達は答えて下さらないのね」

「そうよ。絶対に、うなずいても下さらないわ。どんなにおやさしい方でもそうなの。初めは、とてもみじめで悲しかったわ」

とシモーヌが答えた。エドウィージュとモ

ニカが、ふんと鼻で笑う。

「でも私、あの看守さんにはこれから毎日御挨拶するつもりよ。今日二階で、倒れたひとの手当なさった看守さん。応えて貰えなくてもいいわ」

とルーシーが囁り上げた。

「ああ、あの方ね。やさしそうな方だわ。どこの監舎にも、あんな方が二、三人はいらっしゃる様ね」

とシモーヌ。ベルディーヌの様な鬼も居るし、マジョーリの様な天使も居て丁度いいのだ。それが適正な人事と云うものだ。

「あ、それからね。あなた達に云っとくけど『担当様』と呼ばなきや駄目よ、お名前を呼んだりしたら、相手によるとことだわ、生意気なッて……」

「対等じゃないのね。当り前のことね。でも悲しいわ」

ミルドレーヌが溜息と共に呟いた。

他の監房では、あばずれ達が浮き浮きして居た。今夜は久し振りに楽が出来るのだ。

「巴里祭とクリスマスが一緒に来た様なもんじゃないの。マジョーリにモレシェンヌにイヴェット。今夜のお守り役はお姫様と天使様ばかりじゃないか」

「昨夜の埋合わせさ。けど、まあこんなこた年に二、三回あるなしだよ」

あばずれ女囚連中はニンマリと笑み合う。

「あのイヴェットてのは未だよく気心が分らないけど……。でも、あまり摸らない様だね」

「なあに、チョロいものさ。規則通りに世の中が回わると考えてる純真な娘だよ。モレシエンヌと来た日にや、からかうのが痛々しい位だし……」

「聖マジョーリ様はちよつと勿体ない気がしてさ、こっちが却ってオタオタしちゃうわ」

「でも、マジョーリだって怒ったらきついわよ。あたし、マジョーリの革鞭受けたことあるの。少しは楽かとナメてたら、ネを上げさせられちゃった。ベルディーヌのよりもこたえたわよう」

「ありや、お前さんが悪かったのさ。あたしやね、聖マジョーリ様の前では絶対に反則しないことにしてるのよ。あら、どうして笑うのさ」

「脱脂綿を余計に貰えるのが余程有難いと見えるわね」

「ちくしよう、何とでもお云いよ。だって、あたしは特別体質なんだもん」
「かたわだよ」

「なんだって!! ぬかしやがったわねッ。何よ、十六で子供を産みやがった癖に」

「それだけ男にモテたって訳。ひがむとみつともないよ」

「ちくしようッ、やるかいッ」

峻しい雲行きに同囚達があわてる。

「およしよ。聖マジョーリ様が困るじゃないの」

「あ、そうだったっけ」

意気込んだ女囚は、大きな腰を再びおろした。

「あたし、あの聖マジョーリ様だったらね、ロープ一本なしに町を歩いたって逃げやすいよ。ほんとだってば」

「御立派なこと。でも、ここでいくら誓ったって“仮釈”にはカンケないよ。いいから、いいから、もうお黙り。誰か来るわよ。ありやモレシエンヌ姫君の足音だね。」

モレシエンヌは、ほっそりした色白な娘、
「表て」の総務課あたりでタイプでも叩いて居る方が似合いの女性だ。

「さ、もう寝なさい」

と監房毎に静かに触れて回った。服務規程違反だが、マジョーリはあえて号令などをかけない。

「御苦労様。みんなおとなしく寝た？」

戻って来たモレシエンヌを詰所でねぎらったマジョーリが、見入って居たロケットを胸許へ落とす。

「ええ、まあ。三二二号が泣いて頼むんですけど……」

マジョーリが見詰めて居たロケットの写真は彼女の亡き夫の遺影、兇悪犯に射たれて逝った殉職警察官の俤だ。

「そう。可哀相ね。でも仕方ないわ。解いてやる訳には行かないことよ」

マジョーリ婦人看守は溜息をついて呟き、お茶を淹れに立つ。

「あら、私がしますわ」

「いいの、二八六号はどう？ 水を流してやった？」

「ええ、壁にもたれてじっとしてましたわ」

「五分ばかり、窓を少し開けておやり」
ジョアンヌ女史が聞いたなら目を三角にすることだろう。此の夜勤の編成はフォンティーヌ補佐の指金だ。

「イヴェット、あなた先に寝たらどう？」

お茶を持って来てくれたマジョーリが、デスクのイヴェットに云う。早出したイヴェットに対する心使いだ。デスクの電話器が鳴っ

た。一時間毎に各監舎から刑務課当直へ電話する規程になって居るのだが、向うさんは時々不意打ち電話をかけて来る。デスクに居てすぐに出るかどうか、タルんでは居ないか、と云う訳だ。マジョーリが受話器を取り、応待しながら舌を出した。イヴェットは言葉に甘えてデスクを離れ、モレシェンヌと三人でソファに憩うた。クリスマスチヌの呻きが微かに聞え、三人は眉をひそめた。イヴェットは、マジョーリと一緒に夜勤するのは初めてだ。

「ここに入ってる人達はみんな病人なのよ」ポツリと云ったマジョーリの言葉は、イヴェットの胸に泌みる。そんなだから、マジョーリはいつまで経っても平看守だ。少し後輩のベルディーヌの方が、今では給料も上になつて居る。

「私ね、ここを出た人達がまじめに暮して居ると嬉しいわ」

マジョーリは胸ポケットから安物のコンパクトを取り出した。家事に荒れた指でそれを撫でさする。

「これね、くれたのよ、お礼だって。男に捨てられて赤ン坊を殺したひとだったわ。」

マジョーリは、涙ぐんだまつげをしばいたい

た。

「私ね、貰ったものをどれか一つはいつも身につけてることにしてるの。宝物よ」

イヴェットは深い尊敬のまなざしでマジョーリを見た。其の穏かな顔には、気苦労の小じわが刻まれ、何か犯し難いものが感じられる。

「ええ、そりゃがっかりすることもあるわ。失望させられる方が多いかもね。でも、それは私達の努力が足りないのよ。時代おくれかしら、こんな考え。ホ、ホ、ホ」

「いいえ。それがほんとですわ」

イヴェットはキツパリと云い切った。

巡回して戻って来たモレシェンヌが困惑した表情で訴えた。

「ね、マジョーリ。みんな云うこと聞かないんですの。毛布の中へ手を入れちゃって」

「そう。でも自分のベッドから離れては居ないんでしょ？ 起きてるの居る？」

「いいえ、そんなのは居ませんけど」

「なら、いいじゃないの。いや、いけないわね。私が叱って来るわ」

そう云いながらマジョーリは腰を上げようとせず、腰の手錠を取り出した。

「先ず要具の点検しなきゃね」

と磨き出す。モレシェンヌも腰を下した。

「無理ないのよ。私だって、亡くなった主人のこと想って時々は……」

ズバリと呟いたマジョーリは、頬を赤らめた。時計を見やったマジョーリが立ち上がり、イヴェットも従う。マジョーリはわざと鞭音を響かせ、更に、持った手錠をカチャカチャ鳴らせた。狸寝入もあるだろうが、全監房の全女囚が規則通りに腕を毛布の外に出し、キチンと仰臥して居た。重屏禁のクリスマスチヌは頭を懲罰房の隅に押し当て、片膝を立てて仰向けになって居る。こうすると、片方の脚は何か伸ばして寝れるのだ。眩しさに顔しかめたクリスマスチヌは、伸ばして居た片脚を曲げて立て、立てて居た、方を伸ばし初めた。床中央の鉄環を潜る足鎖が鳴り、鉄枷が床に軋む。

「どう？ 二八六号」

マジョーリが、代って覗き込み、声をかけた。声に憫れみを感じ取ったのか、まみれ汚れた床の裸か身から泣き声が昇って来る。

「もう……体が石みたい。何日経ったの？」

「二日目よ」

「まだア!! もう、一年もこうしてる様な気が……するわ。出してよ、何でもしますわ。お

願ひ」

被懲罰女囚の声と顔から何かを判断したマジョーリは

「駄目。辛抱しなさい」

ビシリと云って視察窓を閉じた。

「体にもよるけど、五日目ぐらいから注意してやらないと駄目よ」

小声でイヴェットに教えたマジョーリは、それきり黙って詰所へ戻った。

夜半、ベッドにまどろんで居たイヴェットはモレシエンヌに叩き起された。第九監房で喧嘩が初まつたのだ。九房は五名までが札つきの女囚、四名が二組に分れて取組み合いをやつて居る。飛んで行つて見ると、鉄格子の外からマジョーリが懸命に叱つて居た。いびきに文句つけたのが発端となり、あんと腰連鎖されてちや働き難くて迷惑だとか、配食に依姑最肩するとか、対抗ビンタの時に少しは手加減したらどうなのさ、とか云う日頃のうっぷんのやりとりが、情夫だか亭主だかの悪口となつて爆発したのだ。

「おやめッ。やめないと懲罰よッ。おやめつたら」

マジョーリとイヴェットの制止もものかわ二組の喧嘩は組んずほぐれつの乱闘だ。こん

な事態に備えて革サンダルすら房内では穿かせないし、武器にする様な物は何一つない。「あたしが折角保安課のひとに見て貰つてたと云うのに：横から色眼でシャシャリ出て来やがって。こんちくしょう!!」

三七二号が三六八号の赤毛を掴んで床にゆすぶる。三六五号は三七〇号の腹に馬乗りとなつて撲りつけて居る。はね返した三七〇号が相手を壁に押しつけて咽喉輪を攻めた。四名共、大柄でがっしりした女達、特に三七二号の腕なんかは男の様に太い。

「あんだ達、とめなさいッ」

マジョーリはうろたえ気味に叫んだが、ベッドに坐つて傍観する三七一号と三七三号は横を向く。「入つて来て、自分でとめりゃいいじゃないの」と云つた顔つきだ。他の房の連中が起き出して鉄格子に寄る。

「お前達は寝てなさいッ。起きちゃ駄目よ」イヴェットは走り回つて叱りつけ、鉄格子を握る手を遂に革ロープで撲りつけた。自分ながら少しうろたえて興奮して居る。

「どこの馬鹿か知らないけどさ、マジョーリ様じゃないか。御恩を仇で返す様なことはおやめよッ」

どこかの房から誰かが呶鳴る。

「そうよ、おやめ。ベルディーヌの時にやりよ。その勇氣あるかいッ」

「そうだよッ。やかましくつて寝られやしない。折角、久し振りに頭がスカツとしたのにさあ」

しかし、二組の喧嘩はいつしか相手を変えて止みそうもなく、房の鍵を持ったモレシエンヌがデスクのあたりでウロウロする。悪態の限りを喘ぐ口から、浴びせ合い罵り合つて、狭い監房の床を転げ回わる四名は無我夢中だ。二人位ならいざ知らず、四名となつては監房内へ入るのは危い。ジョアンヌ女史やベルディーヌなら、どうかなるかも知れないが、今夜はマジョーリにモレシエンヌにイヴェットと来て居る。

「ね、イヴェット。どうしようかしら？ 赤札じゃないわね、よく見てよ」

マジョーリが困惑し切つて云う。出来ることなら監舎限りで処理したいし、此の期になつてもなお女囚達の身になつて物を考えてやるマジョーリだった。鬼の保安課がやつて来ても、その期間中のことならば幾分は酌量してくれるのだ。

「いいえ。みんな違いますわ」

イヴェットは頭を振つて答え、マジョーリ

が決心してモレシエンヌへ合図した。モレシエンヌが赤電話を取り上げる。

「はい、こちら保安課。どうした？」

流石は保安課、忽ち応答が返った。

「あの、こちら第三監舎ですけど……」

「そんなこと分ってる。何ですッ」

表示器を睨む男の声が叱りつける様だ。

「喧嘩です。四名。押え切れません」

三十秒と経たない中に保安課員が駆けつけた。四十がらみの屈強な男が二人、走り過ぎる彼等に監房内から嬌声が起る。ほんとに仕様もない女囚連中だ。鍵をマジョーリに渡したモレシエンヌは、すぐにデスクに駆け戻って出入口を守る。飛び込んだ男達は忽ち取組み合いを引きはがし、照明の明るい通路へ引き摺り出した。囚衣の肩や裾も露わに夢中だったあばずれ達は、撲りつけられた頬の痛さに相手を男性と知るや、忽ち力を失ってデレッと喘ぐ。

「おとなしくしろッ。此のあばずれめが」

腕をねじ上げられた三七二号が、苦痛に呻きながらも眼をトロンとさせた。うっとりとした表情を浮べた三六五号がなおも手足を振り回して暴れ、足払われて床に這い、その背に保安課員が馬乗りになる。或いは、そう

して貰いたくて、暴れて見せたのかも知れない。三七二号も床に押えられ、背にねじられた両手に手錠が喰い込んだ。イヴェットは三六八号の腕をねじ上げて、手錠を腰にまさぐる。鉄格子戸を閉じたマジョーリが三七〇号を辛らくも仰えた。同性の婦人看守に押えられた二人は口惜しげに身を悶え、強い力で反抗する。もうこうなっては五十歩百歩、せめて男性の手で扱って貰わねば損だ、と云う訳だろうが、救い難い女囚根性だ。イヴェットは制帽を飛ばされ、マジョーリは肘で脇腹をしたたかに突かれた。それでもマジョーリは流石に片手には手錠を叩き込んで居る。二人の男が引き継いだ。

「おとなしくしないかッ」

撲りつけられた三六八号と三七〇号は嬉しげな悲鳴をあげ、男の足許に自分から腹這った。舌打ちした男達がしゃがんで手首を掴む。二人のあばずれは申し合わせた様に、忽ち床で暴れ出し苦笑いした男達が膝を背にかけた。三六八号を押えつける男は剃りあとの青さも一きわ濃い長身、女囚は赤毛を床に乱してウツトリと呻き、男の力を確かめ楽しむかの様に悶えつつ、手錠を受けて居た。

「かんにん……」

三七〇号が体に似合わぬしおらしい声をかぼそく洩らし、太いふくらはぎをばたつかせた。既に縛に就いた三六五号と三七二号とは後手錠の身を床にべたりと坐わり込み、はね上げた囚衣の裾も露わに男達の姿をトロリと眺め入って居る。なおも喘ぐ唇からは涎れが垂れんばかりだった。四名の喧嘩女囚達には更に捕縄がかけられる。革ロープではなく細目の綿ロープだ。女囚達は我先にと膝でいざり、男達に背を向けて跪まずき、婦人看守を白い眼で睨む。女に縛られて堪まるものか」と云った顔つきだ。これも功德だ、まあついでだから仕方ない」と思ったのだから、男達は自分達の手で次々とロープをかけた。後手錠を首にグイと吊り、両肘を胸に固縛し、腰のあたりも強くくびる。

「苦しいわ。そんなにきつくしないでよ」

「ねえ胸が苦しいの。調べて見てよ、ねえ」

女囚達は縛しめられながら甘え声を出す。

「何ぬかす。ゴタゴタ云うな。嫌なら手伝って貰うぞ」

髭痕の青い男が婦人看守を顎で示し、三六八号は忽ち身悶えて後ろ手をすり寄せた。

「いいわ、いいのよ。何なら、もっときつく

してよ。あたしが悪かったんだもん」

マジョーリとイヴェットは女囚達の乱れた髪を掻き撫でてやった。勿論、ネットなどは夙に吹き飛んで居る。あばずれ達は忌々しげな色を浮べ、邪魔者が入ったわ」と云った眼つきだった。

「ふん、うまくやりやがったわね、二人とも殿方だとはねえ。見ただろ、今夜の保安課員は飛び切りじゃない？」

「そうよ、あんな二枚目達が居たかしら？あれだつたら女囚冥利に尽きるってとこよ」

あちこちの監房で、ひそひそ声が交わされる。

「ああ、恋しい匂いがするわ」

「犬みたいな女だね、あんたは。ちえっ」かんにんしてえ」か。気分出しやがって、ちくしよう」

「あんな女レスラー級が、あんなしおらしい声出せるのねえ」

「あたいなら、グッとこころあたりを押しつけちゃうわ。あとどうなったっていいわあ」

「どう、あたし達もやらない？ こう、倒されちゃって、グッと押さえつけられちゃうのよお。痺れちゃう、ああ……」

「馬鹿お云い。いいことのあとには悪いこと

があるよ。あの四人だって、今はデレデレ喜んでるらしいけどさ……」

「そうね、やめたつと」

「ホラ、天使様だって怒ってるようよ。くつわを持ってる」

「あれ、保安課行きは固いね。可哀想に、十キロばかりスマートになって来るわ、ザマ見やがれ」

嵌口具をかけられるあばずれ共は顔を振って拒んだ。

「ちょ、ちょっと待ってよ……」

「かんにして。いやよ。もう騒がないわ」

激しい乱闘と興奮の直後とて、未だ胸が喘いで息も苦しいのだ。しかし容赦はない。髪を掴まれ、鼻をつままれ、歯をこじられて鉄塊をくわえさせられ、革とゴムがマスク状にピッタリと口を掩う。女囚達の小鼻が精一杯にふくらんでふいごの様な音を立て、咽喉のあたりが苦しげに波打った。悶える胸に捕縄が更に沈み込む。夜よなか大喧嘩などやらかして手間を取らせた此のあばずれ女達には、此の位の苦しみは当然のこと、まだまだ序の口だ。処分は明朝になってからのこと、四名の喧嘩女囚達はそのまま特別監房の一つずつへほうり込まれた。保安課員はわき目も振らず

嬌声を黙殺して去り、広間と通路の電灯が暗くされた。マジョーリは何事もなかった様な足取りで静かに一わたり巡回し、イヴェットとモレシエンヌは顛末報告書の草案を練る。暗黒の懲罰房の中ではあばずれ達ももう我れに戻り、逃れる術もない懲罰の恐怖にわなないて居ることだろう。

「あなた達は気にしなくていいのよ」

報告書にサインしてマジョーリはそう云ったが、それからの彼女は口数も少く、如何にすすめても遂に横にはならないで、自らを責めては悩むかの様だった。第九監房は彼女の主担当範囲なのだ。そしてイヴェットは、マジョーリのやさしい心を痛めた四名の女囚を憎いと思った。

「やはり、保安課渡しになるわねえ」

マジョーリはポツンと呟いた。モレシエンヌが調えた夜食も、遂に口をつけなかったのだった。

翌朝、ジョアンヌ女史は報告を受けて忽ち不機嫌になった。

「四人位、何とか出来なかったのかねえ」

聞えよがしに呟き、夜勤の三人は油を絞られた。女史には、保安課の助けを借りたことが口惜しいのだ。

「聖マジョーリ様がお気の毒で、あたしもう胸が一杯だわ」

「そう云いながら結構食べてるじゃないの。でも、ほんとだわ。彼奴等、なんと見境のないことを仕出かしやがったもんだこと」

看守長室の気配は広間の女囚達にも分る。

忙しい朝食を掻き込みながら彼女達はいきまいて居た。マジョーリは自分の至らなさを率直に詫び、そして主張した。規程をこう解釈すれば保安課の介入を防げる、と云うのだ。

論旨は明確だが慣例と云うものがある。看守長女史は一蹴した。マジョーリの云うことは尤もだし、人柄には一目も二目もおいては居るが、保安課にも時には花を持たせねばならない。何しろ役人同士の仁義もあるし、看守長ともなればいろいろと思惑もある。保安課幹部ともなれば仕事は楽で威張れるし、給料もいいのだ。保安上の要あり、と云えば大抵のことは通ってしまう世界なのだ。マジョーリは、今度は懲罰委員会の開催を要請し、それも一蹴されて唇を噛んだ。

「モレシエンヌやイヴェットは未だ若いんだから、もっと逮捕術を稽古おし」

女史は、電話器を取り上げながら厭味を云う。

「じゃ、あなた達で処理してね。慣例通りやるのよ。あ、もしもし、保安課？昨夜はどうも。ぶざまな仕儀でお恥かしいわ。身柄、お渡します。うちとしては、刑務課長に白紙伝票切つときますから、ハイ」

マジョーリは溜息をつき、捕縄の束を自分で持った。薄汚れた細目のロープ、三米ずつの長さで何本もある。保安課へ引渡す女囚の身柄は、赤裸々に捕縄付きが慣わしだ。

「あなた達、大丈夫？捕縄かけられる？え、イヴェット。しつかりね。上官の命令よ」

笑いに紛らせて訊ねるマジョーリの声は、少し捨鉢気味でもあった。引き出された四名は広間の床にへたり込んで喘いだ。捕縄の束を見てビクリとし、声にならぬ恐怖を嵌口具の下で呻く。あばずれ達には捕縄の意味が分って居るのだ。観念はして居たことだろうが、保安課行きは恐ろしい。三人の婦人看守は四名の縛しめを一応解いた。男の力で緊縛されて居た縄目から解放されて、小鼻からふーッと吐息が洩れ、それでも未だ何か名残り惜しげな眼で其の捕縄を見やる女囚達だ。マジョーリが無言で促がし、四名は力なく立ち上がった。房内衣を全部脱いで抱え、物入れへ納めに行く。

「しつかり年貢納めといでよ。」

「ちよっと浮気が過ぎたわね。亭主に云いつけてやるわよ。昨夜の勢はどうしたのさ」

「亭主にや逃げられてるさ。それよか、マジョーリ様によくお詫びおし。」

しおれた裸か身四つに、食卓から嘲けりが浴びせられた。四名はしおしおと戻って来て横一列に跪まずいた。悲しげに鼻吸り上げて神妙なあばずれ四人は、昨夜あの女レスリングの大乱闘を演じた、連中とは思えない従順さ、いずれも太い其の両腕を背に回してうなだれる。此の期に及んで少しでも点数を上げようと云う訳でもないだろうが。イヴェットは三六八号に捕縄をかけた。右を下に左を上、重ねた手首にきつく、ロープを巻きつけ、両肩に振り分けて吊り上げる。隣りではマジョーリが鮮かに捕縄を捌いて居た、モレシエンヌが三七〇号の後ろ腰に足をかけて思い切り引き絞ほり、尻を踵に落とした女囚が呻く。此のほっそりした娘も少し怒って居るらしく、容赦もせず、締め上げて腰を蹴った。

「立って」

太い両腿のそれぞれの付根にも捕縄が喰い込んで絞り上げられる。イヴェットも遅れ気

味に腿縄をかけながら、初めて少し可哀想になった。同じ仲間とは云え大勢の女囚達の嘲けりを肌を受け、長い時間をかけて若い娘の手で受ける捕縄は情けなからう。女子用一号捕縄と云う縛り方、イヴェットは何とか恰好をつけた。やはり一番早いマジョーリが三六五号の背後に立って捕縄を捌く。一人残されて待つて居た三六五が激しく身を揉み、矢庭に向き直って床にひれ伏した。保安課行きだけは、と哀願して居るのだ。しかし、マジョーリは黙って利腕を強くねじ上げ、手首に捕縄をぐいと巻いた。

同じ様に三米のロープ二本を使ったのが見較べて見るとイヴェットの掛け方が矢張り最も下手だった。

保安課がやって来て、靴音高く近寄る。今朝は婦人看守が二人、もとより二名共堂々たる体軀だ。忽ち、捕縄姿がわななき、眼が恐怖に見開いて据わった。よほど怖いのだ。何しろ保安課の懲戒室と来ると監獄の中の監獄、五監舎勤務のアンリエットの話によれば、保安課からそのまま病監へ移されて二カ月近くになっても戻って来ないのが二人居るそうだ。

ジョアンヌ女史が出て来て伝票を渡し、イ

ヴェット達は嵌口具を外した。途端、笛の様な声が口々に哀願を絞る。

「うるさいッ。お黙りッ」

一喝された四人の女は忽ち声を吞んだ。

矢張り保安課婦人看守の貫碌と威厳は大したもの、指一つ触れないのに四人のあばずれが威圧されて、もう声も出ない有様だ。

「此の捕縄は何だい。誰が掛けたの？」

三六八号の前胸あたりを蹴る。

「はい、私です」

イヴェットは踵を鳴らした。

「ふむ。もっと手際よくおやり。捕縄が基本だよ。」

「はい」

「デパートの売子だって、もう少し手際よく括るよ。お遊びじゃないんだからね。きびしさがなきや駄目。余計なところがゴタゴタ締まって、肝心の所がふやけてるね。結び目だつてスツキリしないし。」

看守長と同階級の襟章をつけた保安課婦人看守はイヴェットにポンポン云った。

「はい。かけ直します」

「いいよ、もう。さあ、立てッ。豚ども」

赤裸に縄付きの四名は打ちひしがれて曳かれて行く。

「可哀想に、当分娑婆とお別れだよね。」

「自業自得だけど監獄行きとはお気の毒に」

見送る女囚達が声をひそめて囁き合った。

ともかく、保安課のやり方は冷酷無慈悲なのだ。先ず取調べ中と称して数日間責める。そして、いい加減打ちのめされた頃に本式の懲罰と来るのだから、堪まったものではないのだった。

三二二号は三日目ともなると、もう一步毎に呻いてヒィヒィ云った。昼はベルトに手錠をぶら下げたままの上から囚衣をまとっての労役、そして検身が済むや唯独りだけ房内衣の一片をもまとえないで、ガツチリと自分でかけさせられるみじめな股手錠。片時と云えども解いてはおろか弛めても貰えないベルトは、用便・シャワーとてもそのままだ。

「ようくお洗ひよ」

シャワーを浴びる三二二号を婦人看守は嘲ける。

「お慈悲ですから弛めて下さいまし。ほんの少しでいいんです、お願いでございます。哀れんで下さいまし」

切なさ辛らさに三二二号は哀願を繰返す。

「何云ってんのよ。あらま、弛んでる」

婦人看守達は冷たく嘲笑して錠を調べ、僅

かの弛みをも見逃さずに緊め上げて仕舞うのだった。弛めたりすれば、懲罰具の用をなさない。

「可哀想なことするじゃないの。ベルトの鍵を見せびらかしたりしやがって。キャスリーヌの阿魔め。ほんと、癪に触わる娘だこと」

初めはやかみ半分に面白がって居た女囚達も、三日目ともなると三三二号にみんな同情し、同性の婦人看守の意地悪さにふんまんと示す。

「ほんとよ。あの娘、ちっとは聖マジョーリ様の靴下でも煎じて飲むといいんだわ。ちくしよう、一晩でいいから自分があれ掛けられて見るがいい」

先ず女囚の半分以上はベルトの切なさみじめさを味わい知って居るのだった。

日曜日は労役はない。ツーロンやアンジェーではそうは行かないが、ここでは其の点は娑婆並みだ。勿論日曜とても朝の「運動」はあるし掃除もやらされるが、労役衣に着替えることはない。朝食后、希望者は礼拝に行ける。実際にはそんなことは大したファクターにはならないのだが、囚人心理として仮出獄に影響すると思うのだから、大抵の者が神妙な顔で礼拝を欠かさない。仮出獄嘆願資格

を剥奪された者でも、暫くすると思ひ直して希望する。礼拝堂は勿論所内に在って、地下広間からの通路を通って行くのだが、此の礼拝の時だけは腰連鎖も手錠もかけられない。

礼拝堂の周囲は保安課が主となって厳重に固め、礼拝の際の反則は、無条件で保安課行きだ。三百人以上の女囚の群が、腕は自ら背に回わしては居るもののロープ一本なしにぞろぞろと各通路から広間に集まり、そして此の時だけは一堂にかたまって、集合するのだから、支配者側にとっては気苦勞な一刻でもある。礼拝が済めば、天氣のいい限り囚衣の洗濯だ。勿論時間は定って居て、二房宛十五分間で交替する。シャワー場が、洗濯場となつて、十五分間で下着をも含めて全部を洗い終えねばならない。干し場は監舎の屋上、干し終えた連中は鉄網越しに外界を切なげに眺めるが、忽ち追ひ下ろされて鉄格子の中へ閉じ込められる。房内衣と下着は二通り与えられて居るので、ぶさいくな獄衣とは云え幾分か小ざっぱりした姿で女囚達は監房の寝台に腰掛ける。労役はないし、ホッと嬉しげだ。

第十一監房の洗濯は一番最後に五名だけ。ルーシーもミルドレーヌも、うろたえながら洗い終えた。

「三三〇号、ちょっとお見せ。何だい、こりやあ。これで洗ったつもりなの？」

ルーシーの労役衣を調べてベルディーヌがいじめた。

「そーら、初まったわよ。あたしもよく苛められたわ」

「洗濯は女性の最も大切な仕事の一つなんだそうよ。笑わせるねえ」

「あいつのどこじや、まだ洗濯機が買えないのさ。それで、あんなセリフを口惜しまぎれに喚いてんの。」

三房の連中が囁やき合つて笑う。

「この「ベルト」を洗わせて、くれないかしら。凄く綺麗に、しちやうんだけどなあ。ああ、切ない、此の、此の手錠と来たら、もう……。あんな達いいわねえ。ああ、折角の日曜だと云うのにさ、背中も伸ばせやしない。情けないわあ」

三三二号が歎息し、腰をよじってガチガチ音を立てた。

ベルディーヌに洗い方を咎められたルーシーは泣きそうなる顔をした。此の娘は娘なりに精一杯に洗ったつもりなのだ。

「すみません。申し訳ございません。洗い直します。」

「馬鹿お云い。お前のために石鹼や水を余分に使えると思ってるのかい。薄馬鹿トシマ。さ、それを持って皆に見せて回わっといで」

可哀想にルーシーは、濡れた労役衣を両手で大きくひろげて捧げ持ち、各監房を一つずつ見せて回わる。しかも、大声で叫んで回わらねばならない。

「女として、洗濯一つ満足に出来ない三一〇号でございます。こんな洗い方しか出来ない愚か者を笑ってやって下さいまし」

語尾が震え涙声が混じり、ベルディヌは容赦なく何回でも叫び直しをさせて恥かしめそんな有様を眺めるミルドレーヌが他人事ながら歯がみする。ベルディヌが今度は汚れ物を一抱え持つて来た。青灰色の獄衣の下着ではなく、人間の女性が、身につける下着類だ。白やブルーやピンクやグリーン、刺繍のあるのやら、フリルのひらひらしたのやら、色もとどりで華やかだ。眺めた女囚達が哀しい眼を光らせた。

「三八五号。お前を指名してやるわ。これ、洗うの。分った？」

ミルドレーヌの顔あたりにほうりつける。うっと思を詰めたミルドレーヌが歯ぎしりした。

「三一〇号も洗いたいかい？でも、お前みたいな女にはさせられないね。床に坐って。それを捧げてよくお詫びするがいいわ」

床に脚折ったルーシーは涙で頬を濡らしたまま、濡れて重い労役衣を両腕で水平に捧げ続ける。ミルドレーヌの眼にも口惜し涙が溢れた。彼女は教養ある女性、こんな仕事を強制されるいわれは女囚にだってないことは、詳しい法規を知らなくても分る。

「ふん。どうやらいやなのね。嫌ならいいの。これは命令じゃないし、頼んでる訳でもないのよ。他に、させて欲しい者は沢山居るんだからね。拾ってッ。三八五号ッ。拾え、と云ってるのよ」

落ちた下着の数々を拾うミルドレーヌの指はワナワナ震えて居た。シモーヌがそっとたしなめ忠告する。

「ね、おっしゃる通りにした方がいいわ。洗いなさいよ、ね」

涙をホロホロとこぼしたミルドレーヌは、血を吐く様な声で云った。

「洗わせて…頂き…ます…」

「そうお。じゃ綺麗に洗ってね。ああ、分ってるだろうけど、その前に桶をようくこすって、洗ってからにしてよ。石鹼はこれ使っ

て」

ニンマリ笑ったベルディヌはポケットから透き通る様な石鹼を取り出して与えた。打ち重なる屈辱が胸を抉り、全身を熱く駆けめぐり、ミルドレーヌは洗い桶にしがみついて哭いた。

刑執行の公式機関である刑務所内で、私品の洗濯などをさせてはいけないのは云うまでもないが、此の位のことは取るにも足りない日常茶飯事、女囚の中では少しでも可愛がって貰おうと、下着洗いや靴磨きなどを争ってやる者が沢山居る。しかし今日は、意地悪いベルディヌが新入りを痛めつけるべく、同僚達の分まで、集めてミルドレーヌにやらせた。ミルドレーヌやルーシーならば口惜し涙を流して、身の程を思い知るに違いないと云う訳だ。

「あの、担当様」

シモーヌが跨まずいて声を出す。

「一七〇号にも洗わせて下さいまし。」

ミルドレーヌを手伝ってやって、其のまじめな仕事を少しでも早く終えさせてやろうと云うのだ。しかし、ベルディヌ看守はせせら笑う。

「駄目。三八五号一人にやらせるのよ。お前

達三人は後片けおし。こらッ、又手が下がって
「てる」

かたわらの床で呻くルーシーの頭が小突かれた。

「どう？懲役の味は如何？」

ナイロンパンティを揉むミルドレーヌを覗き込んでベルディーヌがからかう。

「こんな家庭的な仕事をやらせて貰って嬉しい？ しみ一つない様に洗ってね」

ミルドレーヌが肩先で頬を押し拭う。

「あ、その黒パンティは私のよ。私は脂性だから特に念入れてね。おや、それでもう洗ったつもりかい？ 駄目だねえ、そんな心掛けだから手術に失敗するの。あら、涙がかかったじゃないか。そのシュミーズは私の娘が着るのよ。懲役人の涙で、汚されちゃ堪まらないね。気をおつけ。けがらわしいからね。」

肺腑を抉ぐる言葉を残してベルディーヌは其の場を離れた。

「よく辛抱なすったわ。よかった。口答えなんかしたら大変よ」

シモーヌが洗い場を磨きながら慰さめる。

洗い桶を抱いて肩震わせるミルドレーヌは、余りの恥かしめに口も利けない様子だ。

「どんなことを云われたって我慢するのよ。」

どんなにしたって勝てっこないですもの。あんな人ばかりじゃありませんことよ」

ミドレーヌは暫し動哭して呟いた。

「あ、あんまり……だわ。なんとひどいことを……。でも、これが……これが……」

ミルドレーヌが声を詰まらせ、エドウィージュが水を盗み飲みしながら云う。

「そうさ、これが懲役でものだよ。いくら嫌だと云ったって辞める訳には行かないし……」

「その代り、鹹になることもないわ」

と、モニカが肩すくめた。何のつもりか、濡らした手で懸命に髪を撫でつけ、指に巻く。誰に見せようと云うのか、精一杯のお洒落を試みて居るのだ。桶の水に映した髪をいじっては小首傾ける風情はいじらしい程で、いくらあばずれ娘でも女心は哀しい。此の娘にした所で、まじめに働こうと努力したこともあるのだ。

「モニカ。ウィンクのお稽古ばかりしてないで床をお拭きよ」

モニカは切ない溜息をついて、桶の水をヤケ気味に流した。

第十監房へ六名が入って鉄格子が鳴り、第四監房の六名が引き出された。地下広間と通路の掃除当番だ。六名は規則によって二人ず

つ腰を連鎖される。床に喘ぐルーシーが其の有様から眼をそむけた。

「ふん。どうやら洗った様ね」

ベルディーヌがやって来て調べる。

「アフリカの土人女だって、もう少しはましな洗い方するだろうけど、ま、いいだろ。お前みたいな女にやらせりや、こんなものさ。所で、何ふくれてんの？あ、石鹸をお返し。あら、ずい分使ったもんだこと。何やらせてもぶさいくな癖に、悪いことだけは人一倍のことをやったって訳ね。何よ、其のツラは!!」

又してもベルディーヌがいたぶる

「懲役人のお前にゃ見るのも勿体ない程の物を洗わせてやったのよッ。不服らしいね、驚ろいたわ。図太い女なこと」

日曜日にはビンタも幾分は控えられる。その代りに、胸にこたえる屈辱の言葉をベルディーヌは浴びせ続けた。

「不服ならそう云い。喜んでやってくれる女が多勢居るんだから。精魂こめて洗ってくれて、お礼まで云ってくれるわ。何とか云ったらどうなのッ。有難かったとか、有難くなかったとか」

ミルドレーヌは血を吐く様な声を絞った。「ありがとう……ございました……」

「ふん。心から云ってる声じゃないね。ま、そのつもりならそれでもいいよ。これッ、三一〇号。お前もだよッ。肘が曲ってる。心から罪に服する気があるの？云々とくけどね、今日の午後は文通、面会の時間よ」

はッとしたミルドレーヌとルーシーは深い悲哀を全身に浮べ、支配者を見上げた眼をおずおずと伏せた。

この面会は日曜日の十一時から十二時までと一時から三時まで。大抵の女囚は月一回が限度で、毎日曜日ごとに二乃至三ヶ監舎が割当てられる。今日は、第三監舎の面会はない。

「お日様の光に当たったの何年振りかの様な気がするわ」

監房でルーシーが呟いた。先刻、屋上で浴びた日光と外気の爽やかさを想い出して居るのだ。週一回の監舎外労役と日曜の洗濯の時以外には、女囚達は戸外の空気を吸えない。雨でも降れば、それもお流れになる。監房の窓とても、女囚が中に居る限り、朝晩の点呼時以外はビッシリ閉じられたままだ。どんなに暑くても開いてくれないし、そうかと思うと真冬には開け放たれて苦しめられることもあるのだ。

日曜日の午后三時には発信と受信が許される。仮出獄嘆願資格を漸く与えられた者が居れば其の旨を言い渡され、胸躍らせて嘆願書に鉛筆を握る。今日は第二日曜日。仮釈放審査委員会もないし、午後の監舎は婦人看守も数少い。三ヶ監房ずつ出されて食卓へまばらに散り、来て居た手紙を漸く渡される。発信を停止されて居る者や文通のあてもない者は監房に残されて淋しく悲しげだ。

「発信したい者は？」

ベルディヌが訊ねる。嬉しさ懐かしさに嚙り泣き或いは失望と落胆に絶望しふてくされて居た女囚達の殆んど全員が手を挙げた。粗末な用箋とちびた鉛筆とが配られる。

「もう一枚頂けません？」

シモーヌが涙を睨に押えて哀願した。ベルディヌ看守は無論黙殺する。発信は日曜毎に通、用紙は一枚が規則なのだ。シモーヌは諦めて嗚咽した。姉妹からの手紙には、何れも写真を同封すると書いてあるのに、それがないので無性に悲しいのだ。検閲は当然としても、害のない写真位は見せてやってもいいのに。朝な夕なに想い焦がれる愛児の姿を一目眺めることが出来たら、シモーヌはどんなことでもするだろう。規則とは云え、血も

涙もない非情さだ。尤もマジョーリだったらこんな時には、気が付かないふりをして写真の二、三枚を床に落してくれる。又、宛先の住所等をも面倒がらずに調べておいて教えてもくれる。検閲や領置は「表て」の仕事、そんな写真を手に入れたり調査したりするのは手数がかるし、時には気苦労も払わねばならない。マジョーリはあえてそう云うことをしてくれるのだ。しかし今日はベルディヌそんな慈悲や思いやりのあろう筈がない。

「宛先をハッキリ書いとかないと、封筒へ入れて貰えないよ。何だって？ お前の親類がどこの馬小屋に住んでるか、私が知ってる訳ないじゃないか。忘れたんならおやめ。それとも調査願を出す？ 半年か一年したら分るかも知れないね」

「でも、あたしの荷物の中に手帖あるんです。それを見せて頂けたら……お願いです」

「ふん。私はメツセンジャーじゃないよ」

ミルドレーヌとルーシーが泣き出してオロオロした。ベルディヌに渡された鉛筆は真新らしくて削ってないのだ。

「これじゃ……これじゃ書けませんわ」

「ふん。規則にはね、用紙と鉛筆を与える、となってるの。削った鉛筆とは書いてないわ

ね。フフフ。」

ベルディーヌは嘲けた。

「ま、何だよ、お前達が心から洗濯位のこととはさせて欲しいと思う様になったら、私の方だって規則にはないけれど鉛筆位は削ったげるわ」

ミルドレーヌが鉛筆をかじろうとし、諦らめてテーブルにしがみついた。全く意地の悪いベルディーヌだ。

発受信は合わせて二十分が規則、ベルディーヌは容赦なく女囚達を追い立てた。受け取った手紙も書いた用箋も食卓にそのままに、女囚達は物悲しく立ち上がる。これと思われた女囚は小突き回わされて、獄衣の上から身体検査だ。紙切れ一枚も監房内へは持ち込めない。

「三一〇号と三八五号は脱衣」

ルーシーが泣き出し、ミルドレーヌが髪を掻きむしった。ただでさえみじめなのに、更にこんな不公平な扱いをされると、口惜しくて喚きたくなる。しかし、女囚は婦人看守の指示命令に従わねばならない。いつ如何なる場所に於いても、女囚は施される縛しめに甘んじ、訊問に答え、検査を受けねばならないのだ。

「お手紙、沢山来てまして？」

戻った監房内でシモーヌが訊ね、ルーシーとミルドレーヌは想い出して噁り上げる。

「今日が初めてだと云うのに、あなた達運が悪かったんですわ。でも、あんな担当さんばかりじゃありませんことよ。」

シモーヌも涙ぐみながら二人を慰さめるのだった。モニカとエドウィージュも少しシュンとして居た。モニカは二監舎から引き続いて発受信禁止中だったし、エドウィージュは返信見込薄の手紙を書いただけなのだった。「あたいたんか、手紙みたいな面倒なものどうでもいいわ」

モニカが強がって云う。

「それよかねえ、今日の果物は何だろ？」

日曜日の夕食には果物を与えられることになって居る。

「ふん。おフルーツは、酸っぱいリンゴ一個を皮付きのままと決まってるよ」

エドウィージュが答えて腿を掻いた。

今日は舎外労役。久し振りに存分拝める陽の目を想って女囚達は、明るい初夏の陽光を広間の窓外に眺め、さも嬉しげだ。昨日の午後、半死半生のさまで保安課から戻された九房の四名は監房に残され、手錠のまま寝台に

ぐったりして居る。クリスチーヌは未だ懲罰房だし、シモーヌは重労働免除で、今日の舎外労役は六十名。

「どう？少しは馴れた？今日は、そとで働くのよ」

イヴェットはエドウィージュの腰鎖の錠をおろしながら、隣りに立ちすくむルーシーに声をかけてやった。入獄以来今日で六日目、馴れぬ労役にオドオドと服して居る彼女だ。「は、はい。少しは。やっぱり、あの鎖、つけられるんですね」

ルーシーの声は震えて居た。諦らめ観念しては居ても、やはり一度は訊ねて見たいのだ。

「そうよ。規則なの。さ、自分で腰に巻きなさい」

冷たく重い鎖をジャラジャラと持ち、自らの腰をくびるルーシーは、後ろ腰に錠の音を聞いて一声噁り上げた。可哀想だが、これは仕方がない。イヴェットは余りきつく締めないでかけてやった。若々しくくびれの深い腰だから少々ゆる目でも抜けはしないだろう。モニカと連鎖されるミルドレーヌが錠の音に眉を悲しげにひそめ、両手を再び背に回わしながら訊ねた。

「あの、あすこに入られてるひと、未だ出して貰えませんか？体がもちますかしら」

元女医のミルドレーヌは、重屏禁のクリスチーナが気になるらしい。

「明日あたり済むわ」

イヴェットはそう云ってモニカの背後に回った。言い渡しは一応一週間だが、ジョアンヌ看守長女史の虫の居所によっては、二日や三日の延長はザラだ。

「きついわあ。そんなに締めないでよ。あたい、ウエストはカッコいいサイズなんだから

大丈夫、抜けやしないったら。あたいのおヒップ知ってるだろう？」

モニカが腰を振って小声で喚いたが、イヴェットは構わずにグイと締めつけ、錠をビシッとかけてやった。此の娘は全く手におえない。いちいち撲るのも面倒な位だ。三三二号が向うの方で哀願して居る。

「ねえ、せめて、戸外労役の時にはベルト解いて下さいましな。お願いよ」

マジョーリがきびしい顔でバシッと頬を打った。どうせ無駄とは知りつつも、相手がマ

◎本誌二〇〇号突破記念◎ 原稿募集▽

▽内 容△

一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文獻的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
一、SMその他、フェテツシュ、切腹、女闘美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
一、形式は創作、小説などのフィクションも結構です。自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を發揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

▽規 定△

一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
一、枚数は一切御自由です。
一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。
一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。
一、〇以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

△奇ク編集部▽

ジョーリなのでつい声が出たのだ。しかし、此のベルトをかけられたまま一日中歩き回る労働の辛さを想うと、三三二号ならずとも哀願の声も出て仕舞うと云うものだ。戒具棚の器具類を磨いて居るシモーヌが鎖を鳴らして出て行く仲間達を済まなそうな顔で見送って居た。

不埒な行為に対するベルトの罰は十日間が習わしだ。しかし、イヴェット婦人看守を欺した三三二号のベルトは二週間後に漸く解かれた。装着されて居たベルトと手錠の清掃手入れは勿論三三二号自身でやらされる。看護婦がやって来て、三三二号は擦過傷の手当を受けた。年配の看護婦は笑いながら褐色の薬液をそこら中に塗りたくり、飛び上った三三二号は呻いてヒィヒィ云った。そして、今度はクリスチーナを簡単に診る。クリスチーナは数日前重屏禁を解かれ、監房の寝台で呻って居た。

「明日から労役させていいですわ。とうとう高い注射なしに済ませることが出来た訳ね。ホホホホ」

首に赤札をつけたクリスチーナは、重屏禁明けの体の弱まりを全身に精一杯示しつつ、看護婦の言葉を恨めしげに聞いて居た。

「痴^ち人^{じん}の糧^{かて}」

旅愁

山本一章

旅愁 (一)

真夏のギラギラした太陽が、走り去る田園の光景をもの憂く照らし出していた。車中は人いきれでむっとしていた。大山は居眠っていたが、アケミは少しくきうきした気分になつて窓から外を眺めていた。二人だけの初めての旅行——彼女には新婚旅行のような感激だった。百合子が一緒でないということも、大山の愛を独占できるという優越感となつていた。

柱に縛られてホースの水の洗礼を受けた翌日から、アケミは自由な生活を与えられた。食事の準備や片づけ、掃除と洗濯、それは新妻のような新鮮な喜びだった。そしてしばらく

くしてアクロバットの個人教授が始められた。

二時間のレッスンは相当激しく、女教師は大山が監視しているのを意識してか、殆んど休憩も与えないで練習を続けさせた。汗みずくになったアケミのタイツやシャツは一日でぼろぼろになることもあった。しかし踊子だったアケミは、その若さも手伝って進歩が早かった。アケミ自身もそのレッスンから苦痛を感じるよりも、楽しみを感じていた。

週三回神戸へ出かけてのレッスンだったがそれのない日は全くアケミの自由だった。新妻のような学生のような、そしてお手伝いさんのような奇妙な生活が続いた。ただ彼女の夜は娘の孤独な夜だった。大山は彼女の身体を

求めず、夜の別居を苦にしていなかった。そして時たま訪れる百合子の存在がアケミには悲しく憎らしいものだった。アクロバットの練習が一段落した時、突然大山がアケミを旅に連れ出したのだった。

行先は北陸のさる海に面した温泉地だった。大山にどんな意図があるのか、それとも単なる慰安旅行なのか、アケミにはわからなかったが、とにかくも旅行できることは楽しかった。それに暫らく遠去かっている被虐への期待もあった。

「うんと虐めてやるからな」

大山が冗談のようにいったその一言が耳に残っていたし、彼のボストンバッグの中に詰められた縄もちらっと見ていた。彼女の体は



一カ月以上ものブランクを持て余していたのだった。

汽車は夕方、まだまぶしい陽の残った駅に着いた。ホテルまでタクシーで。通された部屋は洋室で、片隅にダブルベッドが白いシーツを掛けられて大きな位置を占めていた。

「さあ一風呂浴びるか」

大山は海に面した大きな窓のカーテンを開けて深呼吸した。

「大山さん、わたし好きなもの？」
アケミは目を伏したまま、思い切って聞いてみた。彼の妻に、いや情婦でもいい、彼のものにならない。——彼女はそんな気持ちだった。

「馬鹿だなあ、いきなり……」

しかし大山の答えは、そのひとつとだった。

家族風呂に入った二人は、浴槽の中でのびのびと手足を伸ばした。湯は透んでいて豊富だった。

「どうだい、いい気分だろう？」

大山は湯の中で横になったアケミの肩を抱いて頬に軽く口づけをした。

「さあ洗ってやろう」

湯から上ったアケミは目を閉じて大山の前に立った。大山は腰掛けに腰を降ろしたまま丹念にアケミの体を洗った。タオルを使わず指だけで石鹸を塗り軽くマッサージしながら洗った。胸、腹部、手足、背中、臀部と彼の手の触れないところはなかった。アケミは子供になったような気分で全身を彼に委ねていた。

「さあ、前に腰を曲げて、もっと手を下につけて！」

「足を開いてお尻を突き出して！」

「さあ、足を僕の腿に載せて！」

大山は白くて若々しい肌を憑かれたように洗った。手足の指も一本一本、しごくようにして揉み洗った。可愛い奴——足の爪も、指の股の白い皮膚も、耳も、少し上向いた鼻もみずみずしい唇も、すべてが彼の心を虜にしていた。恐らくその様子を第三者がのぞいていたら、きっと思っただろう。お目出たい男、哀れな野郎——と。裸の湯の中で抱き合った時、大山が耳もとで囁いた。

「ひどい目に会わすからな——」

アケミは力一ぱい彼を抱き締めた。

入浴を終えた二人は浴衣を着て食堂へ行き

食事をとった。もう外は夕暮れの薄い灰色をただよわせて、海の色は黒く沈んでいた。

「希望があるかい？」

食事しながら大山がいった。どういう意味なのかアケミはちよっと戸惑ったが直ぐ気がついた。

「別にないわ。そうね、吊られるのが苦しいけど……」

食事を済ませた二人は、そろそろ浴衣を着た観光客が出だした街へ出た。手を握り合ったまま下駄を履いて、恋人同志のように歩いた。アケミは幸せだった。しかし大山は今夜の彼女の処遇を考えていた。

小屋掛けの色彩だけがケバケバしい看板のヌードスタジオに入った時、アケミは握った手に力を入れた。恥かしかった。何か自分がそのスタジオのモデルになるような気がしたからだ。

「一度見て置いた方がいい」

大山はそういいながら手を引張って暗闇の中に入った。中に客はなかった。

「さあ、どうぞ、カブリツキへ坐って下さいね。奥さん、恥しがることはないですよ」

五十才位の女が二人を床几に坐らせるとスITCHをひねった。赤い布を背景に垂らした

だけの狭い舞台にまぶしい照明が当てられると、その布がもぞもぞ動いて隅から女が出て来た。若い少し痩せ気味の女だった。その女は薄いネッカチーフのような布で前をかくしながらポーズをとった。パチンパチンとスITCHが音を立てて照明が変る度にポーズを変えのだった。だが、刺戟的なものではなかった。単調で事務的な動きだった。

「この頃、取締りがやかましいのでねえ」

後から女がしわがれ声で云った。

「もう少し、どうにかならんのかねえ？」

大山がモデルの女に声をかけた。

「どうってどう？ 助平ね、奥さんがいるのに。おばさんに聞いてよ」

女は体を横にしたまま少し笑って云った。

可愛い顔をしていたし、ポーズを変える時にちらっと見えた部分に興味を感じた大山は、床几を立てて後の女の所へ行った。

「いくらだい？ 追加だよ」

「困りますねえ、でも旦那、誰にも云わないで下さいよ。二枚はりこんでやって下さいな」

金を受取ると女は一度外へ出て行き、誰かと話している気はいだったが、すぐ戻ってきた。再び照明が舞台を照らした時、モデルの

女は生まれたままの姿で背伸びしたポーズをとっていた。乳房は案外大きくはなかったがその円みは少女のみずみずしさを持っていた。腹部から脚にかけての平面が白く滑らかで、臍窩が小さく愛らしかった。

「パイパンだよ」

大山はアケミに小声で囁くと、千円札を一枚四角に折ってモデルの前に投げた。

「おおきに。スペシャルをやったげるわね」

女は仰向けに寝ころぶと腰を曲げて足を頭の上に持ってきた。アクロバチックなポーズだった。白くて滑らかな双丘とそれに包まれた皮膚には不潔感がなくて、艶やかな軟体動物の感じがあった。アケミは大山の手を握っているのも忘れて、じっと見入っていた。女の体がこんなに美しいとは思ってもみなかった。それは薄いピンクの照明のせいかもしれないと思ってみた。それからモデルは二つ三つあらわなポーズをとると、

「これでおしまい」

と照れたように云って、幕の後ろに引込んだ。

「ありがとうございます。またどうぞ」

その声を背に受けて二人は外に出た。

「どうだった？ いいだろう」

大山は濡れた粘膜の滑らかさを思い出していた。それはセックスには繋がらずに、なまなましい生命と動物の孤独感を呼び起すだけだった。(肉体を持った人間——それはなんとちっぽけで哀れな存在だろう。昆虫の短い生命も、人間のそれとどれだけ違うのだろうか。枯れて行く果実と、どれだけ人間の体が違うのだろうか)

大山は握った手に少し力を入れた。それにかすかな反拗があった。生きているということの果敢なさが、切実に伝ってくるようだった。

「さあ、もう帰ろうか」

大山は佻しい気持になっていた。

○

時計が十時を指していた。ベッドのスタンダードだけがぼんやりと部屋を照らして、クーラーがゴトゴトと小さなせわしい音を立てていた。大山はベッドに横になってアケミの裸身を眺めていた。胸から両腋を通して背で結び目を作った綿のロープが、彼女の体重を天井の鉄管から吊っていた。後手にした両手は拇指だけが交叉させられて、紐で固く結ばれていた。そして両肘を寄せ合わすようにして縛った縄が首に巻きつけられているため、彼女

は胸を張って乳房を無防備に晒していた。

揃えた両足の拇指も紐で結び合わされ、体重の何分の一かをその不自由な拇指で支えていた。タオルで目を縛られ、口には縄の轡が奥歯を割って強く巻きつけられていた。それだけの束縛でアケミの体に自由はなかった。首にかかった縄が締まるのか彼女の顔は紅潮して、縄を咬んだ口から喘ぐような呼吸音がせわしく洩れていた。白壁を背に正面向いた裸形は、薄暗い光線の中では白く浮び出して妖しい陰影を作っていた。大山はその裸身を眺めながら、先程感じた佻しさが消えて行くのを感じた。(俺にはアケミがいる！)

彼は縄が彼女の首を締めているのに気づいてはいたが、しばらくその苦悶の様子を見ていた。

「いきが苦しいかい？」

「アウアウウウ」

アケミがかすかに頷いたのを見た大山は、縄を手にして近づいた。首を締めている縄にそれを通すと、ぐいと下に引張ったので呼吸は楽になったが、頸の両脇に縄が強く食い込み、両肘が少し持ち上ったので胸はぐっと突き出された。彼は首縄に通した二筋の縄を乳房の間から臍窩の上へ下ろして、尻へ廻わし

た。そして両肘を縛った縄に結びつけてから前の縄の一本と後の一本とを腰の横に寄せて紐でつないだ。左右同じように縄が寄せられたため、前面の縄は内側から乳房を外側に押し、臍が露出した。そして尻は押し拡げられるように縄で割られた。その造形的な縄の作業に従って縦縄は彼女の胸を激しく締めつけた。羞恥心よりも苦痛の方が強い股間縛りだった。アケミは上半身と腰をかすかに横に振って悶えた。縛りおえた大山は突出した両の乳房を両手でぐっと握った。

「ウウウウ、ウアウウウウ……」

アケミは恐ろしい縄の力を、その体で受け止めながら、力一ぱい縄を咬みしめた。大山は彼女の苦悶を無視して両肩に手をやると、くるりと半回転させて壁の方に正面を向けさせた。背に廻った手の指が、拇指だけを残して固く握り締められていた。白く盛り上った臀部を食い入って割っている二本の縄が菱型を作り股間に消えているのが幾何模様のようにだった。

縄の直線と臀部の弧が調和していた。鈍角を作って股間に消えている縄の直線が、臀部の肉の円みと質量を誇張さえしているかのようだった。

その滑らかな双つの半球を大山は平手で叩いた。

パン、パン、パチン！

弾じくような音と共に張り切った筋肉がふるえた。それは大山にとって刺戟的な感触だったが、少し色づくのを見てから再びベッドに戻った。

彼はベッドに座ってビールの詮を抜き、ラッパ飲みした。

冷房のきいた部屋だったが、アケミは壁に向いたまま汗びっしょりになっていた。

五分、十分……

アケミは縄の締めつけている部分が麻痺して痛みが徐々に去り、圧迫感だけが残るのを感じていた。

（ああ可哀想なわたし！）

半吊りの苦しい姿勢から解かれたのは三十分近く経ってからだった。アケミは疲労でぐったりとしていた。縄をすべて解くと彼はアケミを抱き上げて浴室へ運んだ。そしてタオルの上に寝かすと湯を掛けて軽く全身を摩擦しながら洗った。縄の跡が赤茶けた縞模様を白い肌に刻んで、なかなか消えなかった。

○

翌朝大山が目を覚ましたのは、九時を過ぎ

てからだだった。窓のカーテンを開いた彼は大きく伸びをしながら言った。

「曇ってるな。今日は海へ出てみるか。陽に焼けなくていいかもしれんから」

アケミはダブルベッドの上で裸のまま眠っていたのだったが彼の声で目を覚ました。

昨夜の疲れが少し残っているようだったが寝起きは悪くなかった。そして昨夜もやはり処女を失っていないのに気づいてほっとする一面寂しい気もした。大山自身も自制することの虚しさを感じてはいたが、彼女を処女のまままで責めることを意地のように守っているのだった。それは偏執なのかもしれない。裏返せば現在のままの彼女を喪うことを怖れる痴人の卑屈さから出ているのかもしれない。

のんびり午前中を過ごした二人は、昼食を済ませてから水着姿で海へ出た。曇っているせいか、ウィークデイのためか人影は少なかった。ボートに乗った二人は沖合に漕ぎ出した。温泉街が遠く松林の陰に見えかくれして美しい情緒を作っていた。

「さあ、それを脱いで——」

「ええっ」

「脱ぐんだよ」

アケミはためらった。白昼、それも開けっぴろげの海の上で一糸まとわぬ素裸になることは不安だった。

「早く、心配ないよ」

アケミはボートの中に体をかがめて水着を脱いだ。

「さあ、泳いでみるよ」

舟べりからそろそろと海へ入った時、彼女は少しはしゃいだ気分になっていた。水は沖へ出たせいか冷たくて、肌がキュッと引締まるようだった。素裸のまま彼女はボートのまわりを泳いだ。大山はすき透った蒼い水の中のびのびと泳いでいる白い女体を美しいと思った。

「気持ちいいわ」

一度水の中にもぐった彼女の黒髪は、海藻のようにゆらゆらと揺れながら白い肌にこぼれて、その若いみずみずしさは男の心を圧倒するようだった。

ボートの上に乗ってきた裸身には水滴がはじかれたように附いてキラキラと光っていた。

「ねえ、海で泳ぐの、久しぶりだわ。素敵だわ。素裸で泳ぐってこと、ナイスよ」

アケミは子供のように笑った。

何の屈託もないような明るい少女の面影だった。それから二度三度、彼女は海へ入ってその全裸の体を潮に洗わせた。背泳ぎをしてみたり、もぐってみたり、もう裸でいることが、自然のように振舞う姿は健康そのもののよう感じられた。

「ねえ、あなたもお入りなさいよ」

大山は微笑しながら頭を横に振った。

「見てる方がいい」

「大山さん、もっと若くならなくっちゃ駄目よ。ねえ、今夜も虐めるの？」

「いやかい？」

「そうじゃないの。あのう……わたし嬉しいの。ひどい目にあわせて」

彼女はそう云うと、水の中にもぐった。

大山は笑いながら楽しい気分になっていた。

（よし、今夜は眠らさないぞ！）

旅愁 二

運動したせいか空腹を感じた二人は、海から上ると早目の夕食を取った。アケミは浮き浮きして快活にしゃべった。彼女が大山の家に來てから、これほど楽しそうにしているのは初めてと思えるほどだった。

「もう一度ヌードを見に行くか？」

「いやだわ。なんべん見たって同じでしょうわたしは止すわ。よければ一人で行ってらっしゃいよ」

大山は苦笑した。若いアケミの口調が完全に妻のそれになっていて、ずけずけと彼の心の中に押し入ってくるからだだった。そのくせ彼は咄嗟に、それに返事できず、にがい笑いでごまかして視線をそらした。

「あの娘、綺麗な体をしてたわね。でも変なことしちゃいやよ。そんなことしたら、わたし死んでやる」

「一緒に来いよ」

「待ってるわ。わたしがいない方がモデルもやりやすくて、サービスしてくれるわよ。」

どうせ今夜は責めるんでしょう？ 体を休めとくわ」

大山は一人で夕暮の町へ出た。昨夜と同じスタジオに足を向けた彼は、その入口がまだ閉ったままなのを見て少しがっかりした。他のスタジオへでもと思って引返した大山は土産品をゴタゴタと並べている売店をのぞいてみたが、ありふれたものばかりで目をひくものはなかった。まだ時間も早いのか客の姿もなかった。

「旦那、奥にいいものありますが、どうですか？」

若い番頭のような男が声をかけて來た。奥の畳の間に半分腰かけた大山の前に、写真と性具のようなものが置かれた。しかしそれとても特に興味のあるものではなかった。

一枚づつ写真を繰りながら、その露骨な女の姿態に何気なく目を通していた大山はふと手を止めた。その一枚は足を開いて横たわった女の足の方から写したもので、顔は乳房の丘にさえぎられて見えなかった。次の一枚もその次の一枚も五枚ばかりが同じモデルのヌードだった。体に陰影を作る茂みがないというだけではなく、その体つきから昨夜のスタジオの女に違いなかった。十枚一組だとする男から強引にその五枚を買った。その体の表情は若々しく、大山の心はずませた。アケミの体と似ているようで、しかも本質的な違いを感じさせた。その写真の女には熟れたようなセックス・アッピールがあった。

店を出た大山はゆっくりホテルの方へ歩いた。なぜか写真のモデルが恋しいような気持ちがしていた。もう一度逢って見たい——未練のようなものが彼の心をうずかせた。ホテルへ帰るとアケミはベッドの上に寝そ

べって雑誌を読んでいた。

「早かったのね。どうだった？」

「閉ってたよ」

「へーえ、そりやさんねだったわね」

足をバタバタさせながらアケミは雑誌から目を離さなかった。

「さあ、風呂へ入って来いよ」

素直に入浴を済ませたアケミは、予期しているかのように、裸のままベッドの上に横になった。

「痺をしてやろうか？」

「きのうみたいなの？ あれ、とても痛いよ。縄が肌を挟むと飛び上る程痛くて、たまらないわ。でもいいわ。挟まないようにしてね」

大山は浴衣の帯を手にとると、アケミの目の上をぐるぐると巻いて絞った。

「最初にアクロバットをやれよ」

床の絨毯の上に降りたアケミは目かくしをしたまま体をのけぞらして、両脚の間に頭を挟んだ。足首を握った手に力が入っていた。仰向きに折れ曲った腹部の皮膚が白く張りつめて、その下で呼吸する度に肋骨が盛り上がった。次に片足で立って片足を耳の横にくっつけた。その四肢の極限以上の屈伸は、彼女の

体を不思議な人間ばなれした生きもののようを感じさせた。それでいて不自然な醜さはいささかもなく、美しい曲線はセクシーそのものだった。転り、逆立ちし、脚を垂平に伸ばし、彼女が会得した演技を一通り繰返した。大山はアケミのアクロバットが一流とまでは行かないにしても、レザニマルの舞台での観賞には充分耐えられると思った。それに全裸なら尚更のことだった。

「暑いわ」

彼女は「ことそう云うと絨毯の上に仰向けに寝ころがった。

「海岸へ行こう」

「じゃ、目を解いて」

再び浴衣を着た二人はホテルを出た。大山は手にポストンを提げていた。海岸には街灯はなくかすかに届く町の灯と、月明りで顔をやっと識別できる位だった。人影はなく、打ち寄せる波が低くざわめいて砂を打っていた。浴衣を脱いだアケミの両眼の上に絆創膏をベッタリ貼りつけ、口に縄の轡を咬ました。大山は、後手に手首を縛り合わせてから別の縄を首に巻いて前に垂らし、胴の真中を尻へ廻わして後手に結んだ。一本の縄が縦に掛けられた。それから手首の縄尻で胴を三重位巻

いて臍のところにくびれる程強く縛ったので縦縄がぎゅっと引き締まった。足首を固く縛り合わすとそのまま砂の上に寝かせ、上から浴衣をかぶせた。一息ついた大山は板片を手にする砂を掘り始めた。乾いた表面の砂はさらさらと崩れ易く穴を深く掘るのは難しかった。掘り進むにつれて砂が湿気を帯びてきた。一メートルを超える深い穴を掘り終った時には、さすがの大山も汗びっしょりになっていた。パンツ一つになった彼は、アケミの上の浴衣を取り去り、足首を縛っている縄の残りを交叉した後手首に通して引き上げた。

足先が手首にかすかに届くと、彼女の体は膝を割った逆海老になった。そのアケミを砂の穴に斜め仰向けに入れると、頭が地面より五センチ近く下になった。膝と、背中の手首足首で体を支えている恰好だった。砂をどんな穴の中に入れながら大山は死体を埋葬しているような気持ちになっていた。砂のために体が安定した。首まで砂を入れた大山はそのままにして引返し、古い底の破れたバケツを持って来て、それをアケミの頭の上からすっぽりかぶせると再び砂を押し入れた。完全に埋った穴の上を平らにならすと、バケツの底が僅かに出ているだけとなった。いましめら

れたアケミの体は砂の中に消え、バケツの底の小さな破れが彼女の呼吸を辛うじて助けるだけとなった。

大山は埋め終ると傍に腰を降ろして煙草に火をつけた。埋められた女体——それは大山にとって想像した以上に刺戟的だった。湿った砂に全身を包まれて暗い地中で呼吸しているだけのアケミ、彼女には何の自由も存在しない。このまま放置すれば恐らくは縄による血行の障碍と、渴と飢で静かに死んで行くに違いなかった。それよりも上に向いたバケツの底に砂をかぶせることによって、その孤独な死は早められることが確実だった。声も立てられず、砂の抱擁から逃れることもできずに人知れず息絶える女体を想像することは、彼のサジステイックな性癖を、強くゆさぶった。恐らくは何日か人に発見されずに埋まっているだろう。白骨になった女が発見されることになるかもしれない。縄をまといバケツをかぶった白骨——それは滑稽で悲惨なものに違いなかった。アケミの生命は大山の手一つに握られているのだった。

大山は立上ると尿意を覚え、僅かに露出しているバケツの底に向けて排出した。(頭からかぶるがいい。)液体は金属音を立て、そ

して破れから黒い地中へ流れて行った。彼はバケツの横に短い竹の棒を立てると町へ引き返した。

湿った砂はなま温く全身を抱いていた。アケミは砂と潮の香を吸いながら真暗闇の中で不安と陶酔を味っていた。背後に廻った手首と足首がゆっくりと痺れ始めていたが、砂に埋った姿勢は苦しくはなかった。大山の尿を吸った頭髮からは滴が顔を伝って走った。それも塩っぽい臭いだった。

大山は昨夜のスタジオへ行ってみたが、やはり戸は閉ったままだった。電気がついていたので思い切って板の戸を軽く叩いてみた。

「だれや？」

男の声がして戸が開かれた。一見してやうざとわかる若い男だった。

「今日はやらないんかね？」

「ああ、ちよっと取り込んでいるんや。またあしたきてくれよ」

男はそっけなく言う、戸を閉めようとした。

「昨日のお客だね。ちよっと待ってよ」

照明係をしていた女が男の後から声をかけると、かきわけるようにして外に出て来た。「旦那、好きだねえ。ねえ少しはずんでやっ

てくれない？ 変ったのを見せるから」

「変ったのって、なんだい？」

女はちよろっと、あたりを見廻すと声を落した。

「あの娘、いまから折檻されるんだけど、それを見せてあげてもいいわよ。ちよっと残酷だけどね」

「どうしたんだい？」

「逃げようとしたんだよ。若いのがこの先の駅まで行って連れ戻してきたんだけど、少身体でこたえさせておかなければ、横着な奴だからね。旦那見る気はないかい？」

「面白いな。いくら出せばいいんだい？」

「大きい一枚張込みなさいよ。ちよっと見られないんだから。それに大将にも承知させなけりやならないんだから」

「高いな。それに今持ち合わせもないしな……」

大山はその私刑を絶対見たいと思ったが、努めて冷静を装っていた。

「いいわよ、その時計をかたに置いて、明日持ってきてくれればいいのよ」

大山は腕のインターナショナルを抜くと女の掌の上にぽんと置いた。女は一たん小屋の中に入って誰かと話しているようだったが、

直ぐ顔を出して裏口へ廻るように云った。

彼は暗くてごみごみした路地から小屋の中に入った。裸電球が一つ舞台の上でにぶい光を揺れさせていた。客席の床几に最初出て来た若い男と口髪を生やした中年の男が坐り、その横にモデルらしい肥った女が立っていた。

「ああ、どうぞ」

口髭の男は、そう云って自分の横の床几を指さした。大山は年甲斐もなく胸をときめかしていた。舞台には、すっぱり白い敷布をかぶせられた人体が横たわっていた。それが昨夜のモデルに違いなかった。

「さあ、かかるかねえ」

照明係の女が、そう云いながら敷布をはがすと、板張りの舞台に白い裸身が足をちぢめて横たわっていた。

「さあ、しっかり体で覚えて二度とこんなことにならないようにするんだよ」

照明係の女は、哀れな犠牲の体を仰向けにころがした。その女は何も言わずにちよっと腰を折り曲げようとしただけで仰向けになった。後手に廻わした手首にも揃えた足首にも体のどこにも縄は見当らず一瞬、大山は不審に思ったが、よく見ると後手の交叉した拇指

が三味線の黄色い弦糸のようなもので固く結び合わされ、足の拇指も同じように結び合わされているのがわかった。それだけで女の自由は完全に奪われているのだった。

そして顔を見た時には、さすがの大山もあつと思つた。引出された舌の上下を二本の短い割箸が挟み、両端が口の横で弦糸で結ばれていたからだ。溺水者に対する処置としてこの方法が行われることを知っていたが女に対する責めに利用することは考えたこともなかった。この方法は悲鳴を封じ、自殺を防ぐためには絶好の轡だった。

「最初にスネークダンスをやらそうね。少し汗を出させなくっちゃね」

照明係の女は一人で喋り、一人でうなずきながら舞台の裏に消えた。この女は昔遊廓にでもいたのか、遣り手婆さんのような卑屈で残忍そうな笑いで顔に皺を作り不気味だった。おろし金と山芋を手にして戻ってきた女は、それを擦り合わせて白いネバネバした芋の汁を作った。若い男が舞台へ飛び上ると、仰向けに横たわったモデルの頭をまたいで膝をつき、従女の足首を握って胸に引き寄せた。

縛られていない両膝が割れて乳房の両脇に

密着し、女としては最もむごたらしい姿勢になった。大山は凝視した。

「おい尻をこっちへ向けな」

口髭の男の一声で、モデルの体が直角に廻わされた。

「ヤッチャン、サービスにライトをつけてあげなよ」

照明係の女は手に白い汁をすくいながら、おびえたような顔をして立っている肥った女に声をかけた。まぶしい光線が惨じめな女体と、その上にまたがった男を照らし出した。

「さあ、よく見て下さいよ。それに今に面白い踊りが見られますからね」

女は手にした芋の汁をモデルの肌を押し拡げるようにして場所をかまわずベッタリと塗りつけた。乳首にもこねるようにして塗った。大山はスネークダンスの意味がわかるとこの残忍な仕置を受けるモデルが少し可哀想に思えた。若い男は女の足を放して舞台から降りた。

「セッチャン、どう？しっかり踊るんだよ。」

お客さんもあるんだから」

そのモデルの名前らしかった。

やがて女の体が小刻みにふるえ出した。むず痒さが肌を襲い始めたらしかった。芋のあ

くが肌を刺戟し、ただれさせて行くのがわかるような気がした。

動きが烈しくなった。舌を挟まれた顔を苦しそうに振りながら後手の裸身をくねらせ、

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演 Mファン待望の超傑作集

Mフオト 最新作 M場面決定版

大手札印画紙焼付
各組十二枚一組 二〇〇〇円
八組全部にて 一三〇〇〇円

裸女二人の尻の下

十二枚一組 略号(まふ)
遅ましい素肌の臀部が男の顔の上に乗っかってゆく、全裸の美女二人から責められる幸福なるMモデル男の生態。

二女の戯むれと男

十二枚一組 略号(まも)
美しい蝶々のように二人の裸女が尻に敷いた男の上にて、戯れていたが、やがて尻の下でうごめく男をなぶるのだった。

美女から縛られる

十二枚一組 略号(まね)
暴君と化した二人の遅ましい美女の前に跪いたM男は、必死の抵抗も空しく縄で厳しく縛られてゆく甘美な過程。

男馬を乗り潰す女

十二枚一組 略号(まめ)
二人の肥った女を背中に乗せてハイドウ。いくばくもなく乗り潰された男は、勝気な二人の美女から辱められる。

痛烈ムチのご馳走

十二枚一組 略号(まれ)
後手に縛りあげられた男は、二人の裸女にとっては恰好の弄び道具である。男の肌にムチが炸裂してミミズ脹れが凄い。

首絞めで刺す止どめ

十二枚一組 略号(まむ)
いくら痛めつけても喜んでいゝM男に対しては、最後の止めとして遅ましい太股による首絞めで昇天させてやるのがよい。

汚臭と足舐の強制

十二枚一組 略号(まり)
女の肌にじかにつけていたパンティを頭にかぶせられ、口に押し込まれても、縛られている男はどうすることも出来ない。

二女の臀臭に泣く

十二枚一組 略号(まみ)
肉づきのよい二女の臀の下に押し潰された男の顔は、醜くひしゃげ、その臀臭をいやという程臭がされている。

転った。その悶えふるえる姿は、まさに苦悶する蛇に似ていた。

こらえ切れないのか喉の奥から、グウグウッというような音を立てた。体をそらし縮じめねじり、そうして起き上ろうとした。額を支えにして上体をやっとな腰を振って床板に尻をこすりつけた。そこには羞恥の姿は全くなき、その痒みから逃れようとする必死の運動だけがあつた。そのモデルの頭を照明係の女が無慈悲に押して上半身を倒した。今度はモデルは俯伏せになって乳房を板にこすりつけた。切実な烈しい動きとライトの熱でモデルの体から汗がしたたり、床の塵にまみれて白い肌をうす汚くしていた。乳房を烈しくこすりつける姿は大山に奇妙な感動を与えた。悶える女体を見ながら大山は臀部にも汗線があるということを初めて知った。モデルの呼吸が大きくせわしくなり、喉の奥から出す音もエッエッエッと短いものに変っていた。

「どうだい、少しはこたえただろうね」

しばらくして照明係の女はモデルの動きを見ながら塵紙を出して、汁の塗られた肌を丹念に拭き取った。モデルは体を小刻みにふるわせながらも、柔順に拭き易い姿勢をとって

いた。しかし、その跡の赤くただれた皮膚は見ているだけでむず痒くなるようだった。

「さあ、今度は馬にしましょうね、大将」

口髭の男は腕組みしながらうなづいた。若い男がモデルを抱き上げると舞台を降り、客席の後にある木の手すりの上に横坐りに坐らせた。照明係の女がモデルの足の指を縛っている糸を解いて手すりにまたがらせた。そして手すりの真中から天井まで届いている柱にモデルの首を縄で縛りつけ、手すりの下に伸びている同じ柱を足首で挟ませて拇指を弦糸で縛り合わせた。女の体はくの字型になって手すりの上に固定された。

「重しをつけますかねえ？」

「ああ、つけてやれ」

モデルの伸ばした両膝の上の部分が縄で連結された。

若い男が重そうな角材を引きずって来ると両膝の間の縄に片端を載せた。腿が伸びエエッという悲鳴が洩れた。完全な、むごたらしい木馬責めだった。大山はそのセツチャンと呼ばれている女の圧迫されている肌が潰れてしまいはしないかと不安になった。しかし男達も照明係の女もそんなことに気を留めてもいないようで、更には湿したタオルで女の背

をビシャッビシャッと打ち始めた。

女は手すりの上で頭を振り胸をふるわせながら、挟まれて突き出した舌の先や唇から唾液をだらだらとたらし喘いでいた。

「おい、口をはずしてやれ！」

口髭の男が怒鳴ると、若い男が二本の割箸を舌からはずした。

「セツチャン、もうこりただろう。大将にお詫びしなよ」

「アウウウ、アウウウ……」

舌が痺れているのか、直ぐには言葉にならなかった。

「かんにんして下さい。もう二度と逃げませんから」

それだけの言葉を云うのが、やつのことだった。角材が縄から外された。

「どうや、お客もいることだからオマツリをやってみる？」

「面白いな。旦那どうです？ トップバッターは」

若い男が大山に話しかけた。

「オマツリって、なんだい？」

「それなんですよ」

大山はこの女をアケミのように自分の支配下に置きたいと思いはじめていた。だからこ

こで貞操をもてあそぶ気持はなかった。

「大将、この娘をゆずって貰えませんか」

「ええっ？ あんた買い取るっていうんですかい？ もの好きだなあ。家出娘だし処女かどうかはわかりませんで」

「いいんですよ」

「それに旦那、こいつでも、ここの商売道具だから困るなあ」

口髭の男はそう云いながらも心の中で値段をつけているようだった。時間を置くのが拙いと考えた大山は云った。

「いくらではなす？」

「そうですなあ、三〇ぐらいでならねえ」

「よし、手を打とう。それでいいだろうな」

「仕方ないですなあ。セツチャン、お前行くか？」

手すりにまたがったままの女は力なく頭を縦に振った。金は明日の夕方六時にセッコの体と引替に払うということに約束した大山は急いで小屋を出た。海岸にアケミを埋めてから一時間近く経っていたので、それが気になっていたからだ。足早に海岸に出た大山は暗闇の中で目印の竹の棒を探し出すのに苦労したがやつのことで見つけた。人の来た様子はなくバケツの底もそのまま砂からのぞ

いていた。砂を掻き分けてバケツを取り除くとアケミの頭が砂からのぞいた。大山は先ずそのままで口の縄を取りはずした。

「苦しいかい？」

「そうでもないけど、長いこと放って置くなんてひどいわ。手も足も痺れてるわ」

大山はアケミの声を聞いてはっとした。

「少し話があるんだが、このままでもう少し辛抱しろよ。昨日のモデルのことなんだが

家に来てもらうことにしたよ。今話しをつけてきた」

「へえー、いやねえ」

「一緒に暮すのはいやかい？」

「いやだといったって止す気はないんでしょ？ あなたの好きなようになさるといいわ。でも、わたしを忘れちゃいやよ」

「うん、ものわかりがいいな。もしいやだと云ったら、このまま参るまで放って置いてや

ろうと思っていんだよ」

砂を掘り返してアケミの体を引き抜くように引き上げた大山は、目かくしと連結されている手足の縄を解いた。それから砂にまみれたアケミを抱き上げて海に入った。海の水は少し冷たかった。アケミは手足が痺れているのか体を彼に委ねたまま目を閉じていた。波がピタピタと二人のまわりで音を立てていた。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キヤビネ版印画紙焼付

日本女性拷問刑罰集

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

美木乃々子嬢の体当り演技と読者有志のセッティング並に責役出演とによりて完成された「日本女性拷問刑罰集」は、発表以来、同好者の間で大変な評判を賜わりまして是非一組にお求め下さい

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高小手に縛られた女囚が三角木馬に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫ぶ姿――

海老責め

三枚一組 略号(もに)

両足の拇指はくの字にそり反って激しい苦痛と羞恥に悶えぬく凄絶な女囚の海老責め。

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

白州の粗砂に引き据えられた女囚は高小手首縄に絞られて竹のささらで、肩口を叩かれる。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

白紙で目かくしされた女死刑囚は土壇に仰向けに横たえられている。白刃一閃、哀れ女囚の腹は。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

柔かい脛に算盤板のギザギザが喰い込むのに更に膝の上へ伊豆石をのせて非人が揺さぶる痛さ。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

白州の上の女囚がどす黒い捕縄で厳しく縛られ非人の手で竹の棒を縄目に捻じ込められて呻く。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)

腰の乱れを必死に防ごうとする真白い足を八の字に開かせて足首に非情の縄をからませてゆく。

白洲に悶える

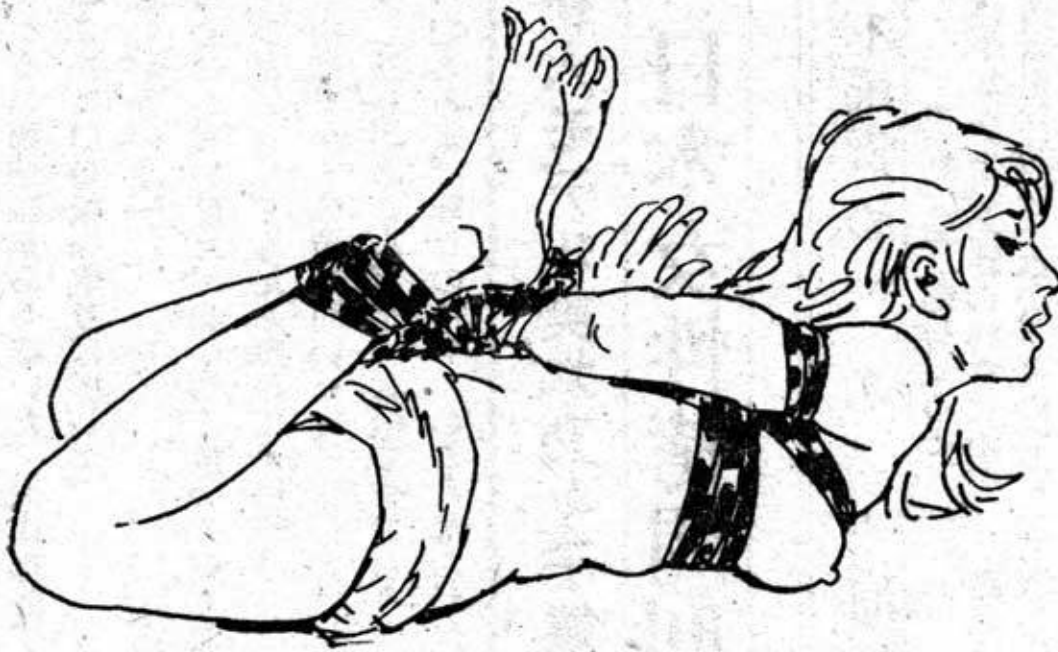
三枚一組 略号(もは)

均整のとれた見事な肢体と肌、殊にすらりと伸びた脛と素足をあらわに投げだして悶える女囚。

舞台につづく遊戯

(続)

柴 里 雷 九



あれから半年、裕子のかた時も、あの男を忘れはしなかったし、あんなに強烈な印象をうえつけられるような観客は一人も現われなかった。

ところが、半年後のある夜。舞台がハネて国電の駅に向う裕子は、やはり駅に急ぐ人々の間に特徴のあるガッチリした肩の、あの男を見つけた。

「あの人だわ！」

裕子の胸はキューンとしまり、瞳は一点を凝視し、目の前に揺れる肩を追いつづけた。それは初恋にも似た感情で、裕子の足を早めさせた。

どこまでも後をつけ、話しかけたい衝動にかられたが、裕子には踊り子仲間の連れが一人あったので、あきらめなければならなかった。

「いまさらそんな乙女のような淡い恋……」

「縛られて、ひどい目にあわされた人に憧れるなんて……」

言いふらされて笑われるのがいやだった。しかし、裕子はたまらず、連れをそれとなく急がせて、男を追いつづけていった。

駅前広場の交差点で信号待ちの間、裕子は背中に視線を感じたが顧りかえることは出来なかった。

その夜、裕子はしまい湯の銭湯から帰える小さな三面鏡の前に座って入念に化粧をした。そうしなければいけない感情のたかぶりをおさえることは出来なかった。

翌日、最終回、客席からの強い視線を感じた。

「あの人が来ている」

裸で舞台に立っている時は、裕子も自分自身でびっくりする程大胆になれた。

客席に降りて、くだらない会話を交し、客

の膝に乗る芝居をする場面があった。

裕子は躊躇なく「あの男」の所へ行つて、膝に乗り、戻りぎわ、小さな声で言った。

「また来てくださったのね」

「縛られたときは悲しかったわ」

「今夜逢つて下さらない」

裕子の声はふるえていたが、勉めて明るい笑顔をつくり、軽くウインクをした。

男はウインクを返えた。

思いきつて言ったあとは、さっぱりし、舞台にも張りが出、裕子はなんとなく嬉しかった。

「お疲れさん」

「お疲れさま」

「お疲れ」

仲間たちは三々伍々帰っていった。

裕子も掃除のおばさんが渡してくれた紙切れを持って、楽屋口を飛び出していった。

△喫茶店『ポニー』で待っている

山崎▽

めざす『ポニー』はアベックで混んでいたが「あの男」はすぐみつかった。

二人は店内片隅にある大きな観葉植物の陰の席に並んで座った。

「本当に来るとは思わなかったぜ」

「あら、わたしも本当に待ってて下さるとは思わなかったわ」

二人の最初の挨拶が「これ」だった。

それから二人の間にはコーヒの香りに酔つたように話はずんだ。

「山崎明夫、28才、遠洋漁業に従事する船員、趣味カメラ」

「リニー白川こと白根裕子、踊り子、年令？趣味手芸」

裕子は最初劇場で縛られた時の印象から、会つてはみたものの不安だった。

「本当に粗野で乱暴な男ではないかしら」

「すぐに、いやらしいことをする人ではないかしら……」

しかし、話をするうち、ごく自然に「明夫さん」と呼びかけられるまでになっていた。

これは、ただ単に道なりに知り合った若い男と女ということではなく、お互いの性癖の

一端、いや、ノーマルでないとされ、世間の目を意識しなければならぬということ、ア

クティブな男とパッシブな女という違った性^{サガ}の結びつきが、一挙に二人を親しくさせた

のかも知れない。

間もなく閉店する喫茶店を出た二人は、手をつないで、夜の街を歩いた。

裕子の心は、ほのぼのと明るく、

「私たちは、肉体だけで結ばれる世の恋人たちとは違う、よりデリケートな絆で結ばれている」

そういう余裕さえ出てきて、すれ違う恋人たちを優越感をもって見送り、胸を張って歩いた。

「可愛い裕子」

山崎もかけがえのない女に廻り会えた満足で足よりも軽かった。

昨日、半年振りで、お互いを認めあった駅前の交差点迄来た。

「明夫さん」

並んで歩いていった明夫が、裕子を振り向いて微笑した。

二人が最初にデートした数日後、山崎は舞台がハネる裕子を待つて劇場の近くの喫茶店に居た。

「あの晩、裕子を送っていったら『男の人にこんなに親切にされたのは始めてよ』と本当に嬉しそうな顔をしたっけ」

「今度はレンタ・カーでも借りてドライブをし、俺のカメラの腕を見せてやるか」

「野外で裸にして縛ったら、どんな顔をするかな」

「ストリップは一年中やっているけど、休みは、とれるんだろうか」

楽しい思いが待っている時間を苦にさせなかったが、肝心の「縛り」については、親しくなればなる程、言いだしにくかった。

暗黙の了解はあるはずなんだが……。

こんなデートが続いたある夜。

二人の足は裕子が踊っている劇場から国電の駅で五つばかり離れた裕子の下宿するアパートへ向っていた。

山崎にとって、アパートの入口までは何回か送って来てはいたが、裕子の室は始めてだった。

若い女の室らしく小綺麗で、縛られることを喜ぶ「裕子」は何処にも感じられなかったが、壁に掛けてある丸い小型の船の舵が、ひどく印象的で嬉しかった。

ラジオの音楽を聞き、お茶を飲みながら、とりとめのない話をし、アルバムを見ながらも裕子は待っていた。

「ロープあるかい」

二人きりの室では、明夫のこの言葉が何だか恥しく、裕子は顔をあからめた。

裕子は半年前、明夫に縛られて以来、一人寝の夜にまさぐった、ありったけの紐類を洋

服ダンスの中から出して来た。

ワイシャツを脱いで、ロープを持った明夫の上半身は日に焼け、逞しい筋肉が盛り上っていた。

「裕子！」

裕子は黙ってうなずいた。

明夫は裕子の夜着を脱がせ、淡い空色のブラジャーと小さい花模様のある絶白のパンティもとって生れたままの姿にしてしまった。

裕子は反射的に両手で胸をかき抱いてうずくまった。

舞台上で踊る、リニー・白川とは全然別個の娘らしい感情がそこに溢れて、明夫を感激させた。

裕子はなすがままにされていた。

明夫は裕子の両手を背中にまとめて縛りあげ、そのロープを胸にまわした。その時、一寸いたずらして、かたくなって、チョコンと飛び出し、上をむいているピンクの乳首をロープで三、四回こすってみた。

「ア、アッハア」

裕子はちよっとうめいたが、すぐ微笑しながら、いたずらする明夫を見て、二人きりの密室でのプレイからくる緊張感より次第に解放されていた。

「イタイッ！」

明夫のさばくロープが、弾力のある裕子の肌をつまんでしまった。

「ごめんよ」

明夫はちよっと赤くなっている、その場所に軽く接吻した。

ロープは左の乳房の上を通って、右の乳房を二つに割り、再び手首にまわして止められた。そして、いきなり明夫は横座りで痛さをこらえている裕子を背後から突きとばした。

裕子は、したたか乳房と顔を打って、うめいたが、すぐに乱れた下半身をまとめて、座り直そうと腰と脚をもがいた。

程よく肉がついて丸味のある腰、すんなりのびて、踊りで鍛えた脚、明夫はその足をとると、いきなり裕子を逆に持ちあげた。

乳房は絨毯の逆の目をザラザラと引きずられ、やがて床を離れ、わずかに肩と顔で全体重を支える形にされてしまった。こすられて一層色を増したピンク色の乳首はあえぎ、足を振って抵抗したが、明夫はそのままの形で裕子を振りまわした。

裕子は頭を頂点にして、ぐるぐる廻りつづけ、髪は乱れ、顔は血が下って赤くなり、ハレたようになった。呼吸は乱れ、胸と腹はす

でに激しく波打っていた。

ついに裕子は白眼をむいて、ぐったりと
びてしまった。顔といわず、背中といわず、
ロープで圧迫されて一層盛り上った乳房の谷
といわず、汗がふきだして流れていた。

明夫は裕子を回転させる動作をやめ、抱き
あげて、ベッドの上に投げ出した。

ベッドの上でぐったりとのび、荒い呼吸を
つづける裕子のウェストに、裕子の赤い巾広
のベルトが思いきりしぼって、締められた。

裕子の腹部は極端にしめつけられて、蜂の
胸のようにくびれ、胸のロープは一層くいこ
み、腰を中心に胴体が二つに分かれてしまっ
たかのように見えた。

これで又、裕子の呼吸は困難を増した。

明夫は水でしめしたタオルで裕子の全身を
拭いてやり、そのままベッドに放置して、呼
吸の治るのを待った。

部屋中、若い活気が漲っていた。

裕子の荒かった呼吸が治る頃、明夫は、し
びれて動かなくなった裕子の後手をとき、あ
らためて、ベッドの四本の足に仰向けの太の
字に縛りつけた。

裕子の丸まっつい唇が、かすかに動いたよ
うだったが明夫は気づかなかった。

裕子のとじたままの睨と長い睫がふるえ、
太股がビクンビクンと痙攣し、足指がのびた
り、ちじんだりしている。

無防備の太の字縛りにされた裕子の胸に明

夫の手がのび、かすかに凹凸を見せている肋
骨を確かめるように上下させた、ピクンと体
をふるわせ、しっかりと口を結び、そのくす
ぐったさをこらえていた裕子も、とうとう鼻
孔を大きく開き、泣き笑いの声をあげた。

こんな悪戯めいた遊びも、二人きりの室で
は遠慮なくやれて、はじめての他人行儀を忘
れさせてくれた。

胸を波打たせ、ハアハアと荒い呼吸をして
いた裕子は、やがてくすぐったさから解放さ
れて言った。

「明夫さん、許して、もう、のどが乾いてし
まう……」

裕子はすでに相当の汗を出していた。

そこで明夫は、一計を案じ、丁度あった晒
布を巾二センチ、長さ十五センチぐらいに切
り、ジュースを満たした皿に入れた。

黄色いジュースは布片にしみわたった。そ

うしておいて裕子の四肢をとき放ち、すぐ皮
バンドを裕子の首に巻きつけ、その一端を持
って犬のようにひきたてた。

「さあ、ジュースをお飲み」

裕子は皿に入りきらないで、ビンの底に残
っていたジュースを両手にかかえたが忽ち明

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時
増刊

写真と絵画

文献
特集号

直接発行所へお申込を！

定価 五〇〇円

(〒20円)

略号〔文献〕

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹
女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した
本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び
集録出来ない特殊文献を満載いたしましたし
残部僅少！ 売切れ近し。絶対に二度と入手で
きない素晴らしい内容の絵画写真集です。

た。売切れますと補充がつかまへん故、今
すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次
第折返えし急送いたします。只今でしたら
在庫しておりますから、お申込みを。

夫にバンドをひかれ「グウェノ」というような声をあげて、ピンを落してしまった。

「手を使っちゃ駄目だ、皿に入っている布をしゃぶれ！」

毛細管現象で布にしみわたるジュースを飲みめというのだ。

裕子がためらっていると、明夫はまる出しの裕子のお尻を平手でたたいて、飲むことを強要した。

裕子は泣きたい思いで四つばいになって尻を突き出し、布の一端を咥え、ペチャペチャとジュースを飲んだ。

「やめろ！」

わずかに喉を潤しはじめたジュースをとりあげられた裕子は思わず、四つんばいの首をのぼしてジュースの皿を追い叫んでいた。

「いじわるう！明夫さん、もっと飲ませて！」

「もっと欲しいか？ 欲しかったら『ワン』といえ」

明夫はジュースの入った皿を裕子の鼻さきに突き出し「ワン」と吠えろと強制した。

全裸に首輪をつけられ、四つんばいになっている裕子は、楽しいはずの遊びとはいっても、あまりにもみじめで「ワン」という声はどうしても出てこなかったが、喉の渇きは益

々つのってきた。

「リニー・白川の演技力はどうしたい。このくらい簡単だろう」

明夫は自分のこの言葉で、舞台姿の裕子の写真を思い出し、責遊戯に夢中で忘れていたカメラのキャップをはずした。

カメラを見て裕子はハッとなった。

こんなみじめな姿を写真に撮られては……信頼しているとはいっても、知りあって日の浅い明夫に不安を感じた。

「照明が足りないなあ」などと言いながら、カメラを持って近づいた明夫は、裕子の首輪を机の脚につなぎとめシャッターを切った。

裕子は、首の動かせる範囲で勢いっばい顔をそむけ、いやいやをした。

「許して、写さないで——」

裕子の哀願もむなしく、明夫は次々とシャッターを切った。

丸く突き出した白い豊かなお尻に、マジックインクで「牝犬」と書いたり、鼻柱に白粉を塗ったり、墨と白粉で目の周囲や全身をブチに塗りとくったり、裕子の頭髪を色々にいじったり、四つんばいの白い肌に、「白いスピッツ」「顔中毛だらけのテリア」「尻尾をピンと立てたブードル」「ブチの雑犬」

明夫のカメラは牝犬のコンクール模様を写していった。

首輪で机につながれたまま、いじりまわされる裕子は頭髪が鼻孔をくすぐってクシャミをしたり、渇ききった喉をゼイゼイいわせた、墨を塗られる時の筆がくすぐったくて尻を振ったり、強制される迷演技で明夫を喜ばせた。

アパートの室々の灯も全部消えてしまった夜ふけ、明夫はブチになった裕子の全身を拭いてやっていた。

「明夫さんたらひどいわ、あれだけやめてっというのに、写真を撮るんですもの」

「俺達のいい記念じゃあないか、写真の中の君は、いつまでも若くて美しい」

「でも……」

「でも、なんだ」

「でも……誰にも見せないでね」

「馬鹿、大事な恋人の写真を他人に見せる奴があるか」

「でも、あなたって、女泣かせなんだもん、わたし、なんだか心配だわ」

若い二人もやっと疲れてきたようだ。間もなく裕子の室の灯も消えた。

(おわり)